

東方九心貓

藍薔薇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私は八雲彩^{やくもさい}。種族は化け猫であり、紫様の式神。

ただ、他の化け猫と違うことがあって、内側がちよつと騒がしいんです。

目次

東方妖々夢

紫様、起きてください	1
稗田家のお屋敷にお邪魔させてもらいませんか？	7
私は八雲彩。彼女は橙。	15
命名決闘法案	23
化け猫だからって舐めてたぜ	29
それがちよつとだけ羨ましかった	34
ふざけないでください	39
『九つの命を宿す程度の能力』	45
……二度と御免だ	51

閑話

ちよつと遊びに来ただけですよ	57
付き合ってくれねえか？	63
掃除をしますよ	68
お礼を言いに来ました	74
笑い飛ばせばそれでいい！	80
さつさと強くなりてーな	85
流されるだけだから	91
手を伸ばしたい	96
血に濡れた左手	101
東方萃夢想	
花見酒ならぬ葉見酒	106

案の定、二日酔いである。 | 111

理由なし。時期不明。 | 116

一方的な要件 | 121

妖夢、じゃなくて妖霧について

126

急に表に出られると困りますよ

131

よーし、しゅっぱーっつ！ | 136

亡霊が此岸に何の用だ？ | 142

もふもふはもふもふのもの | 147

またしても、二日酔いである。

154

早速出るか | 159

で、俺に何の用だよ | 164

あんたは何人いるの？ | 169

……あんた、本当に一人なの？

174

アレよ、アレ | 182

嘘吐きなおじさん | 190

彩を捨てるつもりですか | 196

鬼の力、萃める力、分かつ力。

201

……なんでさ | 207

全部、私の所為だ | 215

私は最強だ | 221

さよなら。 | 228

『九心九尾』

234

……おはよう？

240

閑話

私は不愉快だった。

246

鬼退治の報酬

250

妖怪は敵だから

254

気味が悪いきみが悪い

259

彩に避けられてる気がするのよ

263

窮屈じゃないかい？

269

東方永夜抄

夜を止めてでも

274

……何考えてんだろ、紫様は

279

三分の妖力

284

拝見させていただきます！

288

随分と潔いのねえ

292

式神『八雲彩』

296

いいことを知ったな

302

動くと撃つ！

308

尚の事質が悪いわ

312

ごめん、ありや嘘だった

317

夜はまだまだ長引きそうだ

323

狂わずにいられるかしら？

326

造作もないわ

331

援護をしなさい

335

悪く思わないよ

342

たまのお客様じゃない | 347

ちよつと付き合つてあげるわ | 352

負けたら死ぬ | 356

私は弾のお客様 | 361

正しい選択かは分からない | 365

結局、私はいつだつて間違える。

370

夜が明けていた | 375

貴女の式神ですから。 | 380

いつか、私を殺してね。 | 385

閑話

私は人間を愛している。 | 389

お手合わせ願います！ | 395

精が出るな | 400

人間の里に行つてみたいわ | 405

統率者はいらぬ | 412

不合格ね | 418

東方花映塚

ありとあらゆる花々 | 424

幸せになーれっ！ | 428

暇なら一緒に遊ぶ？ | 432

最強のアタイ | 435

ここどこ？ | 439

どんな花が似合うかな | 443

太陽の畑 | 448

弱い者虐め、ダメ。ゼツタイ。

454

あったような、なかったような？

458

怖かったーっ！

お昼寝ターイムっ

最強、興味ある？

正常な異常

無計画に、当てもなく

薄っぺらい嘘っぱち

……いい、迷惑だ。

貴女は貴女らしく

閑話

邪魔するわね

私に全ては救えない

ネタバラシ

喫茶店に行こう

藍と彩、どちらが強いかな？

極彩『彩色剣尾・玖式』

社会派ルポライターあや

疲れた人間

こういうところが厭らしくて

生きてて楽しいかい？

東方儚月抄

月面戦争

来てしまったよ紅魔館

来てしまったよ太陽の畑

502

505

509

515

520

528

535

540

544

549

552

557

462

466

470

476

481

484

488

493

497

稽古よ、稽古

560

貴女を監視するために

564

その時を待っていたわ！

567

努力も、意思も

573

明日やること

577

一匹残らず仕留めなさい

581

……最ツ悪よ！

586

退屈過ぎて死んでしまうわ

590

今生きている、今日を

596

貴女を殺しても、私は許されますか？

最後の命令よ！

600

月の最新兵器

609

真の『九心九尾』

612

器兵新最の月

615

意味なんてないのだから

620

何か用か？

624

この世界は、なかったことにしよう。

元、貴女の式神だがな

須臾を超越する

633

八雲彩

637

私は遡る。

642

無血の勝利

646

後日談

当たり前だろうか？

657

どうか、平穩な日々を。

661

私が代わりに考えましょう。

665

難しく考えないで

668

喜んで従うぜ。

672

私は今日も流される。

676

手を差し伸べ続けていきたい。

679

殺して終いだ。

685

私達が八雲彩なんだ

689

番外

やあ、混入者

694

東方妖々夢

紫様、起きてください

ゆっさゆっさ。ゆっさゆっさ。

「紫様、起きてください」

「……むにゃ」

……駄目です。もう小一時間肩を揺すっているにもかかわらず、全然起きてくれません。いい加減この役を譲りたいくらいです。ぐーたらな寝息と口端から垂れてしまっている涎で、正直見るに堪えない姿なのですが、それはさておき。しかし、私は諦めませんよ。紫様には早く目覚めてもらわねばならないのです。既に冬は過ぎ去っているのですからね！ ……まあ、もうかなり前に過ぎているのは内緒です。

ゆっさゆっさ。ゆっさゆっさ。

「紫様、起きてください」

「……んあ？」

あつ！ ようやく！ 本当にようやく目を開いてくれましたね紫様！ まだ寝ぼけ眼で頭が回っていないさそうな間抜けな顔ですが、それでも目覚めてくれたのですね！

私は慌てて口を開き、とりあえず思い付いたことをそのまま口に出しました。

「紫様！ もう五月なのですから、冬眠はもうお終いですよ！」

「……こんなに寒くて春なわけないわ。寝る」

「ああつ!? 紫様あ!？」

何と言うことでしょうか!? せっかく目覚めてくれたというのに、またその瞼を閉じてしまいました。確かに外ではまだ雪が降っています、それでも暦上では既に五月。春なのです。起きて下さらないと、藍の仕事が普段より増えて増えてしようがないです、この異常気象について考えてもらわねばなりません、このまま再び眠ってしまったては困るのです……!」

『代われ、邪魔だ』

『あつ』

……その意識が僅かに揺らいだ刹那、内側から出てきた。それと同時に、私は内側へと押し込まれてしまう。

「いい加減目覚めやがれ！ こんのババアーツ！」

「げふう!？」

ああ!?! 紫様が掛け布団から引き剥がされ、両手両足をそれぞれの手でガツチリと握り締めて固定されながら頭を支点にして背中を逆側に曲げられてしまっています!？」

あれは痛そう！ それはもう物凄く！

『紫様に何てことを！』

『けっ！ 酷え真似しやがる……』

『起こすためならばあそこまでする必要はなかったでしょう？』

『……ふうん』

『まあっ!? どうしましょう!?』

『まあ、当然の結果だな』

『おっ、派手な技やってんじゃん！』

いや、止めましょう!? ほら、紫様がこのままだと別の理由でまた眠りに就いてしまいますから！

そう考えていると、内側からまた一人出ていく。そして、表にいるのを引きずり下ろしながら話し始めた。

『……これ以上は紫様が危険です。もうおよしなさい』

『ハッ！ 起こせつつわれたのはこっちだぜ？』

『だとしても別の方法があるでしょう!?』

『るせーっ！ いつまでもババアの馬鹿面眺めてんのがムカつくんだよ！』

……ああ、この際に行け、と。はい、分かりました。いつもすみませんね……。

ギヤーギヤー言い争っている二人の脇を通り、私は浮上する。そして、表に出てすぐに頭の上に乗せられている紫様の背中を下ろし、両手両足を掴んでいる手をパツと離す。布団の上に落された涙目な紫様が私を見上げている。……それはもう、キツツイ視線で。

「……いきなり何するのよ、彩」

「申し訳ありません。……ですが、起きない紫様も悪いです」

「はあ……。うう、寒い」

「そうですね。ですが、もう冬眠はさせませんよ」

そう言いながら微笑む。もしも紫様がまた寝てしまうようなら、その時はどうしてあげようか？ やつぱり、別の誰かに任せるのがいい。私がやるよりも過激的で攻撃的なことをしてくれるはずだ。うん、そうしよう。

『それより、話すべきことがあるでしょう？』

『ああ、そうだった。代わってくれませんか？』

『いいでしょう』

私が説明するより、今出て来てくれたもののほうが分かりやすく話してくれるはずだ。そう考え、私はささっと内側へと戻って交代する。

「紫様。私は冬が明けたら貴女を起こすよう任されています。確かに冬は明けていま

せんが、時は既に五月。もう起きるべき時期でしょう」

「え、ええ……。確かに、ふあ……。、そうね」

「そして、五月にも関わらず未だに雪が降り積もるのは異常気象です。何らかの人為的原因があると思われませんが、紫様はどうなさいますか？」

「ちよつと待つて。まだ寝起きで考えがまとまらないわ」

おお、やつぱりちゃんと言明していて真面目だなあ……。

『だーかーらー！ 起きたから別にいいだろうがーッ！』

『よくありません！ 紫様に傷の一つでも付いたらどうするのですか!?!』

……こつちはまだ言い争つてるよ。代わらせてくれたのは嬉しかったけれど、うるさいのは何とかしてほしいわ。

『ま、いつものことだ。我慢しな』

『そうですね。我慢するしかないですよね……』

我慢しなきゃならないのは分かっているけれど、やつぱりうるさいものはうるさいのだ。そんな風に雑に慰められながら、私は表の様子を窺う。

繭のように掛け布団に包まった紫様は難しい顔を浮かべています。その頭の中ではきつと素晴らしい考えが浮かぶに違いありません。

「……………どうしましようっ？」

……前言撤回。そんなことなかったです。

「では、私が調査に出掛けましょう。紫様は藍とも話してください」

「……ええ、そうね。彩、何か分かったら連絡しなさい」

「了解しました、紫様」

そんな話を聞いていると、表から戻ってきたのが何故か私を引つ張り始めます。

『話は終わりました。さあ、貴女の番ですよ』

『いやいや！ あのままでもいいでしょ別に！』

『なら僕代わるー！』

『あっ』

ちよつとの間表に出るのを譲り合っている隙に、別の一人がささつと浮上していつてしまった。……ええと、どうしよ。

「ゆかりん！ 行ってきまーす！」

「え、ええ……。いつてらっしやい、彩……」

表のが無邪気に笑いながら駆け出し、外へと飛び出していく。いいのかなあ、こんな調子で？

『いつもの事だろ？』

『ですよねー』

稗田家のお屋敷にお邪魔させてもらいませんか？

「てててーん。てててーん。てててーん。てん、てれーん！」

表のは無邪気に即興であろう曲を口ずさみながら雪の中を歩いていく。それはそれは楽しそうなのだが、もしや紫様に命じられたことを忘れちゃあいまいだろうか？

……いや、そもそも聞いているかどうかどうかも怪しいよなあ。だって、その瞬間が楽しければ全てよし、みたいな感じだもんなあ……。

まあ、いいや。とりあえず、表は好き勝手にさせておこう。

『やる気があるの、集合』

『おう、どうした？』

『何かしら？』

『何でしょうか？』

『呼びましたか？』

ふむ、五つか。まあ、妥当な数だよなあ。一つは紫様の命令を聞きたくないだろうし、一つは総じてどうでもいいと思ってるだろうし、一つは暴れたいだけだろうし。多分、ここぞでいくら話していても、余程のことがなければ入ってくることもなさそうだ。さっ

きから口を閉ざしてだんまりだし。

『冬が長引く異常気象。その原因の人物、あるいは原因を知っていそうな人物を挙げてみよう。私は氷精ね』

『あー……、確か冬の妖怪がいなかったか？ そいつはどうよ？』

『逆に春告精がサボってる、なんてのはどう？』

『稗田の乙女に許可を貰い、書物で調べてみるのはどうでしょうか？』

『流石に氷の妖精さんがここまでのことが出来るとは思えないわ。私は、一度調べてからのほうがいいと思うの。考えなしに当たって間違いでした、じゃあ相手に悪いもの』
むう、氷精は否定されてしまったか。まあ、私もあの馬鹿にこんな高等技能が出来るとは思っちゃいなかったけどね。

それ以外だと、冬の妖怪、春告精、稗田の乙女、と。

『一番近そうなのは？』

『現在、妖怪の山にいるようですね』

言われてみて表を見てみると、いつの間にか山登りをしていた。こんな雪の中、よくまああ喜々として登ろうなんて思えるなあ……。私は嫌だ。いつ吹雪くかも分からないし。

というか、普通に吹雪いてきた。山の天気はすぐ変わる。今代わったら非常に寒そう

だ。

『人里は離れてつてるな。冬の妖怪ならいるか?』

『春告精は妖怪の山に消えるんでしよう? だったら、春告精もいなさそうね……』

『ここは一度代わっていただいて、人間の里の稗田家のお屋敷にお邪魔させてもらいませんか? やはり、この吹雪の中を何も知らないまま闇雲に動き続けると身体に悪いですし……』

そんな会話を聞きながら、私は表の様子を確認し続けていた。吹雪の所為で視界がかなり悪くなってきているが、表のは妖怪の山の何処に向かっているのだろうか?

「くしゅっ!」

……あ、表のくしやみした。寒そうに震え始めてる。結構暖かくしていたつもりだけど、この吹雪を防げるほどではなかったらしい。

そこまで見たところで、私は表から内側に意識を向ける。……もう、あの考えなしには任せられない。

『……誰代わる?』

とはいえ、この状況で誰が代わりたいと言うだろうか? ちなみに、私は嫌だ。寒い嫌い。猫は炬燵で丸くなるんだよ! 私、化け猫だけど! 妖怪とはいえ、一応猫ですし?

しばらく黙っていると、大きなため息が聞こえてきた。

『……しゃーない、俺が出てやる』

『よろしくお願いします。調べる時は代わってくださいって結構ですよ』

『相分かった。そんなときや頼むわ』

『いつてらつしゃい。頑張って』

うん、私も応援している。この吹雪の中でも率先して代わってくれる勇敢なのなんだから。私じゃあとても出来ないね。

腕を大きく振る気分で見送り、表で好き勝手ふらついていたのを引つpegがされる様子を見守る。内側に投げ込まれ転がってきたのは若干ぶーたれているけれど、まあ、よくあることだ。我慢してほしい。……まあ、出来ないだろうけどさ！

「寒っ。……そんなじゃま、急ぐとしますか」

表のが積雪の中、ギシリと雪を強く踏み締める。両脚に力が込められていき、上半身が前に傾いていく。そろそろ倒れこんじゃうのではないか、と思つた瞬間に後ろ脚を力強く蹴り出し、雪を撒き散らしながら颯爽と駆け出した。吹雪で視界が悪い中でも迫りくる樹々をスイスイ躲し続けながら、ぐんぐん山を下っていく。……おお、速い速い。

一分足らずで妖怪の山を抜け、それから雪が降る中をひたすら走り続けること数分間。門番の見えない場所から人里を囲う柵を跳び越え、そのまま着地。表を確認した感

じ、誰も私を見てはいなさそう。そんなことを考えているうちに、表のはさっさか走り続けて稗田家の屋敷に到着した。

屋敷の門の前に立つ見張りの人間が私に気付き、キツと睨み付けて警戒し始める。が、それも一瞬のことで、私が誰か気付いた瞬間に警戒を解いてくれた。

「おお、彩様ではありませんか。どうかなさいましたか？」

「急で悪いが、ちよいと調べ事だ。入らせてくれ」

「そうですかそうですか。では、ご案内しましょうか？」

「結構。俺に構うより、仕事を続けていてくれ」

「分かりました。それでは、どうぞ」

仰々しく頭を下げる人間を見ると、若干居た堪れなくなる。私、そんな偉くないのに。つまり、紫様の名前はそれだけの力がある、ということなのだ。式神を憑けてもらったことは後悔していないけれど、こうなるとなあ……。はあ。

屋敷にお邪魔して廊下を歩いている最中、表のが内側に戻ってきた。

『ほら。そろそろ代われ』

『いいでしょう』

『おう。頼むわ』

そう言い合って交代していく。そして、表のはきびきびとした足取りで歩き出した。

さて、勇敢なものには労いの言葉を一つくらいあげたほうがいいよね？

『お疲れー』

『お疲れ様です』

『……おう』

はっはっは、照れてやんの。

『寒くなかったかしら？』

『寒いに決まってんだろ。走ると雪が体中当たって尚更な』

『おっとこっつまえー！』

『うっせえ！　そもそもあんなどこからつきやがったのが悪いんだろうが！』

無邪気な追い打ちに怒鳴る様を面白おかしく楽しんでみると、表のは既に調べ物をはじめていた。ペラペラと本を捲るのが早いこと早いこと。過去の事象、様々な妖怪などについて書かれているものを読んでいることは分かるのだが、私ではその全容を読み切ることが出来そうにない。しかし、表のはちゃんと把握出来ているのだろう。

『ほお、冬の妖怪は霧の湖か。ついでに氷精にもちよっかい出すか？』

『いけませんよ。無実の者にけしかけるだなんて、よくもそんな酷いことを言えますね』

『あら、完全に零だと決めつける方が悪いでしょう？　もしも、があるかもしれないわ』

『いやー、言った私が言うのもあれだけど零でしょ。……だつて馬鹿だよ？』

『僕、ちるるんと遊びたいなー!』

『はいはい。それは調べ終わったらね』

なんて無邪気なことを言うのに対して適当なことを返していると、突然何か came。表の本から目を話し、軽く上を見上げている。これは、通信の前兆だ。もしか、紫様に何かあったのだろうか？

『彩。仕事で手一杯の私の代わりに、橙の様子を見て来てくれないか？ 私はもう心配で心配で仕事の手が今にも止まりそうなんだ……ッ!』

……違った。ただののろけだった。

というか、今から妖怪の山に向かえと？ 少し早ければ二度手間にならずに済んだというのに……。ああ、背後から鬱陶しい雰囲気漂ってくる。振り向きたくない。絶対ドヤ顔浮かべてる……。

別に断つてもいいかもしれないけれど、同じ紫様の式神でも私と藍ではどちらかと言えば藍の方が位が高い。多分。紫様に確認したことないから、実際のところ本当かどうか知らないけど。

「いいでしょう。調べ物は大体終わりましたから、これからすぐに向かいます」

『助かる。では、出来るだけ早く、かつ詳細に報告してくれ』

さてどう返事しようか、と考えている内に、表のが早急に返事をしてしまった。ああ、

うん。行くんですね。はいはい、分かりましたよーだ。

……ああ、ちよつぴり憂鬱だ。あんまり顔を合わせたくないんだよなあ……。はあ
……。

私は八雲彩。彼女は橙。

了承した表のは内側に戻ることもなく、そのまま妖怪の山へと向かっていく。別に脚が速いのと代わってくれてもいいと思うのだけど、了承したのだからと代わろうとしないのは真面目だなあ、と少しばかり関心するところである。寒い中ご苦労。

『……はあ』

『辛気臭いため息すんなよ。こっちまで滅入っちゃまうだろうが』

『まあ、分からなくもないわ』

橙は妖怪の山の迷い家に住んでいる。種族は化け猫、あるいは猫又、時折藍の式神。つまり、式神の式神というわけである。きつと凄いなことなだろうけれど、私にはいまいちその凄さが分からない。別のなら一つくらいその凄さを理解しているのがいるかもしれないけれど、まあ割とどうでもいい。

『誰が会いますか？』

『今表にいるのが顔合わせるだろ』

『藍さんへの通信は私が行いましょう』

『そう？　なら、お願いしますね』

通信をしてくれるのはいいことだ。私のやることが減る。……まあ、全くの零になると少しばかり不安になるのだけど。

表のは吹雪の中、ザクザクと妖怪の山を登っている。表のが普段より足取りが若干重いのは、吹雪の所為だけじゃないだろう。少なくとも、私は顔を合わせたくない。

『僕はだいたいと遊びたいけどなー』

『……よくまあ、そんなこと言えますね』

遊ぶ、なんて表現を悪意なしに使えるのは無邪気なのくらいだよ。悪意ありなら奥のほうで黙ってるのがよく使うけど。私はとてもではないが使えない。

……まあ、橙と顔合わせするのはどうせ表のだ。その間、私はやれることをやろう。手持無沙汰だし。

『……まあ、あれだ。結局、この異常気象の原因は誰か分かりましたか？』

『表のは何か気づいてそうだがなあ……。ま、代わるのを待つか、それとも上がって訊くか？』

『えー、私は嫌だよ。寒いもん』

『それに、表には一つまででしよう？』

『んじや、待つしかねえか』

表に出るのは原則一つまで。式神憑きで安定したとはいえ、私は好き好んで同じ轍を

踏みたくはない。

表の様子を確認してみれば、そろそろ迷い家の結界に到達する頃だろう。本来ならば迷い人のみが侵入を許される場所なのだが、紫様の式神である私には関係ない。……ただ、橙と会う前にちよつとだけ話しておきたいのがある。そう思い、私は奥のほうでぼんやりとしているへ向かう。

『あゝさ』

『……………』

『おーい』

『……………』

お、反応してくれた。よかったよかった。今回は完全無視されなくて。

『橙との顔合わせ、もしかしたら任せるかもしれないから』

『……………』

『もしもの時はよろしくね』

『ん』

それだけ伝えておき、私はさつきと戻る。まあ、表に出ている真面目なのが内側に引き下がってくるとはそこまで思っていない。けれど、もしかしたらそうなるかもしれない。その時、あの無邪気なのを表に出すわけにはいかない。だから、こういう時の適任

がいるなら任せた方がいいのだ。

保険を用意しているうちに、表のは無事迷い家に到着したようだ。いくつか寂れた家
が立ち並んでいるが、普段橙が住んでいる家が決まっている。その家の扉の前に立ち、
トントンと叩いた。ほんの少しだけ待つと、ガチャリと勢い良く扉が開かれた。……遂
に橙と顔合わせかあ。はあ。

「藍さ——……何よ、急に」

弾けるような笑顔で出てきた橙の表情が一瞬で沈み込み、刺し貫くような目で睨み付
けてくる。

「藍の頼みを受け、貴女の様子を窺いに来ました」

「あつそ。私、元氣。さっさと帰れ」

「そうはいきません。詳細に、とのことです」

「うっさい！ 帰れって言っただけでしょ!？」

善意ナシナシ。悪意マシマシ。相変わらず、この様だ。ご覧の通り、私は橙に嫌われ
ている。それはもう、烈火の如く。私は特段嫌ってはいないのだけれど、向こうからこ
こまで嫌われてしまうともうどうしようもない。……だから会いたくなかったんだよ。
はあ。

「……で何もせずに帰ると藍の頼みを破ることになってしまいます」

「破れ。そんで死ね」

「死にません。……死ぬつもりなど、毛頭ありませんよ。橙」

「黙れ！ その口で私の名を呼ぶなッ！」

ここまで嫌われてしまった理由は、同じ化け猫だからだろう。いや、同じ式神だからかな？ それは同族嫌悪というわけではなく、同族なのに決定的な差があるから。

私は八雲彩。彼女は橙。私は八雲の姓を名乗ることを許され、彼女は八雲の姓を名乗ることが許されていない。私が紫様の式神で、彼女が藍の式神だから。

私は一尾。彼女は二尾。化け猫という種族の括りでは私の方が明らかに劣っている。私の方が位が上なのだ。私が紫様の式神で、彼女が藍の式神だから。

『……もしもし、藍さん？』

『彩か。橙の様子はどうか？』

いや、よくもまあこんな状況で悠長に通信出来るな……。しかも、その声色は平静そのものだし。私には無理だ。

『橙さんは元気です。少しばかり頬を赤くしていますが、この天候ならそれも平常でしょう。ちゃんと暖炉に火を灯して家の中を温かくしていました。薪は十分に残されています。ですので、風邪を引くようなことはないと思いますよ』

頬を赤くしているのは寒さよりも、私への怒りの感情だと思えますがね。……まあ、

表を見る限りそれ以外は合ってる。

そんなことは露知らず、藍はそれはもう嬉しそうな声で言った。

『そうか！ それはよかった。わざわざ済まなかつたな。礼を言おう。ありがとう。これで仕事に身が入るといふものだ』

『そうですか。では、通信を切ります。お互い、頑張りましょうね』

『ああ。それでは』

プツ、といった感じで通信が切れる。……よし、終わった。ならば、長居は無用。……と、言いたいんだけど、次は何処に行くかが決まっていない。表に出ている真面目なの考えを訊きたいのだが、今のままでは訊くことが出来ない。

よし、保険が活きた！ そう思い、私は奥へと向かい、だんまりなのを引っ張っていく。ちなみに、ほぼ無抵抗。そのまま表へと浮上していく。

『ちよつと代わって！』

『まだ終わっていないのですが……』

『もう済んだから！』

『おや、そうでしたか。では、代わりましょう』

『ん』

私は引っ張ってきたのを表に置いていき、真面目なのと一緒に内側へと戻っていく。

「黙ったならもう帰れ！」

「……ん」

「ッ！ 何よ、その眼は！ 馬鹿にしてんのかッ！」

「……ん」

いやあ、流石だ。表のに対して誰が何を言おうと、基本的に無関心。極々一部を除けば、総じてどうでもいいのだ。自ら表に出ようとしないけれど、頼めば出てくれる時もあり、こういう時に非常に役に立つ。

さて、表の様子は置いておき。あれだけ調べてくれた末の考えを訊かせてもらおうかな。

『で、どうなんだ？』

『私の推測ですが、春の損失でしょう。何者から春を奪い、冬を留めている。以前にも似た事象があつたようです』

『それなら、春を奪った誰かを見つけないといけないわね』

『それでは、怪しい者を見なかったか聞き込みをしませんか？』

『流石に時間が掛かるでしょ。春を奪った理由を考えて、そこから見つけたほうがいいと思う』

『んじゃ、春を集める理由は何だ？』

『……さあ?』

『おい』

そんなことを話していると、ふと表の様子が変なことに気付く。いくつかも表の変化に気付き、それぞれが表を見上げ始めた。

「うう、寒いな。何処だここ?」

「化け猫が二匹もいるわ。とっちめて何か訊き出しましょう」

「そうね。じゃあ、誰が休む?」

……霊夢だ。残りの二人は、誰だろう? けれど、三人の目的は大体察することが出来る。異常気象の異変解決。血気盛んにも私と橙を叩きのめしてから訊き出すつもりらしい。

うわあ、どうしよう。この状況で挑まれるの? しかも二対二を? ……これはもう散々だ。はあ。

命名決闘法案

表の視界は斜め上に浮かんでいる霊夢含んだ三人の人間に向けられていて、隣にいる橙の様子は窺えない。だが、そのこと自体は割とどうでもいい。問題は、橙と一括りに挑まれる可能性だ。……ああ、嫌だ嫌だ。

「……何の用？」

「いやあ？　ただ吹雪の中を飛んでたら着いただけだぜ。どうだ、お前はここにいたんだ。場所くらい知ってるだろ？」

「迷い家よ。道に迷う者が行きつく場所」

白黒魔法使いと橙が話し合っているうちに、私は内側で一言号令を試みる。

『命名決闘法案をやる気があるの、集合』

命名決闘法案。通称、スベルカードルール。人間が妖怪に勝つために、妖怪が人間と戦えるように、危険性を削ぎ落して派手さと美しさを混ぜ込んだ遊戯。その内容は細かいようで割と雑なルールなのだが、現状で最も重要な内容は挑まれたら原則受けなければならぬことだ。挑み方は、目の前で名乗りを上げてスベルカードの使用回数と被弾回数を提示してもいいし、実は不意打ちだろうと構わない——この場合は大抵基本であ

るスペルカード使用回数三回、被弾回数三回となる——ことが非常に質が悪い。ちなみに、逃亡は無効試合になりがちだが、妖怪側は自身のプライドがそれを許さなかつたりする。

私があの人間の誰かに命名決闘法案を挑まれるだろう、と推測するのは至極普通なことだろう。そして、表にいる無関心なのは、きつと挑まれても棒立ちのまま被弾して終わる。それと比べれば、やる気のあるのどれかが出たほうがよほどマシというものだ。ゆえに、挑まれると推測出来るのなら、相手である人間のために代われるのを準備していたほうがいい。

『おう』

『やるやる——！』

『俺が出るッ！』

『ふん、やらせろ』

ふむ、四つね。一つはこういう時に矢面に立つから、一つは無邪気にも楽しい遊びとして、一つは威張り散らすように、一つは暴れたくて、といったところかな。まあ、この四つならどれが出てても特に問題はないと思う。

『じゃあ、挑まれたら出てってね。よろしくー』

ちなみに、私は戦うのはあまり好きではない。それに、私より出来るのがいるのだし、

別に構わないでしょう？

集まっている四つのどれが出るかで言い争っているのを聞き流し、私は少し距離を取って奥の方へ行つたのに声を掛ける。

『あのさ』

『はい、何でしょうか？』

『終わったら治癒よろしくね』

『そうですね。身体の傷は私がしつかりと癒しましょう』

うん。これで事後処理もよし。次は、っと。

『おーい』

『おや、どうしましたか？』

『紫様に異常気象について連絡する？』

『いえ。まだ確証を得ておりませんし、もう少し調べてからの方がよいのでは？』

あー、確かに推測だもんなあ……。以前に似たようなことがあっただけで、今回の原因がそれとは限らない。

『けど、紫様は何か分かったら連絡して、って言つてたよね？ ……どうする？』

『ふむ……。そうですね。連絡してみましよう』

何か分かったら、とは曖昧で困る表現だよね、といった感じに言つてみたら、連絡す

る気になったらしい。よし、これで命名決闘法案で負けた際に訊き出されるであろうことがよりよいものとなるだろう。人間が解決してくれるのならば、欲しい情報を渡して解決してもらおうとしよう。わざわざ私が解決する必要なんてないよね。

え？ 私が連絡すればいいだろ、だって？ 私より知ってるのがいるんだから、そっちに任せた方がいいに決まってるでしょ。

『紫様』

『彩。何か分かったことでも？』

『飽くまで推測ですが、春の損失が原因ではないでしょうか？ 以前にも似た事象がありましたので、何者から春を奪っているのでは、と』

『春……、奪う……、集める……、開花……』

おや、紫様が何やらブツブツと呟きながら考え始めたようだ。こういう時の紫様は、話しかけても思考に没頭して大抵聞いていない。なので、私は黙って結論が出るのを待つことにする。

そして、一分ほど待っていると、紫様は何やら慌てた口調で私に命じた。

『彩。今すぐ冥界へ向かいなさい。境界は私が緩めるわ』

『冥界ですか？』

『関係ないならそれでいいわ。……けれど、もしかしたら、よ。その事態だけは避けなけ

ればならないの』

唐突な冥界。あの情報からどうなって冥界に繋がったのだ。未だに慌てているのか、詳細なものではなく曖昧なことしか分からない。けれど、それが紫様にとって非常に重要なことなのは嫌というほど伝わってくる。

けれど、残念ながらそれは無理だ。

「スペルカードは三枚、被弾は三回。いいな？」

「ん」

今、表のが白黒魔法使いに命名決闘法案を挑まれてしまった。そして、どうやって選ばれたのかは知らないけれど、一つが表へと飛び出していく。

「ふん。覚悟はいいな？」

「あん？ おいおいどうした、キャラ変わり過ぎじゃね？」

表のがジャギン、と両手の爪を真っ直ぐと伸ばしながら冷めた目で白黒魔法使いを見上げている。……ああ、一足遅かった。

『あのー、紫様。今、白黒魔法使いに命名決闘法案を挑まれてしまったのですが……』

『魔理沙に？ 近くに霊夢はいる？』

『います。それがどうしました？』

『なら、霊夢に冥界へ向かうように伝えて頂戴。それが済んだら、貴女は帰還して結構

『よ』

『はあ、分かりました。元より半分以上はそのつもりでしたので』

よりよい情報を提供出来るように、と思ったら最重要な情報になってしまった気がするけれど、別に構わないだろう。

異変の解決は博麗の巫女に任せられた方がいい。色々な意味で、ね。

化け猫だからって舐めてたぜ

内側から観戦するつもりな私としては、橙と私をまとめて二対二の命名決闘法案にならずに済んでよかった、と思うのみである。ちなみに、橙は給仕服の人に挑まれており、霊夢は屋根の上にニヤニヤ笑いながら私達を見下ろしている。

目が痛くなるような色合いの星形弾幕を表のは伸ばした爪でザシュツと引き裂き、抉じ開けた隙間から右側へと一気に跳び出していく。うっわ、最初から妖術の身体変成と身体強化を使っちゃってるし、この調子じゃあすぐ妖力切れ起こしそう……。

「そこかつー！」

おや、あの白黒魔法使い、この速度を目で追えるんだ。流石、異変の解決に乗り出すだけある。

表のはそのまま右回りに駆け回りながら弾幕を置き去りにしていく。そして、右手を大きく開きながら爪に妖力を込め、右腕を思い切り振りかぶった。

そして、表のの視界から白黒魔法使いが消えた。

「んなっ、消えた……？」

白黒魔法使いの動揺した声が聞こえてくる。まあ、消えてないよ。ただ、白黒魔法使

いの視線が右手に向いた瞬間に切り返して視界から逃れたただけだから。

派手に妖力を込めて、しかも大振りの攻撃をしようとしていた右手。視線が私の身体から右手に向かうのもしようがない。身体からわざと大きく外した右手に向かうのも、しようがない。その瞬間に、派手な妖力だけをそこに置き去りにして切り返す。すると、置き去りにした妖力によって相手が攻撃の幻想を勝手に思い浮かべ、表のが消えたかのように錯覚してしまう。

身体強化をさらに重ねて使ってさらなる加速をした表のは、足音一つ立てずに背後へと回り込む。これだけ速く地面を蹴ってるのに音を立てないとか、どんな脚の使い方してるのやら……。

「ふん」

「ッ、とお!？」

そのまま後頭部へ叩き込んだ膝蹴りを、上半身を大きく前に倒して躲しやがった。……うわあお、どんな反応してるんですか？ 無音かつ背後から強襲を躲すとか。やっぱり、異変解決に乗り出す人間はどこか普通じゃあないね。

そんなことを他人事のように感心していると、表のが白黒魔法使いを上を飛び越えて正面に着地したと同時に内側に戻ってくる。

『代われ』

『最初から飛ばし過ぎなんだよ。爪、そのまま』

『ふん、構わん』

……ああ、もう交代するんだ。いや、別に妖力はまだ残っているだろうけれど、流石に使い切る必要はないよね。

そんなやり取りをしながら表のが交代される。

「来いよ。相手になってやるぜ」

「あん？　またキャラ変わってね？　ま、関係ないな。魔符『スターダストレヴァリエ』
！」

「へえ。んじや、俺も使うか。疾符『爪刃演舞』」

白黒魔法使いから一際大きな星形弾幕が広がる。それに対し、表のは妖力を纏わせた爪を振るい、爪撃を飛ばす。そのまま跳躍して縦に横に乱回転しながら爪撃を放ち、星形弾幕をかき消していく。……いやあ、演舞って名付けただけあつてかなり踊ってるね。いつもより多く回っております、つてうやつだよ。うん。

時折弾幕を引き裂きながら肉薄出来るのだが、ヒョイと躲されてしまうのはしようがないことだろう。だって、この程度の速度なら目で追えるんだもんね。わざとらしく掠めるようなギリギリを狙うあたり、あちらもそれなりに遊んでいるに違いない。

『いやー、お互い楽しんでるねえ』

『そのようですね。……ですが、争いはあまり好みません』

『戦闘とはいえ一応遊戯だから。ね?』

『傷付けば遊戯も争いと大差ありませんよ』

……んー、手厳しい。ま、それでも傷は癒してくれるでしょ? と目を向けて呟けば、当然です、と返された。ああ、相変わらず優しいなあ……。

結果、両者スペルカードを一枚使い切つても被弾することはなかった。あらら、残念。「正直、化け猫だからって舐めてたぜ。こつから上げてくぜつ!」

「そんじゃま、精々付いてってやるか!」

あーあ、お互いニヤニヤ笑つちやつて。白黒魔法使いは星形弾幕だけじゃなく、レーザーやらミサイルやらドンドンばらまいちやつて。それを喜々として捌こうとしている表のも表のだけどき。

時に体をよじつて躲し、時に爪を振るつて引き裂き、時に大きく横に跳んで待避する。表のも合間を縫つて多少の爪撃を飛ばしているものの、容易く躲されてしまっている。だが、お互い楽しそうだ。……ま、楽しんでるならそれでいいか。所詮遊戯なんだし、しまなきや損だよな?」

けれど、楽しい時間は突然に終わる。

「フツ、シツ!——ぐ……ッ」

「これで一つだけ。ま、結構頑張ったんじゃないか?」

ビシッ、と左肩にミサイルが着弾して軽くよろめいた。これで被弾が一回目。表のは視界に映る様々な弾幕を必死に躲し、引き裂いていた。私も表のはとても頑張っていたと思う。けれど、それでもいつか限界がくる。それは単純な理由で、表のの実力より目の前に浮かぶ白黒魔法使いの方が上手だっただけの話。

右手で左肩を軽く押さえながら、表のが内側に戻ってくる。ふうん、ここで交代なんだ。被弾したからなのかな?

『それじゃ、次に交代だな』

『つしやー! ようやく俺の出番だな!』

『おう、いつてこい』

そう叫びながら、表へと跳び上がるように交代していく。……んー、騒がしい。けれど、楽しみなのはよく分かった。

「つし! 舐めてんじやねーぞ! シロクロ!」

「はっ、今度はがきんちよの真似事か?」

……んー、何だろう。二つの遊戯を見ていて、ちよつとだけムズムズする。戦うのはもちろん嫌いだけど、やっぱり楽しそうだし、私も付き合えばよかったかも。

なんてことを考えながら、私は表の様子を眺め続けるのでした。

それがちよつとだけ羨ましかった

「だらだらららあああーっ！」

馬鹿みたいに大声を張り上げる表のは、白黒魔法使いの弾幕を掻い潜りながら縦横無尽に駆け回る。その軌跡に妖力弾を放ちながら。しかし、その妖力弾は決して動くことではなく、かといつて弾けることもなく、ただただそこに留まるのみ。……ああ、表の何をしたいかよく分かったよ。白黒魔法使いはさっさと逃げたほうがいいよ。うん。……ま、伝わるはずもないけどさ。さらに言えば、伝えるつもりもない。

「なんだ？ こんなちゃんけなもんで私を捕らえたつもりか？」
「るっせ」

ふうん。気付いてて逃げないのか。表のは白黒魔法使いをあの場合に留めるために弾幕を留めている。弾幕で線を引いて、柵を敷いて、それはまるで鳥籠のように。飛べない鳥は、猫にだって簡単に仕留められてしまう。

けれど、相手はそんな貧弱な小鳥ではなく、鷹よりも恐ろしい人間だ。果たして、狩られるのはどちらになることやら。

「仕掛けて、引っ掛けて、嵌めて……。それで、最後にまとめてぶっ飛ばすッ！」

「いいこと言うじやねえか。やつぱり、弾幕はパワーだぜ！」

表のが走り続けながら両手に妖力を込め始める。それに対し、白黒魔法使いは何やら八角形のもを手に取り膨大な魔力を込め始める。……うわあ、何ですかあの兵器。下手したらこちら一体が丸ごと吹っ飛ばんじやない？

「爪符『スーパームエガスラッシュ』ッ！」

「恋符『マスタースパーク』ッ！」

表のが右腕を振り下ろし、巨大な爪撃を放つ。白黒魔法使いが白い魔力の砲撃を放つ。……うーん、思った通りあちらの方が強大だ。

その推測通り、一瞬の拮抗を経て爪撃が魔力に飲み込まれ、しかし決して勢いが削がれることはなくそのまま迫りくる。

「ちっ！ もいつばあぁーっッ！」

それを見た表のが左腕も横薙ぎに大振りするが、最早焼け石に水としか言いようがない。あーあ、残念。

それでも表のは右へ大きく跳んで回避しようとしたのだが、時既に遅し。間に合わず、白い魔力の中に飲み込まれてしまった。……うひゃあ、痛そう。それはもう物凄く！ 今は絶対に表に出たくない。というか、次のに傷を残して代わるって辛くない？

『ぐえっ』

そんなことを考えていると、表から内側に吹っ飛んできた。……おう、こりや駄目だ。完全に目を回して気を失ってるよ。

それを見た無邪気なのは、颯爽と表へ飛び出していく。

『よーし！ やつと僕の番だね！ 行ってきまーす！』

『あ、うん。いつてらっしやい……』

表の様子を窺えば、空が見える。白黒魔法使いの魔力の砲撃は既に終わっているようだ。そして、身体は多分仰向けになってる。

「大丈夫かー？ どうすつか……、このままお寝んねは困るんだがな」

「やつほー！ ね、名前教えてくれない？ 僕、ずっと気になつてたんだー！」

「うおっ!? 今度はやけにテンション高いな……。魔理沙だ、霧雨魔理沙」

「まりまり！ 僕と一緒に楽しく遊ぼー！」

「ま、まりまり……?」

へー、あの白黒魔法使い、霧雨魔理沙って名前なんだ。霊夢と一緒に異変解決する人間なら、またいつか会うかもしれないし、一応覚えとこ。あと、相変わらずそのあだ名はどうにかならないのかな? ……まあ、別にいいか。

『紫様がおっしやった通りの名でしたね』

『あれ、言つてたっけ?』

『言ってみました』

『そうだっけ……?』

聞いてなかった。けれど、そう言われれば名前を言っていたような気がしなくてもないような気がしなくもない……。んー、分からん。しかし、あちらは私と違ってちゃんと聞いてたらしい。流石、聞き逃しなし。うん、真面目だ。

「ちゃららー、ちゃらららーん。ちゃらん。ちゃららー、ちゃらららーん!」

「おいおい、歌ってる暇なんかあんのか?」

ちよっぴり反省しつつ、表の様子を見てみた。表のは最初のが伸ばした爪を仕舞い、両手両足を地につけて体勢を低くし、それはもう軽快に走り回っていた。傷とか痛みとかを一切感じさせないくらいに。しかも、またもや歌いながら。いや、まあ、遊戯を楽しむのは自由だし、むしろ楽しむべきだろうし、いつか。

表のが地面から手足を離すと、そこから弾幕が噴水のように噴き出す。それはもう勢いよく上空に舞い上がり、そして広範囲に散らばってから落ちてくる。魔理沙が放つ様々な弾幕を躲しながら駆け回っている表のは、それはそれは楽しそうに笑っていた。

「絢爛『きらきらイリュージョン』!」

そう宣言しながら、表のが魔理沙のほぼ真下で四肢を地面に固めた。そして、地面に妖力を拵げていく。そして、爆ぜた。赤橙黄緑青藍紫。そこら中から弾幕が煌びやかに

噴き出し、見渡す限りを極彩色に彩っていく。

これまでのが使ったスペルカードとは一線を画する。理由は単純。表のは命名決闘法案が得意だから。遊ぶの大好き。だって、楽しいから。勝っても負けても、楽しければそれでいい。今が楽しければ、それでいいのだから。

「よ、つと。ようやくうれしいのが出たな！」

「ふっふーん。ねえ、楽しい？ 僕は楽しい！」

「ああ、だが、私の方がもつと派手で、綺麗で、そして強い！ 魔符『ミルキーウェイ』！」

魔理沙はそう言い放ち、あの八角形を箒の穂に捻じ込みながら飛び回り始めた。そして、箒の穂からは大量の星形弾幕が零れ落ちてくる。

噴き出す極彩色。降り注ぐ天の川。……ああ、これが、これこそが命名決闘法案。美しいね。綺麗だね。そして、夢いね。私には、ここまでのことは出来ない。それがちよっとだけ羨ましかった。

ふざけないでください

表の最後のスペルカードが尽き、命名決闘法案は魔理沙の勝利となった。お互いの煌びやかな弾幕を眺めていて、被弾したかどうかなんて気にしていなかったけれど、あちらが被弾するようなことはなかっただろう。多分。

『あ。終わったから、癒しよろしく』

『そうですね。それでは、いつてきます』

近くで待機してくれていたのにそう言えば、すぐに表へと向かっていった。

『あー、楽しかった！』

『申し訳ありませんが、身体を癒したいのです。代わっていただけませんか？』

『いいよー！』

表で無邪気にはしゃいでいるのと入れ替わり、表へと浮上してくのを見守る。無邪気なのが表にへばり付かなくてよかったよ。

そのまま表の様子を窺っていると、命名決闘法案の勝者である魔理沙が近寄ってきていた。

「さて、知ってる事洗いざらい吐いてもらおうか」

そうやってきたのだが、表のは何故か魔理沙を視界から思い切り外してしまった。表のは目を合わせるのが嫌だ、とかいう性格じゃないはずなんだけど……。

なんて思ったのも束の間。思い切り左を向いた理由が目に入る。白に赤が滲んでいる、血濡れの雪。その中心で横たわる、数本のナイフが突き刺さった人影。橙。彼女が怪我をしたまま意識を失っていた。

「おい待て！……どこ行くんだ！」

向こうの命名決闘法案は物騒だったんだなあ、何てことを考えていたら、表のが橙の元へ駆け出していつてしまう。しかも、魔理沙の制止を聞き流して、だ。それは流石にまずいつて！

命名決闘法案の敗者は勝者の要求に応えることになっている。それなのに、表のはそのルールを無視してしまっている。それはあまりよろしくない。紫様は命名決闘法案のルールを決めた一人であり、私はその式神の一人なのだから、私はそのルールを破るわけにはいかないのだ。

けれど、表のはそれを分かっているのか、それとも分かっている止まらないのか……。そんなもの、分かっている。後者だ。目の前に傷付いた者がいるのだから。

「大丈夫ですかっ!?!」

表のは橙の元にしやがみ込み、目に付いた傷に手を添えた。その手からは淡い光が流

れ出していき、光に触れた傍から傷が塞がり治癒していく。……私としては、この身体の治癒を先にしてほしかったんだけど、まあ、しょうがないか。この身体より橙の方が重傷だし。橙は藍が大切にしてるし。

ナイフを引き抜いてすぐに治癒を繰り返していると、背後から魔理沙と思われる足音が止まった。

「……なんだ。逃げるわけじゃなかったのか」

「ええ、必死にお仲間の怪我を治してるわ。健気ね」

「それにしても咲夜。勝つてもこの様じゃあ意味ないだろ？」

「ちよつと加減を失敗してしまって……。訊き出せなくなっちゃったわ」

そんな二人の会話を聞いた表の様子がおかしくなったことに気付く。……これ、結構まずくないか？ そう思い、念のため飛び出す準備をしておく。

案の定、表のは治癒の手を止めずに振り返ることもなく、責め立てるような口調で話し始めた。

「……今、なんて、言いましたか？ 橙さんを刃物で傷つけ、突き刺し、気絶させ……。」

その上で、貴女はそんなことを言うのですか……？」

「その何が悪いの？」

「ふざけないでください」

やばい！ これ以上はまずい。勝者は敗者に追い打ちせず、敗者は勝者を逆恨みしない。どのような決着だろうと受け入れる。これもルールだ。

即時決行。私は表へと飛び出した。原則、表には一つだけ。うん、分かってるよ。私だってやりたくない。けれど、今の表のは完全に表のみに意識が向いていて、内側に引つ張れるような状況じゃないんだ。だから、やりたくなくてもしようがないんだよ！

「止めて——何故止めるのですかっ!？」

「!？」

橙の治癒を終えると同時に振り返り、右腕を伸ばそうとした身体を途中で押し留める。うぐ、思ってたより意思が強い……。けれど、発射しようとしていた妖力弾は明後日の方角へと吹っ飛んでいったので、まあ、よかったとしよう。

突然、一人二役になった私に驚いている二人はどうでもいい。今は、目先のことの方が重要だから。

「怒りたいのは分かっただけど、抑え——誰かを傷付けて平気な顔をする人間を！ どうして庇うのですかっ!?!——落ち着いてって。ね？ 敗者は勝者に従う。これ、ルール。だから、さっさと答えてさっさと行ってもらう。ね？」

橙は起きないが、傷は治癒したからいい。私の身体は結構痛いのだが、それはしょうがない。目の前の人間は早く異変を解決したい。だから、私が紫様から受け取った情報

を渡して、さっさと冥界へ行ってもらおう。これでこの場で顔を合わせる必要はなくなる。怒りは、まあ、帰ってからゆっくり消化してもらおう。

「……なんなんだ、この化け猫？」

「さあ……？ 私にはさっぱり……」

二人が何か言っている気がするが聞き流す。

少し待つと、隣のは内側へと戻っていった。

『……少し、奥で落ち着いてこようと思います。申し訳ありませんが、後は任せてもよろしいですか？』

出来ればこの身体を癒してから戻ってほしかったけれど……。まあ、これ以上ルールを破らずに済みそうなのでよしとしよう。うん。

「はあ。……さて、知ってること洗いざらいでしたね。この冬をどうにかしたいのでしょうか？ 今すぐ冥界に行ってください。そこに元凶がいます」

「はあ!？」

「……根拠はあるのかしら？」

「信じたくないのならそれで結構。言えることは言いましたので、それでは」

会話を打ち切り、屋根の上で静観していた霊夢を見上げる。私を見下ろすその顔は、かなり不満気であった。……知ったことか。

私は橙の膝と背中の下に腕を入れてゆっくりと持ち上げ、二人を後にする。そして、橙が住んでいる家のベッドに横にしてあげ、そつと布団を掛けてあげた。

「…………じゃあね」

起きるまでここで待っていていようかと思った。けれど、目覚めた時に私がいたら、貴女は不快だよな？ だから、私は帰るよ。紫様の元に。貴女が住むことの出来ない、紫様の元に。ごめんね。けれど、これはしょうがないんだ。

外に出ると、霊夢を含んだ三人の人間は既に迷い家からいなくなっていた。ああ、寒いね。早く、春にならないかな……。

『九つの命を宿す程度の能力』

『紫様。命名決闘法案の敗北を理由に、魔理沙ともう一人の銀髪で給仕服を着た人間に冥界へと向かうように伝えました。おそらく、霊夢と共に冥界へと向かったと思われるです』

まだ若干眠気の抜けない頭に、彩からの通信が入ってきた。隣にいる藍には手を出して静かにするように促し、私は通信に意識を向ける。

霊夢と魔理沙、あともう一人は紅魔館にいる吸血鬼の僕の咲夜ね。霊夢の他に誰が異変解決に乗り出していようとあまり関係はない。霊夢一人いれば、大体の異変は事足りる。……しかし、向かったと思われる、ね。

「……ちゃんと確認したのかしら？」

『いいえ。橙の介護を優先したので確認していません』

「そう」

どうやら、していないらしい。困ったものね。私の推測が正しければ、冥界に住まう幽々子が幻想郷中から集めた春を使って西行妖を満開にさせようとしている可能性がある。そうなってしまえば、幽々子は消滅。下手すれば、西行妖の呪いともいえるべき

災害が幻想郷にもたらされてしまう。それだけは避けなければならない。だから、霊夢には出来るだけ早く冥界へ向かって幽々子を止めてほしかったのだけど、そう上手くはいつていかないかもしれないわね……。

それにしても、橙の介護、ね。

「その言い方だと、橙は相当痛めつけられたようだけど」

「橙に何かあつたんですかッ!？」

『まあ、そうですね』

私が発した言葉、特に橙の名を藍が聞き逃すはずもなく、ガタン、と机を思い切り倒しながら私に詰め寄ってくる。顔が真っ赤でとても可愛らしいけれど、今はそれを愛でている時間ではない。ス…、と目を細めながら、人差し指で藍の唇に触れる。

「仕事に戻りなさい」

「……はい」

そう告げてやれば、藍は見るからに渋々、といった風に机を戻しながら仕事に戻る。ただし、耳がしよつちゆう私のほうを向き、九つの尻尾はグルグルと忙しなく動き続け、座る姿勢もいつでも立ち上がれるように僅かに腰が浮いており、仕事の手も全く落ち着きがなく、まともに動いているようには見えない。

思わずため息を吐いてしまい、眉間を軽く摘まむ。藍は、まあ、後で考えることにし

ましよう。

「……で、具体的には？」

『右肩、右脇腹、左足に刺し傷と多数の切り傷。特に右脇腹の刺し傷は深刻だったようので、治癒を優先していました』

彩に宿る一つに、傷付いた者に過敏なのがいたわね。治癒を得意としていたはずだから、橙が死ぬようなことにはならないだろう。

『あ、そうだ。橙は大事には至らなかったので安心してください、と藍にしつかり伝えておいてくださいいね。藍、橙のことになると周りが見えなくなるところありますし……』
「そうするわ……」

正直言って、もう既に手遅れなのだけ……。

少し遠い目をしながら天井を見上げていると、そんなことを知る由もない彩からの通信が続く。

『そういうわけで、これから帰還しますね』

「場所を言ってくれば、すぐにスキマを開くわ」

『いえ、結構です。紫様は無駄に寝てた分仕事をしてください。それでは』

辛辣な言葉を最後に、彩からの通信は途切れてしまった。確かに普段よりもほんの少し、たった一ヶ月ばかり長く寝てしまったけれども、そこまで言われることだろうか？

いや、そんなはずはない。私がないと言えばないのよ。

さて、一仕事終えた彩は少しすればここに帰還してくる。けれど、今日の前で挙動不審な藍が目先の問題よね……。

「藍」

「つ、はい、何でしょうか紫様」

ビクリ、と藍の身体が軽く跳ねる。サツと仕事の様子を確認してみれば、案の定仕事に戻った時から碌に進んでいない。……ああ、やはりこれは駄目だ。

「……彩が帰還したら交代してもらおうから、それまでは真面目にしろさい」
「承りました、紫様！」

九つの尻尾が畳をバシバシ叩き、輝く笑顔を浮かべ、見るからに喜びを表している。貴女は犬か。

藍もようやく仕事に意識が向き始めたところで、少しホツとする。しかし、それと共に少しばかり気分が沈んだ。

「はあ」

「どうかしましたか？」

「……いえ、異常気象の後のことを考えてたのよ」

嘘。私が考えていたことは、彩が魔理沙に負けた、と言っていたことだ。魔理沙の実

力が低いとは思っていないが、彩が負けたと聞いて少しばかり落胆してしまったのは事実。……まあ、今の彼女なら仕方ない、か。

『九つの命を宿す程度の能力』。私が八雲彩と名付けた化け猫が有する稀有な能力。ここでの命は一度死んでも八度まで蘇る、という生命的な意味ではなく、九つの人格を指す。それぞれの人格に意思があり、性格があり、得意不得意があり、基準がある。人格が切り替わるたび、こちらがついていけなくなる時もあるが、それはそれでご愛敬。

「藍。貴女は彩をどう思ってる?」

「紫様を選んだ式に私が意見することなんてありませんよ」

「そういう御託は結構。正直に答えて頂戴」

そう言えば、藍はいったん仕事の手を止め、難しい顔を浮かべながら私に顔を向けて言った。

「……正直、彩が紫様の式に相応しいかどうか私には分かりかねます」

「そうね。……そうよねえ」

「では、どのような理由で?」

「……保護よ、保護。あのまま死ぬには惜しかったのよ」

事実、式にする寸前には死にかけていた。身に余る力を宿し、自らを滅ぼしかねなかった。だから、私は彼女を式にした。あのまま死んでしまい、その能力が、あの力が、

失われてしまうには、あまりにももったいなかったから。

そんな他愛ない話をしていたら、廊下から足音が響いてきた。そして、静かに障子が開かれる。

「ただいま帰還しました」

「おかえりなさい、彩。じゃあ、藍の仕事を引き継いで頂戴」

「はあ？ ……あー、はいはい、そういうことね。分かりましたよ、つと」

「そういうことだ。では、後は頼んだぞ、彩」

「うん、いつてらっしやーい……」

ウキウキと出掛けていく藍に対し、死んだ目をしながら見送る彩。そして、藍から引き継ぐことになった仕事を目にし、その眼がさらにドンヨリと濁り出す。

その場でしばらく棒立ちしていた彩だが、気持ちを切り替えたのか、机の前に腰を下ろして手早く仕事を始める。……いえ、あれは人格を切り替えたわね。

彩が仕事をしている手前、これ以上私がサボるわけにはいかない。霊夢が異常気象を解決してくれることを祈りながら、仕事を再開した。

……一度と御免だ

表のがたくさんの野菜が浮かぶ鍋をカタコトと優しくかき混ぜている。空いている手でほんの少しの塩をパラパラと加え、少量小皿に移してから味見。そんな時、隣に置かれている炊飯器からピーピー、と音が鳴る。紫様が外の世界から勝手に拝借してきたらしい様々な調理道具を丁寧に扱う表のは、それはもう実に楽しそうである。ま、好きでやってるんだし当然か。

「ふふっ、こんなところかしら？」

頬に手を当てながらコテリと首を傾げて、ボソリとそのようなことを呟いているけれど、どうせ最初から最後まで調理の工程は定まっていたのだ。

チラリと窓から外を眺めてみれば、大分雪解けが済んでいるように見える。春が訪れない異常気象が霊夢達によって解決されてから、もう十日程経っているのだ。春は遅れた分だけ駆け足で過ぎ去っていくらしいけれど、私にはあまり関係のないことだ。

『この異常気象が原因で人間の里が飢饉などにならなければよいのですが……』

『へっ、そんな人間共で乗り切ればいいだけだろーが』

『そうは言うがなあ……。人間が減り過ぎると紫様が憂うだろ』

『ババアなんざ知るか！』

少し奥で三つが話し合っているけれど、私にとってはあまり関係のないことだ。人間が多少飢死しても、私がすることはほとんどない。人間が減って調子に乗った妖怪が湧き出たとしても、その対処は紫様か別のがやるのだし。

「紫様、藍。ご飯が出来ましたよー」

「ありがと、彩」

紫様の言葉を聞きながら、表のは私、紫様、藍の朝食をお椀によそっている。藍の分が二人よりも少し多めなのは、私や紫様より食べる量が多いからである。内側では人間の里の飢饉について話していたつてのに、表ではそんなの関係なさそうである。そりやそうだ。紫様が外の世界から食糧も拝借してるのだから。旬だろうと季節外れだろうと一切関係ない。

「今日の朝食は何なんだ？」

「今日は炊きたてご飯と具だくさんの野菜スープ。食後には林檎を剥いてあげるからね」

表のが藍の問いに答えながら三人分の朝食をお盆に乗せて運んでいく。そんな様子を内側から眺めていたのだが、紫様の表情がいつもと違うことに気付いた。……いや、表情はそこまで変わっていないか。ただ、ちよつと雰囲気がピリツとしているかな？

いただきます、と手を合わせているのを眺めていると、表のが少しだけ羨ましくなってくる。いや、調理したのが食べるのが普通なのはよく分かっているけれどさ、あれだけ美味しそうなものを私が食べられないのはちよつと寂しいのだ。

表のはゆつくりと食事を楽しみ、食べ終えてからすぐにシヤリシヤリと林檎を剥いていると、紫様が真剣な目付きで話しかけてきた。

「彩」

「はい、なんででしょうか？」

「今夜、藍を連れて外に出掛けるから、その間の留守を任せるわ」

「分かりました」

……ふうん。どうやら、今夜に何かあるらしい。おそらく、ちよつとした争いになりそうなこと。そして、その相手は私が足手纏いになりそうな相手であることも、何となく予想出来た。……はあ。

「二人とも、気をつけてね」

表のは林檎を六つに切り分け、紫様と藍に手渡しながら伝えている。多分、表のも私と同じようなことを察していると思う。置いていかれることを悔しいと思っっているのかもしれないし、任されたことを遂行しようと思っっているのかもしれない。

私は二人と比べることが馬鹿馬鹿しくなるくらい弱い。だから、紫様に頼まれたこと

『そういうことだ』

分かつてる。分かつてるけど、うるさいものはうるさいのだ。ジタバタ暴れて駄々っ子か！ ああ、駄々っ子でしたね！ いつもあれを戒めているのは、残念ながら表で掃除に熱中である。私？ 無理無理。止められるわけないじゃん。

ほんの僅かな期待を抱きながら、奥の様子を窺う。しかし、一つはそれを慈しむように微笑むだけ。一つは完全に無関心。一つは異常気象の影響を未だに考察している。一つは静かに眠っている。……ガツカリだ！ 分かつてたけど、誰も止める気がない！

『ゆかりんもらんらんも僕を置いてくなんてつまらないー！』
『だつたらよー……』

地団太踏んでるのの言葉を受け、その隣にいたのが何故か私に目を向けてくる。

『パパッと俺が強くな——』

『つぎっけん！』

叫んだ。それ以上の言葉を遮るように。私の声は内側に響き渡り、地団太が止まり、合っていた目が大きく見開かれ、後ろにいたのがビクツと跳ね、微笑みが戸惑いに変わり、チラリと顔を向けられ、考察が止まり、パチリと目を覚ましてしまう。けれど、そんなものは碌に気にならなかった。……気にしてられなかった。

荒く息を吐いていると、ポンポンと頭を軽く叩かれる。

『……落ち着けて』

『……ごめん。けど、もうあんなことは絶対にしない。……二度と御免だ』

それだけ言い残し、私は頭を冷やすために奥の奥へと向かう。少し、一人になろう。

……悪いこと、しちやつたな。

けれど、もう嫌なんだ。力なんていらぬ。死にたくない。過ぎた力は身を滅ぼす。だから、私は弱くていい。そうすれば、生きてられるから。

閑話

ちよつと遊びに来ただけですよ

私は畳の上に敷かれた座布団にお行儀よく正座し、脇には被っていた帽子を置いておく。服の中に折り畳むように入れて隠していた尻尾を外に出して少し楽にしながら、向かいに座ってお茶を飲んでいる人間を見詰める。無論、微笑みは絶やさない。にっこり。それなのに、向かいの表情はあまり芳しくない。がっかり。

「ふう。……今日はどのような御用なんでしょうか、彩様？」

「ちよつとしたお暇をいただいたから気兼ねなく話せる人の家にちよつと遊びに来ただけですよ？　だからさー、そんな他人行儀な言葉で話さないでよー。私、寂しくて死んじゃうよ？」

「それは兎でしよう？　……はあ。まあ、いいでしょう。私と話してもつまらないと思いませんが？」

「いやいや、ご冗談を。貴女に限って、話が尽きるなんてことはないですよ？」

何せ、目の前で苦笑しているご令嬢は、九代目御阿礼の子である稗田阿求なのだから。『一度見た物を忘れない程度の能力』を持つ完全記憶能力者、あるいは瞬間記憶能力

者。見聞きしたことを忘れることがないから、話のネタが尽きることはまずない。ためになる話、くだらない話、面白い話、悲しい話、その他諸々何でも御座れ。

今日はどんなお話をしてくれるかなあー、なんて期待しながら微笑んでいると、阿求は急に机に紙を広げ始めた。そして、その手には乾いた筆が握られる。……ええと、なんか嫌な予感。

「では、せつかくですから貴女のことを幻想郷縁起に記録しましょう」

「えー。私なんかを記録に残してもしょうがないでしょ？ ほら、私、何処にでもいる化け猫」

「同じ化け猫の橙を記録済みです。そんな言い訳は通しませんよ」

橙はもう書かれてたんだ……。知らなかった。まあ、藍にちよつと訊いてみれば訊いてないことまで語り尽くしてくれるだろうし、記録はしやすそうだなあ。

それに、記録しましょう、って言った瞬間に浮かべた阿求のあの笑顔を崩すのは流石に忍びない。

「……あー、いいよ。好きなようにあることないこと書きちゃってー」

「では、好きなように。実際に私が見て、聞いて、問うて、書けることは滅多にないんですよ？」

そりゃあ、人間の中でも病弱なご令嬢ですからね。それに、勝手に死なれたら色々

困る人間だ。人間にとつても、妖怪にとつても、そして彼女自身にとつても。

「自身の能力で特筆すべきものはありますか？」

『『九つの命を宿す程度の能力』って紫様が呼んでるよ』

「へえ。それはどのような能力で？」

「内側がちよつと騒がしいだけさ」

紫様に式神を憑けてもらつてからは大分マシになったけどね。……憑く前のことは、あんまり思い出したくないかな。

「他に得意なこととかは？」

「私はとりあえず手広く出来るよ。速く走れたり、妖術で爪を伸ばしたり、身体強化したり、ちよつぴり癒したり、他にも色々」

「試しにちよつと見せてくれませんか？」

「んー……、まあ、いいけど」

阿求のおねだりに応え、私は右手を軽く開く。そして、軽く妖力を込める。すると、右手の爪が徐々に伸びていく。……はあ、相変わらず遅いなあ。

「こんな感じ？」

「ええーと……、その、それって便利ですか？」

「……私より得意なのが内側にいるから」

そう言いながら自嘲するように笑い、私は爪を引っ込める。これも少しずつで、比べれば比べるほど遅い。

私は、よく言えば普通で、悪く言えば中途半端。率先して前に出ることも出来ず、家事全般は数歩足りず、記憶力はそこまで、物事を純粋に楽しめず、瞬間威力は低く、事に達観出来ず、癒しても癒し切れず、身体の使い方もなっていない。どれをとっても、私はいずれかに劣ってる。必要な時には必要なのと代わったほうがいい。

私は、最も使い物にならない。

「な、何か弱点などは？」

「水。私、水、嫌い」

紫様曰く、多少水を被っても式神が剥がれないようにしてくれているそうだけど、そもそも私自身が水が大の苦手である。どの程度まで式神が平気か知らないけれど、流石に滝行すれば剥がれると思う。やらないけど。

『すみません』

『おっと、なんですか？』

スツと首ごと視線を逸らしたところで、私は内側に引き寄せられた。そして、通信されたことを教えてくれた。

『先程、例の妖怪を抹消し終えたようです』

『そっか。じゃあ、護衛は終了だね』

お暇？ 嘘だよ。これも仕事だよ、仕事。

先日、人間の里に人食い妖怪が出没した、なんて噂が人間の里の端の方から流れ出した。行方不明者三名。おそらく死亡。手口は人間に化け、外へ連れ出し、そして捕食するそう。目撃者はそう言ったらしい。捕食対象は好みでもあるのか、年若い少女のみ。ということ、私は稗田阿求の近くにいるよう命じられたのだ。万が一、彼女が外に出ようなんてしないように。

幻想郷は全てを受け入れる、と紫様はおっしゃる。人食い妖怪も受け入れるし、その断罪だって受け入れる。とても残酷な話だ。

「……彩様？」

……おっと、阿求が私のことを呼んでる。通信の内容を覚えてくれたのには内側に戻ってもらい、私はすぐに表へと出ていく。

「何かな？」

「私の話、聞いてましたか？」

「いや、全然」

「やっぱり……。私達人間のことをどう思っているか訊いてるんですよ」

ジツトリとした目で睨まれながらそう問われ、私はにっこりと微笑む。……ああ、そ

ういえば、私は一つだけ勝るものがあつたかもしれない。
「大好きだよ」

私は嘘吐きだ。

付き合つてくれねえか？

日の当たる縁側の角を曲がると、黄色い九尾が見えた。それを見た俺はすぐに駆け出し、そして袖を掴み取る。すぐに足を止めて振り返つた藍はその手にマタタビを持っていた。……ああ、いい香りだ。

「なあ、藍。今、暇か？」

「彩か。特に紫様から命じられたことはないが、どうかしたのか？」

「んじや、ちつとばかり付き合つてくれねえか？」

「昼頃には橙の元へ行きたいから、それまでなら別に構わないぞ」

「そうかい。俺もあんま時間は取らねえから安心しな」

そう言いながら、俺は首と指を庭へと向ける。と、同時に両手の爪を一気に伸ばした。藍は僅かに眉をひそめたが、それでも庭に跳び出していく俺の後を付いてきた。

藍との間を少し大きめに取り、向き合つてから両腕をだらりと下ろす。一度大きく息を吸い、全部吐き出す。……よし、準備はこのくらいでいいか。

「軽く攻撃してくれねえか？　んで、俺は往なす。避ける。引き裂く。……分かりやすいだろ？」

「ああ、訓練の一環か。いいだろう」

「おう、よろしく頼むわ」

そう返事し終えた瞬間、一発の妖力弾が飛んでくる。狙いは眉間。上半身を軽く右に傾けて回避。続く三発の妖力弾を右手を軽く振るって引き裂きながら、藍を中心にして右回りに駆け出す。俺を狙って放たれる妖力弾を急加速、急減速、急停止、反転を織り交ぜて躲し、弾幕を置き去りにしていく。チラリと藍の様子を窺うと、真つ直ぐと狙いを定めている目と合った。ニヤリと笑ってやると、藍の口端も僅かに吊り上がる。

それを境に藍から放たれる弾幕が俺を狙うことがなくなり、全範囲に無差別に放たれることとなった。移動によって狙いをずらし、弾幕のない安全地帯を創り出せなくなってしまうわけだ。しかし、まだ問題はない。妖力弾の合間を縫うように、時には両腕を振るい妖力弾を引き裂きながら駆け回っていく。

「まだだ！ もつといける！」

「そうか。ならば、お望み通りさらに強くしよう」

俺の要求に対してそう言い放った藍の弾幕の軌道が大きく変わる。先程までは真つ直ぐと鋭く射貫くような軌道だったが、大きく湾曲して狡猾に攻める軌道へと変貌した。それに軌道だけではなく、弾幕密度も倍程度に跳ね上がっている。流石に駆け回りながらでは辛いため、その場に一度停止して俺に向かってくる妖力弾を全て引き裂いて

いく。

……ああ、魔理沙の命名決闘法案の時の弾幕はこんな感じだったな。もう少し多彩な形状と軌道が混じっていたが、それでも今の俺にとつてはこれくらいがちょうどいいらしい。悔しいが、この程度なのだ。

その場で弾幕を往なし、避け、引き裂き続けていたのだが、何かを感じると同時に半ば勝手に右腕が大きく背後に振るわれる。爪の感触から察するに、どうやら背後から妖力弾が迫っていたようだ。そして、それを引き裂いた。

「……………」

「ぐ……………」

が、その右腕の動きは少しばかり無理があり、その所為もあって右側から迫ってきた妖力弾をもろに喰らってしまった。幸い、訓練として放たれたためあまり痛くはないのだが、被弾は被弾。命名決闘法案ならば被弾一つである。

ふーっ、と息を大きく吐き出し、爪を仕舞った両手を広げながら顔の横に並べて降参を示す。瞬間、藍が放っていた弾幕は一斉に消滅した。

「あんがとな。俺の都合に付き合ってくれてよ」

「構わんさ」

そう言ってくれた藍に感謝しつつ、縁側に座り込む。昼頃にはまだ早い、藍の橙好

きは知っている。右手を軽く振るってさっさと出掛けるよう示したつもりだが、藍は逆
に俺の隣に腰を下ろした。

「どうした？ 橙の元へ行かねえのか？」

「まだ時間はあるからな。それにしても、先程の奇襲、よく見破れたな。視覚外を大きく
迂回させたつもりだったが」

「そりゃ勘だ。何となく、不意討ちは感じ取れるもんだろ」

「野生の直感、というものか……？」

敵の攻撃を察知し、攻撃を躲し、そして撃退する。時には脚を使って逃避だつてする。
死ななきや安い。死角からの不意討ちだろうと、何となく分かる。音だとか、空気の流
れだとか、気配だとか、雰囲気だとか、そういう理屈はよく知らんが、とにかく感じ取
れるんだ。

そう考えていたところで、左手が頭の上に伸びる。しかし、手で防ぐ前に頭に何か硬
いものが当たってしまう。すぐに振り向いてみれば、閉じた扇子を手にした紫様が上半
身だけをスキマから出して微笑んでいた。

「けれど、貴方の反応以上の速度なら当てられるわよ」

「そうだなあ……。まだまだ精進が足りん」

「ふむ……。是非、橙にも身に付けてもらいたいものだな。……いや、私が守るから不要

か……？」

昔はこのような訓練など不要だと思っていた。しかし、これからは一歩ずつ歩んでいかねばならない。少しずつ、強くなろう。

……そうだ。俺はこの身体を傷つけさせない。この身体は俺だけのものではなく、他にも八ついるんだ。俺の傷は皆が共有することになり、そして死は皆を巻き添えにしてしまう。だから、守らねばならない。

掃除をしますよ

「今日の朝食は何なんだ？」

「今日は炊きたてご飯に油揚げの味噌汁、ほうれん草のおひたし、卵焼き、鮭の塩焼き」
「油揚げか。そうかそうか」

藍は嬉しそうに顔を綻ばせている。油揚げ、大好きだものね。少し多めによそってあげましょう。

それはそうと、食卓に藍しかない。紫様が普段座っている席が空いてしまっている。一人減ってしまうと、随分寂しい雰囲気になってしまうものね。

「ところで、紫様は？」

「……まだ寝てらっしゃる。しかし、昨晩は昼前に博麗神社で改めて霊夢と顔を合わせに行く、とおっしゃっていた」

「まあっ！ では、後で起こしてあげなくちゃ」

「そうしてくれると助かる」

私と藍は手を合わせていただきます、と言ってから食べ始める。……うん、今日もいい味。作りたてのほうが美味しいのに、これを食べられないなんて紫様は損よね。やつ

ぱり、早起きは三文の得なのよ。

「私はここの掃除をするつもりだけど、藍は何するの？ はい、お茶」

「私か？ 今日には橙に会いに行こうと思う。最近、気が立っているようだからな」

「あら、そう……」

藍に食後のお茶を淹れてあげながら、私が問うとすぐに答えてくれた。……そう、橙にね。もしかしたら、あの時に私と顔を合わせたのをまだ引きずっているのかしら？ いや、まさかそんなズルズル引きずることもないわよね。他に何か嫌なことがあったんでしよう。

藍は私と橙の仲が険悪であることをおそらく知らないと思う。藍と一緒にいる時の橙は輝くような笑顔を浮かべ、藍に甘えている。私に一切見向きせず、一切語らず、関係を一切見せない。私は特段嫌いじゃないし、むしろ仲良くしてあげたいと思っているのだけれど、残念ながら取り付く島がない。

「たくさん甘えさせてあげてね」

「当たり前だろう？」

藍はそう言つて微笑みながら、ごちそうさまと言つて食卓を立ち去つていく。それを見送つてから、私も手を合わせてごちそうさま、と静かに呟いた。

ご飯粒の一粒も残さず綺麗に食べてくれた食器を片付け、一つずつ丁寧に洗つてい

く。軽く水気を切ってから、水切りかごに立てて並べて干していく。それから食卓を布巾で拭き取り、一度布巾を綺麗に洗ってから水回りの水気を拭き取る。最後に手を洗えば、ここはひとまずお終い。次に紫様の寝室へ向かう。

「……寝ていますね」

静かに扉を開けてみれば、紫様は布団に口元を埋めながらやすやすと眠っていた。その隣にゆつくりと腰を下ろし、耳元に口を近づける。

「……紫様、起きてください」

囁くように言葉を発したけれど、紫様は私から距離を取るように寝返りを打ってしまった。当然、その臉はまだ開いていない。

私だって、本当は自ら目覚めるほうがいいと思つていますよ？ 誰かに起こされるよりも、そちらのほうが気持ちがいいですもの。けれど、ちゃんと顔を洗つて、朝ご飯をしっかりと食べて、きっちりお召替えをしてから出掛けてほしいのです。

意を決し、私は立ち上がる。そして、掛け布団の端をむんずと掴み取った。

「紫様！ 起きなさいっ！」

「うっひゃあ!!」

私は掛け布団を引っぺがしながら、思い切り声を張りました。ビクリと大きく跳ねる紫様を見下ろし、私はやんわりと微笑む。ジツトリとした目で見上げてきましたが、そ

れも覚悟の上ですもの。

「紫様、もう朝ですよ？ それに、今日は博麗神社へ出掛けるのでしょうか？」

「……まあ、そうだけど」

「ですから、顔を洗つてきてください。私は朝ご飯を用意しますから」

「藍は？」

「もう朝ご飯食べて出掛けましたよ、お寝坊さん」

そう言つて微笑んでいると、紫様はそのそと起き上がりました。ここから二度寝なんて流石にしないでしょうから、私は安心して朝ご飯の準備に戻れますね。

炊飯器から真つ白なご飯をよそい、温め直した味噌汁、少し冷めてしまった卵焼きと鮭の塩焼き、そしてほうれん草のおひたしを添えて食卓に並べておく。急須にお茶を準備して待つていれば、顔を洗つて眠気さっぱりな紫様がやつて来ました。向かい側に座り、手を合わせていただきますと言つて食べ始めるのを私は微笑みながら見守る。

「彩、今日は何をしますの？」

「留守番をしながら、ここの掃除をしますよ」

紫様も藍も出掛けるのだから、私は留守番ということになりますね。食卓と紫様の寝室を往復する間だけでも、僅かながら埃が散見していましたし、掃除のし甲斐がありそうですわ。

「ごちそうさま」

「お粗末様です」

食後のお茶を紫様に渡し、私は食べ終えた食器を片付ける。洗っている間に紫様が湯呑と急須を持ってきてくれたから、それも一緒に洗って干す。しっかりと水回りの水気も拭き取って、ここはお終い。

着替えるために部屋へ戻っていく紫様の背中に、一つ問いかける。

「紫様、何か手土産などを用意しましたようか？」

「んー、そうですね。……軽く食べられるものを用意しておいて頂戴」

「分かりました」

軽く食べられるものね。紫様が外の世界から拝借した菓子の中から、箱入りのお煎餅を取り出す。五種類の味を揃えた二十枚入りのお煎餅。これなら、きつと博麗の巫女である霊夢も喜んでくれるでしょう。

さて、私は掃除を始めましょう。そのために、選んだ手土産と掃除道具を持って歩出す。そして、紫様の部屋の前に寄り道してちゃんと伝えておきましょう。流石に、お着替え中かもしれない部屋の扉を開けようだなんて思いませんよ？

「紫様。手土産は玄関前に置いておきますね」

「そう。ありがと、彩」

「いえいえ、お気になさらず」

それだけ伝えれば、後は掃除です。玄関前に箱入りのお煎餅を置いて、私は濡らした雑巾で廊下をちゃんと木目に沿って丁寧に拭いていく。柱や壁なんかも拭いていると、着替え終えた紫様が玄関に現れた。

「行ってくるわ、彩」

「いつてらっしゃいませ、紫様」

玄関から出掛けていく紫様を最後まで見送り、私は掃除を再開する。ここの掃除はお終い。次は部屋ね。畳は箒で優しく掃いて、窓は軽く息を吹きかけながら跡が残らないように拭いていく。汚れがなくなつて清潔になつていく様は、やっていてとても気持ちがいい。きっと、面倒くさいと思うのもいるでしょう。内側にも一つや二つはいます。けれど、誰かがやらなくちゃいけないこと。だったら、それは私がやりましょう。

私は、皆が帰る場所を守りたい。そんな帰る場所が汚れたままだなんて、嫌でしょう？

お礼を言いに来ました

藍は紫様の式神として広く知られているが、私もそうであるとはあまり知られていない。だから、人間の里を歩くときは私が妖怪であることは極力露呈しないようにしたほうがいい。だから、こういう時は耳は帽子を目深に被り、尻尾は服の中に仕舞うことで隠している。下手に周りを見回したりせず、かと言って一点を見詰めることもせず、時折挨拶されれば返し、自然に振る舞う。人間の里にとって、妖怪は飽くまで敵なのですから。

ふと道端の桜が咲いているのを眺めていると、本当に春になったのだと改めて感じた。ただ、今年の春は異常気象によって大幅に遅れ、従来よりも圧倒的に短くなってしまう、その結果としてこの桜模様も非常に短くなってしまう。おそらく明日か明後日には散ってしまうのではないだろうかと思えば、実に儂い命ですね、と感じてしまう。それから人間の里を歩いていき、目的地である稗田家の屋敷に到着する。見張りの人間に会釈をして中に入らせてもらおうとしたのだが、門を潜る直前に私の前に立ち塞がってくる。

「貴女、ここに何の用ですか？」

「阿求にお礼を言いに来ました」

「阿求様に……？」

そう呟きながら、訝し気に私を見詰めてくる。少しばかり目を合わせていたのですが、彼はなかなか私を中に入れてさせてくれない。私が何処の誰か知らなかったのか、それとも気付けなかったのか……。改めて身なりや仕草を観察し、その視線から私が妖怪であることに気付いて警戒していることに気付き、しかしその中で僅かに警戒が緩んでいるところもあり、後者であることを察する。

「八雲彩が来た、と伝えてください」

そう伝えながら、私は帽子を僅かに持ち上げ、耳を見せる。すると、立ち塞がっていた見張りの彼は、目を見開いてからサツと脇へと避けてくれた。

「もつ、申し訳ございませんでした、彩様」

「いえ、お気になさらず。隠していた私も悪かったですから」

そんなに顔を青くして頭を下げるような失態ではないでしょう。多少の遅れは生まれてしまいました。でもその時間に指定があるわけではありませんから。失敗や間違いは誰にだってあることです。

稗田家の屋敷に入り、私は迷いなく廊下を進んでいく。間取りはとつくの昔に覚えている。道中で使用人の一人に阿求が部屋にいることを訊き、それから部屋の襖の前に

ゆつくりと正座する。

「失礼します」

「その声は、彩様ですか？ どうぞ、お入りください」

引き手に手を掛けて静かに開き、一礼してから中へとお邪魔する。そして、しっかりと襖を閉じた。編纂の手を止めた阿求の前に腰を下ろし、真つ直ぐと目を見詰める。

「今日はどのような御用で？」

「貴女にお礼を言いに来ました」

「お礼、ですか？」

「はい。先日、貴方方の編纂された幻想郷縁起を拝読させていただきました、誠にありがとうございます。ございました。おかげで、あの異常気象の異変の解決の助けとなりました」

「いつ、いえいえ。私はただ記録を残しているだけで、決して……」

両手を前に出して遠慮されていますが、貴方方のお陰で私達は助かったことは事実。春が奪われたから冬が留まった、と気づけたのは幻想郷縁起に過去の異常気象とその原因が記載されていたからです。それを読み、紫様に伝え、原因を推測され、そして異常解決者たる博麗の巫女である霊夢に伝えた。これにより、異常気象の異常解決に一役買ったのである。

ですから、私にそのような遠慮せずともいいのですが……。しょうがありませんね。

一つ呼吸を整え、表情を改めながら阿求と顔を合わせる。雰囲気が変わったからか、阿求の表情も一気に引き締まった。

「では、話を変えましょう。異常気象について、いくつか伝えておきたいこと、話しておきたいこと、訊いておきたいことがあります」

「……拝聴しましょう」

「ここからは紫様に命じられた仕事の時間であり、私個人の興味に関する時間でもありません。

「異常気象の異変。その異変に何か名付けたのですか？」

「はい。春雪異変と」

「では、これからはそのように呼びましょう。その春雪異変の首謀者に関して、明確な記載を控えていただきたい。裁量は貴女に任せます」

そう言うと、阿求が二度瞬きをした。……ふむ、そもそも首謀者に関して確定は出来ていなかったようですね。ですが、知らないというほどではなく、誰かから聞いた、といったところでしょうか。紫様、わざわざ命じずともよかったかもしれませんよ。

「春雪異変の結果、人間の里に何らかの変化はありましたか？ 些細な変化でも構いません。思い付く限り、お願いします」

「そうですね……。聞いた話によると、農家の方々は種蒔きに遅れが出たそうです。ま

た、冬が長引いたことで病に臥した方々も多かったですと聞きます。他には、酒が多く売れたそうです。短い満開の桜で花見酒をするために」

「ふむ、そうですか。飢饉などの心配は？」

「今のところは問題ないそうです」

それはよかった。私が勝手に懸念していたことですが、仮に収穫量に響くようならば、紫様の手を煩わせることになった可能性もあった。人間の数が減り過ぎるとバランスが崩れてしまうのだから。

「……あの、一ついいですか？」

「はい、何でしよう？」

少し安心していると、今度は阿求が私に訊いてきた。一つと言わず、二つ三つでも構いませんよ。

「彩様が先日遊びに来た時に伝えなかったのは何故ですか？」

「その日に命じられていなかったからです」

首謀者の記載に関しては早くに気にしていて、先程制限をするよう命じられた。だから、その日に伝えられなかったのはしょうがない。この命が遅れた理由の一つは、それよりも重要な別の仕事を紫様に命じられていたからでしょう。

それだけ伝えれば、阿求は納得した笑みを浮かべた。

それから、仕事を終えたことを伝え、他愛のない話をする。仕事を終えた後は日が落ちるまで自由にしていいと言われているから、私は阿求との話を選択した。彼女から得られる知識は豊富だ。書籍を読み込むだけでは得られない縁も得られる。素晴らしきことだと思いませんか？

より多い知識から、より良い結果を出せるようになる。そうすることで、この身体の生存率を向上させることが可能になるでしょうからね。

笑い飛ばせばそれでいい!

「るんるん、ざつくざく」

僕は僅かに肌寒さを感じながら何となく思い浮かんだ曲を口ずさみ、日陰に隠れて未だに解けずちよつとだけ残っていた雪をザクザクと踏み締める。雪から聞こえる音が心地よくて、靴から伝わる感触がとつても楽しかった! そうやっていると、気付けば雪が土と混じってなくなってしまう。そのことにちよつとした達成感と満足感を覚える。

ふと、こうやって雪を消していけば、最後の最後まで縋りついている冬が終わるんじゃないかなあ、と思った。もう春になっているのは、ゆかりんがそう言ってたから分かっているんだけどね? そうだったら楽しいじゃん!

「あーっ!」

次の雪を探そつかなあ、と思った矢先に、後ろから甲高い声が響き渡る。

振り返ってみれば、僕にビシツと人差し指を向けているちつちやな妖精がいた。

「ちるるんじゃん。どしたの?」

「アタイが昨日見つけてた雪がー!」

「あつたね、雪！ うん、楽しかったよ！」

「そつか！ 楽しかったならよし！ ……じゃっなあーいっ！」

ちるるんが両手で頭をわしゃわしゃしているのを見てみると、僕も思わず笑っちゃうくらい楽しくなってくる。ひとしきり笑って涙ぐむ尻を拭いながら、ちるるんの後ろにちよつと慌てているもう一人の妖精がいることに気付いた。えつと、あれは確かだいちちゃん。ちるるんとよく一緒にいるんだよね。

そんなだいちちゃんがちるるんの隣に立って、肩に手を乗せながら慰めるように呟く。「チルノちゃん、そんなに怒らなくても……」

「だってだいちちゃん！ せつかくアタイが見つけたヒンヤリスポットが台無しになっちゃったんだよ!？」

だいちちゃんの言葉に、大声を張り上げて言い返すちるるん。んー、どうしょ。

「そうだつ！ 代わりのヒンヤリスポット、僕と一緒に探さない？」

「えつ、本当っ!?! 探してくれるの!?!」

「そうだよー。じゃ、早速レッツゴー！」

ちるるんのだいちちゃんの手を取り、すぐにここから出発！ 雪を踏み消していく計画は即行撤廃。日陰から日の当たる場所に出て、やがて霧の湖に辿り着く。普段、ちるるん達妖精が遊んでいる場所。やっぱり、ここの近くでヒンヤリスポットを見つけたほう

がいいよね? さあ、青空に太陽が昇っているうちに、新しいヒンヤリスポットを見つけないっちゃね!

「てれれれー、てれれれーれれーん」

「よーし! 見つけるぞー!」

何となく浮かぶ曲を口ずさんでいると、気合十分なちるるんが僕の手から離れて一気に飛び出していく。その後姿を見て、僕も探さないと! と意気込んだところで、だいちやんが僕の手を握り締めた。その手の感触に、僕は一旦足を止める。

「……あの、彩さん」

「ん? なあに、だいちやん?」

「ごめんなさい。付き合わせちゃったみたいで」

「いいのいいの! 僕は楽しくてやってるんだからさー!」

そんな風にしよげなくていいんだよ? 知らなかったとはいえ、ちるるんに悪いことしちゃったのは僕だし、それで僕が楽しくなることを思ってたから。ちよつと嫌なことがあっても、次は楽しいことをしなきゃもつたいない。

そうだ。あの時はこれからもつと楽しくなると思っていたけれど、結果は全くの正反対で、凄く痛くて、凄く辛くて、凄く苦しかった。思いつ切り失敗しちゃった。次がないかも、つて思った。死んじゃうかも、つて怯えた。消えちゃうかも、つて震えた。け

れど、それでも僕は生きている。この身体があつて、面白おかしく過ごせるんだ。だから、生きてるなら、やつぱり楽しまないと！

だいちゃんの両肩に手を乗せて、僕はめいっばい笑う。

「だから、一緒に楽しも？」

「……はい！」

「じゃあ、行こっか！ ヒンヤリスポットを探しに！」

だいちゃんの手を引いて僕は全力で走り出す。先に行つてしまったちるるんに置いてかれたくないからね！ 精一杯僕に付いていこうと必死に足を動かしているだいちちゃんに振り返つてみれば、その表情は弾けるように笑つていた。

どうにかちるるんに追いついて、僕はちるるんどだいちゃんと一緒になつてそこから中を歩き回りながら、まだ雪が残っているヒンヤリスポットを探す。白く光るところを見つけて駆け寄つてみたら実はただの白い石だったり、途中でお腹が空いてきて近くに生つていた木の実を採つて三人で一緒に食べたり、後ろ歩きしてたちるるんが樹に頭を思いつ切りぶつけて目を回しちゃったり、色々あつて僕はとつても楽しかったよ！

そして、空が茜色に染まって太陽が地平線に沈み始めたころ。

「見つけたー！」

「やったー！ アタイの新しいヒンヤリスポットー！」

「チルノちゃん、よかったねー」

たくさん歩いたから、とつても疲れてヘトヘト。だけど、大喜びしてるちるんを見れば、そんなのは全部吹っ飛んじやって、とつても楽しくなる。お腹の奥からぐーっと込み上がって思いつ切り笑いたくなる。三人で一緒になって、みんな笑顔。

ね? これからも、たくさん笑おうよ。痛かったことも、辛かったことも、苦しかったことも、今を笑えば楽しくなるから。過去を想って泣くよりも、未来を思って悩むよりも、今を感じて思いつ切り笑い飛ばせばそれでいい!

さっさと強くなりてーな

妖怪の山に流れる小川の川上へと歩きながら、雪解け水が流れる小川を見下ろす。おーおー、いるいる。冬が明けただけあって、簡単に見つかるもんだな。んじゃま、いい感じの場所を見つけてさっさと仕掛けるか。俺お手製、少し待っただけで川魚が捕まる手頃な罟であるかご網。川の流れが緩やかでかつ川底が平らな場所を見つけ、そこに放り投げる。

ババアのところから勝手に拝借した紙屑と乾燥した薪に、着火したマッチを放り投げて点火。さーて、待ってる間に川魚を突き刺す串でも作つとくか。近くに生えている樹々の細い枝を右手の爪を伸ばして切断し、そのまま余計な葉を切り落とす。何本作つときゃあいいかな？ とりあえず、五本もあればいいか。遠火で暖まれる場所に腰を下ろし、伸ばした爪を使って枝をガシガシ削っていく。ある程度細く、それで先つちよが尖がつてりゃあ串として使える。

「……あん？」

三本目の完成間近、といったところで違和感を覚える。ガサガサと俺に向かって急接近してくる音！ 足元に削りかけの枝を置き、音のする方角に視線を向けると、樹の裏

側から何者かが飛び出してきやがった。右手を出して迎えてやれば、そいつは引き裂かれる直前で大きく後ろへ跳び上がり、樹の枝に両脚をつけて着地した。

「チツ」

「……んだよ、ネコ。今いとこなんだから邪魔すんなボケ」

「るっさい！ 藍様のお使いの帰り道にいるのが悪いんだッ！」

ギヤーギヤー喚くネコを見上げ、その右肩から左腰に提げられている鞆を見遣る。……ま、手え出してきたんなら受けてやるしかねーよな？

俺は立ち上がりながら樹の枝の上にもいつまでも居やがるネコを睨み付け、妖力を纏わせながら両手の爪を伸ばす。ネコの鋭い目付きと、グツと力が込められた両脚。

「相手になってやるぜ？ 仕掛けを揚げる時間潰しだッ！」

「じゃあッ！」

一直線に飛び出してきたネコの突進を左に跳んで避け、少し距離を取った場所に左手を突き刺して着地する。目の前の焚火を挟んでネコの様子を窺ってみると、真つ赤な華を散らすような弾幕を放ってきていた。ハッ！ その程度、造作もねーな！

「オラアッ！」

地面深くに突き刺していた左手を持ち上げ、土やら石やらと一緒に焚火を思いつ切りぶちまける。放物線を描いて飛んでいく石ころと燃えている薪が、ネコの放つ弾幕

に被弾して破壊されてそこら中に飛び散る。だが、その全てが破壊されたわけではなく、一部はそのままネコへと飛んでいった。

「んにやつ!!? チツ!」

驚愕したような声を上げ、ネコの舌打ちが聞こえてくる。そりやそうだよなあ? 壊せなかつたのの一つでも当たれば、それは被弾だもんなあ?

さて、この咄嗟の判断でネコは何処に逃げようとするか。それは右だ。つまり、俺から見て左側ツ!

「爪符『スーパーメガスラッシュ』!」

「ぎにゃつ!」

妖力を込めた左腕を横薙ぎに振るい、その爪先から巨大な爪撃を放つ。予想通り、右側に回避していたネコに直撃した。

何故回避した方向が分かったか? それは肩掛け鞆があったからだ。おそらく、あのキツネのお使いとやらが入っているんだろう。そんな鞆を前に出すような回避をあのネコがするだろうか? しねーよ。だから、自分の身体が前に、鞆が背後になる右側に避けざるを得ない。

樹々の高さを超えた高さまで浮かび上がり、俺の爪撃を派手に喰らったネコを見下ろす。ハッ、やつぱ身を挺して鞆を守ったようだな。さて次は、と思ったところで、勢い

よく起き上がったネコが飛び上がり、俺と同じ高さまで浮かび上がってくる。随分と睨み付けてきやがる。

「んだよ、ネコ」

「私を見下ろすなッ！ 仙符『鳳凰卵』ッ！」

「知るかバカ！ 爪符『超絶激烈連発爪波』！」

ネコが放つ橙色の妖力弾がいくつもの妖力弾に拡散しながら球状に広がる。俺が両腕を交互に振るい、一振りの爪撃をいくつもの爪撃に分散させながら放つ。お互いの妖力弾がぶつかり合うと、打ち消し合って消滅する。

……チツ、流石にここまで分散さちまうと相当弱っちいな。打ち勝たせるならもう少し強くしなきゃあいけねーわけだが、名前負けさせたくねーから爪撃の分散を減らすのはナシだ。

そのまま互いに被弾せずにスペルカードが尽きてしまう。……まずいな。ネコに一つ被弾させているとはいえ、向こうはまだ二枚残していて、こっちは既に二枚消費しちまってる。

「天符『天仙鳴動』ッ！」

「ツとー！ あつぶねーな！」

宣言と共に急加速したネコの突進を、咄嗟に上半身を大きく後ろに逸らして回避す

る。続く弾幕を爪で引き裂いているうちに、今度は右からやって来たところを後ろに跳んで回避。そして、ネコが置いて来た弾幕に爪で対処している間に次が来る。

「だあああああーっ！ 面倒くせえ！」

思わず叫んじまう。俺はこういう意味のない地味な作業は大嫌いなんだよ！ だからと言つて、デカいの一発叩き込んでしまえば俺のスペルカードが尽きて負けちまう。

……クソツ！

「しゃあっ！」

「ツ痛、ラアツ！」

「にゃっ!?!」

弾幕に対処している隙に背後に鋭い痛みが走る。しかし、その瞬間に急速反転しながら右腕を横薙ぎに振るう。すると、すれ違い際に攻撃してきたネコの顔面にちようどよく右手の甲がぶつかる。あんだだけの速度で突進してきたところに当たったせいか、結構いい音が鳴り響く。

両手で顔を押しえつつジタバタを悶えながら若干涙目で俺を睨み付けるネコ。その顔を見て俺は思わずニヤリと笑つちまう。俺の右手にもかなり痛みが響いたが、これでお相子だ。

「ふしゃーっ！ 鬼符『鬼門——』」

「爪符『ライトニングスラスト』」

身体強化の妖術を掛けた右腕を全速全力で突き出し、その爪先から五本の刺し貫く爪撃を放つ。その弾速は突き出した腕の速度も重なり、今の俺の最速を誇る。この至近距離で外すはずもなく、宣言前のネコの左頬を引き裂いた。

「んじやな、ネコ。今日はもう邪魔すんな」

呆然としているネコにそう言い放ち、俺は罫を仕掛けた小川の元へ下りていく。……あー、川魚の串焼きのための色々、全部撒き散らしちまつてるじゃねーか。ネコの所為で。……俺がやったけど。

「だあああああーっ！ やっぱ気に食わないーっ！」

「……………うつせえな」

遙か上空に響き渡るネコの絶叫を聞きながら、俺はかご網を小川から揚げて帰ることにする。かご網に引っ掛かった川魚は内側の頼むとして、勝手に持ってきた薪とマツチをババアにどう言い訳するか考え、そしてネコの機嫌が悪くなるとキツネの機嫌も悪くなることを思い出し、ため息を吐いた。

騒ぐネコも、苛立つキツネも、叱るババアも、まとめて全部ブチ抜きてえ。さっさと強くなりて一な……………。

流されるだけだから

縁側から雲一つない晴天を見上げつつ、温めに淹れたお茶を一服。お茶菓子として用意した二つの饅頭のうちの一つを手につけて一口ずつ頬張りながら、特にやりたいことはなく、別にやるべきこともなく、ブーツと流されるままに一日を過ごしている。柔らかで温かな日差しは心地よく、優しく頬を撫でる微風は気持ちいい。

別にわたしが表に出ている理由は大したことではない。他のが内側で疲れたからと休みたがっていたり、最近表に出ていたからと譲っていたり、出る理由がないからと断ったり、安らかに眠っていたりで、わたしに白羽の矢が立っただけの話。代われと言われれば代わります。言われぬのなら表にいます。難しく考える必要はない。それくらいでちょうどいい。

「……………」

残りの饅頭を食べようと手を伸ばし、滑るように艶やかなものに指先が触れる。明らかに饅頭とは違う感触。そちらに目を向けてみれば、小さなスキマから伸びた八雲紫の手だった。どうやら八雲紫はわたしが用意した饅頭を食べたいらしいので、そのまま指先を離して饅頭を譲る。そのまま八雲紫の手は饅頭と共にスキマの向こう側へと戻っ

ていき、そして音もなくスキマが消え去った。

半分ほど残していたお茶をぐつと飲み干し、ほう……と一息吐く。このまま何事もなく一日が終わる。ささやかだけど、生きるだけなら劇的な変化なんて必要ない。人妖も男女も公私も賢愚も善悪も好悪も正邪も美醜も紅白も白黒も明暗も有無も真贋も真偽も可否も正誤も増減も加減も曲直も大小も長短も高低も長幼も強弱も軽重も緩急も寒暖も難易も開閉も清濁も和洋も天地も今昔も考えるだけ無駄。今を生きるのにわざわざ考えずともいい事柄。そういう些細な差異なんて、すべからくまとめようでもない。

コトリ、と湯呑を置いて空を見上げていると、その目先に大きなスキマが開いた。そして、そこから八雲紫の上半身が飛び出してくる。

「ねえ、彩」

「ん」

「これから久し振りに古い友人に会いに行くの。貴女を連れて行きたいのだけど、構わないわよね？」

「ん」

別に構わない。誰かが決めたのなら、わたしはそれに流されるだけだから。八雲紫が伸ばしてくる手をそのまま受け入れ、掴まれた肩から引つ張られる。力強く引つ張られ

たわけじゃないのに、まるでわたしが綿にでもなったかのようにふわりと持ち上げられ、わたしはスキマの中に吸い込まれた。

「さあ、着いたわよ」

「ん」

スキマを通った先は、薄暗くてジメツとしてちよつと寒気がするなんだか不気味な場所でした。ふわふわと浮かぶ丸くて白い何か。

さて、八雲紫が着いたという割には古い友人らしき人物は見当たらない。そう思っていたら八雲紫は歩き出したので、わたしはその後ろに付いていく。

「見ての通り、ここは冥界よ」

「……ん」

どうやら、冥界らしい。死者の向かう場所、だったかな。わたし、生きてるんだけど、大丈夫かな。生きてるし、大丈夫か。

少し歩いていると、それはもう立派な屋敷が見えてきた。そして、八雲紫は立ち止まることなく中に入っていく。わたしもその流れに乗って中に入った。手入れの行き届いた庭だ。維持が大変そう。やってる誰か、頑張れ。

そのまま庭を歩いていると、二振りの刀を腰に提げた人間が見えた。刀。殺傷可能な武器。わたしは八雲紫の背後に身を隠す。こうすればまあ大丈夫でしょう。

「……貴女が紫様ですか？ それに、その化け猫は……」

「私が紫よ。それと、この子は私の式。さ、幽々子を呼んで頂戴」

「そうでしたか。では。……幽々子様ー！ 紫様が来ましたよー！」

……大丈夫だった。なら、いい。そのまま黙って八雲紫に付いていく。

縁側に腰を下ろした八雲紫に合わせて、その隣に腰を下ろすことにする。少し待てば、床に足を付けることなくふわりと何者かが現れた。明らかに生きていない雰囲気。彼女が八雲紫の古い友人かな。目が合った。にこりと微笑まれた。

「あらあら、面白い猫を連れてるじゃない。この子は？」

「八雲彩。私の新しい式よ、幽々子。ほら、挨拶」

「……ん」

「……へえ、やっぱり面白い子ねえ。少し欲しくなっちゃった」

ゾワリ、と悪寒がした。別に八雲紫の式が剥がされて、幽々子と呼ばれた何者かのものになること自体は構わない。それが、生きてるなら。けれど、そうじゃない感じがした。

ゆらり、とわたしは立ち上がる。愉し気に微笑む幽々子と呼ばれた者を見詰め、わたしは思う。流されるだけで済むならそれでよかったのに……。

「悪戯はそこまでしなさい、幽々子」

「やあん、紫はせつかちねえ。ちよつと遊んだだけじゃない」

「貴女にあげるつもりなんてこれっぽっちもないわ。私はただ自慢しに来ただけだもの」

「あーら、自分から言うかしら普通？ それじゃあ、私の可愛い可愛い妖夢の自慢をたっぷりしてあげるわ」

「ええっ!? ゆ、幽々子様っ!?!」

「ええ、望むところよ。どちらが上か、勝負といきましょうか」
「ん」

……何だか分からないけれど、あの嫌な雰囲気は雲散霧消した。なら、いい。わたしは静かに元のように座った。

何やら慌てている妖夢と呼ばれた者から受け取ったお茶を飲みながら、わたしは二人の言い争いを聞き流す。今日もわたしは生きている。それでいい。

手を伸ばしたい

人間の里を当てもなく歩いてみると、香ばしい匂いが漂ってくる。匂いのもとに目を向けてみれば、通りのお店に十数人の人間が並んでいた。あれは、焼き鳥屋さんかしら？

私は念のため、被っている帽子を改めて目深に被る。それから、手持ちのお金を確認してから列の最後尾に並んだ。こうしてお店に並んでいる人間がこんなにいるのなら、きつと美味しい焼き鳥に違いありません。

しばらく並んでいて、私の後ろに更なる列が出来た頃。ようやく焼き鳥屋さんのおばさんの前に着いた。恰幅のいいお顔をしていて、とても優しい微笑みを浮かべています。

「あらお嬢ちゃん。いらつしやい」

「すみません。焼き鳥を三本いただけませんか？」

「まあ、若い娘がそんなじやあ駄目よお？ ほら、おばちゃんから一本オマケね！」

「本当ですか？ ありがとうございます」

「いいのいいの！ たーんとお食べ！」

そう言つて快活に笑うおばさんにお金を手渡し、オマケの一本増えて四本になった焼き鳥が入った袋を受け取る。空いた手を振りながらお店を去り、早速一本頬張る。焼きたてで温かく、噛めば肉汁が染み出る。薄つすらと塗られたたれも相まつてとても美味しい。思つた通り、素晴らしい焼き鳥屋さんでしたね。

お昼頃の人間の里はとても賑やかです。お仕事の休憩で私のように何か食べるものを注文していたり、何かを運ぶ大人の方々もいます。子供たちははしゃぎながら駆け回り、それと微笑まじげに見守る親と思われる方も。つい先日まで異常に長引いた冬があつたことを感じさせないような、とてもよい活気が溢れているように感じます。

「……………」

そんな人間の里を眺めながら早々に一本食べ終えてしまい、続く手で二本目に伸びようとした時、その声は聞こえてしまった。

いてもたつてもいられず、私は走り出した。急に走り出した私にそこら中から視線が集中してしまつていますが、そんなことは気にしていません。ああ、屋根を跳び越えることが許されればどれだけいいでしょう。そうすれば、こんな回り道なんてせずにすぐに駆けつけることが出来るのに。けれど、私が化け猫であることが人間の里で露呈してしまうのは、避けなくてはならないルールの一つ。どんなに辛くても、受け入れなくてははいけません。

「よっしやあ！ 当たたりいっつ！」

「うっひよっ！ さっすがあ！」

「よーし！ 次、俺の番ねっ！」

いた。あそこだ。年端もいかなない子供が三人で馬鹿みたいにはしゃいでいる。……
実に楽しそうに笑っていやがる。

そして、私はその声の主の元へ滑り込んだ。

「それっ！」

「痛っ」

私は庇った。子供達が投げた石ころから、足元に倒れ伏している瘦せっぽちで血が流れている猫を。私は思わず、その猫の頬に手を添えてしまう。……ああ、可哀そうに。片目が潰れてしまっている。……痛かったでしょう？ 後で裏路地に隠れてから癒してあげますから、今はもう少しだけ我慢して。

ふと目に付いた血の付着した石ころを拾い上げ、私はゆっくりと立ち上がった。……ええ、大丈夫。私は落ち着いていますとも。そして、青い顔をして私を見上げている三人の子供の前でしゃがみ込む。一番前にいたこの肩に手を乗せ、その額に拾っておいた石ころをコツリ、と当てた。

「ひっ」

「虐めは、駄目ですよ、僕達。痛いのは、嫌でしょう?」

「う、うん……っ」

「じゃあ、こんなことはもうしない。……ね?」

コクコクと何度も頷く子供達に微笑み、私は肩から手を離した。大慌てで走り去っていく子供達を見送り、それから血塗れの猫の元へと戻る。

力なく鳴いている猫を優しく抱え、私は揺らさないようにしながら路地裏へと急いだ。……大丈夫。その傷は私が塞いであげるから。その目もちゃんと治してあげるから。だから、もう安心していいの。

人通りも人間の目もない路地裏に駆け込み、抱えていた猫をそつと下ろす。そして、目に付いた傷口に手を添えてすぐに癒していく。少しずつ傷が塞がっていくにつれ、鳴き声も徐々に元気になっていく。……よかった。ちゃんと、この子を救えたのね。

「ほら、お食べ」

持っていた焼き鳥を串から外し、猫の口元においてあげる。すぐにかぶり付いた猫を見て、私は早く元気になってくれてよかった、とホッとした。

焼き鳥が次々と口の中に消えていき、全部食べ切ってもさらに要求するように私を見上げながら鳴く。……もう、しょうがないわね。私はおぼさんの優しさで充分だから、残りは全部貴女にあげる。すると、案の定ペロリと平らげてしまった。

「……よかった」

痩せていた身体も心なしか少しだけふっくらしてきた気もする猫の頭を優しく撫でながら、私はこうして手を伸ばせたことを嬉しく思った。

弱き者が助けを求めても誰も手を伸ばしてくれないことが日常で、下手すれば助けを求める声すらも封じられてしまう。傷付く者は目を背けられ、下手すればさらに虐げられてしまう。だから、私が手を伸ばしたい。余計なお節介でだとしても、この手を振り払われてもいいから、手の届く範囲で伸ばし続けたい。

そうすることで、あの頃の私のように救われることがあるって信じているから。

血に濡れた左手

時刻は丑三つ時。月明りどころか、星明りすら遮った深い森の中。しかし、視界は猫ゆえの暗視と視力強化の妖術が相まって昼間と大差ない。俺は両手両足を地に付けた猫本来の四足歩行を模した姿勢で、周囲を警戒しながら物音一つ立てずに駆ける。無論、何の理由もなくこんな場所を駆け回っているわけではない。俺は紫に命じられてここにいる。

「……クハ」

俺は人間の里近辺から物音や気配、匂い、そして独特の雰囲気を探り続け、そしてようやくよく見つけ出した。両脚で立ち上がり、樹の裏から対象の様子を窺えば、禍々しい雰囲気や漂わせながら肩を震わせている。寒さや恐れからでは断じてない。

「クウツ、ハハハハアアツ！」

対象は背を大きく逸らせながら高々と嗤う。甲高い笑い声は森の中を木霊し、たちまち近くの樹に止まっていた鴉がバサバサと飛び立ち、ガサガサと栗鼠や川獺などの小動物がこの場から去っていく。

「遂にツ！ 遂に成し遂げたぞオツ！ 儂は、儂はアツ！ クハハハハハッ！」

その姿は人間に程近い。しかし、その手足が明らかに人間のそれではないと主張してしまっている。乾き切った樹皮のように荒れていて、しかし何処か生命力を感じさせる皮膚。その指先は細く、そこから伸びる爪はまるで鉤爪のように鋭利な代物と化している。天を見上げるその横顔からは、ドロリと粘ついた唾液が垂れ落ち、その歯は牙と呼ぶに相応しい形状であった。

「人間をッ！ 人類をッ！ ぶつちぎりに超越したのだアーハハハアッ！」

そう。あの対象は元人間で、既に人外だ。

これ以上の観察は不要か。僅かに出していた頭を樹の陰に隠し、俺は静かに両手の爪を伸ばす。

「……ハア。随分、永かった。こうして妖怪と成ってみれば、人間とはこんなにもちつばけな存在であったのか……」

何故、人間を止めようと思いつたのか。そんなものに興味はない。そもそも、俺は一切合切関係のない話だ。

……ふん。さて、仕事を開始しよう。

「だがッ！ そんなこぼ……っ？」

何かを語ろうとした言葉は、不自然な形で止まった。すぐに何か液体を吐き出し、ビチャリと地面で跳ねる。

無音で背後から肉薄し、左手で突き刺した。場所は心臓。皮も肉も骨も貫き、いとも容易く貫通した。そして、左手首を無造作に捻り、心臓をスタスタに引き裂く。引き抜けば、傷口から派手に血が噴き出した。

「な、何が起き」

しかし、その言葉は突然途切れた。無論、悲鳴も断末魔も上がることはない。

右腕を真一文字に振るい、首を落とす。頭がクルリと回転しながら宙を舞い、そしてポトリと音を立てて地面に落ちた。身体が切断面から血が溢れ出しがならグラリと傾き、そして自らの血の海の中に倒れる。

「……ッ!? ツ! ……、ア……ッ!」

必死に口を動かしているが、そこから声は一切出てこない。何故なら、この頭は既に肺に繋がっていないから。転がった頭が俺を呪殺せんとばかりに睨みつけてくる。きつと、この視線に威力があるのなら、俺の身体に風穴が空いているのだろう。だが、現実是非情である。

右脚を静かに上げ、両目の上に乗せてやる。そして、そのまま全体重を掛けて頭蓋骨ごと踏み砕いた。ぐちゃり、とくぐもったような湿った音を立てながら中身が飛び散る。

心臓、首、頭。この三ヶ所を潰せば、人間は当然のように、妖怪だろうと大半は一つ

の死骸に成り下がる。元人間の妖怪は特に、だ。

ふと、血に濡れた左手を見下ろした。……俺は殺す。敵を、そして命じられた対象を。どれだけこの手を赤く染め、この身体に死臭を纏わせようと構わない。

静寂がこの場を支配する。俺の仕事はこれにて終了した。

「……紫」

『終わったかしら?』

「ああ、終えた。場所は人間の里から北北東に一里ほど離れた森の中」

『そう。すぐに処理するわ』

数秒静かに佇んでいると、地面に音もなく大きなスキマが開いた。スキマは死骸をズブズブと飲み込んでいき、飲み干し、そして閉じた。そこには血の一滴すら残されておらず、まるで何事もなかったかのように綺麗さっぱり消えてなくなった地面が広がっていた。ただ、この俺の身体に付着している血から漂う香りが、ここであつたこととして遺っていた。

幻想郷は全てを受け入れる。人間が妖怪になろうと思うのは勝手だ。実際に妖怪になっても全く構わない。ただし、妖怪になつてしまえばこうして処分するのも、何一つ問題はない。これが、人間が妖怪になった者の末路。遺体すら残らない、残酷な処分。

『それじゃあ、もう帰還しなさい』

「ぶん」

目の前に開いたスキマが大口を開けるように迫り、そして俺を丸ごと飲み込んだ。その際に、両手や右足なんかに着していた返り血が根こそぎ取り除かれていく。漂っていた匂いすらも消え去っていく。取り除かれたものが一体何処に行くのかは知らない。あの死骸と同じ場所に流れているなら僅かに救われるかもしれないが、俺にとつてはもう済んだことで興味はさらさらしない。

こうして、一人の妖怪となった元人間はその痕跡ごと存在を抹消された。

東方萃夢想

花見酒ならぬ葉見酒

私は帽子を目深に被り、人間の里をのんびりと歩く。別に仕事があつて来ているわけではなく、完全に暇潰しで来ている。理由は、紫様が今朝になつて唐突に出て行くよう命じられたから。その時の私は何かやらかしただろうかと頬を引きつらせたが、別に解雇というわけではなく、単純に紫様が一人になりたかつたらしい。ついでに、自分の間は何があつても余程のことがなければ通信せずに関自分で解決してほしい、とのこと。まあ、一人じやなきや出来ないこととか守秘義務とかがあるのだろう。……しかし、自分の間とはいつまでなのだろう？ 一週間くらいかな？ ……ま、帰還を命じられるまで帰らないようにしておこう。

と、いうことで。藍は早速橙が住んでいる迷い家に飛んでいった。私は人間の里で暇を潰そうというわけだ。定期的に与えられている金が使われずに無駄に余っているのだし、使えそうなきにパーツと使つて人間の里の経済を回してあげなくちゃね。ただし、いつまで長引くか分からないので使い過ぎ注意。その辺の金銭管理は内側の真面目なお任せしよう。

……それにしても、やけに明るいなあ。眩しいってわけじゃなくて、人間達の活気が強い。神輿でも手渡せば何が目的ということもなく楽しそうだからみたいない理由で即座に祭りが始まりそうなくらい。まだ朝っぱらだというのに、酒盛りまでしてる人間がチラホラ見当たるし。最近、何かあったつけ？ ……あー、春雪異変があったか。

「おーい！ その可愛い嬢ちゃんやーい！」
「ん？」

そんなことを考えていると、青々とした葉桜の下に莫塵を敷いて酒を呑み交わしている青年に声を掛けられた。既に頬が赤く、相当酔っぱらっているのだろう。周りにいる同じく頬を赤く染めた数人が肩やら背中やらをバシバシ叩いてはやしている。うわあ、若干痛そう。というか、桜が散ってるのに呑んでるのか。花見酒ならぬ葉見酒かな？ ……んー、だったら木陰で呑んでるだけだ、って言われた方がまだ納得出来そう。

まあ、彼らに呼ばれたわけですし、私も曖昧なものだけど反応しちやつたわけですし、多少付き合うくらいはしましょうか。どうせ暇だし。帽子の中に隠している耳と服の中に隠している尻尾が彼らにバレないようにしないといけないけど、そのくらいなら多分大丈夫でしょう。きつと。

莫塵の端のほうに腰を下ろし、とりあえず微笑んでおく。につこり。すると、彼らは大はしやぎしながら私の前に新しいお猪口を置き、トポトポと酒を注いでいく。……あ

の、ちょっと零れてるんですけど。しかし、彼らはまったく気にしてないようである。

「最近は気分がいい！ どうだい、嬢ちゃん？ 俺に奢られてくれねえかあ？」

私が嬢ちゃんねえ……。口調、それっぽいのにしといたほうがいいよね。多分。

「えっ、私にくれるんですか？」

「応ともさー！」

「そうですか。ありがとうございます」

というか、注いでから言われたら流石に断りにくい。……ま、いつか。ここは素直に

奢られましょう。

「いやー、愉快愉快！」

「俺らの奢り酒だ！ ほら、景気よくグイーツと！」

景気よくかあ……。私、そこまで酒が得意ってわけじゃないんだけど。

それ、グイーツ。お猪口の酒を一口で呑み干し、空になった底の二重丸を彼らに見せる。すると、彼らは何故か拍手喝采し始める。そんなに愉快かなあ？

「ヒューツ！ いい呑みっぷりだ！」

「こんなんじや全然呑み足りねえ！ まだまだ呑むよなあ？」

「次はこれなんかどうか？ 辛くていい酒だ！」

「いやいや、嬢ちゃんには甘あいこつちのほうがいいに決まってるあー！」

えっと、どうしよう？ 是非とも代わっていただきたい。けれど、この状況で代わつたら怪し過ぎる。……はあ、私がどうにかしないとイケないのかあ……。

いつものように微笑みを維持しながらどうしようかと考えていると、青年の一人が辛いと言っていた酒がお猪口に注がれていく。ズイツと目の前に突き出されたそれを受け取り、グイッと呑み干す。お猪口が空になったらすぐに甘いと言っていた酒が注がれたので、それもグイッと呑み干した。どっちも美味しいからそれでいいじゃん。あつははー。

それからも青年達の酒盛りに付き合い続け、時に注がれた酒を呑み、時に愚痴っぽい話に相槌を打ち、時に空になったお猪口に注いであげていると、気付けば既に夕暮れ。茜色の空がぼやーつと滲んで見える。というか、回って見える。……これは呑み過ぎたかなあ。あははー。……はあ。

「うっへっへー……。俺あ楽しかったぜえ、嬢ちゃあーん」

「いやー、強いな嬢ちゃんは！ 将来有望だな！」

「えらく別嬪さんだなあ、嬢ちゃん！ おかげで酒が進んだ進んだ！」

「縁があればまた呑もうなあ！」

「……そうですね。それでは、縁が合ったらまた会いましょう」

愉快に笑いながら手を振る青年達に別れを告げ、私も若干ふらつく足取りで歩き出

す。お持ち帰りされないでよかった、と頭の端に思い浮かんで消える。うあー、かなり呑んだよお……。身体が熱い……。頭グラグラするう……。あははー。

とりあえず、阿求のお屋敷に行こう。で、無理言つてでも泊まらせてもらおう。そうしよう。きつと翌朝は二日酔いで頭痛行きだ。嫌だなあ……。はあ。

案の定、二日酔いである。

……頭、痛い。ガンガンする。案の定、二日酔いである。阿求のお付きの人に無理を言ってお屋敷の一部屋を貸してもらい、目覚めて真つ先にこれである。ま、しようがないんだけどさあ……。

すぐに体を起こす気になれず、改めて布団の中に潜り込む。その間にちよつと内側の様子を窺う。

『おや、どうかしましたか?』

『……あー、代わつてくれるのはいいかなあー、なあんて』

『バツカじゃねーの!?! あんなバカスカ呑みまくった表に誰が行くかつてーの!』

『私としては、今のところ表に出る用事はありませんので』

『あつ、そうですかー』

周りを見渡したけれど、生暖かい目で見られたり、若干非難するような目で見られたり、そもそも目が合わなかつたりと、結局のところ駄目そうである。……まあ、私が出たことなのだから、しようがないよなあ……。はあ。

渋々表に戻り、二日酔いの頭痛を感じながら起き上がる。部屋を出て廊下を歩く足取

りが若干重い。途中ですれ違う阿求のお付きの人に挨拶をすれば、食事を用意してあるとのこと。痛む頭を押さえながら人間の里のお店を探すのは面倒だと思っていたので、素直に嬉しかった。

「いただきます」

出されたのはとてもシンプルな卵粥。添え物として、たくあんと梅干しが少々。二日酔いの朝食にこれほど素晴らしい食事があるだろうか？ いや、ない。多分。

ふーふーと覚ましながら一口ずつ食べていると、顔色が若干悪い阿求が現れた。……そういうえば、昨晚顔を合せなかつたし、体調が悪いのだろうか？ 風邪でも引いていたのかな？

「……おはようございます、彩様」

「おはよう、阿求。顔色悪いけど、大丈夫？ 風邪？」

「いえ、昨日はなんだか急にお酒を呑みたくなりまして……」

「……まさか、二日酔い？」

「……はい」

阿求は頭を押さえながら頷いた。おお、同志よ。こんな同志、嬉しくもなんともないけど。むしろ虚しい。

いただきます、と口にしてから私と同じ朝食を食べ始めるのを眺めていると、ふと違

和感のような引つ掛かりを覚える。阿求は酒を呑まない娘ではない。だが、自分自身が病弱であることを誰よりも理解していて、飲酒の適量を弁えているほうだ。それなのに、何となくで二日酔いだと言う。……何か、ヤケ酒でもしたくなるような、嫌なこととか面倒なことでもあつたのだろうか？

そんなことを考えていると、阿求は卵粥を食べ終えていた。それを見て、食事の手が止まっていたこと思い出し、私は慌てて若干冷めつつある卵粥を掻きこんだ。ふう、ごちそうさま。

「彩様はこれからどうするおつもりですか？」

「別に用事はないけど、長居するつもりはないよ。紫様次第だけど」

「そうですか」

「そういう阿求はどうなの？ 面倒事とか抱えてない？」

「いえ、特には……」

コテリと首を傾げるところを見るに、少なくとも面倒なことがあつたわけではなさそうである。何でヤケ酒なんかしたのやら。周囲が呑んでいるから、それに当てられたのかな？ ま、こういうのは私よりも内側にいる真面目なのが考えたほうが色々早い。考える理由があるかどうかは知らないけれど。

私は痛む頭を帽子と一緒に押さえ込み、ゆつくりと立ち上がる。急に動くとう頭痛は加

速するから、慎重にしなくてはならない。

「それじゃあ、私は外に出掛けるとしますね。夜になったらまた来ると思うんで、その時はよろしく」

「分かりました。それでは、行ってらっしゃいませ」

阿求に軽く挨拶を済ませ、見張りの人にまた来るかもしれないと伝えておき、私は外に出た。少し歩いて人間が多い場所に行けば、愉快に酒盛りしている姿がチラホラと見つかる。やつぱり、何かあつたのかなあ？ ……駄目だ。昨日と同じ春雪異変くらいしか出てこない。

阿求のヤケ酒の件もあつて何となく気になつているので、人通りの少ない路地裏に隠れてから内側へと潜り込む。

『なんかあつたか？』

『いや、そうじゃなくてさ。あれだよ、あれ。人間達がやけに浮かれてるからさ、何かあつたつけ？ つて訊きに來ただけ』

『……あつたか？』

『いいことがあつたんじやない？ 楽しいことはいいことだよ！』

『んー、冬明けにしてももう随分前でしょ？』

『そのような話は聞いていませんね……』

『んなこと俺が知るかよ!』

『そのような話題は耳にしませんか、何かあったのでしょうか』

どうやら誰も知らないらしい。二つ答えてくれなかったけれど、知ってたら言ってくれているだろう。多分。つまり、そういうことだ。

けれど、気になったことを放置するのはなあ……。数日モヤモヤしそう。で、さらに数日経てばきつとモヤモヤしたこと自体を忘れるのだろう。忘れるまでが長いのだけど。

『訊いて回ってみる?』

『意味あんのか? それ』

『少しばかり興味が湧いてきましたので、聞き込みは私が代わっても構いませんよ?』

『え、本当? 代わってくれるの?』

『ええ』

『是非是非! 頭痛いと思うけど、代わってくれるならどうぞ!』

真面目なのが自主的に表に出してくれるそうなので、私はその背中をグイグイ押しして表に押し出した。いやー、代わってくれるのがいてよかった! 私、嬉しい。

「……これは、相当ですね」

表のがボソリと呟いた言葉は聞き流すことにした。

理由なし。時期不明。

「んー？ 里中宴会してる理由？ 知らんなあ。ま、楽しいからいいんじやねえの？」

「酒が旨いから呑む！ それ以外の理由が必要か？ 否ッ！ 要らんッ！」

「皆呑んでるし、別にいいでしょ？ あー、私も早く呑みたいわあ」

「ふと急に呑みたくなるんだよ。普通だろ？ とこころで嬢ちゃん、この後俺と一軒どうだい？」

「ほら、あそこ小鳥が飛んでる。綺麗でしょう？ いいことがあると、少し味わいたくなるんです」

「理由なんざ知るかかってんだい！ 俺ア呑むぞオ！ 親仁！ もう一本！」

「お父さんもお母さんも楽しそうに呑んでるよ？ 僕も大人になつたらあんな風になりたいなあ」

「いやー！ 愉快！ 痛快！ 豪快！ はっはっは！ ……え？ 理由？ いいじやないですか、そんなのどうでも」

「朝は目覚めに、昼は花見に、夜は月見に呑むのさ。桜が散っても、また次の花が咲くだろう？」

「最近お酒の売れ行きがよくてねえ。おかげで大変なのよ。ま、嬉しい悲鳴って奴さね！ 終わったらアタシも一杯やるよ！」

表のが人間の里のそこら中で何故酒盛りをしている理由を尋ねて回っているようだけれど、残念なぐらいまいち要領を得ない。ただ酒を呑みたいから呑んでいるだけのようだ。別にそれだけで済むならいいんだけど……。

『ほらー！ やっぱ楽しいからなんだよ！』

『まあ、そうみたいだね』

『何が引つ掛かってんだよ？』

『……阿求も呑んでたことかな』

普段外に出ない阿求にも伝わるほどの活気であり、それを浴びたことで急に酒を呑みたくなった。そこまではまだいい。けれど、自分で自制出来ないほど呑むのはらしくない、気がする。変だとは思うけれど、そんなこともあるさ、で流されればそれまでなくらい些細なことだ。

「今日も酒が旨いのお……。ん？ いつからじゃとお？ ……いつじやったかのお」

「そうね、いつだったかしら？ 昨日、一昨日じゃなかったと思うけど」

「覚えてねーよ、んなもん。別にどうでもいいだろ」

「この一杯のために生きているんだよ、俺は！ いつから呑んでるかかって？ ずっと前

からさー！」

「はあ、この宴会の流行りがいつからか、ですか。そう言われると、いつからなのでしよう？」

「知らん。つまらんこと訊くな。酒が不味くなる」

「聞いて驚け!!? 昨夜から夜通しさ! ……え? 違う?」

「いつからなんてそんなどうでもいいことよりよお、俺らと一緒にどうよ? たつぷり楽しもうぜえ?」

「私は毎日呑んでるわ。周りにはあんま気にしてなかったから分からないわね」

「お酒がよく売れ始めたのはいつだったか? そうねえ……。詳しくは覚えてないけれど、三日より前かしら」

表のが人間の里のそこら中でいつから酒盛りをし始めているのかも尋ねて回ったのだけど、こちらあまり要領を得ない。三日よりは前のようだが、それ以降は記憶に残っていないらしい。皆が皆阿求のように覚えているわけではなく、何日も前のことを詳細に覚えているわけではないのだ。

『こんな雰囲気になったのがいつから分からないのね……』

『事の始まりも分からず呑みまくりかあ……。人間らしいちやらしいか?』

『発端の方はどなたなのでしょう? 誰かいらつしやると思うのですが……』

『逆でしょ。いないんだよ、発端なんて。全員一斉かつ曖昧に浮かれ始めたんだ』

私は思い付きのまま言う。人間の里全体で理由もなく、時期不明瞭で酒盛りをしていったのなら、そうだと思った。……本当のことを言えば、他のとは違うことを、逆のことを、と考えた末に思い付いたのだが。

『はあ？ 何でそーなんだよ？』

『待て待て、そう突つかかるなよ。……で、一つくらい理由はあんのか？』

『理由なし。時期不明。だったら、知らぬ間に刷り込まれた、って考えたほうが私は楽だよ』

嘘だ。全然楽しじゃない。今度は誰が、あるいは何が人間達に浮かれた気分を刷り込んだかが気になってくる。……それが分かれば苦労はしないか。

『ただ宴会が流行してるだけじゃない？』

『人間の里全体で流行の始点が未だに見つかってない』

隣のが言った言葉を、思い付いたままに否定してしまう。偶然見つかっていない可能性だつて否定出来ないくせに、私は何を言ってるのやら。

『不特定の誰かを原因に仕立てるようなことはしませんよね？』

『しないよ。……むしろ、別の理由があるなら教えてほしい』

そっちの方が楽だから。単純明快な方がいいに決まってる。私にとっては、世の中は

難しいことばかりだ。……生きるのだから、こんなにも難しい。

そんなことを話しているうちに、表のが人間の里の外に出て少し距離を取った場所の木陰に腰を下ろした姿勢を取ってから内側に戻ってきた。

『興味深いですね。始まりの時期はおそらく一週間ほど前でしようが明確には不明。始まりの地点はなく、さらには流れすらもない。そして、理由も不明。これは様々な推測が立てられそうですよ』

『人間の里全体に誰か、あるいは何かが刷り込んだ可能性は？』
『有り得ますね。否定する明確な理由がありません』

……有り得ちゃったよ。真面目なのが肯定しちゃったよ。あれだけ言うっておきながら、私としては否定してほしかった……。

はあ、とため息を吐いていると、いくつかの周りののが表を見上げていることに気が付いた。それに釣られ、私も表の様子を窺う。

「おい、起きろよ化け猫。狸寝入りなんざ似合わねえぞ？」

……ええと、この声って魔理沙だよ？ 私、何かしたっけ？

一方的な用件

薄っすらと開けられた視界がゆっさゆっさと揺れていて、その際に時折見える黒い靴や箒はきつと魔理沙のものだろう。この身体の肩を掴んで揺らしているに違いない。

『どうしまししょうか?』

『どうする、つて……出るしかないだろ』

『いや、このまま無視を決め込むのも悪くないかも?』

どれかが今すぐ表に出て魔理沙と話し始めるのもいいけれど、このまま寝ていることにして魔理沙に諦めてもらうのも悪くない。私はそう思う。

そんなことを考えているうちに、この身体の揺れが徐々に激しくなってきた気がする。……うつわ、今表に出たら頭痛に加えては吐き気まで込み上げてきそう。嫌だなあ……。

『というか、そもそも! 魔理沙が私に何の用があるつてのよ?』

『知るかよんなもん』

『申し訳ありませんが、私には何も……』

どうやら、どれも知らないらしい。つまり、魔理沙が私に対して一方的な用件があ

るってわけだ。そして、どんな用かは知らないけれど、きつとこの期待には答えられないだろう。

私はパンパンと手を叩き、周囲に呼び掛ける。ちよつとの間でいいから注目してほしい。

『全員集合！ 表に出るか出ないか、棄権なしの多数決。私は出ない』

『さつき言った通り、俺は出るべきだと思ふ』

『私は出て話を聞いてあげてもいいと思うけれど』

『出て話からこちらの欲しいものを引き出しましょう。具体的には、人間の里について』
『出る出る！ まりまりと遊びたい！』

『ケツ！ すぐ出て叩きのめしてから考えればいいだろうが』

『……ん』

『私は……、このまま放っておいてもよろしいかと』

『出る。そして討つ』

出る派六つ、出ない派三つ、か。ちなみに、無関心なのは軽く首を横に振っていたので出ない派だろうと推測。……まあ、一つどつちに傾こうと変わらない差が既に付いたのだけどき。

私は思わずため息を吐いてしまう。どれもこれも前に出るのに躊躇がない。羨まし

い限りだよ。はあ。

「……本気で寝てんのか、これ？ ……ったく、しょうがないな」

多数決を取り終えたところで、魔理沙が痺れを切らしたのか、この身体を揺らすのをようやく止めてくれた。このまま帰ってくれるならそれでいい。さて、何をしてくるのやら……。

出るといった六つはというと、どれが出るか話し合っていた。別にどれが出てもいいと思うんだけどなあ……。

なんて考えていると、地面を見ている視界に魔理沙の服が見えた。つまり、彼女がこの身体に近づいているということ。それを理解したと同時に、話し合っていた六つのもれから表へと飛び出していった。

カツと目を見開き、腰に回そうとしていた手を左手で弾きながら、折り畳んでいた身体を右側へ倒しながら右手を前に出し、思い切り両脚を振り上げる。

「あだツ!？」

その拍子に、振り上げた両脚が魔理沙の顎を蹴り上げた。偶然ではない。身体強化の妖術を含んだ故意的な攻撃だ。そのまま地に付けた右手が地面を指で抉りながら掴み、身体を引き寄せて距離を取る。身体を縦に回転させて両脚で着地し、真っ直ぐと立ち上がる。その際に両手の爪を伸ばし切っていた。

「ほう……? 起き抜けにこれとは、いい度胸してんじやねえか」

表のが魔理沙に対して不意討ちしたのだから、当然命名決闘法案が始まる。魔理沙は左手で蹴り上げられた顎を擦りながら、右手に持った八角形のを表のに真つ直ぐと向けて獯猛に笑う。それに対し、表のは酷く冷たい無表情のまま重心を前へと傾ける。まさに一触即発。……あ、もう触れてたわ。

魔理沙から四本の白いレーザーが飛び出し、表のがそれを真横に跳んで回避。その後すぐの事だった。

『ちよつと！ 魔理沙とは穩便に話し合おうつてことでもとまりかけてたでしょ!』
『あれは敵だ。俺を、この身体を、持ち去ろうとしたからな』

こんな状況だったのにもかかわらず、表のを内側に引きずり込んだのがいた。ああ、今はそんなことでもめてる時間はないよ！ ほら、次の攻撃が来るよ! この身体の状態は横つ跳びの途中で表のが内側に引つ張られ、そのせいで着地もままならず思いつ切り地面を滑っている。棒立ちよりも酷い有様だ。今すぐにでも立ち上がらないと、回避すら出来ない。

ザつと周囲を見回すと、一つだけ目があった。私の意図を察したのか、それはすぐに表へと飛び出していく。そして、表のは地面を横に転がりながらミサイル型の魔力弾を回避し、それから跳ね上がるように起き上がる。……ああ、よかった。

「何だ、調子でも悪いのか？ 今すぐ楽にしてやるぜ？」

「確かに調子は悪いが、御免蒙るぜ。俺に何するか分かったもんじゃねえからな」

「あん？ 知ってる事洗いざらい吐いてもらうだけさ。恋符『マスタースパーク』ッ！」

膨大な魔力が宣言と共に発射され、表のが横に跳んですんでのところ回避する。

……さて、命名決闘法案は果敢にも率先して突撃してくれたのに任せておこう。正直、

あの様子ではそこまで不利益を被ることもなさそうだし、勝とうが負けようがどちらでも構わないだろう。

未だに話し合うだ敵だと言いつ争っているのはいつも通り聞き流し、私は隣にいた真面目なのに何となく話しかける。

『魔理沙、何が訊きたいんだろうね？』

『私には分かりかねます。情報が足りませんので』

ですよねー。それに、真面目なのが分からないなら、私が分かるはずもないか。

まあ、私は何も知らないよ。知ってることすら忘れるからね。

妖夢、じゃなくて妖霧について

魔理沙との命名決闘法案の勝敗？ 当然、負けましたよ。負けたに決まってるじゃないですか。当たり前でしょう？ たかが一ヶ月や二ヶ月くらい訓練した程度で劇的に強くなれるような種族じゃあないんですよ、化け猫つてのは。

まあ、表のは頑張ってたと思うよ。必死に喰らい付いて、垂れた蜘蛛の糸をどうにかして手繰り寄せようとしていた。駄目だったけどね。実力差は絶大だったよ、うん。表のが勝てなかつたし、私じゃ絶対に勝てないね。戦う気も起きないけどさ。

「痛てて……。で、俺に何を訊きてえんだ？」

「話は後だ。付いて来な」

「……へいへい」

さて、魔理沙は表のに何を訊いてくるのかと思えば、どうやら少し先送りにするつもりらしい。さっさと訊いてくれればいいのに。

まあ、こちらは敗者。勝者には従うべきだ。表のもそれを理解しているため、特に文句を言わず魔理沙に付いていく。時折、表のが頭を押さえているのは、被弾した怪我による痛みではなく、二日酔いの頭痛の所為に違いない。……うん、ごめん。それは完全

に私の所為だ。許してほしい。

しばらく表のが魔理沙の後ろに付いて歩いてみると、日がほとんど差さないほど鬱蒼とした深い森の中に入っていく。そこら中に見覚えのない様々な茸が生えていて、なんだかちよつと不気味な雰囲気漂っている。

『あれ、何処なんだろう?』

『魔法の森ですね。魔力の元にもなる幻覚作用などを引き起こす植物や茸などが自生しており、人間はおろか妖怪ですら近付こうとしないほど危険な森だそうです』

『……大丈夫かなあ?』

『問題ないでしょう』

真面目なのがそう言うのなら、きっと大丈夫だろう。安心した。

「何処に行くんだ?」

「私の家だ。そこで洗いざらい吐いてもらおうぜ」

「はあ……。何でわざわざ移動なんてするかねえ……。別にその場でよかつたら」

「その後は明日の宴会の荷物持ちな。それと、研究に必要な物の採集にも付き合ってもらうぜ」

「……要求多くねえ?」

「どうせお前は私に勝てないんだ。だったら、何回要求しようと同じだろ?」

そう言つて、魔理沙は表のに振り向いてニヤリと笑う。……ええと、つまりだ。一つの要求ごとに命名決闘法案をしてもどうせ全部魔理沙が勝つから、度重なる命名決闘法案を省いてまとめて要求を聞け、と言いたいのかな？ ……なんじゃそりや。言いたいことは分かつたけれど、敢えてもう一度言わせてもらおう。なんじゃそりや。いやはや、傲慢な御方ですこと。

表のは魔理沙の言い分を聞いて、頭を押さえている。これは流石に二日酔いの頭痛の所為ではないと思いたい。……思わせてください。

『荷物持ちと採集だつてさ。採集、頼んでもいいかな？』
『いいでしょう』

必要なものを探すのは真面目なのに任せただ方がいい。ササツと見つけ出してくれるに違いない。決して、無邪気なのに任せない方がいい。探しているものじゃなくて、面白そうなものに意識が引つ張られて、当初の目的を忘れるタイプだから。

表のが魔法の森を歩き続けていると、ようやく日の当たる開けた場所に到着した。そこには魔法の森の不気味で陰鬱な雰囲気合わない、明るい風貌の家が一軒建っていた。看板には堂々とした文字で「霧雨魔法店」と書かれている。どうやら、魔理沙が経営している店らしい。マジックアイテムでも売っているのだろうか。……需要あるのかなあ？ ま、別に気にしなくていいか。

「さ、入れ入れ」

「はいはい」

表のが霧雨魔法店の中にお邪魔すると、まず目に付いたのが所狭しと置かれ積み上げられている雑多な道具。……これは酷い。足の置き場を探すのも一苦労だ。

『……すぐに掃除しましょう。ええ、そうしましょう』

『しなくていいと思う』

表の様子を見上げてわなわなと震えながら怒気を纏わせ呟いたのに、私は思わず待ったを掛ける。任せればきつと綺麗サツパリ清潔に整理整頓してくれるに違いない。しかし、そんなことをするためにここに呼ばれたわけではないのだ。やらなくていいことをする必要はないだろう。うん。面倒だし。

表のは魔理沙が指さした椅子に座り、質問を黙って待っている。視線は魔理沙に真っ直ぐと向けられているあたり、多少の警戒はしているらしい。

「さて、お前に訊きたいのは妖霧についてだ」

「妖霧？ 冥界に住んでる庭師のことか？」

「そつちじゃねえ！ 妖しい霧と書く妖霧だ！ ここ最近、幻想郷中に広がっている妖霧！ お前なら絶対に何か知ってるはずだ！ この魔理沙様の勘がそう言っている！」

「妖霧だあ？ 知らん」

「いいや、絶対に隠してるね！ あん時の黒幕を知ってたお前なら知ってるはずだ！」
「だからなんも知らねえって。他を当たってくれ、他を」

妖夢、じゃなくて妖霧についてかあ……。そんなのが幻想郷に広がってたんだ。知らなかった。もしかして、紫様が私達を排した理由って、この妖霧について調べるためだったりするのかな？

『妖霧、知ってます？』

『いいえ、私は知りませんよ』

『そっか』

真面目なものも知らないなら、私が知ってるはずもないか。一応、他のにも訊いて回ってみたけれど、どれも知らなかった。つまり、魔理沙の勘は大外れなわけだ。大体、その黒幕は私じゃなくて紫様が知ってただけだし。

それから、表のと魔理沙は知ってるはずだ、知らない、と延々と繰り返し続ける羽目になった。諦めが悪いのは美德かもしれないけれど、粘着質なのは嫌われるよ。多分。

急に表に出られると困りますよ

『ん……、もう朝……?』

私は内側で目覚めた。そのまま寝ぼけてあまり回っていない頭のまま、ふわふわと表へ浮上していく。……あー、直接床に寝たから身体中が痛そうだなあ。散々採集に付き合わされて結構疲れてたし。ちなみに、この家の主である魔理沙曰く、化け猫の寝床に布団なんて上等品は不要だそう。酷いなあ。紫様は当然、阿求だつて布団に寝かせてくれたぞ。

とりあえず、ガチガチに固くなっているであろう身体をゆつくりと伸ばすことから始めよう。そう思い、私は身体を起こす。

「うわ——きやつ!?!」

が、その瞬間、何故か既に立っていた身体が大きく前に傾き、盛大な音を立ててすつ転んでしまう。咄嗟に腕を前に出そうとしたのだが、何かを掴んでいたらしく、変に引つ掛かつて被害が拡大してしまった。……えつと、どういうこと?

少しばかり痛む身体を擦り、上半身を起こしてから周囲を見回す。……何処だ、ここ? 魔理沙の家にしては綺麗過ぎる。私の身体はいつの間にか別の家に移動したん

じゃあなかろうか。見回す際に手に持っていたのが箒だと今更ながら気付き、ついにてに部屋の壁と窓に見覚えがあり、ここは魔理沙の家であると思い直す。移動なんかしていなかつた。多分。

「急に表に出られると困りますよ」

この身体の口が勝手に動き、ようやく別の表が出ていたことに気付かされた。

「……ごめん、寝ぼけてた——私が早起きして勝手に掃除をさせてもらつてたもの。私も悪かつたわ——確認せずに出た私が悪い。邪魔してごめんね——気にしなくていいのよ？」 けど、次は気を付けてね？」

あー、悪いことしてしまつたなあ……。どうやら、隣のは掃除したいから表に出ていたらしい。そのために内側のどれにも一切告げず、さつさと早起きして活動し始める徹底ぶりである。

持っていた箒を隣に置き、大きく伸びをする。箒を手放す手がやけに固く、それだけ掃除がしたかつたのだと思うと、何とも言えない気分になる。いや、まあ、悪いことじゃないんだけどね？ ここは魔理沙の家であつて、これから何日も邪魔するわけじゃないだろうし、別にやらなくてもいい気がするんだけど。ま、気にするのはやっぱり気にするのかねえ。

「ところで、部屋中に雑に置かれてたものは？——一旦外に出したわ。後で綺麗に拭き

取ってから戻すつもりよ——ま、流石に捨ててはないかあ——棄てるのも考えたけれど、取捨選択は魔理沙にさせなくちゃ」

そう言うってから軽く笑う。私はあまり笑える気分じゃなかったのだけど、隣のは笑っているのだ。それはもう、出来の悪い娘を語る母親のような感じで。

きつと、そんな気分だったからだろう。私は、視界の端で光る何かに気付いた。即座に視線をそちらに移し、それが魔力弾であることを察する。まずい！ この上半身を起こしただけの体勢では避けられるものも避けれない。さらに言えば、仮に避けてしまうと家の壁に傷が付く。それはそれで魔理沙に何を言われるか分からないから嫌だ。

ならば、私がやることは一つだ。

「右腕を前に出して結界！——え、ええ！」

隣の私がやりたいことを告げながら右腕を上げる。直後に後押しされるように右腕が加速し、右腕を真っ直ぐと魔力弾に伸ばして前方に結界を張る。二つ分の妖力を込めた結界だ。魔力弾は目の前に張られた結界に阻まれ、この身体にも家の壁にも傷を付けることなく消え去った。……ふう、助かった。

しかし、やっぱりわざわざ言葉にしないといけないのは……、いや、これ以上考えるのは止めよう。考えたところで、詮無い話だ。

私はすぐに起き上がり、結界を挟んだまま私を攻撃してきた者の正体を見詰める。す

ると、向こう側にとでも見覚えのある人間が見覚えのある八角形のあるものを手にしている姿が見えた。というか、魔理沙だった。

攻撃してきたのは魔理沙だと考え、とりあえず目の前の結界を消した。すると、唐突にガツと胸ぐらを掴まれる。……おおう、かなりお怒りのご様子。幸い、持ち上げられるほどの力はなかったようなのでそこまで苦しくはないのだけど、こんなことをされてはあまりいい気分ではない。

「この魔理沙様から泥棒とはいいい度胸じゃねえか……」

「待つて。何か勘違い——今、掃除をしている途中ですよ。こんな埃っぽい不衛生な部屋でよく生活出来るわね」

「……ん？ 何だ、化け猫か。というか返せ！ それは私の箒だ！」
「手頃な掃除道具がこれしかなかったもの。しょうがなかったのよ」

そんなことを隣のが話している間に、魔理沙は胸倉から手を離れた。どうやら勘違いは自己解決してくれたっぽいし、表は隣のに任せて私は内側へと戻るとしよう。私が一緒に戻って出ていたら、魔理沙を困惑させてしまいそうだしね。

内側に戻ってみれば、いくつか目覚めていたようだ。私と違って、寝ぼけて別のがいるにもかかわらず表に出るようなことはしていない。はあ。

「それと、私が集めたものを何処に隠しやがった！」

「隠してません。外に出しただけです」

「おまつ！ そんなことしたら盗まれ放題じゃねえか！ なんてことしてくれやがる！」

「そんなものより、この不潔な空間の掃除のほうが大事ですから。不摂生はよくないですよ？」

しかし、魔理沙は表のの言葉を最後まで聞かずに弾かれたかように外へ飛び出していった。そして、外からガチャガチャと音が伝わってくる。まあ、本当に必要ならいつでも取り出せるように整理して置いておいた方がいいと思うんだけどなあ。あのままじゃ一つや二つくらいなくなっても気付けなさそうだったし。

そんなことを考えながら表の様子を見てみると、すぐにでも外に出されたものを家に戻したい魔理沙と、埃を拭き取っていないものを家に戻したくない表の言い争いを始めていた。……あれ、何だか昨日似たような状況を見たような気がするんだけど、気のせいかな？

まあ、別に放っておけばいいか。私の出る幕じゃあないし。宴会の荷物持ちを任せられたときに私が表に出ることになったら出るくらいで、後は他のに任せておこうかな。

よーし、しゅっぱーっつ!

すっかり綺麗に片づけられた部屋の中を魔理沙が右往左往している様子を、私は内側からぼんやりと見守っている。ちなみに、そこで黙って待つてろ、と言われたので、表は素直に黙って待つてくれる適任なのに任せておいた。ほら、椅子に座ったまま西日で茜色に染まった壁の一点をジーツと見詰め続け、ピクリとも動かず物音一つ立てない優秀さだ。私ならずと動かないなんて苦痛だから嫌だね。

それはさておき、魔理沙がああやって慌てている理由は、今夜の宴会の荷物をまとめているからである。掃除の整理整頓の時についてにまとめておけばよかつたのではなからうか、とも考えたけれど、思い返せばそんなこと許してくれるはずがなかつた。外に出したものは全部綺麗に整理してきちんと収納しないと気が済まなかつただろう。多分。

『はい、魔理沙の宴会の荷物持ちになりたいの挙手』

というわけで。荷物持ちとして表に出るのを募集する。無論、一つで十分だ。代わる代わるに運ぶ必要性は皆無である。さて、立候補するのがあるのやら。

『はいはい！ 僕やる僕やるー！』

いた。不安だ。

私以外にも同様に不安を覚えたのがいくつかいるらしく、そのうちの一つが率先して止めに行くようだ。……いや、まあ、ちゃんとやってくれるならどうぞ自由に、と思う私は止めるつもりはそこまでなかった。だつてさ、無邪気に手を挙げているのを止めたなら止めたで、その時は別のが荷物持ちをやらなといけないわけでしょう？ だつたら、別にいいのではなからうか、とも思うのだ。不安だけど。

『おいおい、しつかり出来るんだらうな？ 明後日の方向にふらつと寄り道なんざしねえよな？』

『大丈夫つ！ 僕にまっかせなさい！』

『……なら、いいんだが』

頭を軽く押さえながら見るからに仕方なく、あるいは渋々といった風に納得したようである。ま、他に挙手してるのがないし、別に構わないよ。ただし、表の様子はちゃんと見守るつもりだけどね。不安だから。

「よしっ！ これだけあればいいだろ」

「……………」

お、魔理沙の荷物がちょうどよく集まつたらしい。それなりに値を張りそうな酒が五本に、いかにも保存食つて感じの乾燥茸が数種類。それらが手提げ袋に押し込まれてい

る。なあんだ、思ったより少ないじゃないか。私は数十本の酒瓶を勝手に想像していたので、若干だが拍子抜けである。

『いい? 荷物を落したりしないようにね?』

『はーい! 行ってきまーす!』

表へ飛び出す直前に注意を受け、意気揚々と飛び出した無邪気なのは表のと交代した。表からすんなりと戻ってきたのは、そのまま奥の方へと下がっていく。

表に出て、早速手揚げ袋を掴み取り、ズイツと魔理沙の顔に急接近する。……こうして近くで見ると、魔理沙って意外といい顔してるかもしれない。だからどうしたって話だけどき。

「ふっふーん! それじゃあ、行こっか! まりまり!」

「うおっ! き、急にテンション変えんなよ。こつちが驚くだろうが!」

「えー? 僕はいつもこうだよ? 変なまりまり」

「うっせえ! お前の方が絶対変だわ!」

まあ、確かに表のはいつもあんな感じだ。だけど、私の内側を知らない者からすれば、急に性格がグルリと変わる珍妙な化け猫になるんだよ。だから、魔理沙の意見は間違ってるけど正しい。

他の化け猫も私と同じだと思ってた頃もあった。けれど、いくら探してもいくら話し

ても、私と同じ化け猫はいなかった。おかしいよね。そういうものなんだ、って飲み込むまでは、ちよつと寂しかったかな。……あれ、私が寂しかったのかな？ 他のが寂しかったのかな？ よく分かんないや。ま、どうでもいいか。

「よし、しゅっぱーっ！」

「おい待て！ 何処に行くかまだ言つてねえだろ!？」

「あ、そつか。何処行くの?」

「博麗神社だよ!」

へえ、博麗神社で宴会するんだ。じゃあ、霊夢もいるのかねえ。他に誰が参加してるんだらうか。いや、考えるだけ無駄か。行つて見たほうが早いだろう。

「ふふふーん、ふふふふふふーんふふふーん」

魔理沙の家を出た表のは、魔理沙の隣で鼻歌を歌いながら博麗神社へと歩いていく。視線があつちこつち行つたり来たりしていて、実に楽しそうである。ただ、時折ふらつと別の方向に数歩動いて、それから思い出したかのように戻っているのは少しだけ面白い。……まあ、荷物持ちを忘れかけていたという点に目を瞑ればだが。

「何だ、その鼻歌?」

「楽しいでしょ? 歌うともつと楽しい! だから歌うんだよ。ほら、一緒に!」

「付き合つてられねえわ……」

その言葉に表のは不貞腐れたが、すぐに切り替えてまた鼻歌を歌い出す。それを聞かされる魔理沙は若干辟易しているようである。ま、しようがないね。

それから私は表の様子を見守り続け、やや難はあつたものの博麗神社まで荷物持ちを全うしたことにホツとした。

「あら魔理沙。今日は随分とお早い到着じゃない」

「別にいいだろ? それより、一人追加だ」

「れむれむだー!」

「れむ……? ……ま、そのくらい見れば分かるわよ。その分、酒は用意してあるでしよ
うね?」

「まあな」

おお、表のが勝手に名付ける妙なあだ名を綺麗に流したよ。気にしない系なのかな? それとも、無視する系なのかな? 霊夢は紫様を通して長い付き合いになりそうだから、この宴会を機会に多少は知っておきたいものである。

「はいこれ!」

「これ、魔理沙の?」

「そうだよ? それじゃあね!」

表のは魔理沙の荷物を早々に霊夢に手渡し、さつさと博麗神社へと勝手に入り込んで

いった。止めたほうがよかったかなあ？ いや、誰も止めてないし、別にいいや。

さて、宴会をする夜にはまだ少しばかり早い。きつと、他の参加者はこれから集まってくるのだろう。表のは全く大人しくないけれど、私は内側で大人しく待っていると思いますよか。

亡霊が此岸に何の用だ？

「にやおーん。ふっふーん」

「あんたねえ……、勝手に人の神社の屋根の上に居座るんじゃないわよ」

太陽が地平線の向こう側に沈んでいく。表のは太陽に咆えていた。何故か得意気である。下で宴会の準備している霊夢の言葉は聞き流しているようだけど、いいのかなあ？ ま、いいや。本気で止めさせるつもりなら、力尽くで引きずり下ろされてるだろうし。

内側でその様子を見上げていた私としては、余計なことをして面倒なことにならないならこのままでいいんじゃないかな、とすら思っているくらいだ。他のがどう思っているかは知らないけれど、表のを無理矢理内側に引っ張り込まないあたり、似たようなことを考えていそうである。多分。

『おや、誰か来たようですね』

近くのがそう言ったのを聞き、私は表の視界を注意深く見詰めてみる。……あ、本当だ。二人組っぽい。

「あんたらも来たのね。残念だけど、準備中よ」

「そのようねえ。……ああ、そうそう。昨日、二人くらい誘ってあげたから後で来ると思
うわ」

「ふうん、そう。別に構わないわ」

「それじゃあ妖夢、霊夢を手伝ってあげてね？」

「分かりました、幽々子様」

……ええと、誰だっけ？ 二人の名前は妖夢と幽々子というらしいが、見覚えがある
ような気がするのだが、いまいち思い出せない。少なくとも、私が表に出て会った相手
ではないと思う。他が表にいる時に顔合わせでもしてたかな？

そんなことを考えながら、妖夢と魔理沙が何やら言い争いをしているのを表のが見下
ろしているのを眺めていると、幽々子の目とバツチり合ってしまった。うわ、なんか嬉
しそうに微笑んでるし。しかもこっちに来てるし。やっぱり、どれかと会ってるんだ
よ。今の表のが知っている相手なのかなあ？ どうなんだろう。

「久し振りねえ、彩」

「久し振り？ ……ま、いつか！ そうだよ、僕は彩。ね、名前教えてくれない？」

「あああ、忘れちゃったのお？ 私、寂しいわあ……。私は西行寺幽々子よ」

「じゃあ、ゆうゆうだ！」

あ、思い出した。幽々子はいったったか、紫様に冥界に連れてかれて顔合わせした亡

霊じゃあないか。紫様の古い友人って言ってたはず。で、その近くにいたのが妖夢。そんな相手をあんな風に気安く呼んじやって大丈夫なのかなあ？ ……あ、大丈夫そう。凄くニコニコ笑ってる。

幽々子はそのまま表の隣の隣に腰を下ろし、三人が宴会の準備をしているのを見下ろしながら口を開く。

「貴女も参加するのかしら？」

「うんっ！ 美味しいお酒を皆で呑むんでしょ？」

「ええ、そうねえ」

……ん？ なんか含んだ言い方だなあ。ただの宴会じゃないのか？ ……ああ、魔理

沙が言っていた妖霧が関係してるのかな？ ま、私にはどうでもいいことか。

「……ふん、亡霊が此岸に何の用だ？」

「あああ、可愛い吸血鬼ねえ。もちろん、お酒と宴会に決まってるじゃない」

「さて、どうだか」

もう日も暮れたなあ、なんて思った矢先、突然背後から投げかけられた言葉に幽々子が対処した。なにやら険悪な関係のようで。

表のが振り返ったことで、背後にいる者の姿を見ることが出来た。三人組で、一人目は蝙蝠のような羽を持つ銀髪の少女、二人目はいかにも不健康そうな紫髪の少女、三人

目は見覚えのある気がする給仕服を着た少女。多分、一人目が吸血鬼かな。それっぽい羽が生えてるし。

「こんばんはー！　ここに来たってことはき、一緒に宴会するんでしょ？　ね、名前を教えてくださいませんか？」

「私に名乗らせるつもりなら、まずは貴女が名乗るべきじゃないかしら？」

「僕の名前？　彩って言うんだ！　ほら、名乗ったよ？　だから、僕に教えてくれないかな？」

「レミリア・スカーレット。そして、我が友のパチュリー・ノーレッジと、我が従者の十六夜咲夜だ」

「そっか！　れみりー、ぱっちえ、さつきー！」

うげ、レミリアが思いつ切り頬を引きつらせてるんですけど！　両側にいるパチュリーは気にせず本を読んでいるから大丈夫そう。咲夜は笑顔の仮面で軽く頭を下げている。……ああ、そうだ。春雪異変の時に霊夢と魔理沙と一緒にいた人間じゃないか。どうしよう、急にナイフが飛んでこないか心配になってきた。

パチュリーと咲夜はレミリアに一言伝えてから霊夢の元へと向かっていったのだが、この場に残ったレミリアは幽々子とただならぬ雰囲気漂わせながらパチパチ睨み合っている。そんな様子を表のは平然と眺めていやがる。そんなものを見てて楽しい

のか。

『……あのさ、あれ、大丈夫かなあ？』

『そうね……。少し心配だわ』

『ま、ただの宴会じゃ済まねえだろうな』

他のもそう思うよね……。正直、今すぐにでも他のと代えてやりたい気分だ。けれど、この宴会に誘われたのは飽くまで表のであつて、内側にいる私含めた八つではないのだ。だから、ここで代わるのはちよつと忍びない。

結局、霊夢から宴会の準備が終えたことを伝えられるまで二人は静かに睨み合い続け、そして表のはそんな二人を鼻歌交じりに眺め続けていたのであつた。あんなものどこが楽しいのだろうか……。今の私では理解出来ないし、ハッキリ言つてしたくない。

もふもふはもふもふのもの

「今日もよく集まってくれたな。それじゃあ、乾杯！」

魔理沙を乾杯の音頭を取り、宴会は始まった。各々が酒やら料理やらに手を伸ばし、ペラペラと語り出す。表のは早速酒に手を出しているけれど、大丈夫だろうか？ ……いや、まあ、私の言えた義理じゃあないのだけでも。

今更ながら気づいたのだが、いつの間にならぬ人形より人形らしい金髪の少女が混じっていたのだけれど、特に見向きもされていなかったもので、私は気にしないことにした。『まあ、あの料理を調理したのは誰なのかしら？』

隣で表の様子を見上げているのは、並べられた料理の数々に見惚れているようである。私みたいな素人でも見るだけで分かるくらい美味しそうな料理だし、作る立場から見ればそれはもう素晴らしい代物なのかもしれない。ま、具体的に何がどうしてそう見えるのかはいまいちよく分からないし、表のは全く意に介することなくポイポイ口の中に放り込んでいる。表のが味わってるかどうか？ さあ、知らぬ。

「んー、美味しー！」

「ああ、案外行ける口なのねえ。ほら、どうぞ？」

「ありがと、ゆうゆう!」

ケラケラ笑う表のは、何故か幽々子にお酌されている。……いいのかなあ? ま、いつか。お互い気にしてなさそうだし。むしろ、ドンドン吞ませて酔わせちゃおう、みたいな意思を感じる。

まあ、この身体は割と呑める。ただし、呑めば当然表のは酔っぱらう。滅多に酔い潰れることはないだろうけれど、ある程度呑んでると性格が変わるのも多い。ちなみに、私はあまり変わらないらしい。好き好んで呑まないだけでも言う。

「春をかき集めた首謀者が猫如きにお酌とは、程度が知れるものだな」

「あらあら、お子様は霧に紛れて呑気に遊んでればいいじゃないかしらあ? ……あ、日も遮れない程度の霧じゃあねえ」

「にやつははーん」

……ああ、宴会が始まってからも煽り合わないで……。聞かされる側の身にもなつてほしい。吸血鬼と亡霊の頂上決戦なんて私は巻き込まれたくない。表のは実に楽しそうに笑っているのだが、これの何処に楽しい要素があるのか理解に苦しむ。

「にやははつ。すつごーい! たーのしー!」

おや、表のの様子が……? 何が凄いのか、何が楽しいのか、そんなことを考えていると、表のは隣にいた幽々子に突然抱き着いた。表のが二人の間に割って入った形とな

り、その際に見えたレミリアの目が真ん丸になっていた。今は幽々子の質のよさげな服で視界が一杯だ。お腹に思いつ切り顔を埋めている。

「わふう……。ひんやりふかふかだー」

「あらあ、急にどうしたのかしらあ？」

「……ふん、興が醒めた。その猫に救われたな、亡霊が」

「れみりーおもしろーい！」

「な、何だ急に！ 離れろ！ 毛が付く！」

「あらあら、振られちゃったわねえ、私」

何の脈絡もなく表のはレミリアに向かって跳びかかり、表のはそのままガツチリと抱き着いた。……ああ、そういえば酔っぱらうと抱き着き癖が浮き出るんだっけか。ま、レミリアのお腹にグリグリと擦り付けている頭を両手で挟まれ、すぐに引き剥がされたけどさ。怪我してないあたり手加減してくれているのだろう。

……今、一瞬だけど咲夜の非常に冷ややかな鋭い目が見えた気がした。……大丈夫かなあ、表の。

「……何をしてるんだ、彩」

「あー！ らんらん、それにだいたいも！」

え、なんで藍と橙がここにいるの？ 周囲も急な来訪者に注目している様子。視線が

集中した橙が不安気に藍を見上げ、そんな橙に対して藍は頭を優しくなでて落ち着かせている。仲睦まじいようで何より。はあ。

「幽々子、これがその二人？」

「ええ、そうよお」

どうやら、幽々子が二人を招いていたらしい。知らなかった。まあ、紫様の式神と、その式神だからかな？ ま、理由なんてどうでもいいか。

「うわーい！ もふもふだー！」

「あつ、こら、彩！」

そんなことを考えているうちに、表のは早速藍の尻尾に跳びかかって抱き着いている。……まあ、藍の尻尾つて触り心地よさそうで抱き着くにはちよūdい大きい大きなあ。しかも、そんな立派な尻尾が九本もある。羨ましい限りだ。

まあ、藍に対してこんなことをしている表のに橙が黙っているはずもなく、藍の尻尾に抱き着く腕を引つ張つて無理矢理引き剥がそうとし始める。

「ふしやーっ！ はーがーれーろー！」

「えー？ いいじゃーん、このもふもふはもふもふのものだしー。……ぐう」

「その尻尾は藍様のものだー！」

「……あー、橙。少し落ち着くんだ、な？」

そう藍は言うものの、怒れる橙は全く落ち着く様子はなく、しがみついたまま寝やがった表のを引き剥がすのに必死である。本気で鎮めたいなら表のを引き剥がすのを手伝うべきだったよ。うん。

「聞こえてるだろう？ どれか出て離れてくれないか？」

……あー、うん。聞こえてる聞こえてる。けれどさ、表に出ると酒の入った身体の所為で即座に酔いが回るんだよ。だから出たくない。しかし、このまま藍の頼みを放っておくわけにもいかないんだよなあ……。はあ。

『……どれが出るよ？』

内側に声を出してみるものの、これといった返事がない。スイツと目を逸らされたり、逆に目を思い切り合わされたり、そもそも聞いていなかったり……。出たがらないのは分かる。分かるよ。けれど、どれかが出ないといけないんだ。たとえそれが人身御供だとしても。

内側が沈黙に包まれる中、とある一つから向けられる視線が滅茶苦茶痛く感じ始める。……あー、はいはい、そうですよ。一昨日、二日酔いするほど呑んだのは私ですよ。だから出りやすいだろうが、とでも言いたげだなあ。……はあ。

『分かった、私が出るよ。言い出したのは私だしね』

ああ、嫌だなあ……。若干肩を落としてつつ表へ向かい、眠っている表のを内側へ引つ

張つて私が代わつた。瞬間、身体に残つていた酒気が頭をぼんやりとさせる。うげえ、結構呑んでるな、これ。

頭を押さえながら藍の尻尾から離れ、顔を真っ赤にしている橙の手を軽くあしらつて幽々子の元へ向かう。いつの間にかやら隣に妖夢がいたけれど、気にせず腰を下ろす。幽々子に酒を勧められたけれど、丁重にお断りしておいた。もう酒は呑みたくない。料理でも食べてるよ。あははー。

ちまちまと見た目通り美味しい料理を口にしながら、何となく藍と橙を見遣る。早速、レミリアやら魔理沙やら霊夢やらに囲まれて大変そうである。苦笑いを浮かべながら酒を呑み、訊かれたことには丁寧な答えているようだ。あー、大変そうだなあ。あははー。

「……人気だねえ、藍は」

「そうでしようねえ。そのために呼んだんだもの」

「深くは訊かないよ」

「あら、残念ねえ」

この様子じゃあ、妖霧と紫様は多少なりとも関係があるらしい。面倒事の予感がするので、紫様に命じられない限り関わらなくていいだろう。難しいことも面倒なことも嫌だからね。

「彩さん、お水を飲みますか？」

「飲む。頂戴」

妖夢の好意を受け取り、冷たい水を一気に飲み干す。……この何とも言えない嫌な気分も一緒に飲み下せたらいいのに。

またしても、二日酔いである。

「……頭、痛い」

肩を軽く揺らされて目覚めてすぐ、ズキズキと内側が締め付けられるような頭痛に思わず頭を押さえる。……またしても、二日酔いである。夜分に大変迷惑だと思いながらも、阿求のお屋敷にいた不寝番の人に無理を言つて頼んで部屋を借りたわけだけど、この痛みは結構きつい。迎え酒なんて嘘っぱちだ。信用しちやいけません。知つてたけど。はあ。

昨夜の宴会は日付が変わる前に三日後の宴会を約束して解散となつた。ある者は博麗神社に泊まらせてもらつたり、ある者は酔い潰れてそのまま博麗神社で強制宿泊となつたり、ある者はほろ酔い気分で帰宅したり、ある者は寝る場所を提供しようかと誘つていたりしていた。ちなみに、私は藍からは迷い家に、幽々子からは白玉楼に誘われた。しかし、私は両方断つた。藍には御兩人のお邪魔は出来ませんよお、みたいなことを揶揄いながら言つて誤魔化した。幽々子には既に泊まる場所はあるから、と申し訳ないという風を装いながら言つた。別にどちらかの誘いに乗つてもよかつたのだから、それでも断つたのに深い理由はない。完全に何となくである。

「おはようございませす、彩様」

「……ああ、うん、おはよう阿求」

ゆつくりと身体を起こしながら隣にいた阿求と挨拶を交わす。前回泊まらせてくれた時の朝とは違い、わざわざ私を起こしに来てくれたらしい。ありがとう。開いている手で帽子を手に取り、痛む頭に強く押し付けるように被る。心なしか痛みが和らいだようだが、それでもやっぱり痛いものは痛い。はあ。

のそのそと布団から出た私は、そのまま阿求に引つ張られるように食卓へ向かい、前回と同じくシンプルな卵粥と添え物少々をいただいた。とてもありがたい。箸を手がのんびりと卵粥を食べているところを阿求が微笑みながら眺めていて、何だかこそばゆい感じがした。私の食事風景なんて見ても何にも面白くないと思うんだけどなあ……。

「ごちそうさま」

「お粗末様。昨日は私の屋敷に戻ってきませんでした、何かあったのですか？」

「あつたよ。魔理沙に捕まった」

「それは、……ご愁傷様」

苦笑いを浮かべられてしまった。いざ同情されると、ちよつぱり傷付く。阿求にそんな意図はないことは分かつてる。それでもね、何だか悲しくなってくるものなんだよ。

はあ。

このまま同情めいた苦笑いをされ続けたくなくて、私は無理にでも話を変えらることにした。ええと、話題、話題、話題……。何かないかなあ？ 何でもいいから、少しでも話を逸らしたい。……あ、そうだ。

「阿求は二日酔いしてないんだね」

「あれからはちゃんと節度を守ってますよ。翌日に負担をかけるような呑み方はしません」

「なら、よかった。うん」

けれど、呑んでるんだね。しかも、その口振りは毎日呑んでいると言っているように感じる。実際、呑んでいるんだろう。

人間の里で時期も理由も不明なのに何故か流行している酒盛り。若干隔絶されている阿求にも伝わる程度には影響が強い。三日ごとに博麗神社で開催される宴会。酒、酒、酒。皆挙つて酒ばっかり呑んだくれて、そんなに酒が大好きか？ ……ああ、好きですよ。そうですね。そうですね。はあ。

「どうかしましたか？」

「……あー、いや、まだ頭が痛いだけさ」

「そうでしたか。ご無理をなさらず、お大事になさってくださいね」

思わず頭を押さえていたら、阿求に心配されたので咄嗟に嘘を吐く。……いや、まあ、頭が痛いのは確かだから完全には嘘じゃあないんだけどさ。けれど、違うから。だから、慈しむように微笑まなくていいんだよ。優しい言葉を掛けなくてもいいんだよ。嘘吐きな私には、どれもこれも不相応だから。

けれど、私はさも分かつたかのような顔をしてスツと立ち上がる。帽子を目深に被り直し、私は阿求に背を向けた。理由？ 阿求のお屋敷から出るためだよ。それ以外に何かあるのかい？

「それじゃあ、今日はゆつくりと外を歩くとしようかな。無理しない程度にね」

「そうですか。あの、また戻ってきますか？ もしそうならば、部屋を用意しておきますが……」

「あー、どうだろ。分かんないや」

「それならば、用意しておきましょう。いつてらっしやいませ、彩様」

「うん、またね」

軽く手を振り、お屋敷を後にする。これといった目的もないし、人間の里を歩いて回ろうかなあ。無論、酒は呑まない方向で。ああそうだ。次の宴会には私も酒を用意した方がいいのかな？ それなら、何処かでよさそうなものを買っておかないといけないよね。ついでに、何かつまみになるものも買っておこうか。金なら無駄にあり余ってる

し、消費するにはちようどいい。さっさと使って経済回してあげないと。

そんなことをだらだらと考えながら、陽気に酔っぱらう人混みの中に紛れ込む。……
ああ、どこもかしこも酒臭い。鼻にくるその臭いに嫌気が差し、顔を上げて空を見上げた。何となくだけど、いつもより空が白っぽく、太陽がぼやけて見えた気がした。

「……はあ」

あのさ、紫様。正直言って早く帰還したいんですが、いつになったらいいんですかね
？

早速出るか

「……はあ」

目覚めてすぐに思わずため息が漏れ出てしまった。晴れやかな気分とは程遠い、鬱々とした気分の嫌な目覚め。この身体に酒気はもう残っていないさそうだけど、そういう問題ではない。

昨日の人間の里の散歩は朝っぱらから夜にかけて何度も酒盛りに誘われては断り、目に付いたお店で食事をしていけば周囲の人間達は酒を呑んでおり、小腹が空いて間食を買えば酒のつまみに最適だよなんて赤ら顔で言われ、そしておそらく日を跨いでも人間達は酒ばかりでウンザリしたのだ。しかも、阿求のお屋敷に帰ってみれば、なんと阿求に月見酒を誘われる始末。丁重にお断りしたけどさ。

つまり、誰も彼も酒に溺れてる。ただでさえ好きとは言えない酒が、これを境に嫌いになってしまいうさだ。はあ。

「そうだ、外に出よう。……うん、そうしよう」

人間の里から離れれば、この酒臭い空気も薄まってくれるはずだ。食事に関しては、内側にいるどれかに任せれば何かしら捕まえられるだろう。外の何処に行くか？ 考

えてなかつた。けれど、日が落ちる頃に戻つてこれる距離なら別に何処でもいいかなあ。流石に阿求のお屋敷で寝泊まりさせてくれると分かつていながら外で野宿をする気にはなれないし。

『と、いうわけで。どれか採集か狩猟してくれない?』

『なーにがというわけだ! 意味分かんねー!』

もぞもぞと布団の中に潜り込み、早速内側に戻つて話してみれば、目の前にいたのに怒鳴られてしまった。この様である。おつと、説明が足りなかつたかな?

『いやね? 人間の里は酒臭いからさ、外に出て少し落ち着きたいの。だけど、外で何か食べるためには採集か狩猟をする必要がある。だから、採集か狩猟が出来るのにそこは任せたい。分かつた?』

『……あー、そんなに表が嫌なら俺が代わつてやろうか?』

『別にそれでもいいよ、私は』

……ああ言つておきながら、要は私の代わりにどれかが表に出てくれればそれでいいのだ。昨日の人間の里には嫌気が差したからね。少しくらい休ませてほしい。

不足していた説明を終え、私は内側を見回す。すると、目の前にいるのは拳を手の平に打ち付けた。

『よーく分かつた。狩りなら得意だぜ!』

『毎日お酒ばかり呑んでいては身体に悪いですもの。澄んだ空気に包まれるのはいいことだと私は思いますよ』

『そう思うよね？ だからさ、いつそ外に出てしまえば酒なんぞ見ずに済むと思つてさ』

『えー？ 皆でワイワイ呑むのつて楽しいのにー』

『あん時酔い潰れやがった癖に何言つてんだ』

『私は食用植物の判別なら出来ますが、狩猟はあまり得意ではありません』

『ふん、鬱陶しい』

『ん』

『集めた食材の調理は私に任せてくれていいわよ？ 道具がなくても出来ることはあるんだから』

『おおむね良好。内側も酒に飽き飽きしてるのが多かったらしい。もしも多数決を取れば、賛成多数で外に出ることが出来そう。そして、私は内側でゆつくりと休めそう。どうせだし、この身体も多少は休ませてほしいものである。』

『それじゃあ決まりだね。どれが表に出る？』

『俺が出る！』

『俺が出ようか？』

『僕もが』

二つかあ。……え？ もう一つ名乗り出てた、だつて？ 知らないね、口を塞がれたのなんて。つまり、誰が何と言おうと二つだ。

どちらが出るか少し時間が掛かるかもなあ、と思つていたのだが、後者のほうがすぐ譲つたようだ。ま、昼に何か食べるつもりなら、狩りが得意なのに早めに任せたほうがいいだろう。直接捕まえるにせよ、罾を仕掛けるにせよ、時間があつたほうがいい。

「さうして、早速出るか」

譲られて即座に表に飛び出したのは、布団から飛び起きてすぐに窓に顔を向けた。

……ん？ 窓に？

『まさか……？』

『そのまさかだろうかなあ』

表のが次に起こすであろう行動が読めてしまい、思わず言葉が漏れる。それを律儀に拾ってくれたのも、きつと同じことを考えているに違いない。

「ソラツ！」

案の定、表のは窓を抉じ開け、威勢のいい掛け声と共に外へ一気に飛び出してしまった。そのまま真っ直ぐと飛び上がっていき、人間の里の遥か上空で身体を水平に直し、豆粒のように小さな人間達を見下ろしながら飛んでいく。……嫌な予感というものも、得てしてよく当たるものである。はあ。

『……朝食、食べてからでもよかったのに』

私の呟いた言葉にはどれも答えてくれなかった。……表の、即断即決もいいけれど、用意することが一つ増えてしまったじゃあないか。それに、阿求に無断で出て行くことになってしまった。さらに言えば、阿求のお付きの人が用意してくれているであろう朝食も無為にってしまうわけだし……。はあ。

内側に響いた言葉が表に伝わるはずもなく、表のは山へ向かっていく。あそこは迷い家のある山だけど、多分そう言うことは考えていなくて、食材があるから向かっているのだろう。実際、あそこでよく採っているのを知っている。

……ま、いいや。今から阿求のお屋敷に戻ろう、何て言うのも面倒だ。表のが自ら起こした行動なわけだし、私はもう止めるつもりはない。表の様子を窺って四苦八苦するとあんまり落ち着けないし、奥のほうで休むとしましょうか。

それじゃあ、二度寝になるけどお休みさない。

で、俺に何の用だよ

幾分軽くなった瞼をゆつくりと開いて、体を起こしながら周囲を見回してここが内側だと思ひ出す。ああ、そうだ。私は二度寝してたんだけ。で、表は他のに任せて、多分何か食べてるんでしょ。もしかしたら、もう食べ終えてるのかも。そんなことをぼんやりとした頭で考えながら、私はのそのそと歩き出した。

『お、起きたか』

『……うん、おはよう?』

『今はちようどお昼時ですから、もうこんにちはですよ』

『そっか、こんにちは』

『はい、こんにちは』

まだ少しばかり空回りしている気がする頭のまま挨拶を交わし、寝ぼけ眼のまま表を見上げる。……ええと、あれは川魚の串焼きかな? 焚き火がパチパチ音をたてて燃えているんだけど、どうやって準備したんだろう? 火を扱う妖術は今扱えなかつたと思っただけで、どれか出来るようになったのかな? もしそうならば、羨ましいばかりである。

『そういえば、朝食は食べてた？』

『ん？ ああ、食ってたぞ。その辺に生ってた木の实をな』

『そっか。なら、よかつたかな』

阿求のお屋敷で食べていれば、何て言うのは流石に野暮つてもものだろう。私が勝手に二度寝している間に、色々ちゃんとしていたみたいだね。うん。よかつたよかつた。

『春が早々に流れていったとはいえ、探せば見つかるものですね』

『調理道具はまだしも、調味料がないことが最大の誤算ね……。よく考えれば、そんなものが山の中にあるはずないもの……』

少し離れたところからは、そんな言葉が聞こえてくる。改めて表を見上げてみれば、焚き火の横に敷かれた大きめの葉っぱの上に、木の实が小さな山を作っていた。それと、調味料はしようがない。せめて、塩だけでもあればよかつただろうに。……一瞬、迷い家なら、と思つたけれど、言わないでおく。言つたところで今から変わるわけではないし、あそこには藍と橙がいる。仲良しなお二人の邪魔はしないほうがいいだろうからね。

そんなことを考えていると、表のが串焼きに手を伸ばした。どうやら、焼き上がったらしい。早速川魚の腹を骨ごと豪快に齧り付いているのを見るに、美味しいのだろう。あるいは、それだけお腹が空いていたのかな。空腹は最高のスパイスだそうだからね。

食後には葉の上の木の实をポイポイと口の中に放り込んでいる。

「……あー、食った食った」

満足気である。しかし、それで終わりにせず、ザラザラと土と石が混じったものを焚き火に被せて鎮火を済ませたようだ。駄目押しに、近くの小川の水をバシヤリと掛けている。これで万が一山火事になるようなこともないだろう。うん、安心。

私が表のの行動にホツとしていると、表のは何故か振り返って空を見上げた。何かあったのかな、なんて軽く思っていたら、そこにいた者に度肝を抜かれてしまった。

「で、俺に何の用だよ、コーハク?」

「あなたのお食事をわざわざ待ってあげたのよ? それなのに第一声がそれじゃ、躡がなってるのね」

なんで博麗の巫女が私なんか用があるんですかー!? 僅かに残っていた眠気が丸ごとぶっ飛んだ。

右手には退魔の霊力が宿るお祓い棒。左手は空いていて自由になっているけれど、袖の中に札、針、陰陽玉といった投擲武器が隠されているのが見えてしまった。どう考えても、そのための左手である。

表のはふわりと浮かび上がり、霊夢に思い切り近付いて思い切り睨み付けた。……いや、近いよ。見え見えの挑発に乗らなくていいから。けれど、残念ながら表の私の意

思が伝わるはずはなかった。そりやそうである。

「躰だー？ 知るか、んなもん！」

「ま、別にいいわ。あんたはあの宴会に参加した。だから、とりあえず叩きのめさせてもらうわよ。ついでに訊き出したこともあるし、ちようどいいわ」

……はい？ 今、何と言いましたか？ 宴会に参加したから叩きのめす、とな？ 私、

何か粗相したっけ？

『んー？ 僕を見ても何にもないよー？』

……してたわ。霊夢に対して直接何かしたわけではないけれど、レミリアとか幽々子とかに好き勝手抱き着いてたわ。いや、まさか、そんな理由じゃあないでしょうね？

そうじゃないと言つてください、お願いします。

まあ、少し落ち着いて考えてみれば、前に魔理沙が私に妖霧について力尽くで訊いてきたんだ。異変を解決する霊夢が同じことをしてきたとしても、何ら不思議なことではない。もしかしたら、目に付く容疑者を手当たり次第に叩きのめして回っているのかもしれない。そう考えると、こちらとしては傍迷惑な話ではあるものの、とりあえず霊夢に叩きのめされ、それから無実であると認めてくれるのなら、叩きのめされるのも別に悪くないように思えてきた。ただし、私は痛いのは嫌だから、叩きのめされるのは別に任せるとしよう。うん。

「つまり、俺とやりてーわけだろ？」

「ええ。スペルカードは三枚、被弾は三回。それでいいでしょう？」

「ああ、いーぜ？」

霊夢のお祓い棒を突き付けられてサツと距離を取った表のは、それはもう好戦的に笑う。即座に両手の爪を伸ばし、やる気満々である。いやはや、やってくれるなら私はそのまま任せるだけである。

後は、妙なことをしないことを願うばかりである。頑張れ、表の。応援してるよ。応援はね。

あんたは何人いるの？

表のと霊夢はお互いに睨み合い、表のは両手の爪に妖力を込め、霊夢は右手のお祓い棒を固く握り締める。……さて、どちらが先に出るかなあ？

「しゃらあーっ！」

そんなことを考えていたら、すぐに表のが空を蹴り出すように飛び出し、霊夢の胴に向けて右腕の大振りを振るう。ちよ、殺意高くない？ ま、そんな心配は必要なかったらしく、霊夢は表のの爪をお祓い棒で容易く受け止めていた。ギリギリと僅かに拮抗したが、割とすぐに表のは弾き飛ばされた。どうやら、霊夢の腕力のほうが強かったらしい。

表のは空中でどうにか停止し、最初の場所から全く動いていない霊夢を見上げる。……あれ、視線が霊夢から少しズレてない？ ……あー、そういうこと。好きだなあ、本当に。

「くそっ！ ……なんてな！」

表のはそう言い放ちながら獯猛に笑い、右腕を思い切り引き抜く。その瞬間、霊夢の背後に漂っていた妖力弾が霊夢を襲った。右腕を振るった際に、右手の爪に纏わせてい

た妖力を既に飛ばしていたらしい。……まあ、その後にわざわざ右腕を引いて見せるのは、問答無用で勝利をもぎ取りたいのなら無用な行動。つまり、所謂パフォーマンスなのだろう。ルールの無い世界の弾幕はナンセンスなように、不可能弾幕はアンモラル。糸口くらい、見せてやるべきなのだ。

霊夢は表のの意図に気付いたらしく、即座に背後に振り返りながらお祓い棒で妖力弾を振り払う。……うわあお。それなりに拡散していたと思うんだけど、一振りですべてかき消してしまうとは。見た目に騙されちゃあいけないね。うん。

「案外小賢しいのね、あんたは」

「はっ、知らねーな」

「けど、ちよこまか動かれると面倒なのよ。夢符『封魔陣』」

霊夢は宣言と共に袖から札を引き抜き、青白い光を纏わせて全方位に展開していく。あの一枚の札から全方位へ連なるように広がっているのだが、直接当ててくるわけではなく、移動を妨害してくるスペルカードであるらしい。さらに、札にはパツと見で分かるほど強力な霊力が込められていて、ちよつとやそつとでは破れたりしなさそうだ。確かに、ちよこまか動き回る相手には非常に有効だろう。

「……ちっ、面倒くせー」

表の物は試しとばかりに爪から妖力を放って引き裂こうとしていたが、傷一つ付か

なかった。きつと、まとめて引き裂いて逃れようとも思っていたのだろう。残念だったね。

しかし、表のは両手に更なる妖力を込め始める。……まあ、あの程度で諦めるほど素直じゃあないんだよなあ、今の表のは。はあ。

「だったら力尽くだ！ 爪符『スーパーメガスラッシュ』！」

その宣言と同時に両手にまとわせた妖力を巨大な爪撃と変えて霊夢に放った。流石に全部は引き裂けなくても、多少は切り崩せるんじゃないかな？

「……………んだと？」

……しかし、結果は大して変わらなかった。なんと、最初の一枚すら破れなかったのだ。表のは瞬間火力なら一、二を争える。つまり、霊夢に対して力業で勝るのは困難であるようだ。無論、私が勝てる要素はない。いやー、流石は博麗の巫女。たかが化け猫に破れることはないらしい。

「あんたの実力は既に見させてもらったわ。あんたじゃ私に決して勝てない」
「言ってくれるじゃねーか、コーハク……………」

「事実よ。…………ま、魔理沙と最初にやったのの不意討ちなら分らないけど、不意を討たれると分かっているのなら、どうとでも出来るわ」

は？ ちょっと待った。今、何と言いました？ その口振りは、この身体にいくつも

いることに気付いているようじゃないか。一体、何処まで気付かれた？

『ねえ、あの台詞どう思う？』

『霊夢の前で七つも見せていますからね。九つであるとはいかずとも、いくつかいるとまでは理解出来てもおかしいことではないでしょう』

『別に隠してることでもねえし、別に構わねえだろ』

『いや、まあ、確かにそうだけどさあ……』

好き好んで露呈したくないんだよなあ、何となく。こう、他とは違うんだ、つて改めて言われてる気がして。人間と化け猫。一つと九つ。ほら、こんなに違う。

そんな詮無いことを考えていると、霊夢はわざとらしく当てることはなく、しかし逃がすつもりもないとでも言いたげに札の数を増やしていく。動かなければ当たることはない。こちらからは何をしても通じない。そんなことをして何をしたいのか、と思つた矢先、霊夢は一つ問うてきた。

「ねえ、あんたは何人いるの？」

「馬鹿言つてんじゃねー！ 俺は一人に決まってるだろーが！」

「そう。じゃ、これで詰みね」

一枚の札が表のに投げつけられる。そのまま受けるはずもなく、表のは妖力を込めながら右手を振るう。しかし、やはりというか、込められた霊力と妖力の差が甚大であり、

表のはたかが一枚の札に負けてしまったのであった。その場から弾き飛ばされ、つまり周囲を取り囲む大量の札に捕まり、グルグルと雁字搦めに縛られていく。……うへえ、これは酷い。色々と。

「おいコーハク！ 放せコラー！」

「あんたに勝ち目なんてこれっぽっちもないんだから、早々に切り上げさせてあげたのよ。さ、きびきび訊かれたことに答えなさい」

簀巻きにされて納得いかないらしい表のがジタバタと暴れているが、霊夢は何処吹く風である。まあ、あんな風に捕縛されてしまえば、被弾三回なんて一瞬である。一応、負けは負けだ。若干納得いかないところもあるけれど、必要以上にボコボコにされていながら別にいいかなあ、と思ってしまう私もいる。

『……どうする？ どれか代わってあげる？』

『場合によっては代わりましょうか』

『あんな喧嘩腰じゃ、霊夢とちやんとお話し出来るか心配なもの』
『それじゃ、駄目そうならどれか代わろっか』

まあ、過程はどうであれ、結果は負けなのだ。敗者は勝者に従い、訊かれたことにしっかりと答えるのがルールってものだろう。はあ。

……あんた、本当に一人なの？

「うおおおおおおつ！」

「きちんと答えれば解放してあげるわ」

表のは気合の入った掛け声と共に両腕を広げてグルグル巻きの札を力任せに破ろうとしている様子。……霊夢の言葉、聞こえてるのかなあ？ ちよつと不安だ。

「ふんぬうおりやああああ……！」

「あんた、幻想郷を覆っている妖霧について何か知らないかしら？ 期待はしてないけど」

私は残念ながら何も知らない。内側を見回して、目で知ってるか問うてみるけれど、返事は案の定首を振るだけである。この問いに関しては期待に答えられそうにない。ま、そもそも期待されちゃいないんですけどね。

「はあ、はあ、はあ……。うぎぎ……。負けるかああああ……。！」

「次に、誰か知っていそうなのはいいないかしら？ 思い付く限り全てを挙げなさい」

ふむ、それならいるよ。期待に沿えるかどうかは知らないけれど、私も挙げてみようかな。そう思いながら、私はもう一度内側を見回して口を開いた。

『まずは紫様でしょ』

『霧ではなく煙ですが、煙々羅はどうでしょう？』

『たくさんの妖精が集まれば霧の一つや二つくらいは起こせる気がするけど』

『あれだ。最近、紅霧異変を起こした吸血鬼がいただろ？ そいつなんかどうよ？』

私は紫様以外特に考えていなかったもので、それ以外が出て少しばかり驚いていた。初めて聞く名の煙々羅、大量の妖精の悪戯、レミリアの再犯か。

『煙々羅ってどんな妖怪？』

『煙の妖怪で、様々な姿をしながら大気中を彷徨う妖怪です。かまどや風呂場などに紛れて人間を驚かす、妖精に似た性格のようですね』

『……それが幻想郷中に彷徨っている、と？』

『飽くまで可能性ですよ』

まあ、妖怪の行動なんて大体気紛れだ。突然、突拍子のないことを仕出かしたとしてもおかしくはないか。

人間が驚く姿ってどんな形だろうか、と何となく考えていると、一つが慌てて間に割って入ってきた。

『待ってください。私はレミリアさんが二度も同じ過ちを繰り返すとは思えません。人間であろうと、妖怪であろうと、反省はするんですから』

『そうですね。レミリアが実際に反省していたかどうかはともかく、私が参加するよりも前から続いている宴会に既に参加していたのですから、今の表のように霊夢に捕まったことがあるでしょう。仮に妖霧の首謀者であるならば、その時点で解決しているはずですから』

『……罪なき者だろうと手当たり次第、ですか。嫌になりますね……』

ふうん。つまり、レミリアの再犯はなさそう、ってことね。あの時、レミリアと幽天子が煽り合っていたけれど、見当違いってことでいいのかなあ？ それとも、実はお互い面白がっていただけだったり？ ー、永く生きていけば、いつか煽り合いを楽しめる日が来るのだろうか……。いまいちピンと来ないなあ。はあ。

『それじゃあ、妖精の悪戯？』

『どうかしら？ 出来なくはないと思うけど？』

『……まあ、面白そうだからー、みたいな理由でやるかもなあ。妖精だし』

『うんうん！ やっぱ楽しいことをするのが一番だよ！』

『されてるこっちは楽しくないけどね』

妖しい霧ではなく、妖精の霧ということはどうだろう？ 妖精なんて幻想郷を探せばそこら中で見つかるし、なんかもうこれでいい気がしてきた。……けれど、どうも引つ掛かるんだよなあ。喉の奥で小骨が刺さっているような違和感。何か変だけど、私の手

では届かなくて、けれど気にしないなんて出来なくて、自然と外れるのを待つしかないもどかしさ。何か忘れてることもあるのかなあ？ はあ。

私は妖精の悪戯でどうにか飲み下せないだろうか、と四苦八苦しながら、ちようど静かになったところで表を見上げた。……うわあお、まだ簀巻きに抵抗してるよ。頑張るなあ。

「ぬうおおおおーっ！」

「あんたの実力はもう見えてるって言ったでしょう？ あんたの力じゃ破れやしないわ。本当に躰も出来てないのね」

よく見れば、身体強化の妖術まで使ってるじゃないか。そこまでして破れないのなら、どうにも出来ないんじゃないかな？ 残念だったね、表の。それより、敗者なんだから霊夢に訊かれたことをちゃんと答えてほしいんだけど……。

もういつそ、どれかと代わるべきなのだろうか、と考えていたら、表のを見下ろす霊夢から一つの爆弾が投下された。

「ねえ、あんたって本当に紫のペット？ それとも、もしかして藍のペットだったのかしらっ。」

「はあ!?! 誰があんのババアのペットだ!」

「何だ、やっぱりそうじゃない」

……あ、なあんだ。ちゃんと聞こえてるじゃないか、表の。ならよかった。

『まあっ！ 私には愛玩動物ではないわよ？』

……いや、そこじゃなくて！ 気にするべきなのは、先程の霊夢の発言のほう！

……いや、まあ、別に隠していることでもないからバレてもいい、のかもしれないけれど。

それはそれとして、一体何処から私が紫様の式神だと露呈した？ まさか、紫様が自らバラしたんじゃないよね？ まさか、そんなわけじゃないよね？ ……いや、有り得る。

古い友人に自慢しに行ったんだ。今代の博麗の巫女に自慢気に話しても何らおかしい話じゃない。……ちよつと落ち着いて考えてみれば、露呈の決定打は表のの発言じゃないか。はあ。

「あんだ、紫のペットなら居場所くらい知ってるでしょ？ さつさと吐いて楽になりなさい」

「るっせえ！ ババアなんざ知るか！」

いや、紫様の居場所は知っていますよ。まあ、そこに行けるとは言えないし、今もそこにいるかは保証出来ないけど。だからさ、表のはそんなムキになって反抗しないで、さつさと答えて解いてもらえばいいじゃないか。

『どうする？ 答えそうにないけど？』

『あんな喧嘩腰じゃ、やつぱり駄目だったわね……』

『こつちに引つ張つて、……これねえだろうなあ』

『そうですね。表に執着しているようですから』

今の表のは表に貼り付いて離れそうにない。だから、代わりたくても代われないのだ。厄介な……。はあ。

表のが表に執着している理由は、何となく察することが出来る。簀巻きを破りたいのだろう。けれど、それは無理だ。疲れ果てる、あるいは妖力が尽きるまで待つ？ 時間が掛かり過ぎるから却下。

……つまり、だ。

『……はあ、しょうがないかあ』

『お任せしますよ』

原則、表には一つだけだとしても、代われないならしやうがない。話が出来る表に行くしかないのだ。はあ、嫌だなあ。私はため息を一つ吐き、表へ飛び出した。

「うがああああ——あのさ——邪魔だすつこんでろ！」

「うわ、なんか出た……」

生憎、すつこんでろと言われてもそうは出来ない理由がある。けれど、隣のの意思が強過ぎる所為で私の言葉が即座に潰されてしまつてつらい。意思疎通が困難だ。はあ。

どうしたものか……。いや、どうすればいいかは分かっているんだけどさあ。はあ。

……あー、分かった！ 今、決心した！ この雁字搦めにされている札を破ればいいんでしょ、破れば！ 出来るかどうかなんて知らないけれど、これを破らないと気が済まないんでしょ！

「おおおおおおお！ 千切れるおおおおお——あーもう！ しようがな——あああああああ！」

私も隣のがしているように、両腕を力任せに広げて破ろうとする。身体強化の妖術を使っているようだし、不慣れだけど私も使う。うぎぎ……！

「えっ」

「おおおつ、らあああああ！ よっしや、解け——たからさっさと退いて。話が進まないから——おう！ 構わねーぜ！ んじやな、コーハク！」

「……なんなのよ、もう」

ちよつとだけ緩んだかも、つて思ったらなんか勝手に解けた。霊夢の様子から察するに、わざわざ札を解いてくれたのだらう。馬鹿みたいに力入れて抵抗しているから、呆れたのかも知れない。まあ、とにかく、札が解けたことに満足して内側に戻ってくれてよかった。

さて、そんなことよりも、訊かれたことに答える方が重要だ。敗者は勝者に従うのが

ルールだからね。

「ふう。私は妖霧については知りません。知っていそうなのは紫様。あるいは大量の妖精の悪戯か、煙々羅の仕業と推測しています。それと、紫様のペットでも、藍のペットでもありません。紫様は幻想郷の端っこにある住まいにいると思うけど、残念ながら普通では決して辿り着けないので諦めてください」

縛られて少しばかり痛む体を伸ばしながら、問われていたことをまとめて答えておく。これでいいでしょう？

まさかこれ以上何か訊くつもりはないでしょうね、と思いながら霊夢と目を合わせる
と、怪訝そうに見詰め返された。……あの、なんでしょう？

「……あなた、本当に一人なの？」

「二人ですよ？ 当たり前じゃないですか」

納得してくれなかった。解せぬ。

アレよ、アレ

木陰に腰を下ろし、樹を背にして両脚を伸ばしてぼんやりと空を眺める。木漏れ日に目を細めながら、私は自然を感じていた。ほんの少しだけ酒特有の臭いが漂っているけれど、今の人間の里の惨状を知っている身としてはほとんど気にならない。むしろ晴れやかだ。……ああ、あの酒臭い人間の里から離れるだけで、こんなにも気が楽になるなんて。もういつそ、このまま流行が過ぎ去るまで酒気のない自然の中で過ごしそうかね。ま、暗くなったら阿求のお屋敷に戻るんですがね。

……ああ、そうか。少し前に覚えた違和感。幻想郷に漂っている妖霧、幻想郷に流っている酒盛り。いまいち関連性が思い当たらないけれど、どちらも幻想郷に広がっている。意外と繋がってもおかしくないかもしれない。たとえば、妖霧を吸ったら酒が呑みたくなる、みたいな。

「まさかね」

自分で考えておきながら、それはないな、と否定する。何がしたいのか意味が分からない。酒盛りをさせる理由が思い付かない。妖霧を吸っても酒が呑みたくないのがここにいるわけだしね。あの時覚えた違和感は、きつと繋がりを感じておきながらその先

を忘れていたせいだろう。きつとそうだ。

「何がまさかなのかしらあ?」

「うわあつ!!」

突然、耳元で囁くような返事がして思わず跳び退る。誰!? というか、いつからいたの?!

「何よお、急に幽霊に話しかけられたみたいな反応してえ」

「……ほぼその通りなんですが」

幽霊を亡霊に言い直せばまさにその通りである。ちよつとだけ落ち着いてきて、そこにいるのが誰だったかをようやく把握した。紫様の古い友人、亡霊の幽々子。何というか、ブーツとしていて何も考えていなさそうな雰囲気。風の向くまま気の向くまま、漂い彷徨い風に舞い、つて感じだ。流石は亡霊、なのかなあ?

「ええと、何しにここに来たんでしょうか?」

「ここに来たのはねえ……、アレよ、アレ」

「アレ? ……アレとは?」

「アレとはアレよ。……血の気の旺盛な亡霊、かしら」

「帰ってください」

私は何かしたくて外に出たわけじゃない。だからって、何をしてもいいわけではな

い。さつき靈夢とやったばかりなのに、また命名決闘法案なんかやってられるか。……
というか、亡霊に血なんかあるのか？ あつても冷血だろう。うん。

そんなどうでもいいことに引つ掛かりながら、何となく冥界がありそうな方向、つまり上空を指差しながらそう言ったのだが、幽々子は私が指した空を見上げたままふらふらとし始める。……これ、雰囲気とか、感じとか、みたいなふんわりとしたものじゃなくて、本当に何も考えてないんじゃないやあなかるうか？

「帰るつて、何処に？」

「何処つて、冥界じゃないですか？」

「冥界は駄目よお。妖夢が見張つてるもの」

「……あー、貴女まで通さないとってことは流石にないと思えますが？」

「それに、まだアレしてないもの」

だから、アレって一体なんなんだ。頭痛くなってきた。……いや、止めよう。考えない方がいい。きつと、何も考えていないのだ。右から左へ聞き流して自然と通り過ぎていくのを待った方がいい気がする。

そう思い、私はすぐに内側へと戻る。表が空になってこの身体が棒立ちになってしまっているけれど、すぐに代わりが行くから待つてほしい。適任がいるなら、代わるべきなのだ。私なんかよりも、そちらの方がいいに決まつてる。私は目的のに近付いて話

しかけた。

『ちよつと』

『……ん』

『私じゃあ付き合つてられないから、代わつてくれないかな?』

『ん』

……うん、多分大丈夫。しゃがみ込んでいるその手を取り、私は無抵抗に引つ張られているのを表へ押し付けた。……さあ、存分に聞き流してください。よろしくお願いします。

「あら? アレって何かしら?」

「……ん」

「ん」

「……ん」

「ん」

「……ん」

「ん」

ヤバイ。早くも言葉ですらない会話なのかどうかもよく分からない何かに成り果ててしまっている。大丈夫だろうか、色々な意味で。

『なんなんだよ、あのボーレー!?!』

『……こつちが訊きたい』

無関心と放心が鉢合わせるとああなってしまうのか……。もしかしたら、私は間違えてしまったのかも知れない。あの時の選択は間違っていないかと思いたいけれど、この惨状を見てしまうとそう思ってしまう。

思わず頭を抱えていると、突然何かが来た。これは通信の前兆だ。もしや、紫様から帰還命令だろうか？ 阿求には悪いけれど、そうだったら嬉しいなあ。

『彩。明日、日が沈み切った頃、とある場所にいてほしい』

『はい？ どうしたの、急に？ 何かあるの？』

『紫様からの命だ』

『紫様が？ ……分かった。別に構わないけど、なんで紫様じゃなくて藍から通信が来たの？』

『少し前に紫様から別の仕事を命じられてな。その際に、彩への命を伝えるよう頼まれたのだ』

『ああ、そういうことね。で、場所は？』

『場所は——』

藍から伝えられた場所は、人間の里から数里ほど離れている開けた場所だった。そこ

に何かあるかは知らないし、どうしてそこにいなければならないのかは全く分からない。けれど、紫様に命じられたのだし、何かしらの意味があるのだろう。

あ、そういえば明日の夜は既に用事があるじゃないか。優先順位？ 紫様の命が最上位に決まってるじゃないか。けれど、だからと言って蔑ろにしていいいわけではないだろう。

『あのさ、私も明日の宴会に呼ばれてるんだけど。どうしようかな？』

『遅れるようなら私に通信してくれればいい。その時は皆に遅れると、場合によっては休みだと伝えよう』

『……そういえば、その場所にどのくらいいいればいいの？』

『……分からん。何も聞かされていないからな』

それじゃあ、そこにいれば分かりやすく何かが起こるのかな？ それとも、ある程度そこにいれば紫様から終了の命を出されるのかな？ ……ま、明日になれば分かるか。

『ま、大体分かった。明日の夜にそこにいればいいんだね？』

『ああ。紫様にはそう伝えるよう命じられた』

『それじゃ、またね』

『またな』

別れの挨拶を交わしてから、藍との通信を切る。私は内側を見回し、真面目なと目

を合わせる。

『覚えてくれた？』

『はい、すっかりと』

『ならよかった』

私は忘れっぽいからねえ。覚えてくれるのがいて助かるよ、本当に。安心して紫様の命を脇に退けて置き、表の様子を見上げることが出来る。

「ん？」

「……………」

「んっ」

「……………」

「んー」

「……………」

「ん！」

「……………」

……………何だろう、もっと酷いことになってる気がする。幽々子のんに起伏が生まれてバリエーションが増えたはずなのに、表のが何にも変わってなくてより悲惨な感じが漂っている気がするのは何故だろう。見てられない。

「そう思い、私は表から目を背けることにした。私は何も見ていない。……ええ、見ていませんとも。」

嘘吐きなおじさん

酒気から離れた自然の中で気分をリフレッシュしたためか、ここ数日と比べても幾分気持ちのいい目覚めだった。しかし、それも漂う酒の臭いで早くも台無しである。気分だだ下がり。はあ。

昨日は日が暮れた頃になって、ようやく無関心なのと幽々子とのんの応酬が一区切りし、んっんーんんんんー！ とかいう最早何を言ってるのかサツパリ分からない言葉と共に去っていった。あの後幽々子と顔を合わせて話すかもしれない誰かにまでんだけで会話をし始めないかちよつと不安になった。もしも本当にそうなってしまったとしても、私に文句を言わないでほしい。

私は布団から出て帽子を手に取り廊下に出る。ああ、食卓へ向かう足取りが軽い。酒は百薬の長、されど万病の元。やつぱり、酒なんて好き好んで呑むようなものじゃあないんだよ。

「いただきます」

食事を作ってくれた人間にちゃんと礼を言ってから、手を合わせて朝食をいただく。白いご飯に味噌汁、卵焼きと漬物を少々というシンプルなもの。一口食べて、まず美味

しいと感じられる。こういう調理が簡単そうなものが美味しいのは料理人の腕がいい証拠なのだろう。多分。よく分からないけど。

少し甘めの卵焼きを頬張っていると、廊下から足音が聞こえてきた。どうやらここに近づいているらしい。誰であるかは、何となく察しが付く。この足音は割と聞き慣れているからね。

「おはようございます、彩様」

「ん、つく。おはよう、阿求。元気そうだね」

「はい。ここ最近是比较的調子のいい日が続いていますね」

「そっか」

口に含んでいたものを飲み込んでから挨拶を交わし、阿求の顔色がいいことに少しばかりホツとする。病毒に侵されていないさそうだし、この前の二日酔いなんてことはしていないようで何よりだ。彼女の損失は幻想郷にとっても大きな損害になりかねないらしいからさ。

私が食べているものと同じものが阿求の前にも並び、阿求は手を合わせていただきますと言ってからゆつくりと食べ始めた。私も食事を再開するとしましようか。まだ半分くらい残ってるからね。

「ところで、昨日は急に何処に向かわれたのですか？」

「山。ちよつと気になったことがあつてね」

嘘だ。酒に嫌気が差したからである。けれど、月見酒を毎晩楽しんでいるであろう阿求にそれを言うのは、流石にはばかられる。

「何が気になったのでしょうか？ 何かあつたのですか？ 私、気になります」

「いや、別に阿求が気にするほどのことじゃないさ。特に何かあつたわけでもないし」
「そうですか……」

事実、何かあつたわけではない。何せ、気になることなんてなかつたのだから。その何かを探しようがない。霊夢との命名決闘法案も、妖霧の引つ掛かりも、幽々子との邂逅も、気になったことではなく起きたことだから。

先に食べ始めていたこともあつて、私は阿求よりも早く食べ終わった。静かに箸を置き、手を合わせる。ごちそうさま。それから帽子を目深に被り、席を立った。さて、少し早いけれど出掛けるとしましょうか。……あ、そうだ。どうせだし、阿求に一つ訊いておこうかな。

「ねえ、阿求」

「はい、なんででしょうか？」

「人間の里で一番高い酒つて何処で売つてると思う？」

「一番高いお酒、ですか……。どうして急に？」

「ガッツリ使つて経済を回すのも仕事だからさ」

無論、そんな仕事はない。けれど、使われずにいる金はないのと同じだろう。金なんでものは消費されてこそだ。紫様から定期的に支給されるのだし、使える時にパーツと使わないとね。

阿求は顎に指を当てて少しの間考ええると、すぐに口を開いた。この間、なんと僅か十秒足らずである。流石だ。

「ここから北東にある酒屋で、とても買ったものではないほど高価な酒が売られている、と一ヶ月ほど前に聞きました。本当に一番高価か私には分かりませんが、そのお酒はいかがでしょうか?」

「それじゃ、それにしよつか。ありがとね、教えてくれて」

「いえいえ、気にしないでください。それでは、いつてらっしゃいませ、彩様」
「うん、いつてくる」

軽く手を振つて阿求と別れ、お屋敷を出る。向かうは阿求から聞いた酒屋。せつかく誘われた宴会だし、とりあえず高い酒を提供しておこう。安いよりはいい。多分。

酒盛りの誘いを断りながらしばらく歩き、目的の酒屋に到着した。おそらく、ここがそのはずだ。早速中に入らせてもらおうとしよう。

「らっしや……、ひつく、まだケツの青い餓鬼じゃねえか……」

「すみませんが、ここに一番高い酒をください」

「一番高い、だあ……うー、うー、はっ、まったく何処の世間知らずな嬢ちゃんなんだか……」

うわあ、分かりやすく酔っぱらってらっしやる皺の深いおじさんだこと。ストレートに皮肉つてくれますねえ。世間知らずかどうかは知らないけれど、何処かと言われれば紫様のだ。わざわざ明かす必要もないが。

奥に行つたおじさんが戻つてくると、少し埃の被つた木箱を持つて戻つてきた。中身の一升瓶を取り出して見せてくれる。これが高いかどうか？ さあ、知らないよ。

「こいつあ、最高級の純米大吟醸だ。値段は十だな」

「……十円？ これが？」

「ひっく、ああ、そうだとも。嬢ちゃん、そんな大金持つてねえだろう？」

……ふうん。ま、いつか。別に。

手持ちの硬貨をジャラリと目の前に落とす。……何見開いてんだよ。ちゃんと払えるよ、その程度はさ。だらしなく顎が外れんばかりに開いているおじさんから木箱を奪い取るように手に取り、私は店を後にする。

「じゃあね、嘘吐きなおじさん」

本当のところ、この酒に十円の価値はない。多分、二円か三円くらいかな。もしかし

たら、もつと安いかも。断言出来る。嘘吐きにはさ、嘘が分かるものなんだよ。悪意からくる嘘は、特に。

けれど、金を使って経済を回せるなら別にどうでもいい。詐欺られたとしても構わないのだ。よかつたじゃない、予定外の大金が手に入つてさ。

さて、目的のものは手に入つたわけですし、紫様の命を熟すとなりましたか。果たして、私は宴会に参加出来るかねえ？ 出来なかつたらそれはそれだ。しようがない。

彩を捨てるつもりですか

私は昼前の暖かな日差しを受けながら、紫様の隣でスキマから私が紫様に命じられて彩に伝えた場所を見下ろしていた。その視線の先には、彩が木箱を抱いて昼寝をしている。そして、紫様を挟んだ逆側の隣には、幽々子様が私と同じようにスキマを覗いている。いや、今は紫様と覗み合っている。

「ねえ、紫。私が一晩考えた作戦を棒に振らせるのだから、それ相応のものを見せてくれるわよねえ？」

「それはまだ分からないわ。彩次第ね」

二人は目と目の間でバチバチと激しい火花を散らしている。紫様の発言でサラツと彩に責任が負わされてしまった。頑張るんだ、彩。紫様が何を見せる予定なのかはさっぱり分からないが、ここにいるだけという本当に仕事と言っているのかもしれない命を言い渡された私としては、幽々子様を失望させるようなことにならないことを切に願うことしか出来ない。

「……それにしても、彩は随分早くに現れましたが、他にやることはなかったのでしょうか？」

「あつたらここにはいないわ。……それに、彩にとつては今はまだもう余生に過ぎないのよ」
「あらあ、まだまだ若いのに。もつたないわねえ……」

「余生、ですか？」

幽々子様の言うとおり、彩はまだ若い。三桁も生きていないだろう。下手すれば橙と同じくらいかもしれない。それに、妖獣となつたことで寿命が相当長い。それだというのに、もう既に余生？

私の当たり前過ぎる疑問を拾つた紫様は、一つため息を吐いてから答えてくださった。

「簡単よ。彩は一度死んだから」

「彩は生きてるじゃないですか」

「……まあ、九死に一生を得た、が正しいのだけど。私が保護したから。それでも、彩にとつては既に死後の時間。私の下に就いているのも、各々の信条に反しないならばどうでもいいと思つているからに過ぎないわ」

私のように紫様に従つてゐるわけではないと感じてはいた。しかし、そこまで軽く、それでいて重いとは思つていなかった。

嫌な音を立てる心臓を無理矢理押さえつけけるように、胸元をきつく握り締める。改めて彩を見下ろすと、何も変わつていないはずなのに、その姿はやけに小さく、そして軽

く見えた。それこそ、吹けば飛ぶような砂細工のように。

亡霊である幽々子様にとつて、彩の過去は然程の事ではないようで、さらりと聞き流している。そんなことよりも、気にするべきことがあるようだ。

「で、あそこで安らかに眠ってる彩は私に何を見せてくれるのかしら？」

「妖霧の原因をぶつけるわ。……そうすれば、もしかしたら、魅せてくれるかもしれない」

「何を、ですか？」

「彩の、……いえ、名も無き化け猫本来の実力を」

彩の実力？ 私を知る彩の実力は、分かりやすく突出して秀でている点はあるけど、その代わりに劣る点も分かりやすい。そんなのばかりだ。長所短所は表に出ているのによってまちまちだが、総合的に見れば橙と大差はないだろう。……まあ、鼻屑目に見えるかもしれないが。

そんなことを考えていると、幽々子様は紫様に頬と頬とが触れ合うほどに近づいて妖しく笑った。

「ところで、妖霧の原因って誰なのよお？ 気になるわあ」

「自分で知りたいとは思わないの？」

「もういいわ。だって、これから紫が見せてくれるのでしょうか？」

「……それもそうね。妖霧の正体は伊吹萃香。鬼よ」

「あらあら、随分と久し振りに聞く妖怪ねえ」

鬼。私も久し振りに聞く。幻想郷にいるかもしれないとは思っていたが、ここまで聞かなければ現れることはないと思っていた。言われなければ二度と思いつくこともないだろう、と思うほどに忘れ去られた存在。

「紫様。それはまさか、彩を捨てるつもりですか……?」

しかし、それでも私は知っているのだ。鬼の強大な力を。決して彩が勝てるような相手ではない。いくら束になっても敵うような相手ではない。本当に吹けば飛んでしまうほどに強大な力の差がある。そんな存在と彩をぶつけるのだ。間違いなく、彩は死んでしまう。

「そうかもしれないわね。何も魅せないのなら、ここで散るのもまた一興」

「嘘吐き。こうして見てるのも、いざとなったら手を出して救うためでしょう?」

「……なんで分かるのよ。しかも、バラすのが早いわ」

「長い付き合いだもの。そのくらいすぐに分かっちゃうわあ。……それに、これは私の作戦を潰した分よ。甘んじて受け止めなさい」

「ぐ……」

紫様の答えにゾッと血の気が引いたが、それが嘘であるとすぐに知らされ、思わず安

堵の息が漏れる。流石に、仕事仲間が死ぬ様を黙って見せられるのは嫌だったから。

幽々子様に言われ、瞼をきつく閉じてこめかみを摘まむ紫様は、絞り出すように言葉を発した。

「……まあ、彩が魅せずともきちんと保護するつもりよ。彩の持つ『九つの命を宿す程度の能力』は他に類を見ない稀有な能力ですし？ それだけで十分な価値があるもの」

「あらあ、やっぱり可愛いものは可愛いわよねえ」

「うるさい」

お二人の会話を聞きながら、私はスキマの向こう側で何も知らずに眠っている彩を見下ろす。

彩。これから、強大な相手と相対することになる。きっと、敵うことなどないだろう。もしかしたら、また死にかけてしまうかもしれない。死なないから安心しろ、だなんて言わない。言えない。だが、無事を祈らせてほしい。

鬼の力、萃める力、分かつ力。

昼寝から起きたら黄昏時だった。随分と長いこと寝てしまったらしい。……ま、別にいいか。夜にここにいろ、という紫様の命は問題なく熟せるし。けれど、いつまでいれればいいのやら。明確で分かりやすい変化、あるいは終了の通信が来ればいいのだけど。何もなかったら？ 夜が明けるまで待機してればいい。それだけ。

「……………」

……なんか、変だ。何がどうおかしいかはよく分からない。それなのに、全身の毛が逆立つような感じがする。ここにはいけないような気がする。妖しい雰囲気がいち始める。嫌な予感がする。全身がぞわぞわと粟立つ。……けれど、それだけだ。それだけで、何もない。

とりあえずまだ様子見かなあ、と思っていれば、突然霧が立ち込めてきた。……もしかして、これが妖霧なのだろうか？ 一度思い切り深呼吸してみたものの、足元に置かれた木箱の中身を呑みたいとは毛ほども思わなかった。やっぱり私の予想は外れていたらしい。どうでもいいけど。そんなことをしてたら、さっきまで散々感じていた予感もいつの間にも霧散した。未だに霧は立ち込めてるけど。

「あ、晴れた」

そんなくだらないことを考えていれば、すぐに霧が抜けていった。一体、何だったのやら……。

「あれ？ おつかしいなあ」

「……誰？」

声が出た方向に顔を向ければ、捻じれた二本角が生えた者がいた。あれ、さつきまでいなかったような？ というか、霧が抜けた先にいる、つてことはもしかして？

「貴女が妖霧の正体だったり？」

「へー！ よく分かったじゃない。そうよ、私があの霧よ」

「はあ、そうですか」

紫様の命はここにいろ。妖霧の正体をどうしろ、とは何一つ伝えられていない。……私にどうしろと？ 通信していいかな？ ……駄目だね、うん。この程度、余程の事ではないだろうし。

「この身体を霧散させて幻想郷全て包み込んで、それで皆を萃めたのよ」

「あ、そう。何のために？」

「勿論、宴会をするためよ。今年は冬が長引いたでしょう？ それで私の大好きで賑やかなお花見が遅れに遅れて……。ようやく春になったと思えば、あつという間に桜が咲

いて、あつという間に桜が散って……。こんなに悔しい年もないでしょう?」

「そりやあ残念だったね。けれど、もう止めてくれないかな?」

「えー? 何ですよ? これからじゃない。私の力でもっともっとお人間も妖精も妖怪も幽霊も萃めて、大きな宴会を開いてあげようと……」

「私としては、いい加減酒気が鬱陶しいからさ。鼻に付くし、吐き気がする。貴女の所為で酒そのものが嫌いになりそうだ」

そう言つて、私は木箱を投げ渡した。それはそれは嬉しそうに破顔しながら中身の酒瓶を取り出し、ゴクゴクと一気呑みされるのを眺める。今夜の宴会に持つていく予定だったけれど、もう別にいいや。行く気が失せた。藍にはそれっぽいことを通信して休ませてもらうとしよう。

「かーっ、美味しい! けど、ちよっぴり薄いかなあ」

「それはよかつたね」

「さーて、身体も温まったことし、早速始めようか。ねえ、紫の子分?」

「……どうしてそこで紫様の名前が出てくるかな?」

空になった酒瓶を投げ捨てながらそう言われ、私は思わず聞き直してしまった。いや、そこも気になったけれど、それよりもどうして知ってるんだろう? ……ああ、妖霧の正体なら幻想郷全体で起きたことを把握していてもおかしくはないか。

「急に萃められたと思つたら、目の前にあんたがいる。しかも、紫の子分ときたもんだ。私を止めに来たんでしよう？ だつたら、やるしかないでしょ」

「いや、まあ、止めてほしいとは言つたけれども……」

両拳を握つて臨戦態勢を取られても困る。何故わざわざ戦わなくちやいけないんだ、面倒くさい。萃めたきや好きなかだけ萃めてろ。私は知らん。……いや、霊夢に伝えるくらいはした方がいいかな？ 即日異変解決してくれそうだ。

……ああ、帰りたい。駄目だよ、知つてる。ここにいろ、つて言われてるし。いつまでいればいいんだろう？ 藍に通信しようかなあ。うん、しよう。

「理想は毎晩百鬼夜行。幻想郷の夜は我々鬼のための夜になるの。賑やかで素敵でしよう？ だから、ここで止められたらちよつと困るのよ」

「……あれ？」

何か言っているのを聞き流して通信してみるものの、何故か繋がらない。もしかして、妨害されてる？ 幻想郷の端から端だろうと問題なく繋がる、つて紫様が自慢気に言つてたのに？ 何かあつたのだろうか？

ちよつと考えてみると、理由になりそうなのが目の前にいた。……いや、まだ分からないけれども。

「鬼の力、萃める力、分かつ力。誰だろうと止められるだなどと思ひ上がるな！」

「ッ!？」

拳が迫る。右拳が真つすぐと鳩尾に伸びてくる。私はすぐに身体を捻じりながら横に倒れ込んで回避しようとしたが、残念ながら躲せるような速度ではなかった。左腕に拳をもろに受け、そのまま地面を数回跳ねながら吹き飛ばされる。

「あだッ! あー、痛ったい!」

地面とぶつかった肩とか頭とか背中とかが痛い! うげっ! 殴られた左腕は見るに堪えないほどグチャグチャじゃやないか。もう真つ赤つ赤。なけなしの癒しでどうか血は止めたが、その代わりだと言わんばかりにさつきまで感じもしなかった激痛が浮かび始める。粉微塵って言いたくなるぐらい砕けた骨に関して、私ではどうにも出来ない。そういうのが得意なのに代われれば、数日ばかりで治してくれるだろう。けれど、そんな時間はない。

『代われ!』

『あっ』

そんなことを考えていると、勢いよく内側に引つ張られた。そして、私を引つ張ったのが表に出て行く。

私はそのまま内側に転がり落ち、表のはまだ無事な右手の爪を伸ばした。そして、そんな表のに向かつて鬼が近付いてくる。……ん? 鬼? え、本当にあの鬼?

その瞬間、私の脳裏に処分の二文字が過ぎる。通信するなと命じたのは紫様だ。ここにいろと命じたのは紫様だ。萃めたのは紫様だ。……命を繋げたのは、紫様だ。だから、断ち切るのだから、紫様なのか？

……なんでさ

私は内側に投げ込まれたとはいえ、左腕には激痛の残滓がある。いちいち見るまでもなく、内側にいる私に傷なんてない。けれど、痛くないはずだけど痛いのだ。経験した痛みは、すぐには引いてくれないから。

けれど、そんな痛みよりも、もっと痛いものがある。

『……ねえ』

『何でしょう？』

『私は、今、紫様に、……処分、されてる、の、かな……？』

『可能性としては有り得ます。目の前で起きているこの状況は、全て紫様の手によって起きていると推測出来ます。鬼に關しては主犯の擦り付けに利用しているとも考えられますから。些か遠回しに感じますが、不要と思われたのならば、抹消されるのも不思議なことではないでしょう』

……ああ、そっか。やっぱり、そうなんだ。まあ、うん、しょうがないね。私に至っては何も出来ないし。私が言うのも何だけど、他のだって今ではただの化け猫の延長線だ。要らないなら棄てる。非常に分かりやすい。

「おらおらおらあつー！」

「チツ」

目の前の敵を排除するために跳び出した表のの様子を見上げてみれば、鬼の両腕から繰り出される乱打を右に左にと躲しているのが見えた。左腕は当然治っていない。治せない。癒せない。痛いだろう。痛いはずだ。けれど、気にしてたら一撃まともに喰らって死ぬ。鬼から目が離せない。

あーあ、弱いなあ、私。今を生き抜くには、少なくとも目の前の障害である鬼を払う必要がある。勝利にせよ、交渉にせよ、逃走にせよ、だ。勝つ？ 無理だ。話し合う？ おそらく無理だ。逃げる？ 無理だ。まさに四面楚歌。

『…………どうする？』

なんて訊くくせに、私は既に諦めている。別にもういいや。やるべきことがあるわけでもなく、やりたいことがあるわけでもなく、出来ることがあるわけでもない。そんな私が生きている理由なんて、他のがいるからくらいだ。……ああ、後は紫様に生き長らえさせてくれたからもあるか。ま、今まさに処分されてる真つ最中なんですが。

『一番槍は俺の役目だと思ってたんだがなあ』

『あのオニをぶつ潰せばいいんだろ？』

『…………ちよつと待てよ。何言ってるの？』

意味が分からない。……いや、分かっちゃいけない。理解を拒否しなくては。けれど、そう考えている時点で理解してしまっていることは明白で、二つの意志が嫌ってほど分かってしまう。

『ちよつくら行つてくる』

『やつてやるーじゃねーか!』

そして、一つは勇敢に果敢に戦場である表に跳び出し、もう一つは鬼を潰すために表に跳び出していった。原則を自発的に破り、表のは三つになったのだ。……駄目だよ、それは。駄目なんだって。

「よつと、邪魔するぜ——つしゃー!——ふん。足を引つ張るなよ」

「うおつ、なんか増えた!? おらつ!」

「うおつと——あつぶねー!」

「あらら、動きがごちやごちやだねえ。これでも喰らいな!」

「右だ——左!——右——だあーつ! 右なんだな!」

表のの動きはちぐはぐだ。そりやそうだ。三つの意思が合っていないのだから。けれど、鬼の攻撃を前に右だ左だ言いながら、ギリギリのところを躲せている。けれど、それがいつまで続けられるか……。

それに、そもそも、表には一つまでだって、そう決めたじゃないか。同じ轍を踏まな

いたために。どうして破った。どうして……。

『さて、私も出るとしましようか』

『僕も僕もー!』

『……え。な、何で……』

次々と起こることに押し潰されて頭を抱えていると、さらに二つが表に出ると言い出し始める。

『何もせずに死ぬならば、何かして僅かな可能性を掴みましょう。そのために私は知識を身に付けてきたのですから』

『僕は死んだら楽しくない。だって、そこで終わっちゃうからね。今は楽しく生きなきゃねっ!』

そう言つて、一つは可能性を掴むために表に跳び出し、もう一つは今を続けるために表に跳び出していった。表のは五つになったのだ。……待つてよ。ねえ、止めてよ。お願いだから。

「憎越ながら参上します——やつほーい!——両腕上げんな! 痛えだろーが!」

「おーい、まだ増えるのかい? 面白い、おらあつ!」

「黙れ。右——こつちー!——逆だバカ!——右でいいんだな?——右ですか、了解です」

表のはもう滅茶苦茶だ。意思是反発する。一つでも逆に動けば、その動きは著しく崩れる。酷い有様だ。それでも、避け続けることが出来ている。

『……外のは、もう、出ないよね？ ……ね？』

多数決なら既に負けている。だというのに、いや、だからこそ、私は言った。これ以上は駄目だ。止めろ。止めてくれ。

『出ますよ。今から』

『何でッ！ どうして!?!』

けれど、私の言葉はいとも容易く破れ去る。止めて。止めろ。酷い。待つて。お願いだから。ねえ。駄目。なんで。

『私は帰る場所を守りたい。家を。部屋を。そして、この身体を。だって、九つの住まいじゃないですか』

叫ぶ私をあやすように優しく微笑み、一つはこの身体を守るために表に飛び出していった。表のは六つになったのだ。何で！ ふぎけんな！ 止めろ！ ……ねえ、止めてよ、もう。お願いだから。

「私も手伝います——来たーっ！——ふぎける場合か」

「へー！ まさかここまでとは驚いた！」

「で、どうすんだ？——ぶっ潰す！——至極明快ですね」

「化け猫風情がほざきやがる！」

「右か?!——結界張りましょう!——ああ——避けねえの!?!——よーっし!」

表のは右へ動きながら結界を張り、鬼の拳を受け止める。が、一秒足らずで割られてしまった。そりやそうだ。抗えるはずがない。けれど、その一秒足らずの時間で大きく体勢を崩しながらも距離を取れた。すぐに鬼が距離を詰めてくるが、次の攻撃を結界を張って受け止め、覚束ない動きで再び距離を取る。表のは躲すだけではなくなった。

私はもう何も言えなかった。何も言えずに、残った二つを見詰める。ねえ、出るなんて、行くなんて、言わないで。お願いだから。止めて。破らないで。残って。ここに。

『……………』

何も言わなかった。けれど、その視線は表に向いていた。……つまり、そういうことなんだ。

『……………行きましょう。私も』

言いやがった。その視線は真つ直ぐと表に向けられている。……つまり、そういうことなんだ。

『止めてよ。何で。ねえ。嫌だよ。待って。行かないで。酷い。お願いだから。止めて。止めるよ。ふざけんな! 何で表に出るの!?! 表に出ようとするのは!?! どうして! もう六つだ! これで八つになる! 二度と御免だつて言ったじゃないか! 私

はッ！』

『ん』

『私が手を伸ばすためには、まずは私が救われなくてははいけません。そのために、脅威は取り除かなければいけません』

一つは頷いて唯一の関心を持って表に跳び出し、もう一つは自分を救うために表に跳び出していく。何で！ どうして！ こんなのおかしいよ！ つぎけんな！ 二度と御免だつて、言つてるのに……。どうして、何で、表に出るの？

「ん——遅れましたね——よし来たか——左腕は癒せる？——やりましょう」

「させないよ！ わざわざ時間を与えるわけないで、しよつ！」

「チッ！——今は一秒だつて惜しい！——境界は？——左——先程より強い攻撃ですから避け——こつちこつち！——うおっ、つぶね——」

「ふーん。これも躲せるの？ 手加減して負けるなんて癪だし、もつと上げないとね！」
表が八つにもなれば、最早しつちやかめつちやかだ。動きはガタガタ。重心はブレブレ。それでも、鬼の必殺の一撃をかるうじて避けられる。よくもまあ、あんな有様で動き続けられるものだ。……生きてられるものだ。

……本当に、何で、諦めないんだよ。

『……なんでさ』

……はあ。
呟いた言葉は、内側に虚しく木霊する。何の反応も返ってこない。くるわけがない。

私は一つ、内側に取り残された。

全部、私の所為だ

「この状況、どう打破する!?——殺す——引き裂く!——撃つ!——観察を——まずは癒し——守りま——見事にバラバラじゃねえか!」

「賑やかだねえ、あんた!」

……どうして。本当に、なんでかなあ。表に八つ。私は一つ。表は必死だ。生を諦めていない。私は諦めてしまった。無理だ。私は表に出ない。出られない。だけど、このままでは死ぬ? ……馬鹿言わないで。足掻けば死ぬ。どちらにせよ、この身体は朽ち果てる。鬼を打破出来るほどの強大な力には、当然のように甚大なリスクが伴う。ハイリスク、ハイリターン。身に余る力は身を滅ぼす。すなわち、死だ。

だから、私は弱くていい。弱くていいじゃないか。わざわざ強くある必要なんてない。ただ生きているために力なんて必要ない。不要なリスクを背負う必要なんてない。ローリスク、ローリターン。身の丈に合った力は、身を生かす。すなわち、生だ。死にたくないでしょう? 終わりたくないでしょう? 消えたくないでしょう? それでいい。当たり前じゃないか。いいに決まってる。

それなのに、どうして、そうやって力に手を伸ばす? もう八つだ。残り一つ。つま

り、私。欠けているものは、私だけ。

『……分かつてる。全部、私の所為だ』

ああ、そうだと。分かつてる。知つてる。全部全部、回り回って私が仕出かした行いの結果なんだから。

弱くていい？　んなわけあるか！　私だ。他ならぬ私が力を求めたんだ！　貪欲に渴望した！　力を！　私はいつも満ち足りなかつた。乾き切つていた。だつてそうだろう？　そこにいるのは、どれもこれも優秀なのばかりだ。率先して前に出ることが出来る。家事全般を万全に熟せる。記憶力が非常に高い。物事を純粹に楽しめる。行動予測と瞬間威力が高い。物事を達観している。傷を癒すことが出来る。最適な身体の動作が分かる。けれど、私には何もなかつた。だから、私も何か欲しかつた。けれど、私は何をしても駄目だつた。私が一歩進むころには、他のは二歩三步と先を行く。何も勝てない。何も出来ない。何もない。圧倒的劣等感。私にはそれしかなかつた。

だから、何もせずに勝つことなく勝てるものを得ようとした。つまり、嘘。口先。誤魔化し。話術。戯言。何も勝つ必要はない。弱者は弱者のまま、無能は無能のまま、言い負かせばいい。けれど、それじゃあ駄目だつた。満たされない。乾いたまま。そりやそうだ。何の解決にもなつていないのだから。

『迫り来る脅威に立ち向かうにしろ、脅威から逃げ切るにしろ、まずは単純で強大な力が

必要だと思わないかい？」

『何か守るには、それを守り切れるだけの力が必要だ。何もかも破壊されてからそれを建て直すつもりなんてないでしょう？』

『知識を身に付けるのは結構だ。けれど、それを生かすにはまず何が必要か……。知識を持つているなら分かるはずだ』

『駆ける、跳ぶ、引つ掻く、撃つ……。それだけで満足かい？ もっと出来ることが多いほうが、私は楽しいと思うけど』

『今いる立場で十分かい？ ああ、分かっていると。もっと伸し上がりたいんでしょう？ ちようど、いい方法があるんだ』

『弱者は淘汰され、不適者は絶える。目的はなくとも、ひとまず生きていたいんでしょう？ だったらやることは一つだ』

『弱者に手を伸ばしたい。けれど、その手が脆ければ誰も掴んでくれないよ。引つ張り上げられる強い手が必要だ』

『敵は殺す。けれど、その敵が圧倒的に強ければどうする？ ……うん、分かってくれて何よりだ。共に成し遂げよう』

だから、私が全てを巻き込んだ。口先に出任せを乗せてその気にさせて、机上の空論を見せつけて、そして実行した。

ああ、成功したとも。けれど、失敗した。そりやそうだ。あるべき過程を丸ごとすつ飛ばせば、まともな結果を得られるはずがない。想定していたよりも過剰な力に、何も変わっていない身体が耐えられるはずがなかったんだ。だから、死にかけた。私の所為で。

だから、もう二度と御免だ。私の所為であなつた。失敗した。同じ轍は二度と踏まない。だから、私は弱くていい。強くある必要はない。……満たされなくて、乾いたままで、いい。

そう、私は嘘を吐く。そうだ、これが普通なんだ。これが、これこそが私である。そうやって、私は私に嘘を吐いた。

『ねえ、どうしたいの?』

答えは返ってこない。当たり前だ。私以外、どれもこれも表にいるんだから。

『……どうすればいいの?』

答えは返ってこない。当たり前だ。私以外、どれもこれも表にいるんだから。

『……教えてよ』

答えは返ってこない。当たり前だ。私以外、どれもこれも表にいるんだから。

『……はあ』

静かだ。ため息一つさえも何度も木霊し耳を揺らすほどに。私は一つ。……ああ、弱

いなあ。本当に、身も、心も、何もかも弱い。

「つとお!?——結界!——癒しは——無理だ!——いつくよ!——待つてくだ——ん
——ふん」

「へー、あんたは八匹かい。だけど、私は百鬼だ! 数が全然足りてないね!」

「俺は一人だ!——私は一人ですよ——僕は僕だよ!——ふん——俺は一人だが——

……ん——私は一人なんですが——私は一人ですよ」

「はあ? なーに言ってるんだか。……いや、あと一匹いるのかな?」

どうして力を求める? 求められる? ……私の所為だ。ああ、そうだと。

……本当は、気付いてたんだ。表に一つの原則を私が一番破ってる。もう一度至りた
いんだろう? 死のリスクを冒してでも、強大な力が欲しいんだろう? そんな醜い欲
望に嘘を吐いて、誤魔化して、それらしい理由を並べて、蓋をして……。

なあんだ。最初から、分かってたじゃないか。私。

『私はっ! 最初から最後まで! 嫌だと言ったからなあああっ!』

答えは返つてこない。当たり前だ。私以外、どれもこれも表にいるんだから。

……これで死ぬ? いいよ、どちらにしろ死ぬ。前に歩いて朽ち果てるか、その場に
留まって殺されるか。それだけの違いだ。

私は、醜い劣等感を抱いて表へ跳び出した。これで、表に九つ。

「ごめん——遅えよ」

カチリ、と欠けていた破片が埋まる音がした。ドクリ、と心臓が大きく跳ねる。内側から尋常じゃないほどの熱が湧き上がる。私という存在が大きく捻じ曲がつていくのが分かる。

……あーあ、遂に至ってしまったよ。悪かったよ、私の都合に巻き込んで。けれど、それでも目の前の鬼を討つために表に出たんだろう？ だから、私は悪くない。

そうやって、私は私に嘘を吐く。それでもしないと、私は私じゃなくなってしまう。

私は最強だ

「一つ言っておくね——何をですか？——私は最強だ——つたりめーだ！」

「九匹萃まっただけで大層なこと言うじゃない」

あらゆる段階をすつ飛ばして頂点に登り詰めた超越感。湧き上がる熱で内側から破裂してしまふほどの高揚感。

目の前の障害がこんなにも小さく見える。お互い何にも変わつちやあないくせにね。おかしな話だ。そんなこと分かっている。だから私は嘘を吐く、今は、この瞬間だけは、私に敵う者などこの世に存在しないと傲慢不敵に笑ってやる。

「で、どうするよう？——ぶっ潰——癒す——分かりました」

「はっ！——させないよっ！」

私の言葉に反応し、瞬く間に鬼がこちらへ跳び出して来る。そりやそうだ。わざわざ左腕が治るのを黙って見てくれるはずがない。

けれど、もう治しちやった。左腕の碎けた骨も千切れた肉も見るに堪えない様相も全部まとめてパツと癒しちやった。最早痛みすらも感じない。流石に、この左腕をさっさと治したいとは思っていたらしい。

「右に跳ぶ……お……」

跳びかかる鬼が右腕を引いている姿を見てから叫ぶ。私は最も身体の動作が上手いのに出来るだけ合わせて右へ跳んだけれど、当然のように動きは滅茶苦茶だ。それはもう、私が鬼に殴られた時みたいに派手に吹き飛んだ。ゴロゴロと地面を転がりながら私は思う。……いくつか出遅れたな、と。

「ちよつと……遅い——そんなすぐに——早過ぎるのよ」

地面で擦り切れた肌を癒しているのを感じ、私も妖力を込める。いくつか追隨していくと癒しが加速し、すぐに全ての傷が綺麗に塞がった。

しかしまあ、立ち上がる動作もそれぞれ多少異なるから立ち上がり辛い。けれど、どうにか立ち上がる。基本姿勢は直立。無駄に動こうとしない。それでもしないとやってられない。

「なんだ、喧嘩でもしてるのか?」

「るっせ——違うもん!」

いや、些細な諍いはあったでしょうに。けれど、そんなことを気にしている場合じゃない。

というか、まだ身体が慣れてない。今までと大きく食い違っているのだ。百の内の十を出そうとしているけれど、実際は百万の内の十万を出してしまっているような、そん

な感じ。実際のところ、そんな数字に意味はないのだが。

「先に言っておこう——ん？」

「あん？」

だから、動作を限定しよう。そうでもしないと、今の私はやっていけないのだから。

「縦の攻撃は右に避ける——縦は右ね——横の攻撃は下に避ける——水平は下か——それ以外は後ろに避ける——ん」

「おいおい！　流石に私を前にそんなにバラしちゃって大丈夫かい？」

「攻撃は右腕の振り下ろし。垂直に、全力で、最速で、叩き込む。で、後ろに跳ぶ。いい？——ああー！」

「なあ、まさか本気で言ってるのかい？」

ああ、本気だよ。けれど、もう関係ないんだ。当たらなければどうということはない。当ててしまえばどうということはない。そういうものだから。

「さ、振ろうか——真っ直ぐと——肉薄して——殺す——流石に殺しは……」

知るか。私は足を踏み出した。いくつか私を先行し、残りが追隨する。多少のズレはあれど、真っ直ぐ走るだけだ。そこまで動作に差はない。

瞬間、バァン！　と爆ぜる音がした。随分久し振りに聞く音だ。音の壁を突き破る音。全身の皮膚が後ろに引つ張られ、耐えられなくなり、そして破れて血が噴き出す。

痛みを感じたそばから癒しがかけられ、私も癒しに妖力を込め、いくつも傷に妖力を流して次々と塞いでいく。塞いだそばから破れ、また塞ぐ。ああ、接近するだけなのにこの様だ。けれど私は最強だ。それでも言つてないと、やっていられない。

右腕を振り上げれば、ミチミチと千切れるような嫌な音が聞こえてくる。当然、それも癒す。腕は攻撃の要だからか、皮膚よりも癒すのが多い。というか、多分九つ全部やつてる。それはもう、傷付いていないのと同様だ。最初の音だけして、それ以降は聞こえない。聞こえる前に治るから。

「イシヤアーツ！」

そして振り下ろす。そこまできてようやく鬼の身体が動き出す。両腕を上げて交差させ、防御しようとしているんだろう。けれど、もう遅い。あまりにも遅過ぎる。

握つてるのか開いているのかよく分からない中途半端な右手が、鬼の頭上に振り下ろされる。衝撃。右手が爆ぜる。そりゃそうだ。何も変わつちやいない右手が耐えられないはずがない。無傷でいれるわけがない。滅茶苦茶痛い。

即座に後ろへ跳んで距離を取りながら、今更両腕を頭上に交差している鬼を見遣る。着地はどれかに任せておこう。私はそれに合わせるだけ。

「痛あ——癒しま——うん」

どうにか着地して、すぐに右手を癒して治す。ああ、痛かった。けれど、もう痛くな

い。

右手を治したところで、私に真っ直ぐと駆け出した鬼を見詰める。見える。真っ直ぐと左拳を打ち込んでくる。狙いは鳩尾。だから、攻撃が届かない距離まで下がればいい。

「おらあつー！」

「シッ——うおつ!?!——うひゃつ」

私は二歩歩いて下がるつもりだったのだが、他のはそれぞれ違った動きをしてしまう。後ろへ大きく跳ぼうとしたり、二歩分後ろへ跳ねようとしたり、上半身を後ろに倒そうとしたりで滅茶苦茶だ。しかも、身体が右に倒れかけているところから察するに、どれか右に跳ぼうとしたな？ 縦でも横でもないからそれ以外の後ろだよ！

「牽制する！——どうやっ——何でもいいから！——ん——何でもって……！」

無様に倒れそうになりながら私は思わず叫んだ。本当に何でもいい。さらに踏み込んできた鬼の右拳による追撃を止める何か。

妖術なんてものは所詮、世界の理を自分勝手に捻じ曲げるだけの術。近ければ安く、遠ければ高い。以前は出来ずとも、今なら出来る。それだけだ。

「火炎——よつと——氷術——シッ！——ライトニング——どーん！——えつと——あの——ん」

とりあえず、私は左腕の前に出して火の妖術を放った。猫と火はそれなりに相性がよかつたはずだ。が、他のどれかが左手から氷の妖術を放ったせいではほとんど相殺されてしまった。まあ、妖力弾が飛んでるからいいとしよう。私以外のどれかが右腕を動かしていて、そこから妖力弾やら電撃やらを放っている。……ああ、見事にバラバラだ。大した威力になってない。

「こんなの全然効かないね!」

「だーっ!——結界!——はい!」

牽制を諦めて結界で防御を試みる。今のうちに着地をどれかに任せてそれに合わせたいけれど、どれも私だ。指名する術がない。

そんなことを考えている間に、鬼の拳が結界にぶち当たる。……大丈夫だ。破れやしない。そうに決まってる。

けれど、現実はそのままで甘くない。結界に瞬く間に罅が走り、今にも突き破られてしまいそうだ。

「どんな馬鹿力だよ!?!——山を崩すとか——聞きたくなかつた!」

「おらあつ!」

「げふっ!?!」

いくらか威力を減衰出来たとはいえ、ほとんどがら空きだった腹にもろに突き刺さつ

た。そのまま吹き飛ばされ、地面を転がされる。咳き込むと真つ赤な血が飛び散った。……ああー、滅茶苦茶痛い。内臓が酷いことになってそう。出せる力が強大になっても、身体が何も変わつちやいないのだ。防御はからつきし。分かっではいたけれど、かなりきつい。

さて、どうしたものやら……。勝利にせよ、交渉にせよ、逃走にせよ、とりあえず今を生き抜くには、どうすればいい？

さよなら。

私は軽く首を上げ、跳びかかつてきた鬼を見上げる。頭が真つ赤なのが非常に気になるが、あれは私の血だ。しかも自滅による。今はそんな場合じゃないか。鬼の攻撃は、左腕を大きく振りかぶつた振り下ろし。

「シツ——右に——跳ぶっ！」

「そうらっ！」

先行して右に跳んでいたのがいたから、私はそれにそれとなく合わせておく。避けるのは短距離で構わないと思うのだけど、この身体は軽く跳んだつもりでも思い切り吹っ飛んでいく。しかも、時折音の壁を突き破ってしまうものだから、その反動で身体中がズタボロだ。すぐに癒してくれて傷は塞いでいるけれど、痛いものは痛い。

「水平！——屈めッ！——チャーンスっ！——あの——右手で——爪——貫手で——貫くッ！」

「ちいっ！」

跳んで避けた私をすぐさま追つてきた鬼の右腕の大振りを屈んで躲しながら爪を伸ばす。五指をピンと伸ばし、攻撃し終えた隙を狙う。

この瞬間、と思つた時には右腕が動き始めていた。私も右腕を真つ直ぐと押し出していく。急加速した右腕は音の壁を突き抜け、右腕がグチャグチャにひしゃげて悲惨なことになる。が、致命傷になる前に癒されて治される。治つたらまた壊れて、そして癒される。痛い。痛い。痛い！ けれど、そんなことを考へてる暇はない！

「シヤラアーツ！」

隙だらけな鬼の腹に貫手を叩き付けた。……貫けなかつたのだ。爪は肉に潜り込んだ。しかし、右手は音速超えて壁に激突したようなもの。突き刺さる前に見事に指が潰れた。とてもではないが、私は見たくない。想像もしたくない。もうしちやつたけどさあ！

「即退避！——引き拔い——切り離せ！」

爪が突き刺さつたままでは、鬼の反撃を喰らいかねない。そう考へて癒されて急速に治ろうとしている右腕を引いたら、左腕が勝手に動いて右手の爪を切り落としていた。いつの間に左手の爪を伸ばしたんだらう？ いや、どうでもいい。

「どちらにで——後ろ！——右に——えー、どつち？——後方にしま——どつちでもいい！」

後ろだらうと右だらうと、この際どうでもいい。いや、後ろに跳んでほしいけれど！
せめて、一撃離脱さえ出来ればいい。反撃さえ喰らわなければいい。幸い、全てが後

ろに跳んでくれた。その際にまた皮膚が破れて鮮血が舞ったが、即座に癒したからもう傷はない。少し慣れてきたのか、着地もそれなりに綺麗に出来た。

けれど、最たる問題はそこじゃない。……いや、まあ、動くたびに皮膚が敗れるのも結構な問題ではあるのだけでも。

「んもうっ！——くそがつ！——どれか手え抜いてねえか？——それは……——だろうねえ」

遅い。遅いのだ。あまりにも遅過ぎる。音の壁なんか、いつだって突き破れた。そんなものは些細な壁だった。もつとずつと速く駆け抜けたはずなのに、どうにも何かが引つ掛かる。私は全力を出しているつもりだが、肝心の身体がまともにならない。

何故かはもう分かっている。いくつか手を抜いているから。悪く言ってしまうえば、足を引つ張っているから。しょうがない。純粋に力を求めていた頃とは違うんだ。失敗を知らなかった頃とは違うんだ。私もどれもこれも、悲惨な結果を知ってしまったているから。

昔の目的は九つ揃って強大な力にすることだけだった。力そのものだけだから、特に問題がなかった。けれど、今は違う。今の目的は九つ揃って再び手にした強大な力をどう使うか。多少の差はあれど、ざつくばらんにまとめてしまえば、目の前の鬼をどうにかすること。けれど、その鬼をどう倒すかがそれぞれ違う。全力で完膚なきまでに

潰すべきだと考えるのもいれば、この身体を極力傷付けることなく事を済ませたいと考えるのもいる。結果は同じでも、相反する。多少の差が大きな溝となつてしまつていゝ。だから、しようがない。

それでも、そうと分かつていても、私は最強だ。そうとでも思つていないと、やつていられない。

「痛つてて……。爪は事前に切つときなよ?」

「さつき伸ば——ふん——……ん——関係ねーな」

私が腹に残した五本の爪をズルツと引き抜きながら嗤われる。しかも、傷口をグリグリと撫でればもう塞がっていた。ちくしよう、もうちよつと効いてほしかった……。

さて、私はどうしたい? 鬼をどうしたい? 鬼を倒したい。けれど、いくつかはそう思つていないのだろう。殺したい。差を知らしめたい。穩便に。安全に。その他諸々……。

私は、最高最速の攻撃を叩き込みたい。欲しいのは、今も昔も力そのもの。鬼さえ打倒し得る最高峰の力。その証明。

「家は壊れない——何を——壊れる前に治すから——それは——それでも嫌なら——……嫌なら?——防ぐ壁を用意しろ」

「また作戦会議? わざわざ待つてあげないよつ!」

そう言い放ち、鬼が跳び出して来る。残り二、三秒しか、二、三秒もある。

それだけあれば、その場の勢いで押し通せる。押し通させる。嘘で、誤魔化しで、出任せで、戯言で、机上の空論で、いつも通りに、前のように、乗せてやる。

「身体強化は筋力でも速度でもなく硬質化！——はい——身体を覆う結界！——ええっ？——痛みを即座に癒せ！——無茶を——身体に最も負荷のない動作！——ふん——それだけあればどうにかなる！——頑張ろーう！——どうにかって——っしやあ！——で、どうする？——右手人差し指の一本貫手を左目に突き刺せ！——ん——やるよっ！——ちよつと——やれ！——もうっ！——」

これ以上はもう時間がない。私は足を踏み切った。最も負荷のかからない動作？知るか。けれど、それが出来るのがある。私はそれにか付いていくだけ。身体がピシリと硬くなった感じがする。どうやったんだらう？。けれど、とりあえず私も妖力を流しておく。身体を結界が覆う。私も結界に妖力を流す。皮膚の肩代わりとして破れていくが、妖力の限りは再構成されていく。結界が破れた瞬間に皮膚に衝撃が走るが、それが傷になる前に癒してくれる。私も癒しに妖力を使う。もう始まってしまったから、押し流されるように出来ることをしてくれる。

「シッ！」

人差し指が音の壁を突き破り、結界を壊し指が壊れ癒されながら突き進む。目標は左

目。正面に露出している部位で柔らかな部位。妖怪に対して脳だ何だと言っても正直どうかと思うが、それでも有効打となり得る。

爆ぜた。右手も、鬼の左目も。そこから先は知らない。何故か？ 鬼の攻撃ももろに喰らっちゃったから。派手に吹き飛ばされたよ。真つ黒な空が見える。もしかしたら、そもそも視界が真つ黒なのかもしれない。身体を動かそうにも動けない。血が抜け過ぎた。そりやそうだ。あれだけ破れればそうなる。

意識が沈み始めるのが分かる。どうにかなつたかな？ 許してくれるかな？ 許されないよね。私は処分される？ だろうね。もういいや。もういいか。力は示した。物足りないけれど、もういい。無理だ。動けない。ごめん、嘘なんだ。どうにかなるはずがない。分かってた。けれど、もう遅い。意識も、もう、落ちる。

地面が揺れたな、と思いつつながら、私はプツリと切れた。さよなら。

『九心九尾』

倒れ伏す彩の隣にスキマを開き、藍と共に出る。すぐにスキマを閉じずに幽々子が付いてくるか少し待つと、ふわりと通り抜けてきた。どうやら、最後まで付き合うつもりらしい。吹き飛んだ左目を手で押さええている萃香は、私が現れたことに残った右目を見開いた。

「ちよつと。自分を伸したと思ったら、まさかの親分登場？ 勘弁してよ」

「そんなに身構えなくていいわ。私はね、萃香。貴女にお礼を言いに来たのよ」

「お礼？ ……なんかとつても怪しいんだけど」

「おかげでいいものを魅せてくれたもの」

萃香にキュツと微笑む。私は本当に感謝している。名も無き化け猫本来の実力を引き出し、私達に魅せてくれたのだから。

チラリと彩を見下ろすと、既に藍が背中と膝裏に手を入れて優しく持ち上げていた。見るに堪えない右手を見ると、怒りが込み上げてくる。ここまで傷物にしてくれたことを許すつもりはない。それとこれとは別だから。ほとんど彩の自爆？ 関係ないわ。私がないと言えないのよ。

「だから、私は黙って見ていてあげる。貴女のことには口を閉ざしてあげる。けれど、異変に気付いた者がいたら貴女と会わせてあげる。貴女は好きなので宴会を続けさせるといいわ」

「なにそれ」

「話はそれだけよ」

話は済んだ。私は早々にスキマを開く。隣でニコニコ微笑む幽々子の視線が鬱陶しい。その視線から逃げるわけではないけれど、さつさとスキマを通り抜けた。藍と幽々子もスキマを通り抜け、スーツとスキマを閉じる。

……ああ、そうだ。話は済んだけれど、一つ釘を刺すことを忘れていた。私は振り向き、覗き穴程度しか開いていないスキマから萃香を見詰める。

「羽目を外し過ぎない限りは、ね」

スキマを閉じた。

「あらあらあ、やつぱり可愛いのねえ」

「うるさい」

ええ、可愛いわよ。私の大切なコレクションの一つなのだから。けれど、そうやって微笑ましげに見られながら改めて言われるのは非常に鬱陶しい。

話を切り替えよう。ええ、そうしましょう。

「で、感想は？」

「なかなか面白かったわ。九つの命があるだけのただの化け猫だと思ってたもの。ちよつと予想外」

「紫様。あれは、本当に彩なのですか？」

「彩といえは彩だけど、彩じゃないといえは彩じゃない」

八雲彩の名を与える前から至っていたのだから、あれが名も無き化け猫の実力だ。

けれど、藍は私と力なく倒れている彩を交互に見ては、怪訝な表情を浮かべるばかり。納得出来ない？ そりゃそうよね。だから、端的に説明する。

「あれは妖術よ。基礎的な身体強化の妖術の一種」

「あれほどの力を引き出す妖術に、彩の妖力が足りるとは思えません！」

「コストはほぼ零よ。彩は貴女と同じ九尾に至っただけだから」

「九尾に……？」

そう呟き、藍は彩の尻尾を見遣る。当然、一本しかない。

「ほーら、またそうやって煙に巻くようなこと言つてえ。いつか愛想を尽かされるわよおっ！」

「……はいはい、説明するわよ」

「ちゃんとしてよねえ。私も気になるもの」

幽々子に念押しされ、私は思わずため息を吐く。彩のために幽々子の策を潰したので、少々ばつが悪い。もう少し慌てる藍で遊びたかったところもあるけれど、私は解説することにした。

けれど、可愛い自慢は少しばかり遠回りに語りたくなるものだ。

「藍。貴女は九尾に至るまでどれほどの時間を掛けたかしら？」

「……それは、何百年と。流石に千年はいつていないはずですが」

「彩は手っ取り早く力を欲したから、一晩で九尾に至った」

「は？」

藍の口があんぐりと開かれる。非常に間抜けな顔だけど、そんな顔になってしまっても理解出来なくもない。だって、彩の妖術は何百年もの積み重ねの全否定でもあるのだから。

「本来の妖獣は貴女のように修行なり、魂喰いなり、時間なり、怨嗟なり、膨大な何かの積み重ねで妖力を増やしていき、尻尾を一つずつ増やしていく。化け猫は七つ尾まで至った記録があるけれど、藍は知ってたかしら？」

「一応は。主のために恨みを重ね、遂には七つ尾にまで至ったと」

「けれど、彩は違った。たった一つの妖術で、あるべき過程をなかつたことにしてしまった。彩の妖術の目的は、九尾に至ること。妖術の根幹は、一つの心に一つの尻尾。九つ

揃えて九尾へ至る、『九心九尾』。それが彩の、……名も無き化け猫の導き出した答え「妖術とは、いかに辻褄を合わせることが重要。理由もなく何かをしようとすれば高つくが、何か理由があれば安い。単なる数合わせでも、単に力を無理矢理引き出すよりも簡単だ。最初から九つの尻尾があるのだから、私が九尾であるとした。妖獣は九尾に至れるのだから、化け猫だって九尾になれる。」

それは成功したが、失敗した。器が育たずに中身だけを増やせば、当然溢れてしまう。過剰に溢れた力は、当然のように体を蝕み、やがては滅びをもたらす。

「だから、私は式神を憑けた。その身体に刻み込んだ妖術が容易く発動してしまわないように」

そうやって生かした。あのままなくすにはもつたいなかったから。けれど、そのため私は力を失わせたのだ。

けれど、綺麗に飾っておくだけなら人形でいい。私は生きたこの子を手にしたい。欲を言えば、九尾と至ったこの子を。

「それだけよ。分かったなら幽々子は帰りなさい。宴会、そろそろ始まるんじゃないかしらっ。」

「あら、もうそんな時間？ ついでだし、私と一緒に呑まない？」

「結構よ。一人で行きなさい」

「あーん、いけずう」

そんな風にぶー垂れても私は宴会に行くつもりがない。萃香の催した宴会に参加することは、それが自主的だろうと何だか負けた気分になるから。

そうおもながら、私は幽々子の背中を押してスキマに押し込んだ。出口が人目のない博麗神社付近。そのまま参加するといい。

「さ、帰るわよ。彩の治療を任せてもいいかしら？」

「……はい、紫様。お任せください」

藍の返事に私は笑い、スキマを開いた。

……おはよう？

『……うあ？』

私が死んだら一人の魂となるのか、それとも九つの魂となるのか少し気になっていたけれど、どうやら九つの魂になったらしい。ま、別にどうでもいいか。死んだらとりあえず三途の川が彼岸にでも流されるものだと思っていたけれど、ここは何処なんだろう？ 私には死んだはずだ。あの状況で生きてられるとは思えないし。

『あれ？』

そんなことを考えていてちょっとだけ落ち着いたところで気が付く。周囲に他の八つが転がっている。……生きてる、のか？ まさか、あの状況から？ どうやって？ どうして？ というか、ここは内側じゃないか。見上げてみれば表が見える。……いや、瞼を閉じてるから実際は見えないけれど。

ひとまず、私は表へ出ることにした。表を空にし続ける理由はないのだから。

「……つつう」

表に出た瞬間、全身に痛みが走り、思わず声が漏れる。重度の筋肉痛みみたいに身体が重く、少し動くだけでピシッと針を刺したような鋭い痛みを感じてしまう。頭が鉛のよ

うに重い。ゆっくりと瞼を開けば、眩しいほどの光が目刺さり思わず目を閉じる。
……ああ、生きてるのか。はあ。

光に目を慣らしながらも一度目を開けてみれば、見覚えのある天井がぼやけて見えた。……ここ、私の寝室じゃないか。

「起きたか、彩」

横から聞き慣れた声が聞こえ、そちらに首を動かそうとしたが、痛みの所為で動かすのもままならない。それでも、どうにか少しづつ頭を傾けて目を移せば、そこにはやはり藍が座っていた。多分、声色的に心配していたのだと思う。

とりあえず身体を起こそうとしたが、手を付けた瞬間右手から激痛が走り、それと同時に両肩を藍に押さえられて起き上がることを諦めた。まあ、あれだけやらかしたんだ。しょうがないよね。

「……おはよう？」

「まだ痛むか？」

「まあ、そこから中……」

私はやったこと自体に後悔はない。けれど、やらないと決めてたことを破ったことを後悔している、気がする。力を求めていた。死ぬかもしれないと分かっていた。けれど、それでも渴望した。それなのに、どうして後悔してるんだろう？ どうして後悔し

ていないんだらう？ 自他問わず嘘を吐き続けた弊害か、自分でも自分が分からない。嘘を吐くことが私のアイデンティティなくせに、そのせいでこの様だ。本当、使い物にならないなあ。

「思ってたより傷は深刻だったのだな……。傷は残してないつもりだったのだが」
「……別にいいよ」

この身体になけなしの癒しをしようとしたのだが、その前に藍からの癒しが施される。しかし、いまいち足りていないのか、それとも的がずれているのか、多少痛みが引く程度で完治した感じが無い。……もしかしたら、九つ揃えた障害がそれだけ深いのかもしれない。いや、まさかね。

それにしても、どうして生きているんだらう？ てつきり私は紫様に遠回しな処分をされていたものだと思っていたのだが……。しかし、こうして紫様の住まいに運ばれて治療まで施されているとなると、とんだ見当違いだったのではなからうか。

「あの子、藍」

「なんだ？ 何処かまだ痛むのか？」

「とりあえず右手。……まあ、それは置いといて。藍に言われた場所で待ってたら鬼が現れたんだけど」

「……らしいな。昨晚、紫様はそうおっしやられた」

「……藍は別の仕事がある、って言ってたよね。紫様に何を命じられたの？」

「……博麗神社の宴会に参加して他の者を監視することだ」

嘘だな。悪意からくるものではなく、だからといって善意からくるものでもない。おそらく、即興でその場限り。宴会には参加していないし、つまり監視もしていないのだろう。

けれど、隠していることをわざわざ暴きたいわけじゃない。面倒だし。だったら、これ以上の迫及は別にいいや。

「そういえば、誰がここまで運んでくれたの？ 出来れば礼を言っておきたいんだけど」

「それなら私だ。紫様に命じられてな」

「監視していたの？」

「……そうだが」

ふうん、そっか。傷も一通り癒してくれたみたいだし、今も右手に手を施してくれているし、ここまで運んでくれたし。藍には感謝するべきだ。

「ありがとね」

「気にするな。同じ主を持つ式の仲だろうか？」

「……あー、うん。そうだね」

どう考えても藍のほうが上位でしょうに。それなのに、まるで隣にいるような言い方

だ。前は上に立つ者特有の気配が垣間見えていたはずなのに、どうして鳴りを潜めている？ ……藍は知らないはずだ。一度たりとも口にしていないはずだ。……ま、いや。どうでも。はあ。

藍が私の右手から手を放し、そつと布団の上に置いた。念入りに施してくれたからか、痛みはない。相当悲惨な傷になっていたはずだし、よかったよかった。

そんなことを考えていると、藍は私の目の前に人差し指を向けた。目だけで藍を見上げれば、僅かに眉間に皺を寄せている。

「彩。当分はここで安静だ。分かったな？」

「……えー。すぐ治るよ、多分」

「駄目だ。あんな重体だったんだからな。数日絶対安静だ」

「……はーい。分かりましたよーだ」

どうやら、宴会には当分参加出来そうもないらしい。別にいいけど。正直な話、ちよつと酒を呑みたい気分じゃない。

「勝手に布団から出るなよ？」

そう念押ししてから、藍は静かに部屋を出ていった。……あ、鬼が妖霧の正体だって言い忘れてた。ま、いいや。紫様から聞いてるでしょ。多分。霊夢もいつか勝手に気付くだろう。博麗の巫女ですし。

さて、私は寝るとしましうか。絶対安静のようですし。それに、どうやらまだ生きてるわけだし、さ。おやすみ。

閑話

私は不愉快だった。

食卓に座っていると、調理場から鼻歌が聞こえてくる。彩だ。数日安静だったのだが、ようやく動けるようになったのだ。……まあ、実際のところ、ただ動くだけなら一、二日ほど早くてもよかっただろうが、私が認めなかった。あの時はすぐにでも起き上がりがついていたが、あれだけの重傷だったのだ。念には念を入れたほうがいい。

「今日の朝食は何なんだ？」

「今日はフレンチトーストにミネストローネ、スクランブルエッグ、フルーツヨーグルト」

「そうか。……調子はどうだ？」

「特段支障はないわ。むしろ、身体を動かしたいくらいよ。ずうつとお布団のお供だったからね」

彩はそう言って私に微笑むが、全身ズタボロになった姿を見てしまっている手前、そのまま鵜呑みには出来なかった。多少の痛みなら気にせず、流しているかもしれないのだから。

「どうかしたの？ さっきからジロジロ見詰めて」

「……ああ、すまない。運ぼうか？」

「いいって。藍はそこで座って待ってなさい」

「そうか」

最近、ふと彩をどう見ればいいのかよく分からなくなってしまふ時がある。九つの人格を宿す化け猫が新たに紫様の式神となった程度の認識だった。思うところは当然あった。何一つ見下していなかったとは言えない。紫様の式神としてあまり相応しくないのではないかとも思った。紫様の式神として相応しい、私と同程度の何かがあるのかと考えたが、私には九つの人格くらいしか思い当たらなかった。だから、彩を侮っていたところもあった。

だが、どうだ。彩は私と同程度のものを隠し持っていたではないか。私では到底成し得ないような手段で、私と比べるのも烏滸がましくなるような一晩という圧倒的な早さで、私がいままで積み上げてきたものを丸ごと否定するような手段で、九尾と同等の力を有していた。羨んだ。私には出来ない。妬んだ。私には出来ない。

「ところで、紫様はまたお寝坊さんかしら？」

「そうだな。昨晩は遅くまで呑んでいらしたからな」

「まあっ！ 深酒はよくないって言っているのに……」

私は不愉快だった。不敬だと理解しているが鬼と鉢合わせた紫様に、それを黙って見下ろしていた私に、アレが死と隣り合わせだと見せつけた彩に、知らずに勝手に侮っていた私に、何も言わずに隠していた紫様に、あんな重傷体になっただけながら何事もなく笑う彩に、私の心がグチャグチャにかき混ぜられる。

そんな私の前に並べられる朝食。私が当然のように受け取っていたもの。食材への感謝はしていた。だが、作り手への感謝はしていただろうか？ 私は彩を下に見ていたから、してくれて当然だとは思っていなかったか？ そんな嫌なことを考えてしまう。手を合わせて普段から習慣となっていた、いただきますの言葉。向かい側に座っている彩に向けて言った。感謝を込めて。

「ところで、博麗神社の宴会はまだ続いているのかしら？」

「ああ、まだ続いているよ。だが、もうそろそろ終わるだろうな」

そんな他愛もない会話を交わしながら、私はふと思う。あの時の彩と私がぶつかったとき、どちらが勝るだろうか、と。ああして俯瞰していたから捉えられたものの、目の前に相対してその動きを捉えることが出来るだろうか？ きつと困難だろう。一筋縄ではいくまい。だが、彩はそうやって高速で動き回るたびに消耗していく。ならば、守りを固めて持久戦を挑めば勝てるか。

……そう考え、私はまた彩を下に置きたいのだろうか。そう思うと、馬鹿なことを考

えていたものだ。私は、彩をどう思いたいのだろうか。

「藍。疲れてないかしら？　ちよつと顔色が悪いわよ」

「……そうか？」

「ええ。たくさん吞んで今にも吐きそう、つて感じじゃなさそうね……。最近、難しいことばつか考えてない？　よかつたら私が聞いてあげるわよ？」

「いや、難しいことは考えてないが」

「そう？　ならいいけど」

「そうだ、何も難しいことではない。ああだこうだ考えているが、結局のところ、私は紫様の一番でいたいのだ。」

鬼退治の報酬

真つ昼間に太陽の下で掃き掃除をする気が起きずに部屋でお茶を飲んでいると、お賽銭箱からチャリンと軽い音が響いた。誰かがここにやって来たらしい。しかも、珍しくお賽銭付きで。私は慌ててお茶を飲み干し、すぐに跳び出した。

「ここに お賽銭してくれた素敵な方はどなた？」

「こんにちは、 霊夢さん」

「……なんだ、 紫のペットか。ま、いいわ。ここに何の用？」

お賽銭箱の前には、何やら手提げ袋を持った紫のペットが立っていた。紫からの言伝でも伝えに来たのだろうか？ そう思いながら、とりあえずは慈しむような微笑みを絶やすことなく振り撒く紫のペットを中に招き入れることにする。この暑さでは日に当たるところで話し合う気には到底なれない。

外よりは少しばかり涼しい部屋に紫のペットを座らせ、私は茶葉を新しくしてからお茶を淹れる。

「あんとと話すのは初めてよね」

「そうでしようか？」

「……本当、あんたは何人いるのよ」

「私は一人ですよ、霊夢さん」

そう言つて静かにお茶を飲むのを見て、私は思わず漏れ出そうになったため息を飲み込んだ。

正直な話、かなり話じづらい。この身体の中に何人もいることが何となく分かる。唐突に切り替わり、時に押し合いながら出来の悪い一人芝居でも見せるように話し合うのを見ているのはかなり疲れる。だから、こうして話している間に切り替わらないことを願うばかりだ。

「まあ、いいわ。あんたは何の用があつてここに來たの？」

「紫様から貴女に先日の異変解決の報酬を届けるようにと命じられてここに來ました。それと、改めて挨拶をするようにとも」

そう言うと、何処からか茶封筒を取り出して私の前に出した。手に取つて見ると、それなりに厚い。それに加え、手提げ袋をそのまま渡してくる。中身を見てみると、人間の里では見たこともない紙箱がいくつも入っている。試しに一つ開けてみれば、クッキーが透明な袋に小分けされて並べられていた。残りも似たようなものだろう。

先日の鬼退治の報酬として、これが安いのか高いのかは分からない。けれど、私はこれに満足しているからそれでいい。思わず顔がほころぶほどだ。

「報酬は以上です」

「そう。ありがとう」

「紫様に伝えておきますね」

「やっぱなし。伝えなくていいわ」

「そうですか」

わざわざ届けてくれたことに礼を言ったのだ。紫に礼を言っているのではない。言うつもりもない。決して、最初から異変の黒幕を知っていながら私自身が気付くまで一切手出しせず、私を試すように静観していたことを根に持っているからではないわ。

若干湧き上がった黒いものをお茶と一緒に飲み干す。……ふう、すつきりした。

「次は挨拶ですね。改めまして、私は紫様の式として活動しています、名を八雲彩と申します。どうぞ、今後ともよろしくお願いしますね」

「彩ね。私は霊夢よ。よろしく」

私を手を伸ばせば、彩は私の手を優しく取って握手を交わした。紫のペットであることは同じペットである藍との馴れ合いから察していたが、そんな名前だったのか。そう言われてみれば、何度か耳にしていたような気がする。

握手を終え、私は前々から気になっていたことをそのまま口にする。

「ところで、本当に一人なの？ あんたの中には何人もいるでしょう？」

「私は一人ですが、貴女の言う通り、内側には私を含めて九つありますよ」

「なんだ。ならやつぱり一人じゃないじゃない」

「一人ですよ」

どうして一人であることにそこまで意地を張っているのかいまいち理解出来なかつたけれど、私は放っておくことにした。

それから、他愛のない話を夕暮れまで続けてから自然に別れた。今日は唐突に切り替わらなくてよかったわ。

妖怪は敵だから

お団子屋さんの前に用意された席に座り、ゆっくりとお茶を口に含む。私に付いて隣に座っている彩様は、目深に被った帽子の奥から周囲を見回している。

何となく外に出掛けたいと思っていた頃、彩様が私の屋敷に訪れた。その理由は単なる暇潰しらしい。だから、私は彩様を連れて外へ出掛けることにしたのだ。最近人気の美味しい団子屋さんがあると三日前に聞いていて、実は楽しみにしていたのですよ？

「ふう……。たまには外に出掛けるのもいいものですね」
「そうですね、阿求様」

話に聞いていた通りとても美味しいお団子を片手にそう言えば、隣に座っている彩様はため息交じりにそう答えた。その答えに私は思わず苦笑いを浮かべてしまう。今の彩様がわざわざ私のことを阿求様と敬称を付けて呼ぶあたり、相変わらず外では飽くまで私のお付きの人に扮するつもりらしい。

「彩様は食べないのですか？　こんなに美味しいお団子なのに」
「出掛けるつもりがなかったもので、今は手持ちがありません」
「そうですか。すみません、私と同じものを一つ追加で」

そうお団子屋さんに聞こえるように言ってみれば、彩様は困った顔を浮かべて額に手を当てる。せつかく来たのですし、私の勝手に付いてきてもらっているのですし、少しくらいはいいでしょう？　そういう意図を持って微笑みかければ、わざとらしいため息まで吐かれてしまった。とことん私のお付きの人に扮したいらしい。

注文したお団子が来るまでの間に、私は彩様に一つ気になつていた尋ねてみた。

「ところで、彩様はどうして紫様の式であることを隠しているのですか？　私は一度も彩様が紫様の式であること、というよりも彩様のこと自体を聞いたことがないのでしょ？」

「隠してないよ。誰にも訊かれないだけさ」

そう答えながら周囲を警戒するように見回しているけれど、それは隠しているのと大して変わらない気がする。きつと、そうなのかと問えばそうだと答えるのでしょうか。しかし、そもそも問うこと自体が難しい。私は紫様に紹介されたからそうだと分かるのだが、何も知らなければ問うことすら出来ないのだから。

そのことを喋ろうとしたところで、後ろからお待たせしました、とお店の人がお団子を持つてきてくれたので、先程まで喋ろうとしていた言葉を飲み込んだ。その代わりにありがとうございます、とお店の人に礼を述べる。それと、ちゃんとお金も支払つておきましよう。

お店の人から受け取ったお団子を彩様の前に出せば、何とも言えないとても微妙な表情を浮かべられる。お付きの人に扮していたから、受け取りづらいのでしょうか。……ええ、知りませんよそんなこと。

「さ、どうぞ」

「ありがとうございます、阿求様」

いつそわざとらしさすら感じてしまう深々としたお辞儀付きの礼を言い、彩様はお団子を受け取って一つずつ口にした。しかし、やっぱり視線は変わらず周囲の警戒である。人間の里の外ならともかく、里の中ならそこまで警戒しなくてもいいと思うのだけど……。

おっと、お団子で気になっていた話が途切れてしまっていた。私は途切れてしまった話を引き戻し、さらに尋ねた。

「同じ紫様の式である藍様は里中に知れ渡ってるではありませんか」

「そりや、紫様と一緒にいるところをよく見かけるからでしょ」

「では、彩様は？」

「私は大抵別の場所で別の仕事を命じられているよ」

つまり、知られる機会がないのだ。だから、やっぱり問うことが出来ない。

「では、自ら明かすつもりはないのですか？」

「私が言っても誰も信じないよ。九尾の狐と違って、私はただの化け猫だからね」
「……むう」

確かにそうですが、私は少しばかり気に食わないのだ。私にとって私の立場を気にせず気楽に話し合える数少ない方が、本来あるべき立場に立てずにいることが、窮屈そうに耳と尻尾を隠していることが、あまつさえ私の下にすら付いてしまうとところが、どうしようもなく気に食わない。

そうやってはしたなくも両脚をふらふら揺らしていると、彩様は失笑した。

「何むくれてるのさ。こんなに美味しい団子があるのにさ」

「むくれもしますよ。本来なら私が敬うべき方が私に媚びへつらっているのですよ?」

「媚びてはいないでしょ。……まあ、もつとちゃんとした理由が必要かな?」

「あるのですか? 教えてください。私、気になります」

身を乗り出して訊いてみれば、それと同じくらい身体を引いた彩様は里に目を向けながら端的に答えた。

「人間にとつて妖怪は敵だから」

「それはつ、貴女は違うでしょう? 紫様だつて、藍様だつて里に認められて、許されて

います。それなのに……」

「そうやって安請け合いしちゃ駄目ですよ、阿求様。里のルールはそうやって簡単に

破っていいものじゃない」

そう言いながら、彩様は私の肩をやんわりと、しかし私の些細な抵抗を押し退けるように押して姿勢を戻した。そして、私に微笑んでから里中を警戒するように鋭く見回す。

「私は許されない。それに何より、私が許せない」

そう呟く彩様の瞳の中では、ドロリとした何かが蠢いていた気がした。

気味が悪いきみが悪い

夏真つ盛りのお昼頃、私は暑さに何か負けずに意気揚々と山奥へと歩いていく。目指すは迷い家からちよつと外れた場所にある廃村。そこには、私がたくさん時間を掛けて必死に集めた猫達の楽園の様なものがある。今日こそ私の言うことをよく聞いてくれるしもべを見つけてみせる！ そのために、私自身もふらつと釣られてしまうほど芳しい香りを放つマタタビも持ってきた。これさえあれば、どんな猫だつてイチコロのはず！ そして、いつか私が藍様の隣にいられる日が来るといいな……。

「んなっ……！」

そう思っていたのに、到着したそこで見たそれに思わず目を見開いた。それは起きているのか眠っているのか、目を瞑ったまま身動き一つせず座っている。その周りには、私がそこら中から集めた猫達がうろちよるとしていた。何匹かはその中央にいるそれによじ登り、頭の上に乗って丸くなっているのはやけにご満悦に見えた。

「……………」

「…………ツ！」

眠っていると思っていた瞼が開き、スーツと動いて私と目が合った。瞬間、身の毛が

よだつ。けれど、そんな弱っちい私がバれるのはもつと惨めで、そんな自分にむかついて、必死に睨み返す。けれど、そんなみみっちい私を見透かしたような、あるいはどうでもいいとすら思っているような目で見られて、どうしようもない怒りが込み上がってくる。

紫様の式神として藍様の隣にることとか、猫又にすらなれない一尾のくせに紫様に重用されていることとか、いつかの時にいちいち癩に障ることを言ってきたこととか、いつかの時に藍様の代わりとか言って現れたこととか、いつかの時に一泡吹かせてやろうとして返り討ちにされたこととか、そもそもそこにいるのは私が集めた猫達だとか、私が頑張つてもなかなか懐いてくれないのにどうしてポツと出ですぐに懐かれているのとか、そんなことが私に沸いた怒りを一気に過熱させていく。

私は今にも沸騰しそうな怒りのままに一步踏み出した。けれど、その一步を踏み出した途端にその怒りが凍えるほどの寒気を覚える。これまでは感じなかったものが吹き抜けた。ゾワリと背骨に氷が突き抜けたようだ。不気味で、気持ち悪くて、気味が悪い。その癖に、途中で足を止めるのは私のプライドが許さなくて、震える脚は怒りの所為だと自分を誤魔化しながら距離を詰める。

同族嫌悪？ アレを私と同じ化け猫の括りに入れなくてほしい。何が化け猫よ！ 何処が化け猫よ！ アレが私と同じ種族だなんて吐き気がする。同じ化け猫だからこ

自分かる。伝わる。感じる。アレは私とは違うナニかだ。アレを化け猫だと認めちゃいけない。認めてしまったら最後、化け猫という種族が腐り落ちてしまう。

それなのに、これまでの私が足を止めることを許してくれない。そして、遂に私は手の届く距離まで到着してしまった。

「どっ、どうしてここにいるのよッ！」

「……ん」

「ここは私の場所だ！」

「……ん」

「ここに居るのは私のしもべ候補達だッ！」

「……ん」

「何よッ！ そんな目で私を見るなあッ！」

私を見上げる冷めた目に思わず叫んだ瞬間、猫達が散り散りになって何処かへ行ってしまう。けれど、そんなこと気にならなかった。気にしていられなかった。呼吸は荒々しく、心臓が破裂してしまいそうだった。けれど、目を逸らさなかった。逸らせなかった。逸らしたら負けてしまう。目の前のソレに、今までの私に。

そうやって必死に睨み付けていると、ソレは突然立ち上がった。顔を合わせて真っ直ぐと私を見詰めるその目は、先程とは違ってまだ生きていると思えた。けれど、それで

も不気味でならなかった。

「ふうん、そっか」

「なっ、何よッ！ 分かったなら何処かに消えろッ！」

「流石に消えるつもりはないさ。けれど、まあ、邪魔して悪かったよ。それじゃあね、橙」
「その口が私の名を呼ぶなッ！」

藍様に名付けてもらった私の名前。目の前にいたそれに呼ばれるのは癩だった。目の前にいるソレに呼ばれると穢れてしまいそうだ。

すると、ソレはわざとらしいため息と吐いてから静かに背を向けた。そして、軽く手を振りながら去っていくその背中を、姿を見ていたくなくて、私はすぐに目を背ける。

「……………うえっ……………」

震えていた脚がペタリと力なく崩れ落ちる。我慢していた吐き気が込み上げてくる。けれど、口からは何も出てこない。ただただ喉がガサガサに乾いて痛い。取り零したマタタビの匂いすらも気分が悪くて何も感じない。

気味が悪い！ 気味が悪い！ 気味が悪い！ 気味が悪いきみが悪いから私は悪くない！

彩に避けられてる気がするのよ

私は両腕を投げ出して机に突っ伏し、思わずため息を吐いてしまった。ああ、机がひんやりと冷たくて気持ちいい……。

「どうしたのですか、紫様。そんな辛気臭いため息を吐かれて」

「……藍。……はあ、ちようどいいわ。聞いて頂戴」

「構いませんが……」

机の向かい側に藍が腰を下ろしたところで、私はのっそりと身体を起こした。けれど、いまいち身体に力が入らない。最近のことを思い返すと、気持ちに乗らないのよ。結構気怠いのだ。

けれど、この悩みを聞いてくれるとつても可愛い相手がいるだけ、私は幸せなのでしようね。

「最近、彩に避けられてる気がするのよ……」

「……はあ？」

可愛い相手から可愛くない返事を喰らった。乙女のガラスのハートが割れちゃいそう。

……めげるな、私。この悩みは私にとってはそれなりに深刻なのよ。

「本当なのよ？　今朝なんて起こしてくれなかったし……」

「今日は早朝から妖精達と遊ぶ約束がある、と言って出掛けていきましたが」

「聞いてないわ」

「その時間の紫様はお休みになられていたので」

そう言われれば、昨晩は早くに布団に潜り込んだわね……。理由は眠くなったから。

眠気を我慢するのはよくない。

「一昨日は話しかけても口一つどころか、目を合わせてすらくれなかったのよ？」

「それは元からでしょう。彩の一つは私達が何をしようとするに反応しませんから」

「それでも目を合わせるくらいはしてたわよ」

「そうですか……？　私の場合、いくら話しかけても空を見上げ続けているなんてこと

もざらですが」

そう言われれば、壁に付いた一点の染みに視線が完全に固定していることもあったよ
うな……。けれど、返事の一つくらいしてくれていたはずよ。それがたとえ、……んっ
て感じの生返事以下なものだとしても。

「まだあるわ！　この前なんて里に買い物命じてみれば露骨に嫌な顔されたわ！」

「それは最近、里で流行し始めたというアイスクリンの事ですか？　確かその日は曇天

で一雨降りそうでしたね。実際、一時降りましたね」

「あの日ならアイスが溶けるなんてことはないでしょう?」

「雨を被りたくなかったからだと思いますが……」

そう言われれば、彩は濡れ鼠で帰ってきていた気がする。けれど、アイスクリンはちゃんと持ち帰ってくれたわね。外の世界から拝借したアイスクリームと違って、サツパリとしていて食べやすかったわ。あれはあれでいい味だった。私、満足。

他にも思い当たるところを揚げようとしたのだが、その前に藍の手のひらが私の前に差し伸べられてひとまず口を閉ざす。

「差し支えながら私から一つ言わせていただきますが、そこまで気になるのなら、彩に直接尋ねてみればどうでしょう? 返答次第では今後の対応も考えなければなりません」

「……訊けるわけないでしょう? 訊けたら悩んでなんかいないわ」

「でしようね」

彩がこの場にいないから、藍が相手だから、私はこうして話せるのよ? 幻想郷、藍、

そして彩。私の大事で大切な可愛いコレクション達。その活き活きと生きている姿を私は眺め、ずっと愛でていたい。それなのに避けられてしまっは悲しいじゃない。

私が頬杖を突いてため息を吐いていると、急にスツと藍が立ち上がった。

「では、私が彩に紫様の名前を出さずそれとなく尋ねましょう。その答えを一字一句違えずお伝えします」

「……そう？　じゃあ、任せるわ」

「任されました。それでは、すぐに」

そう言い残して藍は颯爽と部屋を出ていった。……不安だ。万が一、藍が失敗してしまふことではない。彩が私の悩みを肯定することが。いや、まさか、そんなはずはない。けれど、他者の心をホイホイ知れるわけじゃない。境界を操ればどうにでもなるのだけど、元に戻せるとも限らないからあまりしないし、都合のいいように手を加えているようであまりしたくない。彩は特にだ。九つあつて分かりづらいし、下手に弄ると取り返しがつかないことになりかねない。式神憑きだつてかなり慎重に取り扱ったのだから。

「バレない、バレない……」

私はそつと覗き穴ほどの大きさのスキマを開いた。藍が霧の湖に向かって駆けていく姿が見える。それを追つていけば、彩との問答もその場で得られる。

そのまま一分ほどスキマで藍を追っていると、霧の湖の岸辺で妖精達と戯れている彩が目に入った。気の抜けた柔らかな笑顔が見えて、こんな表情を私の前でしていたかしら、と苦いことを思ってしまう。

「彩。楽しんでるか？」

「あんた、さいになんのよーっ!」

「大丈夫っ! らんらんは僕の友達だからね!」

などと説得して、彩は藍に付いて行って妖精達から距離を取っていく。その途中、彩が一瞬だが棒立ちしてすぐに表情が変わる。表に出ているのが変わったのだろう。

「で、藍。通信もせずに直接会うなんて、何かあつたんですか? 緊急なら通信のほうが早いでしょう」

「いや、目に付いたから少し立ち寄っただけだ。少し気になったことがあつただけで、大したことではない」

「ふうん。ま、別にいいや。その気になったことつて何さ?」

「ここ最近のお前はあまり楽し気ではなかったように見えてな。さっきは普段と違って見えたのだよ」

「楽し気なのは別のだけどね。ま、楽しんでたよ。けれど、ここ最近の私が、ねえ……」

そう呟いた彩が、突然顔を傾けた。そして、流し目で雑木林を見詰める。その行動は、傍から見ればただ思い返しているように見えるだろう。けれど、その目線が確かに私の目と合ったのだ。しかも、僅かながらキュツと口端が上がった気がした。

まさかバレた、と思っていると、彩は藍に向き直る。そして、私の疑惑が杞憂だと思わせるほど平常に口を開く。

「私は特に変わった覚えはないけどさ。私がそんなに気になるのなら、それは見ている側のほうに何かあるんじゃないですか？」

「……私に、か？」

「ええ。例えば、嫌なこととか、隠し事とか、後ろめたいこととか、ね。そういうことが続くと、自然と嫌なことばかり目に付くものさ」

「確かにそうかもしれないな。明日には橙を愛でるとしよう」

「はは……。是非、そうしてくださいな」

……バレてた。絶対にバレてた。あの彩の言い方は、藍に対して答えたのではない。確実に私に対してだわ。

私、何かあったかしら……？　ちよつと思り返してみただけれど、特に思い当たることは見当たらなかった。

窮屈じやないかい？

私の身体を疎にして霧のように薄く薄く広げる。別に何かしたいわけじやないし、萃めたいわけでもない。ただ、こうして空気に混じって流されるのも乙なものだと感じて
いるだけ。こうして風に流されると、時折気になるものが目に入る。そういう時は、ちよつとちよつかいを出したり出さなかつたり。刺激が足りないと思うこともあるけれど、案外こういうのも悪くない。

夏を越えて秋になろうとしている今日この頃。妖怪の山の再支配でもしちやおうかなあ、とふと思ひ浮かんだことと一緒に今日も今日とて空気と共に流されていた。流されてもしも妖怪の山に着いたらそうするのも悪くない、と思ひ始めた頃、それらは目に入った。

「あんたも手伝いなさいよ。ほら、掃除してくれるのがあるんでしょ？」

「残念ながら、貴女をサボらせるために掃除をしたいわけではない、と以前言っていましたので。ここは断らせていただきましょう」

「ちつ。楽しんでやろうと思つたのに……。つたく、何もしないなら何でもここに来たのよ」
「暇なら霊夢と親睦を深めてきなさい、と紫様に命じられたのですよ」

「暇なら手伝いなさいよ。それと、私の代わりに毎日全部掃除をしてくれるならいくらでも仲良く出来る気がするわ」

「そうですか。それならば、地道に築くしかなさそうですね」

流されて着いたのは、博麗神社の境内。そこには、私を負かした霊夢と、その前にやり合った紫の子分の彩がいた。私がここ最近気にしている奴が二人も集まっているじゃない。

このまま背後に体当たりの一つでもかまして脅かしてやろうか、と思ったのだが、その前に霊夢の視線が私に向いた。どうやら、脅かすのは失敗らしい。だから、そのまま萃まって二人の間に勢いよく降り立った。参道が揺れ、土埃が宙を舞う。

「やつ、お二人さん。お元気かい？」

「……萃香、今のあんたの所為ですこぶる不機嫌よ」

「こんにちは、萃香。私は元気ですよ」

何やら殺気立っている気がする霊夢に目を向けてみれば、箒を片手に持ち替えて空けた手にお祓い棒を握り締めて真っ直ぐと私に向けてくる。流星に何もしてないのに手を出される謂れはない。

「ちよつとちよつと！ 今日私は何もしてないよ？」

「私が掃いたのを丸ごと撒き散らしてくれたわね。あんたの所為で最初からやり直し

よ。私はあんたらに付き合つてられるほど暇じゃないつてのに、まったく……」
「何だ、そんなこと？ それなら、暇になれば相手してくれるつてことよね」

そう言いながら、私は境内の塵芥を足元に萃めて小さな山にしてやった。掃除で暇じゃないんでしょう？ だったら、これであんたは暇になる。

出来上がった小さな山を見下ろした霊夢と、露骨に上機嫌な表情を浮かべる。ほら、やっぱりね。お祓い棒を仕舞い、近くに置かれていたちりとりにさつさと掃き入れていく。

「いやー、助かったわ。便利ね、あんた。これからも頼みたくなるわ」

「次回以降はお酒と気分で要相談かな？ さ、これで暇になったでしょ？」

「それじゃ、お茶でも飲んでく？」

そう言うや否や、私の返事も聞かずにさつさと神社の中へと行つてしまう。……ま、お茶の一杯を貰うのも悪くない。それよりお酒が欲しいけど。

そんなことを思いながら霊夢の後を追つて神社に向かおうとしたけれど、ふとさつきから黙つていた彩のことを思い出す。そのまま彩に顔を向けてみれば、何事もないように私のことを眺めていた。一点を見詰めるのではなく、まるで俯瞰するように捉えている。

……これはほんの悪戯心だ。当てるつもりはない。当たる寸前で止めるつもり。驚

いて跳ねたところを笑うくらいの気持ち。私と彩の間の距離は二歩で詰められる。その短い距離を大きく吹き込む一歩で一気に詰め、軽く握った右手を一気に突き出す。が、彩はその前に拳の軌道上から身体を逸らす。……ああ、やつぱりそうだ。見えてくる。

当然、避けずとも当たらないところで拳を止めた。しかし、彩は怪訝な目付きで私を見遣る。ま、当たり前前だ。

「これは何のつもりでしょうか？」

「いや、ちよつと驚かそうとしただけ。霊夢には失敗しちゃつてたからね」
「そうですか」

彩は私の動きが見えている。そうだ。あの時も、見てから、話し合い、意見をまとめ、ようやく躲す。それが出来てしまう。ハッキリ言ってしまうえば、たかが化け猫が持てる敏捷性からは明らかに逸脱している。紫の子分なだけはあるのかもしれない。

そう思いながら、止めていた足を再び動かす。そうすると、自然と彩も私の横に付いてきた。

「なあ」

「何でしよう？」

けれど、私が気になっていたのはそれだけじゃなかった。

「あんたさ、窮屈じゃないかい？」

「窮屈、ですか」

「そう。出せるはずの力を出せない。出させない。そんな風に無理矢理押し込められた生活は苦痛じゃないかい？ 私はもつと自由になつてもいいと思うけど」

「特にそうは思いませんよ。それに、今の私は紫様の式神ですから」

「……ふうん、そうかい。つまんないの」

その答えに彩への興味が少し薄れるのを感じながら、私は霊夢が淹れてくれるであろうお茶のことを思う。……うん、やっぱりお酒のほうが欲しいな。いつそ、お茶で割っちゃおうかなあ。

東方永夜抄

夜を止めてでも

満月が夜空を照らす中、表のは庭に出て一心不乱に動き回っている。静止から動き出すまでの瞬発力、そこから最高速度に至るまでの加速力、頭で思い描いた動きを身体の動作で描ける正確性などなど。この空いた時間を使い、地道に訓練してはこの身体をほんの僅かずつでも強くしようとしているらしい。ご苦労なことって。

『これから何があるのかしら？』

『さあ？ けれど、起きてろってことはいつも通り留守番じゃない？』

今日の昼頃、紫様にそう命じられた。詳しい内容は後で話すってさ。とは言うものの、あともう少しで日を跨ぐ頃である。いつになったら詳細を話してくれるのやら……。はあ。

まあ、ここ最近は不思議と眠くない。だから、起きていろと言われてもさして問題はないのだ。とはいえ、活発に動き回るようなハイテンションな感じではないし、疲労がピークに達した時の謎のテンションに見舞われることもない。屋根の上で座って静かにしていたい気分だ。まあ、私は代わりに内側でのんびりしているのだけだ。

「彩」

「ん、紫様か」

そんなことを思い返していると、表の目の前にスキマが開いて紫様がぬるりと出てきた。ほぼ最高速度からの急停止。……あの時を境に、前よりよくなつてしまつてるんだよなあ。経験つてのは、時に呆気なく変えてしまうものだ。はあ。

……ま、それはもういいや。それより、ようやく話してくれる気になつただらう紫様のほうを気にしよつか。

「これから私達で博麗神社へ向かうわ」

「そうかい。じゃ、俺はここで留守を請け負えばいいんだらう？」

「何を言つてるの？ 貴方も一緒にに決まつてるじゃない」

「……はあ？」

……今、なんとおつしやいました？ まつたく、私つたら変な聞き間違いをしてしまったかもしれないなあ。そう思いながら、私は周囲を見回す。単純に同意が欲しかった。

『聞き間違いではないですよ』

『そこは馬鹿正直に言つてほしくなかつた！』

『事實は変わりませんで』

『まあっ！ 今回は留守番じゃないのね。珍しいこと』

『やったー！ 楽しいことがあるといいなー！』

『ハッ、どーだか。面倒事押し付けられるだけかもしれねーぜ？』

『紫様の命じられたことならば、それが私の仕事ですから。たとえ楽しくても面倒でも、ちやんと成し遂げましょうね』

『……ま、出たいのが出ればいいと思うよ、うん』

わざわざ私が出る必要はないだろう。うん。何かをするなら、他のが明らかに私より出来るのばかりだしね。

ぐでーつと楽な格好をしながら表の様子を見上げてみると、紫様の横のスキマがグワツと広がり、そこから藍が歩いて出てきた。キリツとした真面目な表情から察するに、藍も当然のように同行するらしい。分かってたけどさ。はあ。

「さ、行くわよ」

「彩、行くぞ」

「別に構わねえけど、こりやまた急だな……」

案の定、表のも理解がいまいち出来ていないらしい。そりやそうだ。こういう時、私ひとりあえず留守番が常だから。

しかし、二人は待つてくれることなく、表のは背後に開かれたスキマに放り込まれて

しまった。それはもう、ヒヨイと軽々持ち上げられてポイである。「うげっ！」

そして、気付けば畳の上に投げ込まれていた。咄嗟に受け身を取ってはいたものの、結構いい音が部屋に響く。きつと、博麗神社なのだろう。そして、近くに誰かがいるのが見えた。……もしや、彼女はまさか……！

「ッ！ 曲者ッ！」

「うおっ!? 危ねえ！」

悪い予感はあるものだ。飛び起きた霊夢が表のに向けて投げつけた掛け布団を転がって避け、続く霊力弾をその場でヒヨイヒヨイ躲していく。寝起きだというのにこの勢いである。流星は博麗の巫女、なのだろうか？

そんな中、表のが通った隙間から紫様と藍が出てくる。それに気づいた霊夢の攻撃の手がようやく止まったのだが、表のはよく当たらずに済んだものと褒めたい気分だ。

「紫に藍まで？ よく見れば、曲者は彩じやない。あんたら集まって私に何の用よ？」
「霊夢、寝ている暇はないわ。今すぐ出るわよ」

「はあ？」

「こんなあからさまな異変が起きているのに、貴女はよくもまあ寝てられるわね。今もなお、偽りの月が昇っているというのに」

へえ、あの満月って偽物だったんだ。だから何だ、と問われても私は特にどうとも思わないのだけど。

紫様にそう言われた霊夢は障子を開いて夜空を見上げる。そして、頭をガシガシと掻き毟った。

「その異変、夜が明ける前に解決出来るかしら？」

「こんな異変、夜を止めてでも今夜中に解決させるわよ」

……ええ？ 紫様、夜を止めるんですかあ？ それはそれで異変な気がするんですけど……。

ど……。

……何考えてんだろ、紫様は

偽りの月が夜空を照らす下、表のは藍の隣を併走している。飛んでるけど。藍の前には紫様がいて、そのさらに前には霊夢がいる。進む先は霊夢にお任せらしい。紫様がそう言ってた。

周囲がなんだかちよつと明るくなったり暗くなったりしているなあ、と思いながら表を見上げていると、表のは前方から隣を飛んでいる藍に顔を向けた。

「なあ、藍よ」

「何だ、彩」

「文句つてわけじゃねえが、何があつて急に俺も連れてくなんぞ言い出したんだ？ 今までと違えだろ」

「さあな、私も何も聞かされていない。だが、予想なら出来る」

「へえ、どんなだ？」

「今回の異変の相手は、月を挿げ替えてしまえる程の存在だ。きっと相手は強大だろう。もしかしたら、紫様でも苦戦を強いられるかもしれない。手札が少なくて困ることはあれど、多くて困ることはない。そうは思わないか？」

藍の予想を聞いた表のはそれで納得したように頷いている。何を思っただけで頷いているかは知らないけど。手札つてのは私達式神の事か。数が多くて損はない、つてことかねえ？

『何事もなしに黒幕まで無事到着、つてわけにはいかないよねえ』
『でしようね』

ま、私が藍の予想を聞くと、霊夢と紫様の消耗を抑えるために道中の邪魔者を相手にする捨て駒になりそうだなあ、と思うのである。相手が強大なら、ただの化け猫である私は足手纏いだらう。手札が多くて損はなくとも、重りになるなら困るだらう。

ま、別にいいや。私が気にすることじゃあない。命じられたならそれでいい。

「ちよつとちよつとちよつと！ さつきからこの私を無視するなんていい度胸ね！」
「……あら、いたの？」

「夜は虫が多くて嫌よねえ」

なんてことを考えていたら、さつきから周りでチカチカしていたのが霊夢の目の前に出てきた。ほら、やっぱり何か出た。見た感じ、虫の妖怪かなあ？ 無視して通り抜けたいんだけどね。虫だけに。けれど、相手は何だかやる気満々ですし、そうは言つてられないだらう。はあ。

表のは黙って虫の妖怪を見詰めている。虫妖怪が何かしてくれば、きつとすぐに前に

出るつもりなんだろう。まあ、虫相手に負けるほど弱くはないはずだ。相手の数に寄るけど。流石に五万と湧く羽虫の殲滅は厳しいからね。そういうのは蚊取り線香の方が優秀だ。

「彩。面倒だから、これの相手をして頂戴。終わったらすぐ伝えればいいわ」

「はいよ、紫様」

なんてくだらないことを考えていたら、案の定虫妖怪の相手を任されることとなった。表のが命じられるままにサツと虫妖怪の前に躍り出ようとした時、その肩を紫様に捕まれた。

「まだ何かあんのか?」

「余裕があるなら、二つ三つ表に出なさい」

「はあ? そりやまたどうして?」

「流石に九つ出ろとは言わないわ」

それだけ言うと、紫様は表のの背中を押して虫妖怪の前に突き出した。その隙に、霊夢達を連れてさっさと何処かへ行ってしまった。……なんてこと命じやがった、紫様よ。それと、さっきの答えは理由になつてないぞ。はあ。

「あーっ! 逃げられた! 無視されたーっ!」

「そうかい。ま、悪く思うんじゃないぞ」

表のはそう言いながら、両手の爪を伸ばす。そして、虫妖怪に肉薄して右腕を横薙ぎに振るった。が、爪に引き裂かれる前に真上に飛んで躲されてしまった。

「やったな！ 蛍符『地上の流星』！」

攻撃されたことを認識したからだろう。虫妖怪は表のに向けてスペルカードを宣言した。命名決闘法案の開戦である。お互いにルールについて詳しく明言してないので、基本であるスペルカード三枚と被弾三回のルールだろう。

表のは青く輝く弾幕の隙間を余裕綽々で切り抜けている。妖力弾を伸ばした爪で引き裂かないあたり、相手はそこまで強くないと思う。引き裂くことは、普通じゃ避けられないってことだから。……つまり、だ。私は内側を見回しながら一声掛けた。

『……はい、集合』

『何かしら?』

『二つ三つ出ろつてさ。余裕そうだし、どれか出る?』

『はーい! はーい!』

『俺だ!』

『そっか。じゃあ、話し合つて決めてね』

そんなことを言っているくせに、私はそんな風に拳手出来る方が納得出来ない。……あの時、九つ揃えてしまったせいだろうか? ハードルが下がってしまったのだろうか

? もしそうなら、全部私の所為だ。はあ。

いくつも表に出るってことは、それだけの力を引き出すってことだ。一つで一尾ってことは、二つで二尾であり、三つで三尾である。九つじゃないから、九尾じゃないから、二つ三つくらい平気だろうって? そんなことはない。二つも三つも変わらない。お互いの動きが合えばそれ相應の力になるのだが、動きがズレれば互いに障害し合うだけなのだから。……どの口が、と私を唾う私がいる。そんな声は聞こえない。聞こえない。

「おいおい、手抜きしてるならもつと出してくれないんだぞ?」

「言ったね! それ相應の覚悟があるってことでいいのね!」

「どーん!——邪魔するぜ——うおつ?」

「ええ……。なんか気持ち悪……」

嫌なことを考えている内に、さつき手を挙げていた二つが表に跳び出した。虫妖怪のスペルカードが途切れた瞬間を選んだだけよかった、と思っておこう。……え? 直前まで威勢よくしていた虫妖怪に引かれてる? そんなもの、わざわざ気にするようなことじゃないよ。うん。

『……何考えてんだろ、紫様は』

まったく、紫様は私に何を求めてあんな命令をされたんだか。はあ。

三つ分の妖力

表に三つ出た瞬間にドン引きした虫妖怪だが、どうやら命名決闘法案に支障はなさそうである。これといつて変わった様子は無い。動揺が弾数が減る方向に作用すれば大歓迎だったけれど、我を忘れられて無茶苦茶になるよりはマシかなあ。プラスマイナスゼロ。悪くない。よくもないけど。はあ。

「よーしっ！——ちよいと待——つぶね——」

……ただし、こちら側は大きく様変わりしてしまっている。主に悪い方向で。

いつも通りに無邪気に駆け回って弾幕を避けようとしたのだろうが、その場から極力動かず最小限の動作で躲そうとしたのと噛み合わず、咄嗟に右腕に妖力を込めて被弾寸前で引き裂く始末。……当然だ。これまで息を合わせて一緒に、なんて碌にやってこなかったのだから。そんなことする意味がなかったし、必要もなかったから。

「よく分かんないけれど、調子悪いみたいね！」

「あーん!?——落ち着けっつて」

「畳み掛けてあげる！——ここで一気に決めてみせるわ！——灯符『ファイヤフライフェノ

メノン』——」

そんな表のを見た虫妖怪は調子に乗って二枚目のスペルカードを宣言してきた。虫妖怪から翠色に輝く妖力弾が周囲に広がっていく。うげっ、よりによつて全方位限なくばら撒くタイプ。もしも表のを正確に狙ってくれたのなら、弾幕の速度よりも速く動き続けるだけで避けられて簡単なのに……。

そんなことを思いながら表を眺めていると、表のはその場に留まった。そして、きちんと右腕が上げられていく。ほら、いまいち合っていないよ。そりやそうだけどさあ。はあ。

「ここぞ躲——まとめてぶっ飛ばしてやるッ！——おー！——はあ？」

キチンと弾幕を躲そうとしたのが一ついたのだが、そんな意見は多数決で否決されてしまったらしい。残念ながら。まあ、私でもそうしてと思う。だって、正確な動きなんて出来るはずがないのだから、出来る限り単純な動きで済む方がいい。

三つ分の妖力を込められた両腕が淡く輝き出す。ふうん、どうやら三つの意見が噛み合ったらしい。その妖力が具体的にどの程度かは知らないけれど、今表に出ている火力特化の一つが全力でやっても出せなさそうな程度には込められている。端的に言ってしまうえば三尾相当なのだろう。

「爪符『スーパーメガスラッシュ・ドライ』ッ！」

宣言と共に右腕が真一文字に薙ぎ払われる。そこから放たれた爪撃は、表のと虫妖怪

の間に存在した弾幕を全て飲み干してもなお衰えることなく突き進む。うわあお、結構弾数あったと思うんだけど。それでも問題なしですか……。

「うわあっ!？」

「そら! もいつばあぁーっツ!」

「ええ!?! ギャふんっ!」

驚愕して後退った虫妖怪が咄嗟に避ける先を先読みしていたらしく、下に避けていった虫妖怪に向けて左腕が振り下ろされた。さらなる追撃に目を見開いた虫妖怪がそこでピタッと身体を硬直させてしまい、巨大な爪撃の中に飲み込まれていく。……大丈夫かなあ? ま、いいや。別にどうでも。

息さえ合えば問題ないんだろうけどなあ……。そんなのは稀だ。しかも、数が増えれば増えるほど合わなくなっていく。それなら、最初から一つだけいい。ほら、強くある必要なんてないのさ。生きるために、強くある必要なんてあるかい? ないね。

『気分が悪そうですね』

『最高に最悪だよ』

『そうですか』

……なあんで、自分に言い聞かせる。過去を否定して贖罪でもしたいのかしら。私も私に分からない。はあ。

「おーい——大丈夫か？——あーあ、伸びてら」
「きゅー……」

そんな浮かない気分で表を見上げてみれば、どうやら虫妖怪はクルクル目を回して気絶してしまつたらしい。なんだ、問題なくてよかつた。……え？　気絶させたくせに問題ないはおかしいだらつて？　生きてるんだ。死んでない。なら問題はないでしょう？　多分ね。

『ちよつと行つてきますね』

『あー、うん。いつてらっしやい』

そんな痛々しい虫妖怪を見てもたつてもいられなくなつたのが一つ、颯爽と表へと飛び出していった。多少見え隠れしている擦り傷なんかを癒すつもりなのだろう。ま、私がどうこう言つていいことじゃない。勝手にやつてて。

さーて、虫妖怪は無事撃退出来たわけですし、紫様に通信しないなあ。はあ。

拝見させていただきます!

『雑魚だったなー、ムシ』

『そう言つてやるな。……まあ、まさか気絶するとは思つてなかつたがなあ』

『んー、楽しかったー!』

私は内側に戻ってきた三つの会話はそのまま聞き流し、代わりに表に出たのが虫妖怪を癒しているのを見上げながら紫様へ通信を始める。

『出ない……』

しばらく繋げていたのだが、一向に紫様が出てきてくれない。しかし、妨害されていくわけでも、出て即行切断されたわけでもない。繋がってるけど出てくれないのだ。……んー、今、忙しいのかな? 別の誰かと交戦中とか? ま、いいや。とりあえず、終わったら伝えろつて言つたのはあつちだし、出てくれるまで繋げとこう。

「ふう。これでいいかしら?」

一通り虫妖怪を癒したらしい表のは、キョロキョロと首を左右に振つて見回している。何かあつたのだろうか? 見た感じ、何かあるようには見えないけれど。

「あそこに彩さんがいますよ、幽々子様」

「幽々子さんと妖夢さんですか。こんばんは」

「はい、こんばんは」

……なあんて思ってたのになあ。表のが夜空を見上げてみれば、そこには幽々子と妖夢がいるじゃないか。二人も偽りの月が気になって出てきたのかなあ？ もしそうだったら、それに関しては霊夢と紫様に任せてください、とでも言ってお帰りしてほしい。幽々子なんか表のを見詰めて愉快に微笑んでるし、面倒なことになりそうだから。

「あらあ、ちようど知ってそうなのがいたじゃない。妖夢、ちよつと吐かせてみなさい？」

「ええっ!?! 幽々子様!?!」

そして、そういう嫌な予感つてのは得てしてよく当たる。幽々子の言葉に戸惑う妖夢だが、しかし片手で頭を抱えながら表のの前に下りてくる。もう片方の手が刀の柄に添えられているあたり、そういうことなのだろう。はあ。

あーあ、表のも戸惑ってるだろうなあ……。戦えないわけじゃないし、むしろ私なんかより殺せる方だけど、いかせんそういうことを忌避しているのだから。きつと、表のは一発も攻撃せずに回避しかない。万が一でも、相手を傷つけないために。そうすると、スパッと被弾して負けるか、それとも相手が降参してくれるまでの長期戦になるか……。はあ。

『彩? 少し遅れたわね』

『もう少し早く出てほしかったです、紫様』

『……場所を教えて頂戴。スキマを開くわ』

ようやく出てきた紫様が若干申し訳なさそうにそう言ったのだが、見上げている表では妖夢が居合抜刀した刀身から霊力の籠った斬撃が飛来する。表のはそれを屈んで難なく躲した。それなりの速度ではあったものの、躲せないほどじゃない。

けれど、そういう問題じゃないんだよ。重要なのは、妖夢に攻撃されたという事実だ。

『今さっき妖夢に命名決闘法案を挑まれたんで、後でまた通信します』

『……そう、分かったわ』

その言葉を最後に、紫様は通信を切った。私は思わず頭を抱える。ああ、あと数秒早ければなあ。そうすれば、何かされる前にそそくさと逃げたのに。え? 敵前逃亡は卑怯者のすること? プライドなんぞ知らん。そんなもの、遥か昔にその辺に捨ててきた。

けれど、そんなもしもの事なんて考えたところで、都合よくいくわけがないのだ。ほら、表のはやけに刀身の長い刀を向けられている。ここでやっぱ止めにしましょう、何て言ってくれるわけがない。

「彩さん。突然で申し訳ありませんが、紫様の式神の実力を拝見させていただきます!」

ほら、やっぱり。いくらもしもがあるうと、上手く事が進むなんてまやかしだ。知ってたけどさ。

『はい、集合』

『ふん』

『余裕かどうかは知らないけれど、今表に出ているのと息が合いそうなのもう一つくらい表に出よう』

『はいはーもが』

『それじゃあ、私が出るわ』

『うん、よろしく』

そう言つて出て行くのを、内心複雑な気持ちを押し込めながら見送る。癒しと結界なから相性も悪くないだろう。……え？ もう一つ意気揚々と拳手していた？ 気のせい気のせい。

表の様子はどうと、目の前に斬撃が飛来していた。それを右に飛んで躲そうとする前に、新たに表に出たのが目の前に結界を張る。

「あら——お手伝いしに来ました」

「……えつと、彩さん？」

結界に弾かれた斬撃にホツとしながら、私は表を見守る。苦い思いをしながら。

随分と潔いのねえ

妖夢の振るう刀から幾度となく迫る飛ぶ斬撃。表のは結界を張って斬撃を防ぎ続けていく。……あー、これがずっと続くとなると面倒だなあ。いつかは勝敗が決まるだろうけれど、下手すれば明けない夜さえ明けてしまいかねない。何せ、飛ぶ斬撃は問題なく結界で防げるし、表のは攻撃を一切しないのだから。

『まさか、このままずっとなんてことはないよね?』

『流石にねえだろ。あつちは刀だぞ?』

いつの間にやら隣にいたのにそう言われたとほぼ同時に、妖夢は表のに向かつて軽快に走り出した。おお、よかった。そりやそうか。武器を扱っているのなら、その間合いに入ったほうがきつと強い。膠着状態を文字通り切り開くかな?

……けれど、あの刀でスッパリ斬られて死んじやった、なんてことにはならないだろうか? ま、いいか。死んだらそれはそれで。

「やあつ!」

「きや——つと」

威勢のいい掛け声と共に振り下ろされる袈裟斬りに対し、表のはぎこちなく右に跳び

ながら相も変わらず結界を張る。さて、どうなる？

「脆いッ！」

僅かな拮抗はあつたものの、妖夢は結界を打ち破つた。おお、凄い凄い。すぐさま返す手で表のを追うように切り上げを放つが、表のは既に刀が届かないところまで跳んでいた。おお、危ない危ない。流石にスパツと斬られてお陀仏はねえ？ ……え？ さつきと言つてることが違う？ いいじゃん、別に。気にするようなことじゃないですよ。

表のは数度地面を跳ねるようにしてさらに後退していき、妖夢はそれを追いかけてくる。うわ、速いなあ。表のより速い。すぐ追い付かれる。……というか、どんどん加速してない？ しかも、何やら納刀までして居合の構えまでしちゃつて。

なんて思つた矢先、妖夢が踏み出した一歩でいきなり数段速度が上がつた。そして、跳ねて移動していた表のの脚が地に付く前に妖夢が目の前に迫る。

「人符『現世斬』！」

「結界を——はい——防符『守護結界・二重』」

鞘から滑るように振るわれる居合一閃。ああ、こういうのが達人つてやつなんだろうなあ、と見てて思わされる。私にはそういうの出来ないよ。羨ましいとは思うけれど、やりたいとは思わない。

対する表のは、刀に切り裂かれてしまう前に二重の結界を張る。先程までは一つが結

界を張って防御していたが、今回は二つ分が二枚だ。……んー、どうなんだろう？

結果は破られた。呆気なく。薄いガラスをちよつと厚くしたところで、ガラスを二枚に増やしたところで、破られるときは呆気ないものだ。残念ながら。

しかし、表のはそのまま切られるつもりはないらしく、妖夢が結界を割っている隙に一步踏み出した。刀身よりもさらに内側に潜り込んだのだ。しかも、殴る蹴るよりもさらに近く、それこそちよつと動けばぶつかり合うほどに肉薄している。

「うえっ!! さ、彩さんっ!!」

そして、表のは妖夢を抱き締めやがった。突然の抱擁に妖夢も吃驚仰天らしい。そりやそうだ。やり合っていた相手が急に抱き着いてきたら私も驚く。多分。

けれど、ある意味安全とも言えるのだ。何せ、あまりにも近過ぎて刀の間合いを通り抜けてしまったのだから。ついでに動揺させているところもいい。……まあ、表のはそんなつもりで抱き締めたわけじゃないと思うけれどさ。

妖夢を抱き締めている表のは、そのまま人差し指を額に押し当てた。あ、被弾一つ、かなあ……? いや、そういう状況じゃないか。

「めっ!——そんな危ないものを振り回しちゃ駄目よ?——危ないわよ」

「ええ!! い、今は決闘の最中です! そんなことを言われても困りますよ!」

「だから——降参するわ」

「……………え？」

表のの降参宣言に、妖夢が呆けた声を上げる。あー、そつか。その手があつたか。別に負けてもいいんだし、相手の要求は私から何かを訊き出そうとしているだけのようだし、さっさと降参して終わらせるのもいいのか。

『……………けっ！』

一つ文句ありげだけど、無視だ無視。聞いたら口うるさくなりそうだし。どうせ、自ら負けを認めるのが癪なだけなんだから。

表のは妖夢を腕の中から放し、そして上から二人の決闘法案を見下ろしていたふんわり微笑んでいる幽々子を見上げる。

「幽々子さん。私に訊きたいこととは何でしょうか？——知ってることなら答えるわ」

「あらあ、随分と潔いのねえ」

「幽々子は私から何か訊き出したいんでしょう？——私は争いを避けたいのです——だったら、こうするのが一番傷付かないで済むもの」

そういう意味でも、気の合う二つだった。

「あの、若干納得いかないんですが……」

隣で妖夢がそんなことを言っているけれど、幽々子に微笑まれてすぐに口を閉ざした。……………うわ、怖っ！

式神『八雲彩』

「なあんだ。貴女は何にも聞かされていないのねえ」

「そうね——紫様は何も言わずに私を連れて出たので」

「あらあ、大変ねえ」

どうやら、幽々子も偽りの月に異変を感じたらしく、妖夢を連れてわざわざ冥界から出てきたらしい。そして、紫様なら何か知ってると思つたそう。つまり、紫様の式神である私から訊き出せば手っ取り早いだろう、と。まあ、残念ながら紫様が何か知っていたとしても、表のが言っている通り私は何も聞かされていないのだ。知ってるのかなあ、紫様？

……まあ、私としては夜を止めているほうがよっぽど異変な感じがするんだけどね。大丈夫なのかなあ、紫様？

『さて、そろそろ通信しよ』

表のが幽々子達と他愛のない会話を繰り返しているうちに、私は紫様に命名決闘法案が終わったことを伝えるとしよう。

『ちようどいいところに来たわね、彩。妖夢との命名決闘法案は済んだのかしら？』

『はい。先程終わりましたよ』

『なら、すぐにスキマを開くわ。場所は大きく動いてないわね?』

『えつと……、はい。そこまで移動していませんね』

『それじゃあ、すぐに来て頂戴』

『は?』

それだけ言って、紫様に一方的に切られてしまった。そんなに急がなければならぬ用があったのだろうか? けれど、私が必要になるようなことつてあるか? ……いまいち思い付かない。まあ、いいや。とりあえず命じられたわけですし、さっさと熟すようにしましょうか。

私は表へと浮かび上がり、表に出ている二つを内側に引つ張り込んだ。会話の途中だったけれど、悪いが優先度が違う。

『んもう、急に何よ?』

『突然ですが、何かあったのですか?』

『紫様がすぐに来いって。近くにスキマを開くつてさ』

『あら、そうなの? じゃ、後はよろしくね』

『えっ』

そう言われると共にドンと背中を押され、私は表に押し出された。身体は特に痛くな

い。けれど、目の前では幽々子と妖夢が会話が急に止まった所為で首を傾げている。
……うへえ、申し訳ない。

「あー、あのですね」

「あら、戻ったねえ。それで、庭の剪定のお話なんだけど」

「すみませんが、紫様に呼ばれたんでまたいつかにしてもらっていいですか？」

謝罪の気持ちを含めて頭を下げつつそう言うと、私のすぐ隣でグアツとスキマが開いた。それを見た幽々子は私の状況を理解してくれたらしく、妖夢を引き連れてふわりと浮かび上がっていった。

「そう、残念ねえ。それじゃあ、紫に伝えておいてくれないかしら？ 私達は勝手にやらせてもらう、って」

「分かりました。伝えておきますね」

「彩さん！ また今度、私とちやんと手合わせをしてくれませんか？」

「えー……。まあ、暇があったらね」

別のが。当然、私はやらん。私なんかよりよっぽど好戦的なのがいくつもいるからね。

上へ上へと浮かび上がっていく二人を見上げて手を振り、二人が背中を向けてすぐに私はスキマに目を向けた。さて、行きましようか。何があるのやら、と思いながら、私

はスキマを潜り抜けた。

「わざわざ私が出す必要はないわ。式神『八雲彩』」

「……はあ？」

出てみたらそこは命名決闘法案の真っ只中であつた。しかも、どうやら私はスペルカードらしい。手札つてそういう意味かよ、藍。

「八雲、彩だと？ そんな式神がいたのか！」

「えっと、紫様。何がなんだかサツパリなんですが」

「そんなことは今はどうでもいいわ。もう始まつてるのよ。相手はあの半獣。さあ、貴女の力を見せつけなさい！」

どうしてそれをよりにもよつて私に言うんだ、紫様よ。私には見せつけられるようなことが何もないというのに。ああ、今すぐ他のに代わりたいたい……。

そんな私の思いが伝わっていないのか、はたまた伝わっていて無視されているのか、私は紫様に背中を押されるままに前に出る。えっと、命名決闘法案の相手はあの厳格そうな表情の半獣か。バカス力弾幕を撃っているんだけど、あれつて被弾してもいいのかなかあ？ だって、今の私は飽くまで紫様の式神という道具として参戦させられているわけだし。……まあ、当たらない方がいいだろう。多分。

ふと周りを見回し、藍がいないことに気付いて思い切りため息を吐いてしまう。……

代わりに藍を、って言うのも駄目ですか、そうですね。はあ。

「あーあ、しょうがないなあ……」

そう独り言ちながら、私は右足の裏に結界を張る。そして、それを柱のように勢いよく伸ばして突進する。両手の爪も伸ばしているのだが、まともに使えるくらいの長さになるまでにはあと数秒は必要だろう。結界で十分な速度を得たところで、思い切り跳び出す。踏み出した衝撃で結界が砕け散ったが、最初から踏み台として使っているのだ。気にする必要はない。

さて、標的はもちろん半獣。被弾しそうな妖力弾は右から二つ、左に一つ、正面に三つ。正面の妖力弾は右手から妖力弾を拡散させて放って打ち消し、左の妖力弾は左手の中途半端に伸びた爪で引き裂き、残る右の妖力弾は身体を右に大きく捻じってどうにか回避する。伸ばし途中で柔かった左手の爪が途中で折れてるし、右の妖力弾は服を僅かに擦った気がするけれど、あまり気にしないでほしい。

さあ、目の前には目を見開きながら後退しようとしている半獣。けれど、結界で押し出したこともあって私のほうが早そうだ。回避のついでに身体を右に捻ってあるから、右腕を振るうには十分だ。爪は未だに伸び切っていないが、ここまで近付けば問題なからう。

「そらあつー！」

「おっと、安直だな」

あ、躲された。割と余裕綽々に。ま、いいや。私なんてこんなものである。けれど、とりあえず跳んでいくすぐ先に結界を張って、跳ね返るように跳ぶくらいはしよう。

「うえっ？」

そう思っていると、身体が急に加速した。え、何が起きてるの？ ……ああ、どうやらどれかが表に出てきたらしい。いくつも重ねられた身体強化の妖術から察するに、隣のはここで半獣を仕留めるつもりのようなのだ。相変わらず、殺意マシマシである。

「殺さないですよ？——ふん」

私も隣のに合わせて身体強化の妖術に妖力を流す。その影響で身体がさらに加速する。一切の無駄を排した隣のの動作にどうにか合わせて結界を蹴り飛ばし、半獣の背中を全力で蹴り飛ばした。

「ぐはっ!？」

おお、結構いい当たり。背中が思い切り逆に曲がつてるけれど、死んじやいなさそうだし大丈夫でしょう。きつと。

いいことを知ったな

「くっ、どうやら私の負けのようだな……」

そう悔し気に言いながら、半獣は背中を押さえてふらふらと起き上がる。何かよく分からないけれど、さっきの蹴りが最後の一手だったらしい。脚だけだ。

あと、気付けば隣のは仕事は終えたと言わんばかりにさっさと内側に戻ってしまっている。酷い、私も戻りたかった。まあ、表を空にするのはあまりよくないのでしようがないけれど。はあ。

私がそそくさとこんなところに呼び寄せやがった紫様の元に戻っていると、霊夢が半獣に思い切り詰め寄りを始めた。何？ あの半獣、偽りの月の黒幕なの？

「さあ、さっさと人間の里を元に戻しなさい！」

「戻しても大丈夫よ。最初からこの人間と貴女に興味なんてないわ」

ありや、違うのね。けれど、人間の里を戻すとは？ その言葉を聞いて改めて周囲を見回してみれば、確かに人間の里がない。おかしいなあ、こちら辺にあつたはずなんだけど。阿求のお屋敷とかがなくなるとちよつと困るんだけど。暇潰しの場所がなくなるから。……まあ、いいや。

なんて思ってたのに、まるで霧が晴れたかのように人間の里が浮かび上がってきた。うわ、あるじゃん。なんだ、見えないだけでなくなったわけじゃないのね。これなら阿求も死んでいないだろう。よかったよかった。

「お前達が人間達を襲おうとしていないのは分かった。じゃあ、何処に行こうとしているんだ？」

「あっち」

「こっち」

どっちだよ。紫様と霊夢はまるで真逆を指差し合っている。酷い有様だ。私？ 決まったらそっちに付いていくだけだよ。

「……あー、異常な月の原因を作った奴なら、そっちだぞ」

そっちかよ。しかも、若干頬を引きつらせた半獣が指さした方向は二人とまるで違う場所である。酷い有様だ。私？ 決まったからそっちに付いていくだけだよ。

二人のそっちは七十度違う、あなたは百十度違う、と正直五十歩百歩な気がする言い争いを聞き流し、私はその場で黙って待っている。こういう時、横槍を挟んだら予先がこっちに向きかねないからね。藪に棒を突く必要はない。まあ、すぐ終わるだろう。多分。

「八雲彩、でいいの？」

「まあ、そうですが。何か？」

なんて思っていると、人間の里を隠した半獣に声を掛けられた。興味を持たれるようなことあったかな？ ……紫様の式神ってことくらいかな。

「お前みたいな式神もいたんだな。あの賢者の式神と言えば藍くらいだと思っていたものだから」

「別に隠れてるわけじゃないし、隠してるわけでもないよ。ただ、知られてないだけさ」
「そうか。それじゃあ、いいことを知ったな」

いいこと、ねえ。私の事ってそんないいことか？ ま、いいや。別にどうでも。それつきり、半獣は口を閉ざす。正直、会話が途切れてくれてホッとした。命名決闘法案の途中でいきなり出された身としては、この半獣に対して会話のネタがまるでない。これ以上話しかけられても困るのだ。

それから一分足らず。未だに霊夢と言い争いしている最中に紫様がスキマを開き、そこから藍が現れた。ちよつと服に傷が見えるあたり、誰かとやり合っていたのだろう。傷がスツパリと切れているから、鋭利なものを得物にしてる相手だと思う。ま、済んだことだ。どうでもいい。

「紫様、ただいま戻りました」

「遅いわ、藍」

「申し訳ございません」

「ちよつと、あんたの方がズレてたつてこと誤魔化してるんじゃないでしょうね?」

「貴女がしようもないことを言つてる間に刻一刻と月が沈んでいくのよ。さ、急ぐわよ」
「ほら! またそうやつて誤魔化す!」

「いや、先に言い始めたの紫様なんです。……ま、いいや。何はともあれ終わったみたいだし。」

二人が半獣の指差した方向へ飛んでいくのを見て、私も浮かび上がる。そのまま飛んでいく前に、私は一度振り返つて半獣に軽く手を振る。なんだか別の意味で疲れている表情で肩を竦めながら手を振り返された。まあ、頑張れ。応援だけはするよ。心中で。一回くらい。

「行くぞ、彩」

「はいはい、藍」

そう言つて、私はわざわざ待つてくれた藍に付いて飛んでいく。別に置いていつてくられても構わないのに。むしろ、置いていつてくれれば楽なのに。まあ、置いていつてもスキマで引つ張つてきそう。はあ。

先を行く二人を追いかけるように飛んでいる最中、私は何となくさっきの命名決闘法案でいかなかった理由を問うことにした。別に、あの時藍がいてくれれば私がスペルカー

ドになることはなかった、とか思つての事じゃないよ？ 本当だよ？

「さつきまで何処行つてたの？」

「彩と別れてすぐ、夜雀と遭遇してな。それを任されたのだ」

「ふうん。それだけ？」

「いや、その後すぐに吸血鬼とその従者に鉢合わせたな。この偽りの月を紫様の仕業では、と勘繰つてきたから追いつ返していたのだよ」

「あら、そりゃ災難」

服の傷はそれが理由か。レミアアの従者の咲夜はナイフ持ちだし。私と同じように二連戦、しかも相手が吸血鬼達となれば私より遅れるのも仕方ないか。

けれど、仮にも九尾が人間相手に傷つけられたのか、と少し意外に思いながら服を見ていると、藍に肩を竦められた。

「意外か？」

「まあね。たかがナイフ投げでスツパリいかれてるのはさ」

「従者は時間を操る能力を持っていてな。少し苦戦したんだ」

「へー、時間をねえ。そりゃ凄い。何処まで出来るの？」

「私が見たところ、減速と加速、それと停止だな」

「そっか」

そんなもんか。

動くとき撃つ!

さつきの半獣が指差した方向に飛んでいったら、迷いの竹林が見えてきた。よほどの強運の持ち主でもない限り自力での脱出は不可能と噂されている、あの迷いの竹林である。そんな場所に迷いなく突っ込んでいきやがった霊夢はよほど樂觀的なのか、迷わないとも思っているのか、それとも何も考えていない馬鹿なのか……。まあ、きつと迷わないのだろう。博麗の巫女だし。はあ。

そんな霊夢の後を当然のように飛んでいく紫様を見て、私は思わず肩を落とす。ああ、やつぱりここなんだなあ……。迷いの竹林を通り越したその先とか、ちよつとだけ期待したただけだなあ。……。まあ、最悪の場合は紫様に頼んでスキマを開いてもらえば問題ないでしょ。多分。

私と藍は紫様の後を付いていくわけだが、私は迷いの竹林の目の前に一旦止まってしまふ。あー、行きたくないなあ……。この奥から面倒事の予感がする。まあ、異変解決の時点でお察しだけ。

「どうした、彩。早く行くぞ」

「はいはい。分かっていますよーだ」

迷いの竹林に入つてすぐに藍が止まり、そんな私を呆れ顔で促される。はいはい、分かつてる分かつてる。私は紫様の式神ですし、役目ですからね。はあ。

私は重くため息を吐き、諦念を抱きながら迷いの竹林に突入した。藍と共に少し先を飛んでいる霊夢と紫様に追いつき、それからは二人の後に追隨する。霊夢は脇目も振らずぐんぐん進んでいくのだが、付いていく私としては違和感が拭えない。

「ここ、かなり飛びづらいんだけど。竹は多いし、霧は立ってるし、なんか変な感じがする」

「文句を言うな」

「言うさ。さつきから真つすぐ飛んでるのに飛べてない。思いつ切り捻じ曲げられてるじゃあないか」

「あんた、さつきからうるさいわね。この近くに異変の黒幕はいるわ。黙って付いてればいいのよ」

「……そうですか」

さつき指差していた時はまるで違う方向だったことは言わない方がいいだろう。それと、異変の黒幕ならすぐ隣にいるかもしれないよ。まあ、偽りの月の方じゃなくて、夜を止めた方だけだ。

そんなことを考えていると、霊夢と紫様の前に真つ白な魔力のレーザーが雨のように

降り注いできた。見覚えあるんだけど、なんだっけ？

「動くと撃つー!」

ようやくレーザーが止まり、もうもうと舞う土煙が晴れる前に上のほうから聞き覚えのある声が響いてきた。

「間違えた。撃つと動くだ。今すぐ動く」

……ああ、魔理沙か。道理で見覚えがあつて、聞き覚えがあると思つた。チラリと藍を見遣るが、首を振つて肩を竦められた。どうやら、ここに来るところは見えていないらしい。

さて、盛大に弾幕をばら撒かれたわけだけど、霊夢は割と落ち着いて魔理沙を見上げていた。

「何でこんな場所に魔理沙がいるのよ?」

「さあな。私は迷惑な妖怪を退治しているだけだぜ。いつも通りな!」

「へえ、奇遇ね。私も迷惑な妖怪退治をしている最中よ」

「私が言ってるのは『迷惑な妖怪』を退治だ。お前の場合は迷惑な『妖怪退治』だろ?」
「それでもないわ」

平然と会話しているけれど、魔理沙はよく見る八角形のものを手に一触即発の雰囲気だ。というか、さつきから霊夢よりも紫様に視線が向いてないかな? 気のせいじゃな

いよね？

「へえ、こんな夜に貴女一人で何が出来るかしら」

「迷惑な妖怪退治だ。今日の月はもう見飽きた。そろそろ明日にしてみらうぜ」

「で、その迷惑な妖怪は一体誰の事かしら？」

「お前らの事だよ。紫と、その後ろの怪しい化け猫」

あん？ どうして私が指差されてるんでしょうか？ 意味が分からないんですけど。

それから魔理沙は紫様が昼夜の境界を弄ったことを指摘し、ついでに私のことをなかなか怪しいとのたまう。怪しい、って……。しかも、何となくって。まあ、別にどうでもいいけど。はあ。

霊夢が後ろを見ろ、月を見ろと言って応戦しているけれど、私としてはそんな問題じゃない。

「紫様」

「何よ、彩」

「立派な異変の黒幕ですね」

「今更よ」

あーあ、推測が確定しちゃったよ。はあ。

尚の事質が悪いわ

目が痛くなるくらいカラフルな星形の魔力弾が左右から襲いかかる。とりあえず、身体を右に向けて背後に結界を張る。ものの数秒しか持たないだろう脆弱なものだが、目の前に迫る弾幕の対処には十分だ。ようやく実用に値する長さで強度を得た爪を振り下ろし、いくつかまとめて引き裂いて空間を確保。チラリと背後を確認し、案の定もうすぐ壊れると思いつかまともに引き裂いて空間に前進し、前方からの弾幕がないことを確認してから振り返る。それとほぼ同時に先程張っていた結界が破られ、迫り来る魔力弾の中から被弾する魔力弾を見て選んで爪で引き裂く。はあ。

「どうして私かなあ……」

「口を動かす暇があるなら動け。負けなどしたら紫様の名に泥を塗ることになるぞ」

「もう既に負けてるんですけど」

「なら、汚名返上だな」

よりにもよってどうして私が出ているときに命名決闘法案が始まるかなあ、と思わず愚痴れば即座に藍に叱責されてしまった。知らんがな。

私達の前に浮かんでいる紫様は、魔理沙が放っている魔力弾から被弾するものだけを

取捨選択して一つ一つスキマで拾い上げ、わざわざご丁寧に紫色に染め変えてから魔理沙にお返ししていた。どうせなら全部やってくださいよ。紫様なら出来るでしょ。多分。そうすれば楽なのに。はあ。

偽りの月を背後に上空から星形魔力弾を降り注いでいる魔理沙を見上げてみると、突然笑い出した。

「ははっ！　なんだ、その化け猫も紫のペットだったのか！　いや、子分か？　それとも式神？　……まあいい。道理で怪しいわけだな！」

「そうよ。彩は藍と同じ、私の可愛い可愛い式」

「そういう言い方止めてくれませんか？」

「あら、いいじゃない」

何となく口出ししてみれば、顔だけ振り向いた紫様は私に笑う。キュツと口端を吊り上げる、妖しい微笑み。……まあ、どうでもいいや。好きに呼んでくれ。私は紫様の式神だから。

ちなみに、霊夢は我関せずと言わんばかりにその辺に佇んでいる。まあ、魔理沙が名指したのは紫様と私だ。藍は紫様の式神として勝手に乗り込んでいるけれど、霊夢は関係ないと言えない。けれど、的が増えるから参加してほしかった。はあ。

おっと、ため息なんかしてる暇ないんだっけ。周囲を確認し、弾幕の軌道から被弾し

ない場所を推測。さっさとそこに移動しよう。

「すみません——あ？」

が、そうしようとした身体が変な形で止まる。急に出てくるなよ。ああ、そりやあ怒られるわ。なんて思っている間にも、私が避けようとしていた魔力弾が迫る。うげ、当たっちゃう。

なんて思っていたけれど、横から高速で飛来した妖力弾が魔力弾を貫きかき消した。首が妖力弾が飛んで来た方向に曲がろうとするので、私も気になっていたらしそちらへ向く。

「何をしてる。ボサツとするな」

「申し訳ありません。そしてありがとうございます、藍」

どうやら、さっきの妖力弾は藍のものだったらしい。いや、ありがたいけど。その前に、一つ言わなきゃならないことがある。

「どうして出てきたの？——今度は私が出ることが決定したので——さっきみたいに？」

——先程のように」

どうやら、わたしがいない間に内側で誰が出るか話し合っていたらしい。さっきの半獣の時もそうだったようだ。けれど、出るタイミングはもう少し考えてほしかったかなあ。はあ。

まあ、いい。よくないけれど。それよりも、私が対処するべきなのは紫様から零れた弾幕の処理だ。え？ 紫様の背後とかに密接すれば必要ない？ それは流石にどうかと思うので、どうしようもなさそうだと感じたら、ということだ。

「他のと代わった方がよくない？——いえ、そんなことはありませんよ——私より出来るのが他に七つもいる——私は貴女ほど出来るのを知りませんよ」

何言ってるんだ？ おい、真面目に考えろよ。私に何が出来る？ 何も出来ねえよ。おちよくってるのか。

「冗談は私の専売特許なんだから——思ったことを正直に語っただけですよ——尚の事質が悪いわ」

本気でそう思っているなら考え直してくれ。冗談まで取られてしまったら、私の勝っているかもしれないものが本気でなくなる。どう考えても、私は全てに劣るんだから。

視点が勝手に四つの魔力弾に移る。ああ、それが当たるのね。その四つの魔力弾の軌道に合わせて四つの小さな結界を張る。隣のも妖力を流してくれたから、あの程度で割れることはないだろう。魔力弾を防ぎ用済みとなった結界はすぐに消す。そして、次の魔力弾に合わせて結界を張る。繰り返す。今のところ、問題はない。

「つとぶ」

なんて思った矢先、問題が起きた。ただし、私にではなく、魔理沙にだが。突如、霊

力の籠った陰陽玉が飛んできたのだから。

「……何すんだよ、霊夢」

「あんたらがちんたらやつてるからよ」

何を思ったのかは知らないけれど、霊夢が重い腰を上げてようやく参戦するらしい。

「こりやまずいな。一旦立て直すか」

あ、逃げた。脱兎の如く。箒に跨って彗星のようにビューつと。……いや、別に逃走は禁止されていないけれど。ま、いつか。

「あ、逃げた？」

「さあ、地の果てまで追うのよ」

よくなかった。

ごめん、ありや嘘だった

紫様が我先にと向かっているので、私もどうにか付いていく。竹を避ける際に多少横に逸れることはあれど、基本的にはほぼ真つすぐ飛んでいるだけなので、隣のの動作に合わせてるのはかなり楽だ。……まあ、実際のところは真つすぐ飛んでいるつもりなだけだ。はあ。

しかし、なんでわざわざ追いかけるかねえ？ こちらの目的は偽りの月だ。逃げるなら放っておけばいいのに。

「面倒くさいなあ——仕方ありませんよ」

「途中で邪魔立てされるなら、今のうちに片付けたほうがいいだろう？ それに、あれは紫様を侮辱した」

「あー、はいはい。よく分かりました」

分かっているよ、そんなこと。けれど、私としては面倒が先立つのだ。だって、私は関係がない。え？ 紫様の式神の時点で関係あるだろうって？ そんなくだらない理由で巻き込まれる身になってみる。気分急降下だ。

わざとらしくため息を吐きながら飛び続けていると、ようやく遥か遠くに見えていた

魔理沙が立ち止まり、おもむろに振り向いてきた。

「あれ、霊夢じゃないか。こんなところでどうしたんだ？」

「白々しいにも程があるわ」

「さっきのは紫と化け猫分。今度はお前分だ！」

などとほざき、星形魔力弾の弾幕をばら撒き始めた。どうやら、命名決闘法案の再開らしい。はあ。

まあ、私がやるところは変わらない。前のほうは霊夢と紫様に任せておき、零れ弾に対処するだけ。魔力弾の軌道を見て、被弾するものを選び、軌道上に小さな結界を張り、用済みになれば消す。それを繰り返すだけ。

「このままじゃ埒が明かないな。さっさと明日にしてもらうぜ！ 魔空『アステロイドベルト』！」

そう思っていたのに、魔理沙はスペルカードを宣言して弾幕密度を爆発的に増やしやがった。ああ、面倒な……。しかも、一発一発の魔力弾の威力も跳ね上がってるから、さっきまでの結界では防ぎ切れない。それは妖力を多少多めに流して強度を増すことで対処出来るとして、問題は躲して素通りした後の魔力弾。それらが竹やら地面やら結界やらにぶつかると、炸裂して小さな魔力弾になってくるのだ。それが横やら背後から来るのだから、非常に面倒くさい。幸い、一度しか炸裂しないからまだマシか？ んな

わけあるか。はあ。

霊夢は難なくヒヨイヒヨイ避けてるし、紫様は背中に目でも付いてるのかつて疑いたくなるくらい正確にスキマを開いてるし、藍も霊夢ほどではないだ問題なく躲せている。私？ 隣のに合わせて動いてるだけだよ。時折、周囲をグルリと見回してからいくつかの魔力弾に視線が映るから、それに合わせて結界を張るだけ。まあ、結界だけで対処できなくなったようだから、多少は動いてるよ。けれど、やっぱり細かい動作は厳しいものがある。

「苦戦してるな」

「そうですね——だから代わったほうがいいって——そんなことはありませんよ」

私なんかより出来るのはいるんだから、さっさと代わった方がいい。そう思っているのに、隣のはそうは思わないという。止める。冗談じゃない。

なんて思っていたら、突然パチツと弾ける音がした。それと同時に右手の指先に僅かな衝撃が走り、その正体を知る。親指と人差し指の間に、パチツパチツと断続的に電流が走っている。雷の妖術。私一つでは静電気にも満たない役立たずな代物にしかならないはずの妖術。

「これを使いましょう」

なんて提案を持ちかけられる。今は二つだから、多少なりとも見れるものになってい

るのだろう。経験つてのは、時に厄介なものだ。

……まあ、いい。私が隣のを止める理由は特にないのだから。けれど、せめてもの抵抗として、結界を張りながら小さくため息を吐いた。

「……いいけど——では、お願いしますね——はあ？」

提案したなら最後まで責任持つてほしかった。後はよろしくとか、それは私が言いたいことだよ。けれど、そんなこと言つてられないよなあ……。はあ。

私は藍の隣まで近付くために、今出来る最高強度の結界を藍に向けて張る。いくつも被弾して今にも壊れてしまいそうだが、そのたびに新しく張り直して対処。私は結界に手を当てて滑るように藍の元へ接近した。

「急に何だ？」

「肩に手を乗せて、妖力を流してくれないかな？」

「……構わんが、どの程度だ？」

「人間が死なない程度かな」

などと適当なことを言い、藍の手が左肩に載ったところで私は紫様に通信をする。

「紫様」

『こんな時にどうしたの？』

「この通信を切つてすぐ、私を魔理沙の前に出してください」

『やる気になってくれて嬉しいわ』

「そりやどうも」

話は済んだが、もう少し通信は繋げたままで。藍から流された妖力を受け、右手に走る雷が馬鹿みたいに激しい轟音を鳴り響かせる。……えっと、これって明らかに過剰量な気がするんですが。もしかして藍、紫様を侮辱したこと根に持つてこんな量にしたわけじゃないよね？

こうして他力がなければ使い物にならない。私一つ、どうしようもなく役立たず。他力本願。いつものことだ。はあ。

「なんだ!？」

まあ、こんだけ大音量でビカビカ光ってれば当然魔理沙にもバレるわけでした。ま、警戒されるよなあ。関係ないけど。

私は通信を切った。瞬間、目の前にスキマが開いて紫様に引つ張り上げられる。出てみれば、私は紫様の前にいた。つまり、魔理沙の前にいる。ここなら、問題はない。

「一撃で仕留めてやる。雷符『藍電一閃・式式』!」

宣言と共に右手の人差し指を真っ直ぐと魔理沙に向ける。雷の速度って知ってるか？ 光ほどじゃあないが、音なんぞよりも速いんだ。この距離で人間が反応出来る速度じゃないんだよ。ま、スペルカードとして最低限避けられるように軌道は単調にしてやる

が。

「ガッ!？」

撃った、と思っただら感電していた。空気が灼けるような音がし、周囲の竹が爆ぜる。……あつれえ？ やつぱり過剰量じゃない？

「ア、ガガ……。き、効いたぜ。ズガンとなあ……。お返しだ。恋符『マス』」

撃った。お代わりもう一撃。当然、魔理沙は感電した。煙が出ているけれど、本当に大丈夫かなあ？ ま、いいや。多分生きてるでしょ。平気平気。最悪、死んでも問題はない。そういうルールだ。あんまよくないけど。

流石に二発喰らって意識は保てなかったらしい。魔理沙はそのまま落ちてった。ピクピク痙攣するように動いているのは、生きているからか、それとも雷の所為か……。

「さっき一撃で仕留めるとハッキリ言っただけだったのになあ……。ごめん、ありや嘘だった——どうやら生きていますようですし、これでいいでしょう」

何だ、生きてるのか。よかったよかった。

夜はまだまだ長引きそうだ

「流石にやり過ぎではないですか？——悪かったとは思ってるよ、うん——手早く済ませるべきと判断したので」

右手にバチバチと残留していた雷を元の妖力に戻していると、急に内側から一つ飛び出してきた私を叱ってきた。まあ、言われた通り過剰量だったのは認める。けれど、これだけ強力になったのは大体藍の所為だから。多分。え？ 二発目を撃った私の所為だつて？ ……防衛本能さ。咄嗟に撃つちゃったんだよ。しようがないじゃん。はあ。

身体が地面に落ちた魔理沙の元へグイグイと引つ張られるように動くので、私はそれに合わせて動き出す。雷に打たれて煙を上げてるのを見れば、そりゃあ傷を癒したくなるよね。無駄に多く受け取った妖力がまだ残ってるし、これを治療に回して帳消しすることしよう。そうしよう。

魔理沙の元にしやがみ込み、伸ばした手から淡い光が流れ出す。とりあえず残っていた妖力をまとめて流し込んでやると、溢れ出る光がたちまち魔理沙を包み込み、光が晴れると一通り綺麗サツパリ治療されていた。うわあお、凄い凄い。羨ましい限りだ。はあ。

「ちよつと、魔理沙は大丈夫でしょうね？」

「ひとまず命に別状はないかと——死んでないし、平気平気」

「紫、ペットにはちゃんと首輪とリードを付けるべきよ」

「あら酷い。このくらい別にいいじゃない」

私は紫様のペットじゃないよ、と言ったところで意味はあまりなさそうである。まあ、私としてはリードを付けたきや付けてもいいよ。そうしたいなら。別に構わない。どうでもいい。

とりあえず治療を終えた魔理沙をこのまま放置するわけにもいかなないと隣のが言ってみれば、紫様が魔法の森にある魔理沙の家にスキマを開いてポイッと投げ込んでしまった。うわ、雑。せめて布団の上に投げ出されていることを願おう。ま、たとえ床に放り投げられていようと私としては一向に構わないが。

やることが済んだとばかりに二つとも内側に戻っていくのを感じ、どうしてよりにもよって私を置いていくんだと肩を落としていると、ポンと肩に手を置かれた。振り返ってみれば、にこやかに笑う藍がいた。

「よくやった」

「あー、うん。けど、多過ぎない？」

「あの程度では死なんさ」

「……そうですか」

嘘だな。あれは下手に扱えば死にかねない妖力量だ。どうやら、何かしら思うところがあつたらしい。……ま、いいや。生きてるし。

まあ、これで少なくとももう魔理沙に邪魔立てはされなくなつただろう。よかつたよかつた。あとは、偽りの月の黒幕なわけですが。そちらはどうなんでしょうかね？

「あら？　あれは何かしら」

「どうやら目的地のようね。本当、貴女はいつだって運がいいわ」

……何ですと？　私は若干疑いながら霊夢と紫様が見ている方向に目を向けてみれば、少し遠くて見づらいがそこには確かに古めかしいお屋敷があつた。阿求のお屋敷とどっちの方が広いかなあ？　ま、どうでもいいか。

「とりあえず、あの屋敷の中にいるわね。ほら、行くわよ」

「ええ、そうしましょう。貴女はいつだって正解よ」

「彩、何をしている？」

「え、ああ、うん。行く行く」

二人はさつきとお屋敷に向かって飛んで行ってしまい、ぽけーつとしていたら藍に叱責されて私も急いで追いかけていく。夜はまだまだ長引きそうだ。はあ。

狂わずにいられるかしら？

さつきからずつとお屋敷の中を進んでいるのだが、真つ直ぐと続く廊下の終わりが全く見えない。というか、進んだ距離だけですら既に廊下がお屋敷の外見よりも長い。明らかに捻じ曲げられている。面倒だなあ……。はあ。

そもそも、わたしは内側でのんびりしようと思って思ってたのに。そうだというのに、なんかさつきからずつと表に出ている気がする。なんでき。

「……次は代わってやる」

「彩、何か言ったか？」

「愚痴」

ま、いいか。私だつて一応紫様に命じられてるし、いくら愚痴つても文句垂れても出来るだけはするよ。出来るだけはね。流石に何もしませんは気分が悪いから。……既に結構やつてる気がするのだが、まあ、そこはしようがない。うん。はあ。

そんなどうでもいいことを考えながら歩くこと十数分。進んだ距離を考えるともしかしたら迷いの竹林を抜けるんじゃないやなからうか、ふとそんなことが思い浮かんでいたら、先の見えない廊下に人影らしきものが見えてきた。あー、よかった。このまま延々

と何もないなんて嫌なこと考えずに済んだわ。

「遅かったわね。扉は全て封印したわ。もう姫様は連れ出せないでしょう?」

その姿を見て真つ先に兎だと思っていると、いきなりそんなことを言われた。……姫様? 誰だそれは。偽りの月の黒幕? ま、いいや。

紫様はとりあえず倒したらどうだ、なんて物騒なことを霊夢に提案している。それもそうねみたいなき感じに頷く霊夢もどうかと思うけど。私としては紫様の決定にとりあえず従っておくだけだ。そういうものだから。

私は黙って兎を見詰めていると、私達をジーツと観察して何故だか分からないけれど急にホツとした様子。

「なんだ、ただの妖怪か。そもそもここまで来れるはずがないし。あーあ、心配して損したわ」

こんなふざけてるように見えますが、一応幻想郷の大賢者なんて呼ばれる程度には凄いい妖怪なんです。それをただのつて言うのはあまりよくない。まあ、紫様は多分気にしないだろうし、私もどうでもいい。よくないのは藍だ。ほら、急に目付きが鋭くなつて若干殺意が漏れ出ちゃってるし! しかも、これでも押さえ込んでる方で、内心は沸騰していても何らおかしくなくさそうだ。はあ。

「貴女、何を心配していたのかしら? 偽りの月を浮かべて」

「偽りの月？ あー、地上の密室のことね。それはお師匠様のとっておきの秘術よ。貴女達に判るかしら？」

「鈴仙。そんな説明じゃ人間には判らないわ。それに、満月をなくす程度、とっておきでも何でもない」

「なんか面倒なことになってきたなあ、と漠然と思っていたら、兎の背後から赤と青が半分ずつ配色された奇抜な格好をした人間が現れた。うわ、何か新しいのが出た。……ん？ 人間？ あれって本当に人間かなあ？ いまいち人間っぽくない気がするけど、人間だとも感じる。けれど、妖怪かと言われればそれも違う。何だろう、この感じ。ま、いいや。どうでも。」

「赤十字って外の世界の病院のマークじゃなかったつけ、と帽子を見ながら思い返していると、紫様はその赤十字の帽子の人間を鋭く指差した。」

「霊夢、あれが黒幕よ。そんな匂いがするわ。さあ、この偽りの月を元に戻してもらいましようか！」

「そう？ ……んー」

「それはまだ早いわ。今この術を解くわけにはいかないの」

「というか、この人間が兎のお師匠様か。そりゃあ、いかにも黒幕っぽい。というか、よく考えれば偽りの月を浮かべた張本人じゃないか！ 黒幕だわ。なんかいまいち釈然

としないけれど、自ら出てきてくれたのならば手っ取り早い。探す手間が省けるから。

「鈴仙。荒事と狂気は貴女の仕事でしょう？　ここは任せたわよ」

「お任せください」

なんて思ったのに、黒幕はさっさと先の見えない廊下の奥に消えてしまった。あーあ、残念。

とりあえずさつきから首を傾げている霊夢は放っておき、私は隣に立つあまり近寄りたくない雰囲気を醸し出す藍を見遣る。

「ねえ、藍」

「何だ、彩」

「とりあえず落ち着いたら？」

「私は落ち着いている。これ以上なく冴え渡っているさ」

「……あつそう」

妖気を滾らせながら言う台詞じゃないでしょ、それ。まあ、確かに頭は冴え渡っているだろうけれど、それ以外考えてないなんてことはないだろうね？　ま、別にいいか。どうせ、紫様は当然のように藍と私を引っ張って目の前で邪魔をしている兎と戦うだろうから。

そんなことを話しているうちに、霊夢はお祓い棒を構えて目の前の兎とやり合う準備

が整ったらしい。紫様と藍は最初からなので、私もやらなきやいけないわけだ。はあ。「月の兎である私の眼を見て狂わずにいられるかしら？」

狂う、か。あんまりいい思い出はないな。

造作もないわ

うわ、危なっ！ 躲さなかったら眉間に直撃コースだったんですけど。なんて思いながら、私は平然と藍の背後に滑り込む。

「彩、自分で戦え。何度私を盾にすれば気が済むんだ？」

「無理無理。戦う相手を間違えてるって」

だから、そんな怖い声出さないでくださいよ。ここは手頃な安全地帯なんだから、使わないなんてもつたいたい。というか、使わないとやってられない。どうせちよつとくらいい盾にしたところで、藍にかかる負荷は大して変わらないでしょう？ 弾数がちよつと増えたところで問題なく防げるはずだ。多分ね。

まあ、藍が怒りに身を任せて前に飛び出さないのはいいことだ。少なくとも、今のところは。正直、いつ飛び出してもおかしくないと思う。私が藍を好き勝手盾に出来る時間もありなさそうだ。命じられでもすれば喜々として飛び出すだろうし、あと一つや二つ何かあれば独断で出ていくだろう。それを紫様が止めるなら止まるだろうけれど、きつと止めないだろうなあ……。はあ。

藍の背後からヒョイと顔を出すと、即座に妖力弾が飛んでくるのですぐに引つ込め

る。ピンと伸ばされた人差し指から放たれる妖力弾は、照準は気持ち悪いほど正確で、弾速はむかつくくらい高速。さらには躲すとその先に妖力弾が置かれてるなんてこともざらなので、先読みされてる嫌な気分になる。結界？ 私が張つても貫かれてお終いだから。妖力の無駄。はあ。

「……………ええ……………」

またどれか出てくるだろうとは思っていたけれど、無関心なのがでてきちゃったよ。こんな状況になつたら代われとか言えないじゃん。もしも言つたら、この身体は棒立ちして分かりやすいになるだけだ。あの兎の撃つ妖力弾で余程のことにはならなさそうだし。それを見越しての選択だとしたら、内側で行われているであろう選出は結構厭らしいぞ……………」

まあ、いいや。たとえ基本は棒立ちでも、動いてほしいと頼めば動いてくれる方だ。身勝手に動かれるよりは遥かにマシだろう。うん。言い換えればわざわざ口に出さないと伝わらないってことだけど、それはもう大体そんなものな気がしてきた。

「ねえ、紫。私もいい加減本格的に出たいのだけど」

「そうねえ……………。黒幕も目の前だし、いいんじゃないかしら」

前から聞こえてきた霊夢と紫様の会話に思わず頭を抱えたくなりながら、ちよつと固い感じがする身体を力任せに右に向ける。隣のは留まろうとも動こうともしていない

から、最悪私一つでもこの身体を無理矢理動かせそうだ。結構動きづらいけど。

「右に出るよ——ん」

そう呟きながら、私は藍の背後から右に跳ぶ。当然のように着地点に飛んでくる妖力弾を、地面と水平に浮かべて張った結界に着地して回避。一呼吸おいてから結界を消し、静かに着地する。

……ん？　なんか兎の目に若干の戸惑いが見えるんだけど。どうしたんだろう？

「宝具『陰陽鬼神玉』」

なんて考えていたら、霊夢が宣言したスペルカードによって兎が空色に輝く靈力に照らされてよく見えなくなってしまった。うわ、あの陰陽玉って全部退魔の靈力なの？

あんなの喰らったら痛いじゃ済まなさそうなんですけど。

けれど、あの陰陽玉がいくら強力であろうと、靈力によって廊下一杯に巨大化していようと、その形状が球体である以上、四隅には空きが出来てしまう。ほら、右下に跳んで躲されたよ。まあ、そのことを既に分かっていたかのように靈力弾を右下へばら撒いていたが、これを兎は妖力弾で難なく撃ち落としていく。

「やっぱり、地上って大したことないわね」

あ、まずい。

「紫様！」

「あら、藍ったら。式神『八雲藍』。さあ、いつてらっしやい」

なんて思ったところで既に藍は飛び出し、それに便乗するように紫様がスキマを開いて兎の前に送り出した。……やっぱり止めないじゃないか。はあ。

藍が放つ弾幕は点や線どころか面ですらない、空間を埋め尽くす膨大な密度の弾幕。それでいて複雑怪奇でありながら規則性を嫌ってほど押し付けてくる幾何学模様を描いている。まあ、こちらは飽くまで命名決闘法案のスペルカード。不可能弾幕はナンセンス。

「その程度の弾幕、造作もないわ」

そんな兎の言葉が聞こえてきたと思ったら、突然藍がぐらついた。あの藍が、だ。何かされた？ 何をされた？ そんな心配を抱いていると、藍の放つ弾幕に不規則性が滲み始め、美しさが損なわていく。華美の押し付けがスペルカードなのだから、これはスペルカードと呼んでいいのだろうか？ ……別にいいか。あつちは命名決闘法案をするつもりがないだろうし。というか、多分相手は知らない。

ちよつと一筋縄ではいかならしい。だからと言って、私に出来ることなどないのだ。はあ。

援護をしなさい

「紫様のところに行くよ——ん」

なんかふらついてる藍のことは確かに心配だけど、それよりも私の安全の方が重要だ。そう思いながら、私は隣のと共に走り出す。お互いに動作を合わせようとしているようにちよつとちぐはぐな感じがするが、その場でコケるほどじゃない。

紫様の後ろで立ち止まると、紫様が振り返った。止まるのがちよつとズレてつんのめり、コケそうになったところは見逃してほしい。

「どうしたの？」

「大丈夫でしょうか？」

「私が？ 霊夢が？ それとも藍がかしら？」

「分かかって訊かないでください」

わざとらしく笑いながら私に問う紫様をジロリと睨みつける。威圧感皆無だろうけれど。

「どうやら、あの月の兎の紅い眼は狂気を操る力があるようね。藍はそれをもろに受けちゃったみたい」

「……つまり?」

「問題ないってことよ」

「どこがよ、どこが。見るからにフラフラじゃない」

霊夢が指摘しているように足元が覚束ないのも気になるけど、私としては弾幕がえらく不規則な方が気になるのだ。あそこまで来てしまうと、スペルカードとしてはむしろ不規則性を前面に出した方がいい気さえしてくる。

さて、そろそろ藍のスペルカードが時間切れだ。藍が自力で戻ってこれるかどうかは分からないけれど、おそらく霊夢は時間切れと同時に飛び出す。猛禽類のような鋭い目を見れば誰だつて分かる。あれは狩る者の目だ。きっと勝利をもぎ取ってくるだろう。博麗の巫女ですし。

まあ、何を考えようと私なんかには出来ることはないだろう。紫様の背後で待つのが私の出来ることだ。うん。そう思つて無関心を決め込むために壁に顔を向けて木目の一点を見詰めることにしたのだが、そんな私の肩に何故か紫様の手が乗せられる。

「彩。貴女も行つて霊夢の援護をしなさい」

「……本気で言ってるんですか?」

「今までに私が嘘や冗談を言ったことがあつたかしら」

「腐るほど」

本心で答えたら何とも言えない目で見下ろされた。……あ、無関心決め込むって思ってたのに反応しちやつたじゃないか。これだから私は中途半端なんだ。はあ。

まあ、命じられてしまったのだ。しようがない。話を聞いていたらしい霊夢の視線が私に突き刺さる。そんな目で見ないでほしい。今の私は一応味方なんだから、狩る対象じゃないよ。

「あんたも来るの？ 足引つ張るんじゃないわよ」

「むしろ引つ張ってくれないと困る。さ、行くよ——ん」

ここで時間切れ。さて、嫌々ながら出陣としましょうか。はあ。

素早く藍の真横を通り抜けて前線へと飛び出した霊夢の遥か後ろ、私はとりあえず藍の肩を支える。なに、戦うだけが援護じゃないさ。こうして戦後処理をすることだって立派な援護だよ。多分。

「大丈夫かな？ おーい」

「……大丈夫だ、とは言えんな。悪い酒に酔わされたような気分だ。よく見えんし、聞こえん。お前こそ大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよ。当たり前前でしょう？」

そう言つて苦笑いを浮かべていると、すぐ隣にスキマが開いた。意図を察し、私はふらつく藍をスキマに押し込む。これで戦後処理は終了かあ。次は霊夢の援護ねえ……。

無理があるでしょ。

「何が出来る?」

そんな言葉が思わず漏れ出る。出したところで意味なんざないだろうが。きつと誰も答えてくれやない。

「出来ることをしましょうか——出るんかい。答えるんかい」

唐突に新たに出てきたのに思わず突っこみながら、兎の零れ弾を横に跳んで躲す。着地がうまくいかず、しかし四肢を床に立てて対処。人型になると猫のように四足歩行はしにくいから、すぐに立ち上がるけれど。その際に迫る妖力弾は結界を張って防御。そのまま貫かれるのでは、と思っただけれど、案外ひびが入っただけでどうにかなった。

「とりあえず、霊夢の元まで——そうですね」

結界を消すと同時に走り出し、霊夢の背後に滑り込む。ちよつとでいいから盾になってほしい。

「何しに来たのよ!」

「そりゃあ、一応援護だよ。命令だし」

「じゃあ、魔理沙の時みたいにドカンと出来ない? あれなら楽でいいじゃない」

「無理ですね——そんな妖力はない」

「役立たずね!」

そう言われましても。あれは飽くまで藍から妖力を譲渡してもらった結果でしてね。私一つや二つでどうにか出来る規模じゃないんです。それに、そんなもの撃つたら火災炎上待ったなしだ。悪いけれど諦めてほしい。

じゃあ、代わりに何が出来るかな？ 出来ることなんてない私に、何か出来ることがあるだろうか。いや、ない。出来ることなんて最初からなかったんだよ！ ……自分で言つて悲しくなってきた。はあ。

「ありますよ」

なんて思っていたのに、隣のはあると断言する。さつきから私に何を期待しているんだ。

瞬間、右手に何かを感じた。……え、この妖術使うの？ もしかしたら埃拭きに使えるかもくらいしかならないこれを？ ……まあ、いい。私よりも隣のが真面目に考えた答えの方が信用出来る。

「いいの？——問題ありませんよ——あ、そう。重符『平身低頭・参式』」

宣言と共に妖術を発動する。瞬間。私は膝から崩れ落ちた。そこら中に飛んでいた弾幕も一齐に軌道を下に変え、床に墜落していく。両手を使って立ち上がろうとするけれど、身体が嫌に重苦しい。

「ぐ……っ!? 何よ、これ……っ?」

しかし、こんな無様な姿をさらしているのは私だけじゃない。向かい側にいる兎も、両肘両膝を床に押し付けて頭が床すれすれまで落ちてている。

そりやそりや。ここら一体の重力を思い切り増やしたんだから。加重力の妖術。私一つだと埃が舞わなくなつて便利かもしれない程度だが、ここまで面倒な重力になるとはなあ……。

「急にどうしたのよ、あんたら。ま、いいわ!」

そう言つて、何故か霊夢は何も変わらず兎に突撃していく。まさか、影響がない？ 具体的に何倍になつたか知らないけれど、何の問題もなく動けるなんてどんな人間だよ。

「霊夢は最初から重力から解放されているようですから——なんじゃそりや——空を飛ぶ不思議な巫女は伊達じゃない、ということですよ」

まあ、いい。霊夢を巻き込まないならそれで。私に課された命令は霊夢の援護だから。

ただ、まあ、一つくらい言わせてもらおうか。藍のためにも。

「やつぱり、月つて大したことないわね」

そう言つて嗤う。月が狂気に支配されているのなら、地上は重力に支配されている。逃れられない時点で、どの口が言う？

私の言葉を聞かされた兎の悔しそうに歪んでいるであろう顔すら見ることが出来ない。何故なら、既に顔が床に沈んでいる。そのままデスマスクでも作りたいたいのかい？
なあんてね。

後はお任せですよ、霊夢。ここは貴女の独壇場だ。そう思いながら、早く勝負が決まることを願っていた。

悪く思うなよ

それからすぐ、重力に捕らわれた兎は重力から解放されている霊夢に成す術なく叩き潰されることとなった。弱い者いじめでもしてる気分にもなったのか、ほんの一瞬だけ霊夢の表情が暗くなった気がしたが、それは私が気にすることじゃない。私は無様に地に伏しているが、紫様の命じた通り援護はした。それでも私が何か言っているのなら、楽に済んでよかったじゃないか、とだけ。

「ま、こんなもんね」

「終わりましたか？——ならさっさと解きたいんだけど。重いから」

「そうね、もう終わったわ。何してたか知らないけど、解きたきや解いていいわよ」

そう言われ、私はすぐさま加重力の妖術を解除した。鉛の如き重さだと思っていた身体が羽根のように軽くなる。まあ、急激な変化でそう感じているだけだが。すぐに元の重力に慣れるだろう。

私はブーツとしている隣のを引きずるようにしてでも無理矢理立ち上がり、ふーっと肺に溜まっていた息を吐く。

「あのさー——何でしょう？——私、戻っていい？——というか戻る。半獣、魔理沙、そし

て兎。三つだ。私、三連戦。疲れた。休みたい——構いませんよ。ちようど紫様と話したいことがありますので——そりゃよかった」

「まだ終わって、ないッ！」

ようやく休める、と思つた矢先。床から這い上がった兎が叫ぶ声が響く。思わず目を向けてみればその姿は酷くポロポロなのだが、その狂気を孕んだ紅く瞬く瞳が私を射抜く。

……何？ そんなに睨まないでよ。さつさと負けを認めて道を開けてほしい。とうか認めろ。面倒臭い。はあ。

「あー、命名決闘法案を知らないのか。道理で往生際が悪い——そのようですね。仕方がありません。ここで決めてしましましょう——ん」

「ッ!? な、なんで」

「脳天強打でいいでしょ——この様相なら十分でしょう」

なんだか目を見開いている兎の頭上に小さな氷の粒を妖術を用いて生む。続けざまに二つの妖力が加えられ、米粒のような大きさだった氷が人間一人丸ごと収まる程度の大きさまで膨れ上がる。一応、氷塊が頭に突き刺さって大惨事なんてことは避けるために、あまり尖らないようにはした。まあ、それでも重量は相当だろう。

「悪く思うなよ」

そのまま落下。兎の頭に直撃し、そのまま倒れ伏した。用済みとなった氷塊はすぐに溶かし、そして霧散させる。じめっぽくなつてしまったが、そこは許してほしい。……あーあ、終わったと思つたのに臨時で追加ですか。勝手にやっただけだけどき。はあ。私は隣の表を任せて内側に戻り、ついでにもう一つ無関心なのを内側に引つ張り込む。表には一つでいい。そつちの方が楽でしょう？

『あー、疲れた』

『おう、お疲れさん』

内側に戻ると、肩をポンと叩かれ労われた。本当だよ。私はもう出ないぞ。今、決めた。

そんな馬鹿みたいな決意を抱きながら、私は表の様子を見上げる。霊夢は手を団扇のようにして自身を仰ぎ、紫様と藍が表のに歩み寄つてきた。どうやら気は確からしい藍が心配そうな顔で口を開いた。

「大丈夫か、彩？」

「ええ、特に問題はありませんよ」

「しかし、さつき確かに……」

「私は紫様に丁寧な保護されていますから」

え？ さつきの兎、私に何かしてたの？

藍をふらつかせたあの狂気？ 気付かな

かった……。

まあ、紫様に憑けられた式神はそういうものだ。私という存在を丁寧に強固に包み込んでいる。そうして私を守っている。敵から。そして、私自身から。

とにかく、問題ないならそれでいい。ほら、紫様は既に先へ進みたがっているようだよ？

「霊夢。さっきのを追うわよ」

「さっきの？ ……んー、なんかなあ」

「その件で紫様。一つ尋ねておきたいことが」

「簡潔にして頂戴」

「分かりました。では、簡潔に。偽りの月を浮かべた張本人と、偽りの月を浮かべることになった原因、紫様はどちらが異変の黒幕とお考えですか？」

表のはそう問うた。張本人と原因？ 張本人はさっきの人間っぽいのだよね。しかし、原因？ 誰かいたっけ？

しかし、表のの言葉に紫様はニヤリを笑う。どうやら、意味を悟ったらしい。

「そうね、先を急ぎ過ぎてみたい。霊夢、さっきの月の兎が漏らしてた姫様とやらに会いに行きましょう」

「……ええ、そうね。奥で守っているのなら、さっきのも出てくるしちょうどいいわ」

あー、姫様！　　そういえば、そんなことも言つてたね。何か気になつてたのにすっかり忘れてた。連れ出せないでしょう、とか言つてたから、会いに行けばさっきの人間っぽいのも紫様達を姫様に会わせないために出てこざるを得ないわけか。一挙兩得。一石二鳥。

「彩、さっきの問いの答えならどちらもよ。二兎追うものは二兎とも得るの」

「そうですか。よく分かりました」

流石紫様は欲張りだなあ、と思つていると、霊夢が一つの扉に手を当てて指先でチョイチョイと何か施している。すると、パキンと何かが壊れるような音がした。

「この先にいるわね。さ、行くわよ」

鍵開けかな？　泥棒かよ。

たまのお客様じゃない

扉を抜けた先でもまだまだ長つたらしい廊下が続く。けれど、表のはあまり気にすることなく紫様に付いていつているらしい。

「藍、調子はどうですか？」

「紫様の手を煩わせてしまったが、もう大丈夫だ」

私は内側で両手両足を投げ出して横になりながら、表のと藍がそんな会話をしているのを聞き流す。藍は本調子らしいね。へー、よかったよかった。

『ま、そんなのもう関係ないですけどね』

『どうした？　ぐでつと横に伸びやがって』

『よい子はおやすみの時間なのさ』

『こんな深夜に起きてる俺は悪い子だ、って言いてーのか？』

『だから休んでる。悪いと退治されちゃうのさ』

『退治されていないから僕はいいい子だねっ！』

『んなこと言ってるねえで働け。やる時はな』

『はー？　誰がババアなんぞの言いなりになるかっての』

『もうやらないから休むんだ。疲れてるのよ』

なんて他愛のことを言い合い、そして軽く笑い合う。こんな話、意味なんて最初からありやしない。重要なのはここにいること。内側まで制限されたら流石にもうやつてられない。こんな日を跨いだ徹夜の異変解決に付き合わされる身にもなつてほしい。疲れた。はあ。

このままゴロゴロ転がってようかなあ、なんてことを考えていると、表の視界の奥でキラリと何かが光るのが見えた。と、思った時には表のが藍から一步距離を取った。そして、表のと藍の間に出来た隙間に何かが通り抜けていき、それと一緒に弦を激しく弾いたような音が響く。あれつて動かなければ直撃コースだったわけか。うわ、あつぶなあ……。

『……矢か』

『矢あ？ それはまた微妙な武器を……』

具体的に何が通り抜けたかまでいちいち気にしていなかったけれど、他のは何かちやんと見ていたらしい。矢。つまり、相手は弓か。矢筒から矢を取り出し、弓に番え、狙いを澄ませ、そして放つ。ハッキリ言つて、始動から攻撃までが酷く遅い武器だ。しかも弾数制限あり。さらには熟練度によつて威力精度共に大きな差が生まれてしまい、素人が扱うには厳しかったはず。熟練者は矢を山なりに飛ばし相手を射貫くことも可能

ではあるらしいが、だから何だと言った風である。

しかし、先程の矢は相当速かった。さっきの兎の妖力弾なんか目じやないくらい。というか、弦を弾く音とほぼ同時に矢が横切ったあたり、音速とほぼ同速。無茶苦茶だ。

……大丈夫かなあ、表の。ま、いいや。

「全く……。こつちに来させちゃ駄目だ、って言ってるのに……」

あ、出た。赤と青の奇抜な服を着ているから、さっきの人間っぽい。つまり、偽りの月の異変を引き起こした張本人だ。彼女の身長よりも大きな弓を持っているから、さっきの矢は彼女の攻撃ってことでもいいのかな？

表のはチラリと藍の様子を窺ってから前を向き、人間っぽいのを真っ直ぐと見遣っている。ちなみに、藍は既にやる気十分なようで、妖力を滾らせていた。怒気は感じないので、さっきみたいにはならないと思いたい。

「霊夢。こいつが言っている意味、分かるかしら？」

「ええ、こつちが正解ってことでしょ」

前にいる二人は随分と余裕そうである。まあ、音速程度でビビるような二人じゃないか。というか、既に突撃してるし。

さて、私は内側からのんびりと見させてもらおうとしましょうか。

『残り何本見える？』

『十二』

『つてことは全部で十三本？ 少くない？』

『一人一本で事足りるってことじゃねーの？ あのアカアオ、馬鹿にしてんだろ』

『鉛筆みたい』

何て話している間に、矢が二本同時に放たれた。一本は霊夢、もう一本は紫様へ。しかし、霊夢はお祓い棒を横薙ぎに振るって叩き落とし、紫様はスキマを開いて明後日の方向へと飛ばしてしまう。藍と表のは二人の後に付いているけれど、この様子では前の二人で事が済んでしまいそうだ。それはよかった。

こちらが距離を詰めた分だけ相手は後退し、距離を保ちながら次の矢を弓に番える。今度は一本か、と思った時には矢が放たれ、あんなことを思った矢先なのに藍の眉間を狙われていたが、藍が撃った一発の妖力弾に真つすぐ撃ち抜かれて破壊された。真正面から立ち向かえるのがちよつとだけ羨ましいと思ひ、そう思ってしまった自分を嘲笑う。……何言つてんだか。はあ。

何とも言えない気分になりながら、弓に番えられた三本の矢を見遣る。三本の矢つて揃うと強いんだっけ？ ……揃わない方がいいって。三本ですら強いのに、九本揃った嫌になる。はあ。

「永琳」

次の攻撃が来る、と思つたらまた別の誰かの声でその動きが止まる。その様子に霊夢と紫様も突撃を止め、声のした方を睨んでいる。……えーつと、一体どなたでしょうか？

その答えはすぐに出た。

「つ、姫様」

「たまのお客様じゃない。大切に扱わなくちゃいけないでしょう？」

奥から現れたのは、おしとやかな雰囲気を感じる黒髪の女性であつた。なんかまた人間っぽいような違うような妙な感じだけど、あれが偽りの月の原因の姫様？

……うわあお、本当に二兎追うものは二兎とも得ちやつたよ。

ちよつと付き合つてあげるわ

『話せば分かつてくれそうじゃない?』

『どうだか』

確かにあのおしとやかという第一印象からは、心優しいお姫様とでも付けてやりたくなる。けれど、私が真つ先に思い当たつたのは世間知らず、浮世離れといった悪印象である。よく言えば箱入り娘、さらに悪く言えば非常識。何でだろうなあ……。人間の汚い面を見過ぎたからか? ま、いいや。どうでも。

そんな姫様は口元を袖で隠しながら微笑んでいるのだが、薄つすらと開かれた目がやけに鬱陶しい。細部に至るまで不躰に観察されている気分だ。たかだ化け猫に対して不躰などと自意識過剰かもしれないが……。はあ。

「遂にお出ましね。ちようどいいわ。二人まとめて叩きのめしてさつさと帰るわよ」

「そうね。手早く済ませましょう?」

「せつかちねえ。焦らなくてもいいのに」

黒幕二人を目の前にやる気マシマシな霊夢と紫様。それに対して姫様は鈴を転がすようにカラカラと笑っている。随分と余裕そうなことで。しかもそのまま目を瞑って

しまった。その隙に攻撃されて平気だとしても言いたいのだろうか？ ……いや、隣に守ってくれるであろうものがあるからかなあ。ま、どうでもいいか。

十秒いかないくらいだろう。姫様はゆっくりと瞼を開いた。その瞳は楽しいことでも閃いた子供のように爛々と輝いているように見える。

「……うん、そうねえ。最近はずーつと永琳が屋敷から出させてくれなくてつまらなかつたの。その、命名決闘法案？ だったかしら。外で娯楽としてはやっているのでしょうか？ 面白そうじゃない。ちよつと付き合つてあげるわ」

「姫様？」

「永琳は横で黙つて見てなさい。せつかく楽しそうなものを見つけたのに、水を差されたくないわ」

急に何言いだすんだ、この姫様。幻想郷に命名決闘法案が発布されたのは本当に最近の話だぞ。私の中の世間知らずの印象が崩れ去つたんですけど。……何か引つ掛かるけれど、まあいいや。気にすることでもなからう。

永琳と呼ばれた人間っぽいのを下がらせ、姫様は両腕を大きく広げて言い放つ。

「スペルカード？ は五つにしましょう。多いほうが楽しめそうなもの。……ん？ 被弾してもいい数も決めなきゃいけないわね。数合わせでこれも五つにしましょう」

そう言つて姫様がルールを決めてしまった。そんな随分余裕そうな態度が癪にでも

触ったのか、紫様の表情があまり芳しくない気がする。しかし、あちらに持ち出されたのは紫様が発布した命名決闘法案である。ここで乗らないのはあまりよろしくないだろう。多分。

「随分暇そうね。こつちはそんな暇じゃないのに……。霊夢、早急に片付けるわよ」

「そうね。黒幕を懲らしめられるなら何でもいいわ」

「彩、準備はいいか？」

「あまり。ですが、やれるだけのことはしましょう」

その答えを聞き、姫様はこれまた嬉しそうに笑う。そんなに遊びたいのか。……まあ、別にいいや。霊夢と紫様ならどうにでもなるだろうし、勝負は表のに任せてしまおうわけです、私には関係ないだろう。

「これに私が勝てば貴女達に何かしらを要求出来るのでしょうか？」

「考えるだけ無駄よ。霊夢には誰も敵わないわ」

随分な自信だ。まあ、私も博麗の巫女である霊夢が負ける姿はいまいち想像しにくい。

紫様の言葉を受けた姫様はわずかに頬を膨らませたが、すぐに怒りを話捨てたかのようになんとも微笑む。

「本当にせつかちねえ。私が勝ったらその世にも珍しい九心猫を戴くわ。ちようど兎

じゃない新しい愛玩動物が欲しかったところなのよ。九つの人格で須臾を超越した存在。無限の過去の中でも一つ輝く記憶になると思うのよ」

「……何ですって?」

あれ。なんか急に関係が出来たんですけど。なんでや。

負けたら死ぬ

「ふふっ。見せてあげるわ。私からの美しき難題を！ 難題『龍の頸の玉——五色の弾丸——』」

私は内側で姫様が振るう目が痛くなるほど豪華絢爛なスペルカードを眺める。赤黄緑青紫の妖力弾とレーザーが所狭しと降り注ぐ。あんなのを避けるだなんて、私はやりたくないね。出来る出来ないの問題じゃない。はあ。

なんてことを考えていたら、表のは光を避けて陰に入った。無論、都合のいい壁なんでもない。そこにあるのは妖気を纏う九つの尻尾である。

「少し失礼しますね」

「彩、また私を盾にするのか!? そんな余裕はないぞ！ お前も前に出て戦え！」

「そう言われましても、今の私の出来る最善は戦わないことですから」

全くもつてその通り。撃つたところで雀の涙。むしろ、撃つ暇があつたら被弾する。表のは弾幕を避け続ける必要がある。そして、被弾しない方法は盾に籠ること、と。

『負けたら向こうに飼われるってさー。どう思う？』

さて、表のが頑張っているけれど、内側ではちよつとお話をしようか。何、別に大切

なことでもない。どう転ぼうと、転がろうと、関係ない話。

『構わん』

『……ん』

一つはボソリと呟き、もう一つは生返事。真つ先に返事をした二つはどちらでも構わない様子。知ってた。

『どっちだろうと関係ねーな。が！ 負けんのはぜつてー嫌だね！』

一つは勝敗が関わらなければどちらでも構わないらしいが、この条件なら紫様のほうを選ぶということでもいいでしょう。

『ゆかりんとどっちのほうが楽しいかなー？ 僕は楽しいほうがいいんだけど』

一つはどちらか決めかねている様子。まあ、先のこととは分からないからね。けれど、まあ、別にどっちに転んでもどちらにせよ無邪気に楽しんでそうである。

『俺は拾われた身だしなあ。勝手に出て行くのは悪いんじゃないか？』

一つは紫様を選んだ。確かに、死に際の私は紫様に命を拾われた。式神を憑けた。それは私だつて感謝している。一応。

『んー、帰る場所が度々変わるのはあんまり……』

一つは紫様を選んだということでもいいだろう。まあ、昔はその日暮らしだったからねえ。……昔のことはあまり思い返したくないな。

『私は今のままがいいです。ペットよりも式神である方が自由ですから』

一つは紫様を選んだ。家に閉じ込められたら困るか。犬は外に連れ歩くのに、どうしても猫は外に出さないんだろうね？

さて、表のに聞く余裕はないからこれで大体揃ったね。まあ、姫様よりも紫様のほうがいいらしい。別に構わないが。

『おいおい、待て待て』

『ん？ どうかした？』

『どうかした、じゃねえよ。まだ言ってるねえじゃねえか。訊くだけ訊いと言って言わねえのかよ』

『あー、ごめんごめん。私はどうでもいいよ。ペットでも、式神でも、大して変わらないだろうから』

どちらにせよ生きている。賽がいくら投げられようと、生きてさえいれば何度だろうと投げられる。ついでに言えば、愛玩動物は暇そうだけど、式神は仕事が割と面倒。どっちもどっち。

そう考えて答えたのだが、何故かため息を吐かれてしまった。なんでき。

『……あー、気付いてないかもしれないから言っておくが』

『まだあるの？』

『紫様から離れるってことは、式神を外されるだろうから大分変わっちゃうぞ』

……はい？　今、何と言いました？　……式神を外される？　つまり、あの頃に戻ることか。戻されるのか。待て。嫌だ。止める。ふざけるな。……あの頃が瞬間的に脳裏に流れていく。嫌な記憶だ。思い返したくない記憶。記憶つてのは厄介だ。なかつたことに出来ないのだから。

『剥がされんなら別にいいじゃねーか。あん時みてーに強くなれんדר？』

『えー!?　皆消えちゃうのやだ!　痛いし苦しいし!』

『……ふん』

『あの頃、ですか……。あまり戻りたくないですね』

周囲で何か喋っている気がするが、耳の奥がキーキー甲高い音がしてよく聞こえない。ふと、ありもしない中身をぶちまけたくなる感覚がした。思わず口元を押さえるが、混み上がってくるものは当然ない。ただただ気持ち悪い。何でもいいから吐き出せばまだ楽になれたかもしれないのに、ここではそんなことも出来ない。

一分、十分、あるいは数秒か。肩を大きく揺さぶられ、私はその手のほうへ顔を向けた。揺れ動く焦点の合わない目では何がなんだかよく見えなかつたが、徐々に焦点が合ってきた。それと共に耳鳴りと吐き気が大分収まってくる。

『おい、大丈夫か?』

『……全然大丈夫じゃない。あーあ、負けられない理由が出来ちゃったじゃないか。はあ』

私は思わず頭を抱える。ここで負けたら死ぬんじゃないか？ ……何だ、いつものことだった。だから何だとも思う私もあるけれど、別に好き好んで死にたいわけじゃないから。

「おい！ いつまでそこにいるつもりだ！」

「私一つではいつまでも、としか」

「情けない！ 彩、お前それでも紫様の式か!？」

「はい。これでも紫様の式ですよ」

なんか表のも大変なことになってるし。藍が滅茶苦茶苛立ってる。目の前のスペルカードの対処に手一杯で余裕がないのだろう。はあ。

『……とりあえず、どれか表のの手伝いに出てって』

とりあえず死ぬのは何となく嫌だという消極的理由から、私は内側に一声上げた。

……え、私？ 休むよ。休ませてほしい。はあ。

私は弾のお客様

一つ、二つ、少し遅れて三つと表に飛び出していくのを見遣り、思わずため息を吐く。大丈夫かなあ？　ちゃんと動けるかなあ？　……多分、無理でしょう。けれど、ただの一尾の化け猫ではどうにも出来ないことも理解している。

それなら他人任せでいいじゃない、と囁く声でした。私はそうしたいけれど、そうはいかないんだよなあ。非常に残念ながら、そうするとその他人が押し潰れてしまう。その結果、負けて姫様のペット直行待ったなしだ。死ぬ。はあ。

「悪い、待たせた——ふん——っしや——！——おや、三つも来ましたか……」
「どうやら一つじゃなくなつたようだな。ならば早く行け！」

「下らん——うおっ!？」

藍の言葉に碌に返事もせず、一つが先走つていく。しかし、三つの反応の遅れはあまりにも致命的で、右脚がつのめつて前のめりに倒れかけてしまう。が、すぐさま左脚を前に出して転倒だけは回避した。咄嗟の反応つてのは意外と噛み合うものだ。あー、危ない危ない。

視界に映るのは降り注ぐ青白いレーザーと翡翠色の星形弾幕。藍の後ろにいる間に、

姫様のスペルカードは別のものへと移り変わってついでにいたらしい。これ、何枚目だ？
ま、いいや。終わる時には終わる。

「闇雲に駆けても被弾するだけだぞ?!——裂く——んで、近付いてぶちかませばいいだけだろ?——それはいいですが、この数をどう捌きましようか……」

両手の爪を伸ばしつつ真つ直ぐと駆け抜けながらの四つの会話。幾重にも掛けられているであろう身体強化の妖術でとんでもない速度になっているのだが、目の前にレーザーが落ちてきそうだと判断した瞬間その手前スレスレで急停止して別の方向へ走り出し、今度は星型妖力弾がぶつかるともかく急停止して走り出すの繰り返し。被弾していないだけマシンなのだが、急停止はともかく急発進がズレていて見ているこっちはヒヤヒヤする。

見上げた先には私達に向けて弾幕を放つ姫様の姿。一直線ならば二、三秒あれば届く距離。しかし、細かく左右に躲しながら駆け抜ける、なんて繊細な動作が出来ない。右に避けようとしたら大きく右に跳んでいくか派手にずっこけるのが目に見える。だからいちいち止まらなければならない。その分、近付くのが遅くなってしまう。

……ん? 今、何か飛んでたぞ。いや、気のせいじゃない。姫様の腕に何か被弾して弾ける。

「痛っ。……こんな弾、私は求めてないわ。貴女達が私に差し出すべきは私の御石の鉢

よっ。」

「私は弾のお客様だもの。一つと言わず、五つ貰いなさい」

「こんな見当違いな代物、こつちから願ひ下げよ」

さつきのは霊夢の霊力弾か。それに被弾したからか、姫様の弾幕の手が一度止まる。多少残留している妖力弾はあれど、ほぼがら空きだ。

「シツ——おい待て——好機と言えば好——だーっ！ 行くぞっ！」

そう思った時には既に一つ駆け出していた。なし崩し的に残りの三つも動き出し、ものの数秒で姫様の目の前へと到達する。両腕に込められた妖力が輝く。

「あら、早速こつちに来てくれたのかしら？」

「悪いが——ちげーよっ！ 爪符『超超超絶激烈連発爪波』！」

「違うの？ なら、次の難題を出しましょう。難題『火鼠の皮衣——焦れぬ心——』」

表のが両腕を振り下ろし、目の前の姫様は数多に広がる火炎を解き放つ。数百に分散した爪撃は炎に飲み込まれ、焼き尽くされて消えていく。むしろ、より燃え盛らせてしまったような気さえする。うへえ、熱そう……。

そのまま身体ごと焼かれてしまう前に表のは空中で後転しつつ大きく後退っていく。ついでに両腕から爪撃を放っていたが、全て焼き尽くされてしまつて残念ながら被弾させることが出来なかった。まさか炎を引き裂くなんて馬鹿なことをしようだなんて思

わないだろうな、とちよつぱり思ったが、流石にそんなことはなかつたらしい。よかつた。

それからも表のはめげずに爪撃を放つが、数を増やすために分散させただけあつて一つ一つが弱つちい。あの炎を切り抜けることが出来ない。さらに、いくつもの火炎球を避けるのはなかなか厳しい。細かい動作が出来ない。私が出ているよりマシだろうが、それでもかなり難しそうだ。はあ。

『……大丈夫かなあ』

『大丈夫よ、きつと』

そう言われても、不安なもの不安だ。負けられないからねえ。

さてさて、どうしたものやら。

正しい選択かは分からない

「だーっ！ あっつい！——当たらずとも熱は伝わりますから」

「いちいち騒がしいわね、あんた」

「うっせーコーハク！ どららららららあーっ！」

いや、どう考えても表ののほうがうるさいでしょうよ。滅茶苦茶騒いでるじゃん。叫んでるじゃん。

必死に両腕を振るって拡散する爪撃を放っているが、迫り来る炎に次々と焼き尽くされていく。焼け石に水どころか火に油って感じさえしてしまふのだが……。さらに言えば、火炎球に直接焼かれていなくとも、それが脇を通り抜けるだけで皮膚が焼け爛れそう。近くで同じ目に遭っているはずの霊夢が無事な理由を知りたいよ。はあ。

「実際たとえ火の中水の中、とはいかんよなあ——ふん」

「というか、さつき氷使ってたじゃない。それ使いなさいよ」

「んなもん出来るわきゃねーだろ！」

「はあ？ まさか、あの短時間で忘れたとか言わないわよね？」

「忘れてはいませんよ。ですが、覚えていると出来るは違うのです」

見れば何でも出来るわけじゃないんだよ、残念ながら。だからって、試したところで使い物になるかも分からないけどさ。努力は成功に繋がらないし、あつさりと言切つてくれる。少なくとも、私は駄目だ。塵が積もれただだのごみ。何も出来ない。

『あのスペルカードが終わり次第癒しましょう』

『いくらか赤く焼けてるわね……。どうして守ろうと思わないのかしら？』

そりゃあ、だだっ広く記憶して覚えるの、率先して矢面に立つの、過剰なほどの上昇志向の、敵を屠るのが揃つていて身を守るなんて考えが浮かぶとはあまり思えない。たとえ浮かんだとしても、そんなことより目の前の敵となるだろう。

まあ、そろそろスペルカードが終わるかな、と感じていたところでゆさゆさと肩を揺らされる。はいはい、どれですか？

『ねえねえ、僕も出てつていいかな？ いいよねっ？』

『よくない。待て。お願いだから』

『ケッチー！』

無邪気な提案は勝手に却下。今、私は生死の境目にいる。まあ、どちらが生でどちらが死か、あるいはどちらも生かどちらも死か、実際のところそんなもの分かりはしないけれど。ということ、残念ながら遊んでいる余裕がない。だから、そんなに頬を膨らませてむくれても覆しません。両手で頬を挟んで潰してやるが、放した途端すぐ膨らん

でいく。……そんなに不服か。はあ。

目の前で膨らむ頬を何度も潰して遊んでいると、一足早く表ののスペルカードが終了した。そしてすぐに姫様のスペルカードも終わる。どうやら、表のは被弾はしなかったらしいが、確かに皮膚の至るところが赤くなってしまうているようだ。軽度の火傷である。

なんて思っていれば有言実行、一つ表へと飛び出していった。

「まずは火傷を癒しましょう——ふん。そんなもの戦後処理で構わ——今すぐです！」

「あらあら、賑やかねえ。難題『燕の子安貝——永命線——』」

表のが身体に淡い光を巡らせていく最中、姫様は碌に間を置かずに次のスペルカードを宣言されてしまう。癒しが間に合わない。手を貸しているのは本人含めて三つかなあ？ 五つ揃えば間に合っただろうけれど、残念ながら協力的じゃない。この程度なら動けるだろうから。

突如、視界が白く染まる。目が慣れてくると、真つ白なレーザーが全方位に交錯していた。前後なら多少動けるようだが、上下左右には無理だ。腕を広げようものなら一本どころか二、三本被弾してしまう。この弾幕は当てるといふより、移動を阻害するためなのだろう。ほら、左右から嫌に目立つ真つ赤な妖力弾が迫ってきてる。

「下がるぞー——まだ癒し切れて——んなもん後でいーだろーが！」

あまり動きたがらないのを四つが引つ張るように無理矢理後ろへ下がりが、左右の妖力弾をなんとか躲かしている。まあ、動かれると癒しにくいもんねえ。

「もう火傷は治ったようですね——もうちつとで当たつちまうところだったじゃねーか！——それより怪我をしないでください」

とはいえ、どうにか火傷は癒し終えたらしい。まあ、こうして眺めている私としては被弾してたら藍がキレそうだから動いてほしかった。動きたくなかったのは分かるけれどさ。ま、正解なんてない。たとえいくら繰り返そうと、それが正しい選択かは分からない。

『これで大丈夫でしょう。痕にも残らないはずですよ』

『お疲れ』

『あー、うん。お疲れ様』

やることを終えてさっさと内側に戻ってきたのを私も軽く労っておく。まあ、わざわざ思ったことを口にする理由はない。口にしなければ伝わらないとは、こういうときばかりはいいことだ。はあ。

それにしても、これが賑やかだと本当に思えるのかい？ 見てる側は楽しいだろうけれど、やってる側は苦勞でいっぱいなんだよ。そりやそうだ。どんな悲劇も関係なければ喜劇に変わる。あらゆる不幸も笑い話だ。所詮、そんなもん。

『むーっ！ あーそーびーたーいー！』

『駄目』

私はそんな風に気楽に捉えられないよ。はあ。

結局、私はいつだって間違える。

「あら、この難題ももう時間切れ？ 三も五も大差ないわねえ」

姫様の放つスペルカードが終わりを迎えた。しかし、命名決闘法案はまだ終わったわけではないらしい。つまり、さっきのはまだ四枚目だったということか。あれで最後だったらよかったのに。はあ。

しかし、姫様はここに来て最後のスペルカードの宣言をしない。このまま流れるように最後のスペルカードも宣言するものだと思っていたから、少しばかり意外だった。けれど、宣言しないならしないなりに弾幕を張るものだ。何もせずに、いやこちらの弾幕は避けているけれど、それでも何も手を出さずにいることに違和感を抱かずにはいられない。

「そのまま降参してくれないかしら。そうすれば楽なんだけど」

「道理で夜が明けないと思った」

霊夢のぼやきは聞こえていないらしく、姫様は冷ややかさを僅かににじませた目で紫様を見ながらそう呟いた。

「貴女の仕業ね？」

「それがどうかしたかしら？　貴女の後ろに浮かぶ本物の月を返せばそれで済むわよ」

後ろ？　そう言われて表の奥のほうを見遣つてみれば、ここから遙か向こう側には確かに月らしきものが見えている気がする。へー、あれが本物の月なんですか。秘術だか何だかできようにかしたつていう。何故隠しているかなんて知らんけど。というか、どうでもいい。

『月を挿げ替えて何がしたいんだろねえ』

『独り占めとか？　月見酒をパーツと楽しむために！』

『それは違うかなあ、流石に』

ふざけたことを抜かす口の両側を潰し、頬に溜まった空気をぶふーつと吐き出させる。ちよつと手を緩めればまた膨らんでしまうわけだが。風船か。

それはさておき。そんなことのために姫様を隠すのはどうかと思うし、あの兎は姫様を連れ出せないでしょう、つて言つてた。姫様は誰かから逃げている？　逃亡者か罪人か何かなのだらう。多分。まあ、そんな姫様が月見したいみたいない理由で独り占めするなんて悠長なことをしている余裕があるとは思えない。そんな余裕あつたら、さつさと隠れるべきだ。……ああ、隠れるための秘術か。あれ？　よく分からなくなつてきた。もういいや。どうでも。

私の思考がこんがらがつてきたのでいつも通り横に投げ捨てていると、姫様はさつき

までの冷たい目が嘘のように暖かに微笑んだ。

「まあ、いいわ。今は続きを楽しみましょう。これが最後の難題よ。難題『蓬莱の弾の枝

—虹色の弾幕—』

最後のスペルカードの宣言。名前の通り、七色の弾幕が広がる。相変わらず視界一杯を産め作る妖力弾で目が痛くなりそうだ。頑張れ、表の。もう一踏ん張りだよ。うん。そう思っていたら、何故か一つ表から内側に戻ってきた。あれ、いいの？ 尻尾が一つ減るとその分弱まるんだけど。

『どうしたの？』

『私はこういった類があまり得意ではありませんから。先程から他のと比べて出遅れがちでしたので』

『そっか。……あれ？』

荒事は苦手だもんなあ、と思っていたのだが、両手の中にいたはずのがない。……まさか。

「てーれってれー！——るっせえ！」

あーあ、出ちやった。表から聞こえた声を聞き、私は思わず頭を抱えてしまう。やらかした。

……まあ、いいや。遊びじゃないとは言ったし、あれで最後だし、変なことにはなら

ないでしょう。まあ、遊びに関して真剣であるし、最悪遊んでいても大丈夫かなあ？

命名決闘法案に対して真剣に取り組んでくれるなら、それはそれでいいかもしれない。けれど、やつぱり不安だ。色々。はあ。

そんな不安を払拭するように、表のは妖力弾が飛ばない場所へ次々と駆け抜けていく。真つ直ぐと進み、すぐに曲がつてさらに走り続けている。よくもまあ、あんな細い隙間を真つ直ぐ突き抜けようと思えるなあ。当たつてないからいいけど。……ただ、姫様から距離を取ろうとすると若干動きが鈍くなる点は気にしないでおう。

そんな表のはそうやって走り続けながらも騒がしい。

「何しに出て来てんだよー——遊びにつ！　ねえ、スペルカードやつてもいいよねっ？——構わん——いーんじゃね？——よーっし！——おい、勝手にや——彩虹『しゅわしゅわレインボー・よんっ』！」

宣言と共に身体から七色の弾幕が炭酸水の気泡のように湧き上がっていく。同色の妖力弾が触れ合つて混ざり合つたり、時には姫様の妖力弾を受けていくつかに割れて分かれたりで忙しい。

表のは姫様を見上げている。楽しそうに笑っている。実際、楽しいのだろう。面白いのだろう。そう言つてたし。

『……はあ』

『おや、どうかしましたか？』

『いや、何でもないよ。……何でもないさ』

けれど、私は楽しくない。長い付き合いだからか、そんな私の言葉を生暖かく笑われる。それこそ生まれた時からより長いとはいえ、内心が透かされるている気がするからなんか癪だ。

結局、私はいつだって間違える。

夜が明けていた

「あーあ、負けちゃったわね」

「……姫様」

「いいのよ、永琳。楽しめたもの」

終わった。あの状況から向こうに逆転されるなんてことはなく、当然のように姫様は敗北した。しかし、ふわりと下りてきた姫様の表情に悔しさが滲んだのは最初の極一瞬だけで、むしろ晴れやかで清々しい様相であった。

『あー、終わった終わった！　へっへー、俺の勝ちー！』

『ふん、当然だ』

『いや、見えてんのに被弾しかけたのいくつもあつただろ。やつばまだまだ修練が足りねえなあ……』

表に出て命名決闘法案をしていたのが戻ってくる。優越感に浸っていたり、無情に受け流していたり、反省点を見詰めていたり、それぞれ思うところがあつたりなかったりするようだ。

……ということは、だ。表にはなぜか無邪気なのが残されているわけで。何でよりに

もよつて……。ま、いいや。はあ。

床に降り立った姫様にズイと乗り出すように近寄った紫様は高圧的に振る舞う。まあ、一応勝ったわけだし多少はね。

「さあ、本物の月を返しなさい。敗者は敗者らしく勝者の要求に応えるものよ」

「最後の最後までせつかちねえ。そんなに生き急いでも仕方ないのに……」

「もう眠いからさっさと帰りたいんだけど」

「れむれむおねむ？　ねむねむれむれむ？　ねむれむ？」

「そうよ。だから、早くしてくれないかしら」

「ふふ。眠くなるのも当たり前ね」

「そう言つて姫様はくすくす笑う。」

「もう朝だもの」

……朝？　けど、紫様が夜を止めているはずで……。しかし、ここから見えた外は確かに朝日で照らされていて、誰がどう見ても夜が明けていた。

「貴女……っ」

「あんな半端な永遠、月と一緒に返させてもらつたわ」

齒軋りでもしそうなほど食い縛っている紫様に、姫様はくすくすと笑う。さつきと同じ笑いのはずなのに、何処か挑発的である。よく分からないけれど、紫様の妖術は姫様

に破られてしまったようだ。……まあ、ギリギリ今夜中に解決出来たと言えなくもないような気がしないでもないと思われるわけですし、そんなに悔しがらなくてもいいじゃないですか紫様。

『妙なところでプライド高えからなあ、紫様は』

『……確かに』

格好よく見せたいのだろうか。けれど、あのだらけ切った素顔を知っているとなあ……。はあ。

「ふふん、ふふん、ふふーん。ふふん、ふふん、ふふーん」

そんな睨み合う二人を碌に気にすることなく、表のは鼻歌と共にふらふらとそこら辺を歩き回っている。相変わらず呑気なものだ。

そして、ふと姫様の真横で立ち止まった。すると、姫様は紫様からすぐに目を離して表の顔に向けた。紫様と睨み合うものだと思っていたのでちよつと意外と言えれば意外。

「そういえば……。あ、その前に名前教えて！ 僕は彩」

「あら、私は蓬莱山輝夜よ。輝く夜と書いて、輝夜」

「じゃあ、てるるんだ！」

そう言った瞬間、視界の端に見えた永琳だったつけ？ 彼女の目が酷く冷たくなった

のを感じた。止めて。そんな目で見ないで。変なあだ名くらい許してあげて。……はあ。

そんな視線を気にすることもなく、と言うか気付かないままに表のは言葉が続ける。「どうして月を独り占めしたの？ 気になるー、つて言ってるのがあるから僕に教えてくれない？」

「独り占めだなんて可愛いわねえ。いいわ、教えてあげる。永琳」

そう言つて輝夜は永琳に目を向けて説明を促した。それを受けた永琳は実に嫌そうな表情を浮かべながら口を開いた。

「……満月の晩に月の使者が訪れると鈴仙が感じ取った。けれど、私達とその月の使者とが会うのは避けなくてはならなかったのよ。だから、私は月を入れ替えた。そうすれば、月の使者がここに辿り着くことは決してない。……貴女に説明したところで本当に分かるのかしら」

「ううん、分つかんない。けど、月から誰か来ようとしてたんでしょ？ それって出来なはずだよな？ えーつと、なんとかかかんとかと、なんちやらとかんちやらのどーちら……。んー、何だっけゆかりん？」

「博麗大結界と幻と実体の境界よ」

「そうそれ！」

よくもまあそんなこと覚えてるなあ、表の。私はいつだったか紫様に聞かされてはいたけれど、言われるまで忘れてたよ。

博麗大結界は、博麗の巫女と博麗神社の周辺によって、外の世界から幻想郷を隔離する巨大な結界。幻と実体の境界は、外の世界で幻となりつつあるものを幻想郷に引き入れる境界だったはずだ。なんか違う気がするけれど、大体そんな感じだろう。うん。

そんな表のと紫様の会話を聞かされた輝夜と永琳は目を見開いた。……何を驚いているんだろう。

「ふふ……。あーはっはっはっはっは！ なあんだ。じゃあ、最初から隠れる必要なんてなかったのね。はははっ！」

突然、輝夜が笑い出す。嬉しそうに、楽しそうに、馬鹿みたいに、笑っている。

よく分からないけれど、まあいいや。嬉しそうだし。済んだことだし。後腐れもなさそうだし。なら、それでいいじゃないか。

貴女の式神ですから。

夜空に偽りの月が浮かべられて夜を止めたあの異変は、人間の里では永夜異変と呼ばれている。つまり、人間達にとつては月なんかよりも明けない夜の方が深刻な問題だったわけだ。大きく目立つものに目が行って、その裏側に隠されたものとか、足元に転がった小さなものとか、そういうったものに目が行かなくなるようなもの。まあ、人間にとつては幻想郷が大半の妖怪が活性化される夜に支配される方が恐ろしかった、つてこと。

数日前、暇だったから阿求と会って話してみれば、永夜異変の原因と黒幕は不明なんだと。あまりにも不鮮明であり、謎が多過ぎて記録に残すのを躊躇うとか何とか。まさか、原因が全く別の異変の解決のためで、黒幕がああ紫様だなんて考えてもいなかっただろう。……いや、考えても除外したのかな？ まさかそんなはずがない、つて。まあ、この件に関しては紫様に口止めされているんで漏らしませんでした。はあ。

「……眩し」

そして今。私は真っ昼間から縁側でぐでーつと伸びていた。特別やることがあるわけではなく、外に出て動きたいわけでもなく、何もない時間を享受していた。だったら

他のと代わつてやればいい、とも思っているのだが、こういう時に限つて他のは表に出
てこない。出てくれば代わつてやるのに。……まあ、たまにはこの身体を休ませてやる
のも悪くはないでしょう。うん。

そうやつて寝そべっていると、キシキシと縁側が軋む音と振動を感じ取つた。誰かが
近づいてきているのだが、起き上がる気になれない。なので、そのまま近付いてくる誰
かに首を向けてみれば、だらしないくらい頬が緩んだ藍が見えた。

「彩、私はこれから橙と顔を合わせてくるが、何か伝えておきたいことなどがあつたら
言つてくれ。伝えておこう」

「いや、別に何もー。いつてらっしやーい」
「うむ。行つてくる」

そう言つて藍は弾むような足取りで出て行つた。嬉しそうですなあ。そりやそうか。
はあ。

もういつそのまま昼寝でもしようかしら、と思つたその時、目の前にコトリと湯呑
が置かれた。その湯呑を持つ手が伸びている先に目を向けてみれば、スキマが私を覗い
ていた。そして、そのスキマがスーツと開いていき、紫様が現れて私を見下ろしてくる。
……あの、眠ろうとした矢先に何か用でしょうか？ はあ。

「彩、ちよつといいかしら？」

「……まあ、構いませんよ」

微睡みに沈みかけていた意識を無理矢理浮上させながら、私はのっそりと身体を起こした。重ったるい瞼を持ち上げる気になれないまま紫様をぼんやりと見遣り、そのまま手元に置かれた湯呑を口に付ける。

「熱っ！」

沸騰寸前のお茶だった。口の中思いつ切り火傷したんですけど！ いくらなんでも猫に対してこの仕打ちは流石にどうかと思いますよ？ 思わず湯呑を投げ飛ばさなかつた私をどうか褒めてほしい。褒められるわけないけど。はあ。

すぐに口の中に指を入れてなけなしの癒しを掛けていると、にっこりと笑う紫様は私に言った。

「目は覚めたかしら？」

「……覚めましたよ。ええ、覚めましたとも。で、何の用ですか？」

多少の黒い感情を込めて睨み付けたが、紫様は何処吹く風である。はあ。

「一つ、尋ねてもいいかしら？」

「一つと言わず、いくつでも。答えられるだけ答えますよ」

貴女の式神ですから。

「なら、気が済むまでさせてもらおうわ。彩、私に隠し事はないかしら？」

「いくらでも。紫様が一体どれのことを指しているか、残念ながら私にはサツパリですが」

紫様が隠しているつもりの秘蔵の酒の場所？ 小耳に挟んだ藍の愚痴っていた内容？ 他のが突撃して壊したけどそれっぽく修繕した棚？ やることなくて爪で引っ掻いてボロボロにした畳？ 隠し事なんて、覚えているものから忘れていくものまで無数に存在する。数える気にはならないくらいたくさんだ。

そんなことを思いながら首を傾げる。まあ、紫様も私のこの答えくらい想定内だろう。大体そんなもんだから。だから、何についてか言ってくれらるだろう。

「あの時、貴女に輝夜が言ってたわね」

「何と？」

「須臾を超越した存在、と」

「……言ってみました？」

「というか、須臾って何だ。目玉焼きにかけるやつ？ ……ああ、あれは醤油か。なら違うか。」

「須臾は、千兆分の一、あるいは認識不可能なほど短い時間のことよ」

「へえ」

「それを超越する……。貴女、そんなこと出来たの？ それをすると、どうなるのかしら」

？」

説明されて、思い当たることはあつた。

けれど、思い出したくないことだ。

……二度と、御免だ。

「さあ」

だから、私は嘘を吐く。いつも通り、息を吐くように。

「そう。なら、たんなる妄言だったのかしら……」

「かもしれないね。あるいは、私が知らないだけで何かあつたのかも」
貴女の式神である以上、二度と起こらないことだから。

いつか、私を殺してね。

満月。先月と違って本物のはず。多分、そのはず。

「……………」

表のは屋根の上で腰を下ろし、満月をひたすら真つ直ぐと視線を逸らすことなく見上げてゐる。虫のさざめきもなく、微風すらなく、ただただ静かに時が流れていく。

『暇暇暇ーっ！ 僕もやりたーいっ！ きーもーだーめーしーっ！』

『るっせえ！ 駄々こねてんじやねーよ！』

『はいはい、静かに！ 紫様に留守番を命じられたんだから文句言わないの』

……ま、内側はこの様ですが。本当に騒がしい。ただ、そう騒ぎたくなるのも分からなくはない。本当、留守番って暇なんですよ。掃除は昼に済ませてしまつたようですし。

紫様は霊夢と藍を引き連れて肝試しに出掛けている。もう一度言おう。肝試しだ。再三言つても信じられないかもしれないけれど、紫様は肝試しに出掛けている。人間の子供か、と言いたくなつたけれどどうやら本気らしい。場所は迷いの竹林つて言つてた。理由は聞いてないので知らない。

『未練たらたらな地縛霊でもいるんですかねえ』

『一度迷ったら出られないからなあ。いるかもな』

『見つけたらちゃんと成仏出来るようにしてあげたいけれど……』

『憑かれたら面倒でしょ』

もう憑かれてるけどね、式神だけど。まあ、怨霊みたいな類のものに憑かれると妖怪は死ぬらしい。具体的には、別の妖怪に成り変わってしまうとか何とか。そんなことを阿求が言ってた覚えがある。もしも、私に憑かれたらどうなるんだろうか？ 案外、十つ目になったりするかもしれない。……嫌だな、それ。

『たとえ何が出たとしても、博麗の巫女と紫様のお二人がいれば問題ないでしょう』

『そりやそうなんだろうけどなあ……』

その二人でどうにか出来なかつたらどうなるのだろうか？ ……きっと、幻想郷が終焉を迎えるだけのことだろう。単純明快で簡潔な答えだ。だから何だっただけだ。

『……む』

そんなことを考えていたら、一つが警戒心をむき出しにしながら表を見上げた。何かあったかと思つてわたしも見上げてみれば、僅かに布の擦れる音が聞こえた。風は吹いていないはずなのに。

「月が綺麗ね」

「……ん」

左隣から聞き覚えがある様な気がする声があった。気付いたら、そこにいた。いつからそこにいた？　そもそも、どうしてここにいる？　ここに侵入するのは容易ではないはずなのに。

表のは満月から目を離さない。左隣に誰がいようと興味ないらしい。愛想のない生返事を一つだけして、それつきり口を開くことなく佇んでいる。

しかし、それも僅かな間だけ。表のを引っこ抜いて入れ代わった一つが左を向きながら立ち上がり、すぐに後ろに跳んで距離を取る。……あれ、いない？

「少し、貴女と二人きりで話したかったのよ」

「っ、シッ！」

「あら、危ない」

消えたと思つた声が背後からして、表のは即座に爪を伸ばしながら振り返りざまに右腕で薙ぎ払う。が、ギリギリ爪が届かない距離までふわりと距離を取られて躲される。

そして、ようやくその姿を見た。躲したのは、輝夜だった。話したいって、何を？

「何用だ」

「貴方、やっぱり私に飼われてみない？」

「ふん、断る」

「あら残念」

そうは言うけれど、あまり残念そうには見えない。分かっていたというより、気にしていない感じ。あるいは、諦めてないと言うべきか。はあ。

表のは両手の爪を伸ばしたまま輝夜を見遣っている。空気が張り詰めていく。きっと、何か動作を起こせば攻撃するだろう。

「そう警戒されると話も弾まないわねえ。……最後に一つ、頼んでもいいかしら？」

緊張を物ともしていいようなのほほんとした口調で言う。表のに返事はない。が、やはり気にすることなく続けた。

「いつか、私を殺してね。貴方なら、もしかしたら」

そう言い残して、消えた。……何だったんだよ、もう。こっちのほうがよくぼど肝が冷えたじゃないか。はあ。

閑話

私は人間を愛している。

「……ふむ、もう癒えたな」

念のため巻いておいた包帯を解いてみれば、傷跡一つない肌が見えた。この前の満月の夜、迷いの竹林で仕事をしていた最中、博麗の巫女と大賢者、その式神と一悶着あったが、その時の傷は既に癒えた。生徒達には酷く心配されたが、これで大丈夫だろう。

さて、今日は休日。解いた包帯をぐみ箱に入れながら、外へ出かける用意をする。買っておきたいものは特にないのだが、私は人間の里で子供達がよく出かけている場所を歩いて回ることにした。休日の使い方としてどうなんだ、と言われたこともあるが、休日だからこそ教師として生徒達を見て回りたいたいと思っている。楽し気に笑っている姿を見れば嬉しいし、稀に悪戯をしようとしている子を見つければちゃんと止めて叱ってやりたい。それは当たり前のことだと思わないか？

人通りの多い大通りを歩いていると、子連れの母親と顔が合った。

「こんにちは、慧音先生。ほら、挨拶」

「こんにちは先生！」

「ああ、こんにちは。今日もいい天気だな。これからお母さんと何処に行くんだ？」

「傘屋さん！ 可愛いのが買ってもらうんだ！」

「そうか。気に入ったものが見つかるといいな」

頭を下げて子供と目を合わせて話せば、これからの買い物に思いを馳せているようだ。頭を撫でてやればくすぐったそうに微笑む。

「いつも娘を見てくださってありがとうございます」

「何、気にしなくていい。私も楽しくやらせてもらっているからな」

それから傷の心配をされ、もう治ったことを伝えればホッとした表情を浮かべられる。寺子屋での出来なんかを話していてもよかつたのだが、早く傘屋に行きたいらしい子供に催促され、引つ張られるように行つてしまった。去り際に元気いっぱい両腕を振るう子供を最後まで見送る。今日もいい日だ。

「へいへーい、ピッチャービビってるう」

そんなことを考えていたら、大通りを抜けた先の脇にあるちよつとした空き地から悪戯っぽい声が聞こえてきた。その空き地には何か置かれてはいるわけではないのだが、遊び盛りの男子達が集まって遊んでいることが多い。

聞こえてきた言葉から察するに、どうやら最近やつて来たご老公の外来人が熱心に語っていた野球で遊んでいるらしい。ピッチャーがボールを投げ、バッターがバットで

打ち、キャッチャーが取るらしい。詳しいルールはあまり知らないのだが、生徒の話題に付いていけるように今度調べておこうか……。

しかし、さっきの声は明らかに女子のものだった。男子に混じって遊ぶ女子は珍しいし、時折性別の違いで諍いが生じる場合がある。まさかそんなことにはなっていないと思うが、一応覗いて行こう。

「オラア！」

「うっ」

そう思いながら空き地を覗いた瞬間、私の横つ面に柔らかなものがぶつかつた。ボテボテと地面を転がる手毬。

「あ」

「やべ」

「あん？」

「せ、先生。こんちわー……」

私は手毬を拾いながら、野球で遊んでいた三人の男子と一人の女子の元へ歩み寄る。引きつった笑いを浮かべた男子三人は悪いことをした自覚はあるらしいが、バット代わりの太い木の棒を持つ女子は悪びれる様子がない。……これは叱るべきだな。

「ああ、こんにちは。今日もいい天気だな。さて、そのの」

と、そこまで言ったところで私の言葉が喉に詰まった。

何故なら、叱ろうとしていたその女子は、あの八雲紫の式神である八雲彩であったからだ。



男子達には野球をするならもう少し広いところで、周りに気を付けて遊ぶように言った。素直に聞き入れた男子達は、ここから少し離れたもう一回り広い空き地へと走り去っていった。

これから叱るといふ名目で残った彩に目を遣ると、目深に被った帽子が目が付いた。妖獣の象徴たる獣耳を押し付けるように被っている。尻尾も服の中に隠しているようだ。パツと見で妖獣であると見抜ける者はほとんどいないだろう。私も顔を見るまで気付けなかった。

「彩、だったな。こんなところで何をしていたんだ？」

「あー？ キツネがネコの世話に行きやがった所為で、ババアから仕事振られてんだよ。人間の里で怪しいのがいねーか睨んでたら、面白そうなことしてるガキ共がいたから俺も混ざったわけ。なかなか面白かったぜ？」

そう言つてニヤリと笑う。

しかし、私はその説明よりも昔のことを思い出していた。このような格好の少女を何度も見てきた覚えがある。その全てが彩だったとは思われないが、前からこうして人間の里の監視をしていたのか……。

「今日は、その怪しい者はいたのか？」

「いねーな。妙な態度してたり、変にギラついた目をした奴はいねー」

「……そうか。ならいいんだ」

いないと答えられ、私は安堵した。心の底から。

私は人間を愛している。全ての人間は尊いものである思っている。時折道を踏み外すものもいるが、それでも必ず元ある道に戻ってきてくれると信じている。だが、きつとこの彩は踏み外した者を容赦なく消しているのだろう。そう思うと、苦いものが込み上げてくる気がした。

これ以上話すことが思い浮かばずに黙っていると、彩は通りに目を向けた。

「んじや、俺は仕事に戻るわ。じゃーな、ハクタク」

「あ、ああ……」

そう言つて、彩は人混みの中に紛れていった。ここから見ていたのだが、すぐに見つからなくなった。これからも怪しい者を探して回っていくのだろう。

それからしばらく、私はその場に立ち止まって空を見上げていた。生徒達が悪人に育たないことを願い、道を外れないように指導しなければ、と改めて強く思い直した。

お手合わせ願います！

幽々子様が見守る白玉楼の前に広がる庭にて、私は腰に提げられている楼観劍の柄に軽く手を添えた。

「それでは彩さん。お手合わせ願います！」

「あの、止めにしませんか？」

「ええっ?! あの時約束したじゃないですか!？」

「お互い傷付け合うなんて無益——はいはい、今更言つてもしようがないでしょう? ——手合わせ願われたつてだけで巻き込まれた身にもなつて諦めろ」

憂いを帯びた表情から苦笑いの表情へ切り替わり、そしてため息交じりの言葉で締めた彩さん。気の抜けるような一人芝居としか思えないが、何でも一つの身体に九つの命が宿っているからだそうだ。幽々子様がそう言つてた。

ガクリと落ちてしまった肩を立て直し、改めて柄に手を添える。緩んでしまった糸をピンと張るように、波立った意識を澄ませていく。

「お互いに実力を出し切りましょう」

「さて、文句は?——あります——はい、ないね。あつても止まらないから諦めな——そ

れは流石に横暴じゃない?」

私は踏み出した。楼観剣の間合いまで一気に踏み込み、鞘を滑るように抜き放つ一閃。

「右に結界——分かってるわよ——仕方ありませんね」

ガギン、と硬いものに阻まれる。この結界、以前よりも確実に強度が増している。しかしッ!

「まだ脆いッ!」

「知ってる——じゃあ、どうするの?——丸く出来る? 球体に——出来るわよ。……ああ、そういうことね。分かったわ」

居合の一撃を屈んで躲す彩さんが何やら早口で喋っているのだが、そんなものを聞いている余裕はない。そして、喋る隙も与えない。返しの袈裟斬りを振り下ろす。

その振り下ろした楼観剣に、彩さんの手の甲が刀身に沿うように触れた。結界が張られる。その結界は先程とは形状が異なり、なだらかに曲がっていた。

「守るのは受け止めるだけじゃないってことよ——そういうこと」

そして、楼観剣は地面に垂直に振り下ろされる。彩さんのすぐ横の地面に突き刺さる。刀身が結界に沿うように滑り、無理矢理軌道が曲げられたのだ。

私は地面から楼観剣を引き抜きながら後ろに跳んで距離を取る。あのままでは確實

に反撃を貰ってしまう。

「逃げんなよ」

「く……っ！」

だが、やはりと言うべきか、彩さんは距離を詰めてくる。しかし、完全に詰められてはいない。私は地面に着地し、楼観剣を構えて迎え討つ構えをした。攻撃を楼観剣で受け、返り討ちにしてみせる。

「ガッ!」

そう思った矢先、私の顎に衝撃が走った。何もなかったはずなのに、不意を打たれた私の身体が後ろに大きく傾いていく。見えなかった。何が起きた？

仰向けに倒れていく最中、それをようやく視認した。結界だ。拳ほどの大きさの結界。私の顔が合った場所に浮かんでいた。

「結界は防御のための——壁、天井、床を作る妖術でしょ？ 防御の妖術じゃないよ——違うわよ。もう」

そんな言葉を最後に、私は結界に押し潰される。重い……ッ！

「うおおお……はあっ！」

が、今までの結界と比べて明らかに脆く、私は力業で無理矢理持ち上げ、突き破り、立ち上がった。そして、楼観剣を周囲全域に振るい、押し潰していた結界を破壊し尽くす。

「まだ終わりではありませんよ、彩さん!」

「ふざけないで——ならどうして出来る?」

何やら言い争いをしているように聞こえるが、私は距離を詰める。対する彩さんの手は淡く輝いていた。横薙ぎの一閃を先程と同じように上向きに曲がった結界に軌道を曲げられそうになるが、曲げられる寸前に加速させて斬った。が、破られるのを読まれていたのか、彩さんは既に体勢を低くして私に向かつて大きく踏み込んでいた。

「出来ることをしないでわざと負けたなんて、向こうが許さないでしょ——……それを言うなら残り六つが出——あーあー! 何言ってるのかなあー? ——……もう。後で必ず癒しますからね?」

そして、光る手が私の膝に触れる。

「ッ!?!」

膝から何か突き出した。白い棘状のものが何本も。そして、脛や太ももに向かつて皮膚が一気に捲られるように破れ出し、派手に鮮血が弾けた。

「誤治療って奴だ。我慢しな——まあっ、随分とえぐいことするわねえ」

突然の激痛に思わず身体が固まる。しかし、それは致命的な隙でしかなかった。続く光る掌底をもう片膝にも受け、今度は肉が内側から爆ぜた。血に濡れた骨が露出して、痛みに感じない。私の痛覚がおかしくなってしまったのか、それとも痛みを感じ

るべきものごと吹き飛ばされたからか……。

しかし、両脚がこの様では手合わせを続けようがない。私は全く力の入らない両脚の代わりに楼観剣を杖代わりにして地面に突き刺した。

「……参りました」

「すぐに療します——今度は間違えないから安心しなつて」

そう言われて膝に淡い光が当てられると、内側から突き破るように露出した白い棘が皮膚の中に戻っていき、破れた皮膚が塞がっていき、爆ぜたはずの肉が復活していく。……流石にこの惨状でそのブラツクジョークは洒落にならないと、私は苦笑いを浮かべるしか出来なかった。

疑っていたわけではないけれど、やっぱり彩さんも紫様の式神なんだなあ……、と思
い知った。私も精進が足りない。もっと頑張らねば！

精が出るな

肌寒い風が肌を撫でる縁側を歩いていると、横から風を切る音が聞こえてふと目を向けてみれば、彩が庭で舞い落ちる枯れ葉の一枚一枚を伸ばした爪で引き裂いていた。足元の落ち葉に目を向けてみると、流石に全てを網羅出来ているわけではないようだが、それでも大半は切断出来ているようだった。

「精が出るな、彩」

「む、藍か」

一声掛けてみれば、彩は最後に枯れ葉を一枚引き裂きながら振り返った。そして、少し休憩するか、と呟きながらこちらに歩み寄って縁側に腰を下ろす。その隣に私も腰掛けた。

ふつ、と熱の籠った息を吐いた彩は、伸ばしていた爪を戻した指と目を私に向けた。

「で、何か用か？」

「いや、別にないが。……そうだな、時折ああして一人で訓練しているだろう？ 成果はどうだ」

「全然だなあ。大分マシにはなったと思うんだが、全く足りる気がしねえ」

彩はそう言つて肩を竦ませる。しかし、当の本人は足りないと言うが、私は化け猫という種で見れば随分高い能力に達していると感じた。以前は総合的に見て橙と同等だろうと感じていたが、今となつてはその認識を改めるべきだろう。

だが、それと同時に、当の本人の言う通りまだ足りないとも感じざるを得ないのもまた事実。紫様の式神として見れば、その程度の能力では下の下以下、とは言わずとも下の中、よくて下の上だと思う。……ただし、あの『九心九尾』はまた別の話だ。あれに關しては未知数である。

「そうだな。互いに紫様の式神として、紫様の名に泥を塗るなどという失態をせぬよう精進を怠らず努めようか」

「それが基準つてなるとまた別の話じゃねえ？ 俺としちやあ、最低限傷付かない、あるいは逃げ切れる事なんだが」

「何？ 敵前逃亡などと甘えたことを言うな」

「いや、死ぬよりやマシだろ？ ある意味敗北より恥だろうが、そんなもん気にしてられねえだろ」

「……ふむ」

そう言われれば、失うよりはいいとも言えるだろう。彩は紫様に失わせるには惜しいと言わせたものだ。しかし、泥を塗ることを許容することとは別だ。

「ならば、さらに精進しろ。敗北も逃走も不要になるまでな」

「おいおい、さらにハードル上がってんじやねえか。出来るわきやねえだろ」

「そうは言うが、永夜異変の際は随分と多彩な妖術を扱えたじやないか。動きも格段に速かった。カラクリでもあるんじゃないか？」

「……あー、どうだろうなあ」

ふと『九心九尾』の一端に触れてみる。随分とわざとらしく訊いてしまったが、彩は空を見上げながら口を濁す。隠しているのだろうか？ 何も恥ずべきことではないだろうに。……いや、あのような自滅と隣り合わせでは恥ずべきことかもしれないが。

なんて思うと、彩が一瞬固まった。が、すぐに表情が切り替わる。別のが表に出てきたのだろう。

「藍」

「何だ？」

口にした言葉に疑惑の色が濃く出ている。そして、その瞳にも滲み出ている。

「何時知った？ 気付いた？ いや、いつかは露呈するだろうとは思ってたけれど、一応問おうか」

「ふむ、何時だと問われれば、鬼との接触の時だ」

「……嘘吐きだね、藍は」

「あの時はそう命じられていたからな」

ああして覗き見していたことはある程度秘するよう命じられていた。しかし、もうそのある程度は過ぎただろう。ああして三尾四尾となっていたのだから、隠すことも止めたのではないかと思っていたのだが。

「こつちも二つ三つ出ろ、つて命じられたからね。まあ、それなら藍には話しておくか。私の愚行について」

『九心九尾』だろう？ 紫様が語ってくれたぞ」

「なんだ。それなら私から話すようなことはないかな」

そう言うのと、彩は前を見詰めた。しかし、その瞳は何処か空虚で、前を見ているように実際何も見ていないように感じた。

ならば、何を見ているのだろうか。愚行だと言った過去のことか、それともまた別のことか……。

そんなことを考えていると、彩はその空虚な瞳のまま私に顔を向けてきた。その瞳に見詰められ、そのまま吸い込まれてしまいそうだと柄にもないことを思う。

「あんな力、必要ないと思わないかい？」

「力そのものに罪はないだろう。むしろ、力そのものはあるべきだ」

「そうかな？ あんな力、存在自体が罪だよ。今はもういいけれど、あれは二度と起こす

べきじゃあない。このまま眠るべきだ」

「……言ってることに矛盾がないか？」

「いいよ、矛盾なんぞ気にすることじゃないから。今は平気だつてのは多分本当だから。今の私は紫様の式神だからね」

それだけ言い切つて勝手に口を閉ざした彩だが、私の頭の中ではいまいちよく分らないままだった。煙に巻かれたような気さえする。しかし、これ以上追及しても答えてはくれないだろう、という確信めいたものを感じた。

そうか、一言告げてから私は立ち上がり、その場を去る。……何やら、彩は重く面倒なものを内に抱えているようだ。

人間の里に行つてみたいわ

「人間の里に行つてみたいわ」

ある晴れた冬の日、唐突に姫様は言った。既に外に出る気でいるらしく、幾重にも重ねた衣が普段よりも多い。しかし、今は雪が降っていないとはいえ外は非常に寒く、あまり出掛けたいとは思えない。

姫様はお師匠様に詰め寄つて強請つているけれど、きつとお断りしてくれるだろう。いくら月の使者の脅威は去つたとはいえ、気軽に外へ出していいような御方ではないのだ。

「そうですね。暗くなる前に帰つて来るならいいんじゃないかしら。一応、鈴仙を付けさせるけれど、たまには羽を伸ばすのも悪くないでしょうし」

「流石永琳。話が分かるわね」

「えっ……?」

そう思っていたのに、まさかの快諾。そんなお師匠様の言葉に思わず顔を向けると、お師匠様とバツチリ目が合った。そして、その瞳は言っている。行け、と。……はい、分かりました。

「鈴仙、よろしくね」

「はい、姫様……」

思わずうなだれていると、姫様に肩をポンポン叩かれ、そしてそのまま姫様は廊下に出て外へと向かわれた。瞬間、お師匠様の鋭い視線を感じ、私も慌てて姫様の後を追う。玄関に立て掛けてある笠と変装用の衣装に手早く着替えてから外に出る。既に先のほうまで歩んでいた姫様の元まで走ると、立ち止まって振り向いて私を待つてくださった。

「もう、遅いわよ」

「も、申し訳ございません……」

僅かに乱れた息を整えながら謝罪し、急いで着替えたことと走った所為で少しばかり乱れた衣装を軽く手直しする。……これでよし、と。

「さ、行くわよ」

「はい、姫様」

再び歩き出した姫様の隣に付いていく。周囲を警戒しながら歩くが、近くに怪しい者はいないようだ。

さくさくと雪を踏む音だけが響く。そのまま静かにしているのは少しばかり気になる、私は口を開いた。

「そういえば、どうして突然外に出掛けようと考えたのですか？」

「窓から見た銀世界が綺麗だったからかしら」

「そうなんですか。人間の里では何をしておつもりでしょう？」

「んー……、着いてから考えるわ」

そう言つてふふ、と姫様は笑う。確かに、急な思い付きで決めたようだし、そこまで中身は決まっていなくて当然かも。

そんなことを考えていたら、何者から急速に接近してくる気配を感じ取った。

「ッ、姫様！」

「輝夜アアアーツ！」

すぐに危険を知らせようと叫ぶとほぼ同時に、私達の目の前に火の鳥が降臨した。雪を瞬時に溶かし、空気をも焦がす熱気が肌を刺す。藤原妹紅だ。

「ここで会ったが百年目！ 今日こそお前を殺す！」

「あら、妹紅じゃない。熱くなっているところ悪いけれど、今日は生憎忙しいのよ。あまり長くは付き合えないわよ？」

「知るか！」

そして、二人の盛大な喧嘩が始まった。こうなってしまうと、私が手出し出来るようなことはない。むしろ、邪魔にしかならないから。

「ふふ、いい感じに温まったわねえ」

「……そうですわね」

道中に妹紅の襲撃はあったものの撃退し、私達はようやく人間の里に到着した。温まったと言っているけれど、見る限り汗一つかいていない。汗で冷えるなんてことはなさそうではなかった。しかし、あれだけ激しく動き回って体が温まったで済ませてしまうあたり、やっぱり姫様は恐ろしい御方だ。

そんなことを思いながら、私は人間の里へ進んでいく。姫様に付いていく。姫様は何かあるごとに目移りし、瞳を輝かせて興味を惹かれているようだ。

「この笠、中々いいと思わない?」

「姫様にお似合いですよ」

笠屋で試しにいくつか被って見せたり。

「ふむ、意外と美味しいのねえ。鈴仙、今度貴女も作ってみせなさい」

「……はい、姫様」

軽食としてうどんを食べ、ついでに無茶な要求をされたり。

「あら、犬じゃない」

「持ち帰るのは駄目ですよ」

誰かの家に繋がれた犬に目を向けたり。

そんな風に人間の里では特別何事もなく済むと思っていた。思いたかった。けれど、残念ながらそうはいかないらしい。

「あつ」

「おや」

「げっ」

姫様がそれを目にした瞬間、より一層その瞳を輝かせた。それは一見すれば帽子を深くに被った少女とも少年とも言えないような人間のようであったが、もう一度見てみればその認識は即座に改められる。あの時、永遠亭に襲撃して来た際にやって来た四人のうちの一人の化け猫に他ならなかったからだ。

思い出すと苦いものを感じざるを得ない。波長を思い切り狂わせてやろうとしたのに、碌に通用しなかったのだ。後でお師匠様に聞いてみれば、九つの波長が混ざっているからと言われたことを思い出し、そうだと思ってみてみれば、確かにいくつかの波長が混ざっていると感ずることが出来る。しかし、それを九つだと断じることが出来なかつた。

そんなことを思いながら見ていると、あちらは特に気にするでもなく普通に自然に歩み寄ってきた。

「満月の夜以来ですか。お久し振りですね、輝夜」

「そうねえ、久し振り。元氣だったかしら？」

「恙なく健康に過ごしていましたよ」

恐れるでも、敬うでもなく、普通に会話していた。それが強烈な違和感でしかなかった。

そう感じて思わず緊張していると、目が合ってしまった。その視線が一瞬だが私の全身を隈なく観察するように動くのを見逃さなかった。そして、ふつと微笑まれる。

「貴女は鈴仙でよろしいでしょうか？」

「え、ええ。そうよ」

「お久し振りですね。知っているとはい思いますが、私は八雲彩と申します」

そう言つて、彩は静かに手を伸ばしてきた。一瞬、攻撃かと疑つたが、私との間で止まり、そこでようやく握手であると気付く。私は嫌な感じを振り払うようにその手を握り、精一杯の笑顔を浮かべる。まさか引きつってはいないだろうか……。

そんな私達の手を姫様がガシツと握り締め、私は姫様に目を向ける。

「こうしてせつかく会えたのだし、一緒に行きましょう？」

「そうですね。お付き合いますよ」

「……そうですね、姫様」

その発言に、私の頬が強張るのを感じながらどうか同意する。今度こそ引きつってはいないだろうか。いや、絶対引きつってる。

目の前の彩がとにかく得体が知れない。敵であったことと、直接ではないとはいえ敗北を喫してしまった苦い経験から、私は彩を警戒し続ける。しかし、彩は何ともないように微笑むだけだ。きつと分かっているはずなのに、何事もないように流されている。まるで警戒するだけ無駄であるかのように。

それからの姫様は実に楽し気であったが、私としてはとても疲れる時間であった、と言い残しておこう。……はーあ。

統率者はいない

私は蒸したての白い湯気が昇るあんまんを頬張る。風邪を引いて胃腸が弱っている時にはあまりよくないとは知っているけれど、そこは病み上がりだから大丈夫と言うことで。

そんな風に自分で理由を付けて納得しながら、このとても美味しいあんまんを食べ切った。ホツと一息吐くと、口から白い息が上がる。私はその白い息が消えるまで眺め、それから隣に腰を下ろして頬杖を突きながら通りを眺めている彩様に顔を向ける。

「ですから、彩様。私はその女性に一度お会いして話してみたいんですよ」
「あつそうですか、阿求様」

まるで興味が無い非常に軽い受け答えである。

その女性は、昨日人間の里に現れたという話題で持ち切りらしい。その容姿は可憐な少女と絶世の美女を足して二で掛けたような、それはそれは美しい女性だそうだ。淡く光って見えたときえ噂されている。一目見た者は誰も彼も老若男女問わず美しいと口に出していると言うのだから、眉唾ではあるまい。残念ながら床に臥していた私は見ることが出来なかったわけだけど、そんな部屋に籠っていた私にすら届いた噂だ。非常に興

味がある。

「どのような方なのでしょう？ 私、気になります」

「……それを私に言われましても」

「あら、彩様ならご存じでしょう？ その方のお隣にいらしたそうではありませんか」

噂ではその美しい女性のことばかり話題に上がるけれど、一部では両側を挟むように笠を被った者と帽子を深く被った者がいたとかなんとか、という話も上がっている。

「帽子の特徴をまとめれば、彩様に辿り着くのは容易でしたよ。そのような帽子は里では売られていませんからね」

「……あー、阿求様。もしかして、輝夜のことでしょうか？」

「輝夜さん、というお方ですか。彩様が知っていること、少しでもお聞きしたいです。何処でお会い出来るかなんて、特に」

「ええー……」

露骨に嫌そうな顔を浮かべられたけれど、ここで何も聞けずに終わるのは胸中にもやもやが残る。そう思い、私は横を見て目を合わせてくれない彩様に思い切り身体を寄せた。

しかし、その身体は肩にグツと手を当てられて止められてしまう。痛くはないが、明らかに拒絶。

「……ごめん。その話はまた今度にして」

「あつ、ちよつと！ 彩様!？」

それだけ言い残し、彩様は席を立てて歩き出してしまふ。そんなに話せないお方だったのでしようか？ ……いえ、それならまた今度なんて言わないでしよう。

私の頭で追いかけるとまた後日が天秤に乗せられてゆらゆらと揺れる。今聞けなかつたら寝つきが悪くなりそうだとか、急な話の切り方だとか、そんな気になることが周囲をふわふわと漂い、決断がつかないままだがとりあえず彩様を追いかけることにした。……そう、どうして急に断られたのかくらい訊いてもいいでしょう、なんて自分を無理矢理納得させながら。

幸い、彩様の足取りは遅く、私でも少し急ぎ足で追いかければじきに追い付けそうだった。必死に追いかけてるとき、彩様は何やら一人でぼそぼそと喋っているようでしたが、この距離では何を言っていたかは聞こえなかった。

「あら……？ この先に道なんてなかったわよね……？」

ふと足を止め、そう呟く。この先は行き止まりだ。引き返さないと。引き返さなければならぬ。

……違う。そんなはずはない。この先はまだ道が続いている。地割れも崩落も何も起きていない。それに何より、この先に彩様が進んでいる。道がないはずがない。

どうしてそんなことが浮かんだのか違和感を覚えながら、私はそんな不安を拭うためにも駆け足一歩手前まで急いだ。

「彩様！」

「ちよつ、何で——ミスってんじやねーか！——いえ、絶対記憶能力で押し通したのでしよう——まあっ！ それってまずいんじゃないかしら？」

どうにか追い付いて、ぶわつと溢れた安心感から彩様の名を呼んだ。けれど、彩様の反応が非常によろしくない。

「あのものが」

「シッ！ ちったあ黙れって！——ふん」

何故、と訊こうとした口を手で塞がれる。そんな警戒剥き出しの彩様を見詰め、それから何か理由があるのではと周囲を見回した。

「おや、阿求殿ではありませんか。そのような汚らわしい化け猫風情から離れ、今すぐこちらへ」

「っ……!!?」

そして、ぐるりと首を曲げて振り向いたそれと目が合った。合ってしまった。年老いた男性の人間、ではない。口元から牙を覗かせ、粘つく唾液を垂らしているその姿は、既に人間とはかけ離れている。人間から妖怪に成ってしまった、人妖。背筋が震える。怖

い。

とん、と彩様に軽く押されて背後に回される。彩様の背中が見え、ほんの少しだけど震えが収まった気がした。

「ちようどいいい！ お聞きください、阿求殿。我々人間は妖怪に虐げられておる！

我々は餌ではない！ そのような邪悪極まりない妖怪は即刻淘汰し、我々人間だけの新たな世界を築き上げるべきです。そのための力、そのための私！ 阿求殿。聡明な貴女ならお判りでしょう？ 貴女は私と共にいるべきなのです」

「何言ってるんだ——その人間のために人間辞めてどうすんだか」

「口答えをするな化け猫がア！ 貴様が新たな世界の最初の礎となれエ！」

発狂したように喚くその姿がメキメキと音を立てて変わっていく。両手両足の爪が黒く鋭く伸び、その背からは鳥とも虫とも言えない翼が生え始め、瞼が真円にまで開かれた眼球にギョロリと見詰められ、私は思わず一步後退る。

「ごめんなさい——見せるつもりはなかったんだがなあ——ま、もう遅いか」

彩様が私にそう言い、その身体から妖力が形となって溢れ出す。それはまるで六つの尻尾のように見え、そしてその尻尾の形をした妖力が異形と化した人間を上から、右から、左から、前から、下から、後ろから、貫いた。

「ガ、アア……ッ!?!」

「極彩『彩色剣尾・陸式』。悪いけれど、人間に統率者はいらぬ。日和見主義であるべきだ。生まれ、育ち、何となく生きて、流行に流され、飽きて、時に恐れ、そして死ぬ。それでいいんだよ。そういうもんだから。それになにより、人間は妖怪に成つちやあいけないんだよ、蝙蝠野郎」

そして内側から爆散した。断末魔一つ上げられずに、その命を散らしてしまった。

……知識としては、知っていた。人間は妖怪に成つてはいけない。けれど、その末路を、私は、見てしまった。知ってしまった。覚えて、しまった。

「ごめん」

それだけ言って、彩様は私を優しく抱き締める。頭の中がぐちゃぐちゃにかき混ぜられそうな私は、ただその身体に身を寄せるしか出来なかつた。

不合格ね

「不合格ね」

「あつそうですか」

帰ってきて早々、私は紫様にそう言われてしまった。ここ最近で見た苛つく表情堂々第一位にランクインしそうなくらいニヤニヤしながら。……落ち着け、私。相手は紫様だ。だから握った拳を開くんだ。うん。はあ。

阿求と話している最中、刺すような視線を感じた。視線を感じた場所に目を向けてみれば、その目には明確な敵意が見え透っていた。それと、口端から僅かにはみ出た牙。そこまで確認してから、私は紫様に通信してどうすればいいか問うたのだ。その返答は、一人で対処してみせなさい。

「貴方、自信満々に『出来らーっ！』なんて言ってたじゃない」

「言つてねえよ」

「貴女は言つてなくても、貴方が言つてたのよ」

……やっぱり一発くらい殴らせてほしくなってきた。いや駄目だ。どうせ意味なんてない。もういい。どうでもいいんだ。もう済んだことだし。はあ。

私は真面目に話を聞かない方が楽だと思い、その場にゴロリと横になる。床が冷たくて気持ちいい。外寒かったけど。そんな私を見下ろす紫様が続きを話し出す。

「私が出した条件は迅速に、隠密に、安全に、無害に、抹殺することよ」
「知ってますよ」

だから即座に行動し、人間の里に無害であるようにしつつ、内心嫌だと思いながらいくつか表に出てもらい、殺したのだ。

「まず、迅速に。これはいいでしょう。丸あげるわ」

「丸なんて並べても零にしかならないからいらないです」

「そうねえ。不合格だったのだし、丸は没収ね」

そう言つてケラケラと揶揄うように笑う。たかが戯言にまで付き合つてくれてありがとう。はあ。

まあ、一分一秒縮めるならまだしも、劇的に速く事を済ませるのはちよつと無理がある。出来たとしてもやりたいとは思わないけど。面倒だし。

「次に、隠密に。これは及第点ね。よりによつて阿求に露呈しまったもの。けれど、そこには目を瞑つて一人で済ませたことと、認識阻害の結界を用いたことを評価してあげる。三角あげるわ」

「なんか刺さりそうな気がするんでいらないです」

「そう？ それなら三角も没収するわ」

認識阻害の結果。結果なんて壁を作るものだと思つてたけれど、本来は境界を作るものだそうだ。ここから先は立ち入り禁止を物理的にしているものが普段使っている、私が認識していた一般的な結果。

けれど、守る手段は防衛以前に立ち入らせないことも含まれる。それが今回の認識阻害の結果なんだそうだ。つまり、ここから先は進んではいけないと思わせ、あるいは無意識に進む道を逸らさせ、あるいは空間を捻じ曲げてしまう。それをすると聞かされた時は、そういうえばそんなのもあつたような気がするとぼんやり思い出していた程度だけ。そんな器用な事出来ないからすっかり忘れてた。

「次に、安全に。これもいいでしょう。前々からもしかしたらと警戒していた人間だったけれど、起きてみれば別に大したことなかつたわね。ふふつ、あの時の貴女なら過剰戦力だったでしょう？」

「……まあ、安全に、ですからねえ」

「よろしく」

私は抹殺対象の後を付けながらいくつか表に出て来て、と呟いた。こういう時に内側から表を見ることが出来ても、表から内側を見ることが出来ないのがもどかしいと思うのはいつものことだ。まあ、表で感じている五感の大半を内側では感じれないと不便に

思っているのでお相子な気がするが……。はあ。

私の呼びかけに応えたのは五つ。一つは抹殺と聞いて、一つは戦闘と知って、一つは自信ありげに、一つは計画を立てて、一つは結界を張るために。そんなに出てきちゃうのかと頭を抱えなくなつたけど。はあ。

「次に、無害に。これは駄目ね。人間の里に対してはほぼ無害に済ませたけれど、阿求の心に負つた傷はかなり深刻なもの。すぐに多少のケアはしていたようだけど、そもそも付いてこないように屋敷に帰すべきだつたわね。だからバツをあげるわ」

「それこそ刺さるからいらぬです」

そう言つた直後、私の上にスキマが開き、十字架が顔に落ちてきた。刺さりはしなかつたが単純に痛い。まあ、これは十字架じゃなくて斜めに傾けてバツの意味なんだろうけど。いらぬと言つたのに、丸と三角は最初からくれなかつたのに、これはくれるのか。……。まあ、どうでもいいか。はあ。

あの後、阿求が落ち着くまでその場で付き合い、それから結界を解除しつつ屋敷まで一緒に戻つた。私では赤く腫れた目に癒しを掛けてあげたくらいしか出来なかつたけれど、他のだつたらもつと出来ることがあつただろうなあ……。ま、もう済んだことだ。「最後に、抹殺。あれなら確実に死んでたけれど、派手に爆散させたから処理が少し面倒だつたわ。そこはちよつと減点。いつかは痕跡一つ残さないように出来るようになつ

てくれたらいいのだけど」

「……そうですか。期待しないでください」

「期待してるわ」

実は、出来ないこともない。消滅の妖術は存在するし、空間断裂の妖術も存在する。他にも色々あるけれど、私としては疲れるから嫌だ。殺すだけで何度そこまで小難しい妖術を使わなければならぬ？ というか、妖力の負担が大き過ぎる。私では、消滅の妖術は米粒一つ消すくらいに限界だろうし、空間断裂の妖術は引き裂く前に妖力が尽きるだろう。無理だ。

それより、私としてはその場から身体を動かさずに抹殺したことが重要だ。棒立ちで済むならそれに越したことはないだろう。身体から離れた妖力の操作は、他の干渉が多少あったとしても損失は少なく済むから。

「だから不合格よ」

「六割取れてるんだから合格じゃないですか？ というか、唐突な抜き打ち試験なんだからもう少し甘くしてくださいよ」

「現実はいつだって突然よ。これはまたいつか再試験かしら」

「……嫌だな、やり直しは」

重ったるいため息を吐き、私はそのまま目を閉じた。やり直しは面倒だ。明日は特に

何もなまま過ぎ去っていきますように。けれど、同じことの繰り返しは起こりませんように。退屈だし、嫌になるから。

東方花映塚

ありとあらゆる花々

『起つきろーっ!』

『げぶう!?!』

横になって眠っていた私の上に何かが押し掛かる。無理矢理叩き起こされて非常に不愉快だ。というか、私に乗ってるのは何処のどいつだ……。

押し掛かっているのの頬を両手で潰しながら起き上がる。……何だ、その挟み込んでも分かるくらい楽しそうな笑顔は。押し掛かった理由が無邪気なら許されるとでも思ってるのか。私は許さんぞ。ま、だから何かするでもないけど。はあ。

『で、何かあったの?』

『凄いだよー! 表見てっ!』

『表え?』

両手で挟んでいたのを横にぺいっと放り投げ、私は表を見上げる。どうやら、庭の手入れをしているらしい。鼻歌まで歌っちゃってとつてもご機嫌なようだ。

『……うわあ』

そしてその光景に純粹に驚く。

朝顔。紫陽花。アネモネ。梅。弟切草。カーネーション。桔梗。菊。金盞花。金木犀。コスモス。桜。山茶花。ジャスミン。白詰草。水仙。鈴蘭。堇。ゼラニウム。蒲公英。チューリップ。躑躅。椿。デイジー。鳥兜。薺。撫子。菜の花。ハイビスカス。花水木。薔薇。パンジー。ヒヤシンス。昼顔。藤。フリージア。ポインセチア。鳳仙花。鬼灯。牡丹。ポピー。マリーゴールド。紫露草。桃。木蓮。山吹。夕顔。百合。夜顔。ライラック。ラベンダー。蘭。龍船花。竜胆。蓮華。その他諸々……。

季節も、時間も、一切切関係なしにありとあらゆる花々が咲き乱れている。しかも、この庭では見たことのない花だろうと構いなしだ。圧巻である。

「あ、紫様。おはようございます」

「おはよう、彩。随分と楽しそうね」

「まあっ！ 紫様にもそう見える？ 楽しいわ、とても。こんなに賑やかな庭は初めてだもの」

「そうね。……もうそんな時期なのね」

縁側を歩く紫様は、僅かばかり目を細めて庭に咲く花々を眺めてそう呟いた。

『そんな時期？』

『大体六十年周期に起こるようですよ』

『へえ、知らなかった』

少し引つ掛かった単語に首を傾げていると、後ろから答えが返ってきた。んー、六十年前は生まれてないな。多分。

『いくつか花食えそうだな』

『止めた方がよろしいかと。この花の大半は外の世界から過剰に流れ溢れてしてしまった幽霊が憑依しているそうですから』

『うげっ、食ったら面倒そうだな』

『私に何か出来ないでしょうか……?』

『そういうのは他の誰かがやってくれるでしょ』

幽霊の成仏は妖夢にでもやらせておけばいい。勝手に成仏させたらいけないらしいけど。

もう少し詳しく訊いてみれば、死神が許容量を超えて溢れ返ってしまった幽霊の回収に回っているはずなので、放っておけば時期に収まるらしい。ほら、他の誰かがやってくれるってさ。

「ところで、今日の朝食は出来てるかしら?」

「出来てるわ。ご飯とわかめの味噌汁、卵焼きに菜の花のお浸し。悪いけれど、私はここのお手入れで忙しいから自分でよそって食べててね」

「そう？　なら、程々にね」

そう言つて紫様は去つていった。表のはそれを見送り、そして庭の手入れを再開する。

幻想郷中がこんな感じなら、観賞して回るのも悪くなさそうだ。そんなことを思いながら、私はゴロリと横になった。さて、もう一眠り……。

幸せになーれっ!

二度寝から目覚めてのっそりと身体を起こし、ぼんやりとした頭のままで表を見上げる。……どうやら、表のはまだ庭の手入れをしているらしい。あと、いつの間にやら麦わら帽子なんて被ってた。どのくらい手入れを続けているのか分からないけれど、影の感じから昼にはまだなっていないと思う。多分。

表のはゴム手袋を付けた手で鳥兜を丁寧に根っこごと引っこ抜いていた。鳥兜って結構危ない毒を持っている植物だったと思うんだけど、大丈夫かなあ……? どんな中毒症状になるんだっけ? まあ、死ぬ前に癒せばどうにかなるか。はあ。

『鳥兜は植物全体に毒を持ちますが、特に根に多いようです。中毒症状は嘔吐、呼吸困難、臓器不全など。皮膚、あるいは口などから摂取してから一分足らずで死亡する即効性がありますね。ですが、適切な処理と容量、用途をもつて使用するならば強心作用、鎮痛作用などの薬としても使われていますよ』

『聞きたくなかった……』

思ったよりヤバイじゃないか……。ゴム手袋してるからまだマシだろうけれど、花粉を吸って中毒なんて洒落にならないぞ。癒せばいいんだけどさ。はあ。

明らかに不自然な挙動をしたら、そこで慈しむように悠長に微笑んでやがるのを引つ張つて即行表に出てもらうとしよう。そうしよう。

「……ふふ、こんなところね」

それから十数分。表のは鳥兜含むいくつかの種類の花を引っこ抜き終えたようだ。きつと、それら全てが大なり小なり毒を持っている花なのだろう。幸い、表のが途中でふらつくなどはしなかつたので、私の勝手な心配は取り越し苦労となつた。ま、それからそれで別にいいんだけどさ。

表のはそれら引き抜いた植物を麻袋に入れ、そそくさと飛び出していく。はて、何処に行くつもりなのやら。

「これを捨てたら代わつてあげるから、もう少し待つててね？」

『はーいっ！』

そんなことを考えていたら、表のはそう呟いた。そして、それに無邪気に返事するのが一つ。どうやら、私が寝ている間にそんな約束をしていたらしい。

表のが見下ろす幻想郷は、庭と同じように所狭しと何でもかんでも花が咲いているわーお、改めて見てもこれは凄い。こんな風に季節外れに咲き乱れる花々は見てて楽しからう。そりゃあ代わりたがるわけだ。

そして、表のは少し外れた場所にゆつくりと降り立ち、麻袋ごとポイツと捨ててし

まった。そんな雑な廃棄でいいのかなあ？ ま、いつか。そんな雑に捨てても気にする酔狂なのはいいないでしょう。

『はい、どうぞ』

『わーい！ 僕、行つきまーすっ！』

そして、表のが入れ代わる。

『お疲れ様です』

『お手入れは楽しかったけれど、ちよつと疲れちゃった。少し休ませてくれる？』

『おーおー、寝とけ寝とけ。私みたいにさ』

表から戻ってきてふう、と一息ついて休んでいるのにそう言ってやり、私は表を見上げる。

「ふふふーん、ふふふーんふーん」

表のは陽気な鼻歌と共にスキップしてた。さつきからキョロキョロ周囲を見回しながら興味が湧いたであろう満開の桜へ進み、その途中でさらに興味が湧いたであろう真っ赤な牡丹が咲いているところへと向かい、それからその途中にあった白詰草の中に跳び込む始末。結局何処へ行くこうとしているのかサツパリ分からない。

跳び込んだ白詰草の絨毯の上をゴロゴロと転がり、大の字に寝転ぶ。いや、本当に何したいのか分からない……。ま、楽しそうだしいいか。

「あーっ！ 見いーっつけたーっ！」

そして急に叫んだと思つたら、白話草の中からプチッと一つ摘まみ上げる。それは四つ葉のクローバーだった。幸運の象徴とも言われているとか何とか。

「幸せになーれっ！」

そう高らかに笑い、表のは摘み取ったクローバーを投げ上げる。それは風に乗って何処かへと飛んでいった。

暇なら一緒に遊ぶ？

「ふふーん。……にやはっ！」

あっちへふらふら。こっちへふらふら。表のは当てもなくあちらこちらへ歩き回る。好みの花を求めているのだろうか、ひらひらと羽ばたいている蝶に視線を奪われてそのままふらふらと付いていく。

表のはきつと難しいことなんて何も考えないで、ただただ今を純粹に楽しんでいるんだろう。その生き様は少しばかり羨ましく思えるのだ。ただ、羨んでもなりたいたとは思わないけど。

「あっ」

そんなことを考えていたら、その蝶が突然落ちた。命尽きるにはあまりにも唐突過ぎるが、それもそのはず。蝶に霜が降りている。温かな気候に包まれた春に蝶がいきなり凍るなんて考えにくい。何処かの誰かがやった可能性を考えるのが普通だ。

「どーだ！ アタイのスペシャルテクニク！」

「チルノちゃん……。命をそんな簡単に奪っちゃ駄目だよ？」

「平気平気！ 多分生き返るって！」

「多分って……」

そして、答えは向こうからやって来た。氷精、チルノだ。その隣にいるのは大妖精だったかな？

表のはというと、凍った蝶よりも聞こえてきたチルノの声に意識が持つてかれている。というか、既にチルノに向かつて走り出している。

「ちつるるーん！ やっほーっ！」

「うわあつ!? 誰だー!? はーなーせー！」

そのままチルノに思いつ切り跳びかかり、抱き締めて髪の毛をわしやわしやしている。突然抱き締められた表のを引っぺがそうと両腕を必死にジタバタ振り回しているけど、残念ながらほとんど掠りもしていない。

「彩さん!？」

「だいちゃんも、やっほーっ！」

「や、やっほー……っ?」

驚く大妖精に挨拶し、困惑気味な挨拶を返されて満足げに笑っている。それでいいのか。

表のがチルノを両腕から解放してやれば、抱き締めていたのが誰なのかを知ったチルノは嬉しそうに笑う。それでいいのか。

「こんなところでさいに会えるなんて奇遇だなー！」

「奇遇だねー！ 嬉しいねー！ ちるるんが暇なら一緒に遊ぶ？」

「遊ぶ！ アタイの新しくて滅茶苦茶すごくて格好よくて新しいスペルカード見せてやる！」

「いいねっ！ 見せて見せて！」

ハイテンションな会話で気付いたら命名決闘法案で遊ぶことになっていた。……凄いな、私には付いていけないさそうだ。何気なく内側を見回してみると、苦笑していたり、興味なさげにそっぽ向いてたり、その場にしゃがみ込んでいたりで、私と似たり寄ったりだった。よかった、付いてけないのは私だけじゃない。

「アタイのすっごいところ見ててね、だいちゃん！」

「うん。頑張つてね、チルノちゃん」

チルノが大妖精と表のの手を取って飛び出す。しばらく飛んだ先で手を離し、チルノは表のと距離を取った。どうやら、始まるらしい。

最強のアタイ

チルノの手から小さな氷柱がいくつも放たれる。それを表のはギリギリまで引きつけてから横つ飛びして躲す。もののついでのようなちやちな爪撃を一発放ち、それをチルノは大きく飛び越えた。もっと弾幕張れるでしょ、と思うところもあるけれど、この命名決闘法案は本気でやり合うような勝負じゃないのだ。このくらい緩いのでちょうどいい。

そんな風に代わる代わる攻撃し合っていたのだが、チルノが攻撃の手を止めて両手を前に出した。

「さーい！　これがアタイの新しいスペルカード！」

そう自信満々に宣言し、右手から左手へ氷が伸びる。氷は左手で止まらずにぐんぐん伸びていき、やがてチルノと同じくらいの長さにまで伸び切った。単なる氷の棒かと思っただが、どうやらそうではないらしく、伸び切った先端が鋭利に尖り、手元は太く丸く整えられ、徐々に見覚えのあるような形状へと変化していく。

「ジャツギーン！　氷符『ソードフリーザー』！」

「ちるるんすつーいーい！」

氷の剣の完成だ。へー、上手いもんだ。私はそんな風に特定の形に成型するのはあまり得意ではない。というか、そんなの面倒臭い。そういうのは得意なのに任せるね。

お遊びにそんなもの振り回すのはどうなんだろう、と思っただが、よく見てみれば実態は見てくれだけで流石に切断は出来なさそうだ。ただし、硬いものにぶつ叩かれるわけだから、被弾すればそれなりに痛いだろうけど。

「そりゃーっ!」

「うにゃっ」

「せい、せい!」

「にゃははっ! こっちこっち!」

「待てー!」

上半身ごと使った大胆な振り下ろしを表のは右に躲し、切り返しを今度は左に飛んで躲し、続く右からの横薙ぎの振り回しを後ろに躲した。それから距離を取り始め、チルノが逃げる表のを追い駆ける。剣の射程に入るとすぐに振り回しているけれど、そんなに振られて当たるほどのろまじやない。というか、そもそもチルノが表のに追い付ける程度の速度にしているあたり、じゃれ合ってるようなものなのだ。

そうやって時間いっぱい追いかけっこをし、そのまま時間切れになったので、チルノは氷の剣をそのへんにポイツと投げ捨てた。おい。氷だから解けるんだろうけど、下に

誰かいたら悲惨だぞ。いないけどさ。はあ。

「何でだー！ 当たらなーい！」

「じゃあもつとずつと大きくしよつか！ ドーンと決めちやおつ！」

「もつと、でかく……！ そつか！」

痲癩を起こしたチルノに表のがアドバイスとは思えないような言葉を返す。しかし、あんな答えにチルノの目はキラキラと輝いた。いいのかそれで。

「それじゃ、次は僕だねっ！ 回転『ぐるぐるスフィア』！」

表のは宣言と同時にチルノから一定の距離を保ちつつ縦横無尽に回転し始めた。表のが通った軌道上に妖力弾が置かれていて、チルノを包んでいく。このまま動かれなかったら被弾させられないか、と思つた矢先、最初に置いてかれた妖力弾から順番にチルノを襲う。弾速は結構とろちいが、この球体の中という狭い範囲で避けなければならぬのなら、下手に速いより難しいかもしれない。

「へっへーん！ このくらい最強のアタイには通用しないわ！ 電符『ヘイルストーム』！」

「うわつとお？」

一定の距離を保っていた表のの身体がぐらつく。どうやら、チルノを中心に強風が吹いているらしい。その風に乗って、拳大の電が球体となっていた妖力弾を穿ち、次々と

穴を空けていく。あらま、これは痛い。チルノは小さいから、下手したら穴から抜け出されてしまうかも。

「あ」

なんて思ってたなら、表のの視界がチルノから真逆の空へと切り替わる。急に何故、という答えはすぐに分かった。その中心に吹っ飛んでいく麦わら帽子。どうやら、被っていた麦わら帽子がさっきの風に持っていかれてしまったらしい。しかも、チルノから放たれる風とは別の自然風に流されてさらに遠くへ飛んでいってしまったている。

「あーっ！ さいの帽子っ!?!」

「んー、いいよ気にしないで！ 続けよっ！」

「追いかけるよっ！」

まあ、帰れば他の帽子があるからね。しかし、表のの言葉を聞いていないのか、チルノは命名決闘法案を止めて麦わら帽子に向かって飛んでいく。視界の端では、チルノを見守っていたであろう大妖精も麦わら帽子に向かって飛んでいるのが見えた。随分お人好しだなあ。

「待て待てー!」

そんな二人を表のは追いかけていく。お遊びは中断してしまっただけで、なんか別に楽しそうだしいいや。

「ハハハハハ？」

風に乗っていた麦わら帽子がいつまでも宙を漂えるわけもなくゆつくりと落ちていく。チルノと大妖精、そして表のもそれに合わせて高度を落としていき、遂に麦わら帽子は地面に落ちた。しかし、地面に落ちてからも風に巻き上げられてふわりと飛んでいき、時には鏝から落ちてコロコロと転がっていく。

「よっし取れ……、なーい！ 待てー！」

「はあつ、はあつ。待つてくださーい……」

チルノと大妖精は掴めそうになるたびに距離を取られる麦わら帽子を必死に追いかけているわけだけど、内側にいる私としてはそこまでしてもらわなくてもいいんだけどなあ、と思うのである。多分。表のも。

『麦わら帽子、他にあつたよね？』

『あるわよ？ 麦わら帽子と言わず、他にもたくさんね』

『ですが、数多くあれど一つとして同じものはありませんでしたね』

そうは言うけれど、どうせ帽子の大きさとか、鏝の形とか、多少の色合いとか、ちよつとした飾りの有無とか、そんな細々としたところが少し違う程度のものだろう。あの麦

わら帽子でなければいけない、みたいな特別な思い入れはないのだ。少なくとも、私は。表のは帽子に向かつて走っているチルノと大妖精の後ろに付いていつている。愉快な鼻歌を歌っているあたり、実に楽し気だ。ただ、前に行く二人と違って帽子にそこまです意識が向いていないあたり、そういうことなのだろう。

「取ったぞー！ さい、これ！」

「うわーっ！ ちるるん、だいちゃん、ありがとっ！」

遂に掴み取った麦わら帽子を誇らしげに表の手に手渡すチルノを見て、そういうことかなあ、と勝手に納得する。自分で取るより、チルノが取ってくれたほうがチルノが楽しい。それを見て表のも楽しい。二人楽しくてもっと楽しい。多分、そんな感じ。ま、そこまで考えてるか知らないけど。

「ところで、ハハハハハ？」

「えっと……、何処だろうね……」

表のが受け取った麦わら帽子を軽く叩いて土を落とす、ギョツと押し付けるように被っている間、キョロキョロと周囲をひっきりなしに見回していたチルノが呟いた。大妖精もここが具体的に何処だかあまり分かっていない様子。

『何処か分かるのいる？』

『何処なのでしょうか……』

『知らん』

『名称が付けられた場所が近くにならないので、残念ながら答えかねます。強いて言えば、魔法の森と霧の湖が多少距離を置いた場所にあると言えますが』

どうやら、名も無き平地らしい。とは言うものの、四季折々の花々が彩る今では寂しい印象を一切感じない。ここはここで咲き誇る花々を見るだけで気持ちが悪く落ち着けそう。表のも既に足元に咲いている派手な模様をした花に目を奪われてるし。

そんな表のの肩を揺らされ、振り向くとチルノが満面の笑みを浮かべていた。

「なーに？」

「こうなったら探検だー！ 冒険だー！ 面白い何かアタイ達を待っているに違いないー！」

「冒険かあー、探検かあー」

そう言つて目を輝かせるチルノは特に何かあるように見えないところをビシツと指差している。もしかしたら何かあるかもしれないけれど。

そんなことを考えていたら、大妖精が控えめに袖を引っ張っていた。

「えっと、彩さん。霧の湖の方角なら分かりますので、無理にチルノちゃんに付き合わなくても大丈夫ですよ？」

「大丈夫っ！ すっごく楽しそうだしねっ！」

「そうですか？　ありがとうございます！」

「気にしなくていいの！」

そう言つて表のは笑う。そして、チルノと同じ方向に顔を向け、人差し指を伸ばした。

「冒険へ、いざ行かん！」

「えっ、さい行かないの？」

「チルノちゃん……」

そこで勘違いされるとは思わなかった。

どんな花が似合うかな

「じゃじゃーん！ アイスフラワー！」

「うわーっ、綺麗っ！」

「チルノちゃん、こんなのはどうかかな？」

「ありがと、だいちゃん！」

意気揚々と探検だ冒険だとは言っていたものの、奇想天外で吃驚仰天の天変地異な出来事は起こらなかった。精々、物珍しい花を見つけたり、それをチルノが凍らせて持ち歩いたり、あるいは大妖精が深い藍色をした花々を編んで花冠にしてチルノに被せる程度だ。……まあ、そんな簡単に起きて堪るか、と言いたいけどさ。花の異常だけで充分だ。

『ところでさあ、あんな風に凍らせたり、花冠にして被ったりしてると、憑依してるけど、憑依してる幽霊に何かされるとかないよね？』

『ないわよ。お手入れしてる時に何もなかったでしょう？』

『そうですね。多少触れた程度で悪影響があるのなら、あの時紫様が黙ってるはずがありませんので』

『あ、そう。それならいいや』

放っておいて目の前の妖精達に何かありました、じゃあ目覚めが悪くなるかもしれない。ま、妖精相手に死ぬなんておかしな話だけどき。二日くらい消えるだけだ。一回休み。だからって、好き好んでそうなりたくないわけではないだろうけど。

そんなことを考えていたら、大妖精が表のを眺めていることに気付いた。その視線は頭、特に麦わら帽子に向かって伸びている。

「どうしたの?」

「あつ、いえ、彩さんの麦わら帽子にはどんな花が似合うかな、と」

「んー、どんなのが合うかなー?」

表のはそう言っって首を傾げているが、そういうのを考えるのは得意な方だろ。煌びやかで装飾過多なスペルカードをいくつも考えてるじゃないか。……え、私? さあ、そういうのは苦手だ。他のに任せたほうが早い。そうでしょう?」

そうは思っただが、せっかく多種多様な花々が視界一杯に広がっているのだ。こうして目の前に見本が咲いているのならば、表のと大妖精が二人で考えている間くらいは試しに考えてみるのも悪くないだろう。

『どんなのが似合うと思う?』

『そうねえ……。あんまり派手な色だと少し浮いちゃうし、淡い色だとい感じじやな

い？』

『デカくて派手なのドンと乗せたほうがいいに決まってるだろーが！』

『藤の花はどうでしょう？ 横に少し垂らすといいと思います』

『赤い薔薇なんかを一つ刺すだけでいいんじゃないかねえの？ で、言い出したくせに何もないのか？』

『あー……、なかなか思い付かないねえ。精々毒がないならいいかなあ、くらいしか』
『なんだそりゃ。関係ねえじゃねえか』

だから、そういうのは苦手なんだって。真つ青なヒヤシンスとか、真つ赤なポインセチアとか、目に映った花を一つずつ麦わら帽子に添えてみたのを思い浮かべるのだが、どれもいまいちピンと来ないのだ。強いて言えば、睡蓮を二つほど並べたのなら多少はマシかなー、と思つたくらい。

私が思い浮かべたのなんぞより、やつぱり他ののが考えたの方が圧倒的に似合うと思うのだ。藤の花とか似合いそうでしょ。うん。

さて、そろそろ二人は答えを出すかな、と思つて表を見上げてみる。しかし、どうやらまだ思い付きそうにないらしい。まあ、これだけたくさん咲いている花の中から一番いいものを選ぶのは容易ではないだろう。

「おーい。二人して何考えてるのー？」

「えっ、あつ、チルノちゃん!」

そうやって二人が考え込んで黙ってしまったのが気になったのが大妖精の肩を揺らしながら話しかけた。考えすぎてチルノのことが頭から抜けていたらしい大妖精はわたわた慌てていたが、すぐに平静を取り戻した。

「あのね、彩さんの麦わら帽子に似合う花を考えてたの。チルノちゃんは何が似合うと思っ？」

「向日葵!」

「向日葵! そっかあ、向日葵かーっ! 向日葵、どこに咲いてるかなあ?」

「ちよつと探してみる!」

そう言うと、チルノは少し見上げるくらい高いところまで飛び上がり、キョロキョロと周囲を見回し始める。やがて、クルクル回るチルノの動きが止まった。

「見つけた! あそこに一面向日葵だらけの場所があったよ!」

そして、チルノは表のと大妖精を見下ろしながら、とある方向に指を伸ばしながら喜々として叫ぶ。

「よーしっ、誰が先に付くか競争だー!」

「おー! 負けないよちるるん!」

「あつ、待ってよチルノちゃん! 彩さんも!」

そのままチルノは指差した方向へと飛び出してしまい、競争と言われてすぐさま飛び出した表の。そんな二人を大妖精が慌てて追いかける。実に楽しそうだ。

しかし、はて。一面向日葵だらけ、に聞き覚えがあるような気かするけれど、何かあったかなあ？

太陽の畑

目の前に広がるのは一面に咲き誇る向日葵。見覚えはあるような気がしなくもないけれど、どちらかと言えばないと思わなくもない。少なくとも、私がここで何かした覚えはない。そのはず。多分。

「着いたーっ！ 僕、いっちばーん！」

「負けたー！ くーやーしーいー！」

競争に勝った表のは思い切り両腕を広げて喜んでいいる。負けてしまつて地団太を踏んでいるチルノが頬を膨らませて表のを見上げているが、その膨らんだ頬を人差し指でツンツンと突いて遊んでいる。まあ、多少出遅れていたとしても、妖精相手に負ける敏捷じゃあないのだ。私と違ってね。

『あのさあ』

『どうかしたか？』

『ここ、何処だっけ？』

『太陽の畑ですね。多くの妖精が住み着いており、夏になるとこのように向日葵が一斉に花開くそうです。また、かの風見幽香が支配していることでも有名ですね』

『風見幽香あ?』

聞き覚えがある名前だ。だが、話した覚えはないし、ましてや顔を合わせた記憶すらないのだが……。一体、私はどこでその名前を知ったんだろう?

『げえ。あの最強格の?』

『そうですね。強大な力と膨大な妖力を有する、実に妖怪らしい妖怪だですよ』

『へー! そりゃ随分乗り越え甲斐のありそいな奴だな』

どうやら、とんでもなく強い妖怪で有名ならしい。しかし、一体どこからそんな自信が湧くんですかねえ……。? 無理でしょ、無理無理。たかが化け猫なんだから、プチッと潰されて終了でしょ。はあ。

『下手に目を付けられるようなことをしなければ基本的には温厚で、趣味は花と弱い者虐め』

『絶対勝手に表に出てちよつかいなんてしないでよね! いいわね!』

『はー!? 誰がんな馬鹿みてーなことすつかよ! 俺が真ん前からぶっ潰してやるわ!』

『下らん。敵ならば殺す』

『いやいや、勝てねえ勝負なんぞ逃げるに限るだろうが。今日を生きてりや明日が来るだろう?』

『そもそも、そのような無駄な争いは起こさないようにするべきですよ』

他のゴチャゴチャ言ってるけれど、まあいいや。趣味が弱い者虐めという部分がちよつと引つ掛かったけれど、虐めで済むならそれでいいか。虐められたくないけれど。はあ。

ちよつと騒がしくなったので距離を取り、唯一あの中に混ざらず奥のほうで座つていたの隣の腰を下ろす。ぼんやりと表を見上げているけれど、何を視ているのだろうか。見ても気にしてなさそうだけど。

『ところで、どう思う?』

『……ん』

『そっか、どうでもいいかあ。ですよねー』

ちよつと魔が差して訊いてみれば、生返事と共に首を傾げられてしまった。そりゃそうか。どんなに風見幽香が強かろうと、きつと対岸の火事みたいなものなのだろう。関わりないなら関係ない。当たり前だ。

私としても、関わらずに済むならそれに越したことはないと思つている。弱い者虐めなんてされない方が楽に決まつてるしね。

「はあつ、はあつ、二人共、速いよお……つ」

「だいちゃんおつそーい！」

「ちるるんだって私よりも、ねー?」

「むーっ! 次は勝つもん! アタイってば最強ですからあ!」

ビシイと指差して啖呵を切っているけれど、そんな涙目ではみみっちい負け惜しみにかか聞こえないよ。うん。表のなんてケラケラ笑ってるし。

「彩さん! チルノちゃん、彩さんの帽子に合う向日葵、見つけよっか」

「あ、うん! そうだね!」

大妖精からすれば揶揄いが過ぎるように見えたらしく、ちよつと窘められてしまった。まあ、表のは笑いは止めても笑みは浮かべたままなので、そこまで反省してなさそうである。

それはそうと、麦わら帽子に似合う向日葵を見つけに太陽の畑を回るつもりらしい。これだけたくさん咲いていればきつといいものを見つけられるだろう。

「だいちゃん! これどうかな?」

「彩さん、ちよつといいですか?」

「いいよ。なーに?」

早速チルノが見つけた向日葵に表のの頭、そこに被っている麦わら帽子を当てられる。ジーツと見詰めている大妖精の目は実に真剣だ。

「ちよつと小さいかな?」

「むー。じゃあ、これは？」

「それは大き過ぎるよ、チルノちゃん……」

帽子よりも大きいじゃあないか。流石にそれはない。私でも分かるぞ。

そんな風にくつも見えて比べて回り、どんどん奥へ奥へと進んでいく。なかなか決まらなけれど、これだけたくさんあるから、よりいいものがあるかもしれないと思ってしまうているのかもしれない。まあ、そんなことは私の考え過ぎで、単に気になるところがあるのかもしれないけれども。

「だいちゃん、これはどうだ！」

「んー……、いい！　今までで一番似合ってるよ、チルノちゃん！」

「やったー！」

「やったね、ちるるん！　だいちゃん、ありがとー！」

やがて、大妖精が一番いいと言う向日葵が見つかった。大妖精の言葉に大喜びなチルノはすぐに向日葵の茎を千切って手に取り、大妖精に手渡した。そして、使わないであろう茎や葉を丁寧に取っ払った向日葵を麦わら帽子に引っ掛けた。

その向日葵は鮮やかな真つ黄色の花びらに中央は深い焦げ茶色で、点々と活き活きとした黄緑が見える。麦わら帽子の横に添えると花びらが少しばかり鏝からはみ出しているが、向日葵しか目に付かないなんてことはないちようどいいサイズ。うわあお。時

間かかったけれど、本当にいいものを見つけたなあ。

「すつごい！ さい、すつごく似合ってるよ！」

「えへへー、どう？ 可愛い？ それとも恰好いい？ にやはっ！」

表のも嬉しそうにクルクル回って二人にみせている。どうやら、いたく気に入ったらしい。

そんな時、背後から静かに草を踏む音が聞こえた。視界に影が差す。

「あら、楽しそうね」

嫌な予感しかしない。声を掛けられた表のは、クルリと後ろを振り返った。

淡い黄緑色をした日傘を差した、鮮やかな黄緑色のくせつ毛をした真っ赤な瞳の少女が笑っていた。……ただし、目元に影が差しているのだが。

「ちよつと、私にも付き合ってもらおうかしら」

弱い者虐め、ダメ。ゼツタイ。

「さ、冷めないうちに飲みなさい?」

付き合えと言われ、有無も言わせぬままに連れてこられた一軒家。どうやら、ここは風見幽香が住まう家らしい。視線と雰囲気の影響によって、半ば無理矢理招かれたチルノと大妖精と表のは椅子に座らされ、冷え切った笑顔を浮かべながらティーカップを目の前に並べられた。中身は紅茶のようで、もてなしのつもりなのだろう。

「何これ!」

「……えっと、これは」

「ありがとっ!」

……ただし、グツグツと煮え滾っていないければであるが。そして表の。何でそんな笑顔でいられるんだ。

「……どうしてこうなった」

『ん』

頭を抱えながら思わず呟いても、返ってきたのは気のない返事だけである。

「ふうー、ふうー」

「ふっふーん、最強のアタイならこんなのちょちょいのちょよよ！」

表のは紅茶を必死に冷ましている。猫舌なのだ、仕方ない。隣に座らされていたチルノは、なんと紅茶を凍らせてアイスティーにしてしまった。うわああ、便利だなあ。

そんな表のの顔に幽香の大きく開かれた手のひらが迫り、そのままグワシツと掴まれ握り締められた。そして、隣からはガツンと鈍い音が響く。ついでに、攻撃を受けて飛び出そうとしていたのがいくつかに取り押さえられていた。

「あ痛ーっ！ ギブギブツ！」

「痛ーっ！ 何するかー!？」

「冷めないうちに、ね?！」

頭がミシミシ言っつていようと、背筋が凍りそうな声色で言われても、無茶なものは無茶だ。猫舌でなくともあんなものそのまま飲んだら口の中火傷必至である。

しばらくして、手のひらから解放された表のは両手でこめかみを擦っていた。下手したら凹んでいそうである。隣のチルノはおうおう呻きながら頭を押さえていた。

「えっと、あの、ご好意はありがたいんですけど、その、今日は雲一つなく暖かですし、私は温かいお茶ではなく冷たいお茶を飲みたいですが、よろしいですか……?！」

「あら、それは悪かったわね」

チルノを挟んだ向こう側の椅子に座っていた大妖精は、酷い目に遭った表のとチルノ

を見て顔を真っ青にし、引きつった笑みを浮かべながらしどろもどろに交渉。そして、沸騰寸前の紅茶を取り換えてもらっていた。かなり博打だった気がするけれど、賢明な判断だと思う。

幽香は大妖精のティーカップを手に取り、グイッと飲み干した。……何であれが飲めるんだよ。そして、新しいティーカップを取り出して大妖精の前に置いた。そして、新しく淹れ直したらしい紅茶を注がれる。

「どうぞ?」

「あ、ありがとうございます……」

……ただし、紅茶を注いだ傍から凍り付いて氷の柱になっていなければだけど。これでは飲めない。大妖精は引きつった笑みから当分戻れそうになさそうだ。

『虐めだ……。陰湿な虐めだ……。』

『……ん』

……弱い者虐め、ダメ。ゼツタイ。

そんなことを考えていたら、ふふ、と揶揄うような声が聞こえてくる。

「ま、人のものを勝手に盗った分はこのくらいにしてあげるわ」

そう言つて、愉し気に笑う。さっきまで感じていた圧力が、まるでなかったかのよう霧散した。今の幽香が浮かべている笑顔は、先程までの冷え切ったものとはまるで真

逆で、温かみを感じさせる。

「欲しかったら私に一言言いなさい。欲しいだけあげるわよ」

「は、はい！ ごめんなさい！ ほら、チルノちゃんも、彩さんも」

「ご、ごめんなさい……？」

「にはははっ、優しいねー！　じゃあ、ちよつと遅かったけれど、僕に一輪くださいっ！

ありがとうっ！」

「そうね。どうぞ」

それから、何やら打ち解けたらしい四人で愉快に話し始める。チルノの頭に乗っていた花冠を褒められたり、摘んでから少し時間が経ってしまったて僅かに萎れていた花に生氣を戻してくれたたり、幻想郷中の四季折々の花について話していたり、そんな他愛のない談笑。

……よく分からないけれど、助かった、でいいのかな？

あったような、なかったような？

「美味しー！」

「そう？ それはよかったわ」

表のは嬉しそうにどら焼きを頬張り、隣に座っているチルノと大妖精も紅茶と一緒に食べている。ちなみに、チルノが紅茶を凍らせてキンキンに冷やして飲んでも幽香は笑って許している。無論、嫌がらせ染みだ両極端な紅茶ではない。んー、紅茶とどら焼きって合うのかなあ？ ま、どうでもいいか。

『……はあ』

『どうかしたか？』

『いや、別にー』

ため息を吐いてしまったけれど、別に表のが羨ましいとか、内側にいるのは暇だとか、そういうんじゃない。何か幽香の視線がやけに気になっただけ。杞憂だろうけど。

どら焼きを食べ切って空になった菓子皿に幽香は新しくクツキーを広げ、早速手を伸ばそうとしたチルノに口を開いた。

「ところで、チルノだったかしら？ 貴女、妖精にしては強い力を持っているわね」

「おー！ 分かるの？ アタイの最強さが！」

「チルノちゃん……。ああ、気にしないでください幽香さん。チルノちゃんの口癖みたいなものですから」

「いいわね、最強。目指すだけならいいことだと思うわ」

「む？」

「最強なんて、なってみればつまらないものよ。一線を越えてしまえばどれも同じようなものだもの」

「んー？ どういうこと、ゆうか？」

「あら、貴女にはまだ難しかったみたいね」

自称最強のチルノはいまいち理解出来ずに首を傾げていたが、やがてクツキーに手を伸ばして事を流したようだ。喉元過ぎれば何とやら。……違うか。はあ。

どら焼きを頬張ったまま話を聞いていた表のも、最強がつまらないってところだけ気にして、残りは聞き流していた。つまらないってことは楽しくないってことだから。

なんて思ってたなら、幽香と目が合った気がした。……いや、違う。気のせいじゃない。明確に合った。しかも、品定めするような感じの悪い目。

「彩、だったわね。貴方は最強に興味があったのかしら？」

「んくつ。僕？ んー、あったような、なかったような？」

「……そう。貴方はそうなのね」

そう言つて、幽香は笑う。その目が表のじやなく、内側にいる私と他のに向いている気がしてならなかった。……杞憂じやなかったのかよ。はあ。

最強に興味？ ないよ。もうない。下手に強くなることには代償が伴うことを知っている。思い出したくないが、飲まれていくつか消えかけたことだつてある。最強なんてなるもんじやあないんだよ。……まあ、他のがどう思つていようと、私にどうこう言えることじやないけどさ。

『……はあ』

『どうしたの？』

『嫌なこと考えちやつただけ』

……止めよう。もうどうでもいいじやないか。そうだ、どうでもいい。どうでもいいんだよ、はあ。

「うわっ！」

「きやつ!？」

「ん？」

そうやって頭を抱えていると、突然視界が揺れた。

「あら、随分暴れん坊な客が来たようね。私はちよつと見てくるから、悪いけれどここで

お開きにしましょうか」

何事かと思えば、幽香が窓から外を見詰め笑みを深くしながらそう言った。表のは幽香に釣られるように窓の向こう側を見遣り、そこで土煙が上がってるのが見えた。どうやら、太陽の畑に何かあつたらしい。幽香の怒りを買った誰かがそこにいる、というわけか。

「そ、そうですね。幽香さん、今日はありがとうございました」

「ありがとー、ゆうか」

嚙猛な笑みを浮かべる幽香に大妖精は思わず頬を引きつらせながらも別れの挨拶を言い切った。チルノが顔を青くしているのは決して寒さが原因なわけがあるまい。氷精だし。

「そっかー。いつてらっしやーい、ゆうかりん！」

外に出て行く幽香を表のは手を大きく振って見送る。そして、家から出た瞬間、幽香の背中が一瞬にして掻き消えてしまった。……まあ、超スピードで土煙のほうへ飛んで行っただけなんだけど。

まあ、あれだ。何処の誰か知らないけれど、無事を祈るだけはして思う。祈るだけだけど。はあ。

怖かった一つ!

幽香の家から急ぎ足で離れていくチルノと大妖精に付いていく表のだが、二人と違って幽香の飛んで行った方角を後ろ歩きで見ている。瞬間、太陽の畑から空へと極太のレーザーが放たれる。その中に太陽の畑にちよつかいを出した、あるいは出してしまった何処かの誰かがいるのだろう。ここからでは誰が喰らっているのか見えず分からないのには、ホッと安堵したようなちよつと残念なような……。まあ、どうでもいいか。

「うっわー、すつごーい!」

「す、凄いですけど。確かに凄いですけど!! 彩さんは、幽香さんが怖くないんですか?」

「全然怖くないよ? だって、ゆうかりんは優しいからねっ!」

まあ、大妖精が抱いた恐怖は分からなくもないけれど、幽香の怒りがこちらに向いていないのだ。もしもあんなものを喰らったら、と考えれば確かに恐怖を覚えるけれど、喰らうことがなければ恐怖なんて感じない。打ち上げ花火に対して恐怖を覚えないと同じだ。むしろ、夜空を見上げて綺麗だと微笑む余裕すらあるだろう。そんなもんだ。……まあ、私は怖いと思っているよ。一晩寝れば忘れて気にしなくなるくらいに

は。

しかし、大妖精は表のの言葉を理解しても恐怖を拭き切れることは出来なかったようだ。思い切り頬を引きつらせたままだし、顔色がかなり悪い。

「ぶはっ！ あー、怖かったーっ！」

やがて太陽の畑から出てすぐ、やけに静かだったチルノは大声で叫んだ。呼吸もほとんど止めていたのか、ゼーはーゼーはー肩で息をしている。その呼吸はしばらく荒いままだったが、大きく深呼吸をしてどうにか落ち着いて汗を拭っていた。拭った汗が凍って冷たそうである。氷精だからね。うん。

「あれが、最強……！ アタイの力……！」

「違うと思う」

「むかー！ さいは最強のアタイの何を知ってるのよー！」

「ちるるんはお転婆で可愛いよねっ。にやははっ！」

ケラケラ笑う表の顔を真つ赤にして威嚇するチルノはまるで猫のようだ。私なんかより、よっぽど猫らしいかもしれない。

『最強のチルノ、って言われてもねえ……』

『遠い昔には地球が氷に覆われるような時代がありましたので、その時代にいたならば今より遥かに強力な力を有していたかもしれませぬ』

『なんだそりや。一体何時の話だよ?』

『一説によれば二十億年以上前ですね』

『どうでもいいわ』

そんな過去、行けと言われても行きたくない。あまりにも遠過ぎるし、違い過ぎる。喉でも鳴らしそうなくらい表のことを睨んでいたチルノだが、その瞼がすーつと下りていく。すぐにハツと見開いたけれど、手の甲で瞼をゴシゴシ擦り始めた。

「チルノちゃん、眠いの?」

「そんなことふあ……、ないもん」

大妖精の問いにチルノは否定するものの、欠伸交じりでは残念ながら説得力が皆無だ。

「ちるるんおねむ? 何で?」

「チルノちゃん、昨晚遅くまで遊んでいたんです。もしかしたら、それが理由かも」

もう一つ理由を上げるとすれば、あの幽香を前にして極度の緊張を保ってしまっていたが、ここまで来てようやく安息を得られた。それでドツと疲れが出て、急に眠くなったからとか。……まあ、私はチルノじゃない。実際のところは知らん。

表のは苦笑する大妖精を前にキョロキョロと周囲を見回しながら考え始めたようだ。まあ、表のが考えていることなんて大体予想出来る。

「じゃあ、近くでお昼寝出来そうな場所に行こっか！」

そう提案した表のの視線は、既に少し遠くにある満開の桜に向いている。木陰に入れば日に当たらないだろうし、昼寝にはちょうどいいだろう。というか、既に先客が一人いる。

「そうと決まれば、レッツゴー！」

「え、ちよつと彩さん？」

「うみゆ？」

そのまま有無を言わずチルノと大妖精の腕を掴み、グイグイ引つ張っていく。チルノは既にかなり寝ぼけているようで足取りがかなりふらついているけれど大丈夫かなあ？ 大丈夫か。多分。

お昼寝ターイムっ

目を擦って今にも眠りそうなチルノと大妖精を引つ張つてきた満開の桜の下。桜の下には死体が埋まっています、その生气によつて桜は綺麗に咲いているとかもつぱらの噂である。まあ、今に限つては生气ではなく幽霊なんですけどね。

「……なら日もあんま当たらないし、ちようどいいでしょ?」

「そうですね、……えっと、誰か眠っています、よう?」

表のと大妖精が顔を寄せて小声で話しながら目を向けた先には、見間違いではなかった先客が一人いる。両腕を組んだ枕を頭の下にして寝転んでいるくすんだ赤い髪の少女。その傍らにはその少女と同じくらい大きい鎌が地面に突き刺さっている。……ん?

『鎌?』

『大き過ぎませんか?』

『使えんのか、あれ?』

あまりにも現実味に欠ける代物で一瞬流しかけてしまったが、なんだあれ。ちよつと物騒過ぎやしないか? というか、何でそんな使いにくい武器を選んだ。振り回すなら

槍や薙刀のほうがいいし、斬るなら刀のほうが圧倒的にいいぞ。多分。

『随分と鈍ですね』

『とてもじゃないけど斬れないわよ、あんな刃じゃ。ちゃんと研がないと』

『使い物にならない』

しかも、刃物として使い物にならないらしい。そう言われて巨大な鎌を見てみれば、確かに刃に鋭さはほとんどなく、むしろ斬れないように潰されているように見えた。鈍器としてならまだ使えるかな？ いや、それなら金棒を振るつたほうがまだ使いやすいだろう。残念ながら私には、わざわざ刃を潰した鎌を武器として利用する理由が見出せない。なさそうだ。はあ。

「ぐっすり眠れるってことでしょ？ ならいいじゃん」

「え、あ、そうです、ね？」

巨大な鎌に目を丸くしていた大妖精は、表ののよく分からない理論に頷いた。頷いてしまった、とも言う。

「それに、ちるるんはもう夢の中だしねっ」

そう言いながら指差した先には、既に桜の幹を背にして船を漕いでいるチルノがいた。何か静かだと思っていたけれど、既に寝ていたのか。自称最強の妖精でも眠気には勝てなかったらしい。

言われた大妖精は、静かに眠っているチルノを見てしようがないと言わんばかりに肩を落とし、そつと隣に腰を下ろした。ゆっくりと横に傾いていくチルノの身体を優しく支え、そのまま自分の膝の上に乗せてあげていた。冷たくないのだろうか？

表のは手を組んでグツと身体を伸ばし、そして小さく欠伸をしながら大妖精の隣に腰を下ろして両脚を投げ出した。

「ちるるんは寝ちやつたし、僕も寝ちやおつかかなー」

「あつ、そうですか？ それなら、私が起こしてあげますよ」

「んー、勝手に起きるからいいかな。それじゃ、お昼寝タイムっ」

そう言い残すと、表のは体を丸めて瞼を閉じてしまった。

『たっだいまー！』

そして、そのまま表のは内側に戻ってきてしまった。眩しい笑顔が憎らしい。

『おかえりなさい。もういいの？』

『僕としてはもう十分楽しめたからいいかなっ！』

そう言って笑うけれど、これでは表が空になってしまっている。外で何か起きたとしても、身体は一切動かなくなってしまう。それは危険だ。

『どれか表に出ようか』

『寝るって言ったそばから起きんのか？』

『……あー、そう言われればそうか』

まあ、ちよつとくらくらいいいか。瞼は閉じられているけれど、耳は塞がっていない。表の音は問題なく聞こえる。表に出る分だけ僅かに遅れるだろうけれど、寝起きなんてそんなもんだ。そういうことにしておこう。はあ。

最強、興味ある？

　　臉の向こう側から降り注ぐ優しい木漏れ日を感じながら、大妖精の囁くような子守唄に耳を澄ます。眠れよい子よ、だつてさ。

『ねーねー、ゆうかりんが言つてた一線を越えたらどうこうつてどういうことなのかな？』

『んなことどーでもいーだろーが。俺はいつか藍も紫も霊夢も魔理沙も幽香も全員まとめてぶち抜いてやるんだからな！』

『無茶言うな。歩幅が違え』

『んだと!? 出来ねーつての!?』

『そこまでは言つてねえよ。そうかつかさんな』

『例えば、一億度と一兆度では後者の方が高温であることは明白ですね？ ですが、どちらにせよコップに注がれた水は一瞬で蒸発するでしょう。そういうことではないでしょうか』

『あら、料理だつてそんな感じよ？ 美味しい料理なんて、ある程度出来ればそれ以降は誤差だもの。……あ、食べる側にもよるかしら』

『むう。なんか難しい……』

ほら、内側はこんなにも騒がしい。どれもこれも眠りに就きやしない。身体だって精々寝たふり、あるいは死んだふりだ。……悪かったね、悪い子で。

最強についての話を聞いていると、そう言われればそうかもしれないな、と納得させられる。料理は知らないけれど、温度に上限なんてあるのだろうか？ 最強つてのは、何処まで強くなっても果てがなさそうだな。考えるだけで嫌になる。終わりが無いとか、同じことの繰り返しとか、そういう面倒なのは好きじゃあないんだよ。

そこまで考えて思わずため息を吐いてしまう。これだから強さなんていらんんだよ。身の丈に合った、ただの化け猫らしい、そんな力で十分。そう思うでしょう？ そうなんだよ。そういうことにしとけ。はあ。

半ば無理に飲み込みつつ、私は近くで微笑ましげに笑っているのにコソコソと近付いていく。あ、バレた。私にそんな慈しみを向けないでくれ。向けられても困る。

『……最強、興味ある？』

『それで救えるものがあるのなら』

『撫でたら首が飛ぶかもよ』

『では、飛んだ首だろうと問題なく癒せるでしょうか？』

『そればかりはならなきゃ分からないねえ』

『私としては、それよりも何処までも伸びる腕が欲しいです』

『……ゴム？』

『いえ、私が救えるのはこの手が届くところまでですから。この手が伸びれば、今まで手の届かなかつた、伸ばされなかつた誰かも救える。そう思いませんか？』

『思わない。というか、そんな腕が伸びる身体はちよつと嫌だよ』

『そうですか……』

人間の里の端から端まで腕が伸びるのを想像しながら首を横に振つたのだが、ちよつぱり落ち込ませてしまったかもしれない。まあ、そんな理想を語るのも抱くのも勝手だけど、私は嫌だと思つたのだ。……届かなければ近付けばいいのに。はあ。

なんて思っていたら、不意に横から衝撃を受け、そのまま私が倒れて何かが押し掛かつてきた。……何処のどれだ、この野郎。

『ねーねー、最強つてどのくらい凄いとと思う？ ねえ、どう思ぎゅぶ』

『……まず跳びかかつてくるのを、止めろ』

『ごべんばび』

無邪気にも跳びかかつてきやがったのの両頬を両手で潰しながら起き上がり、湧き上がってきた怒りに任せて睨み付けた。……まあ、謝つたようだからもういいや。

両手を離してやり、改めて顔を向ける。何故楽しそうに笑つてやがるんだ。はあ。

『でっ！ 最強つてどのくらい凄いの思う？』

『そう思ってるうちは最強じゃないんでしょ』

『んー、よく分かんないっ！』

適当なことを言つて煙に巻こうとしたら伝わらなかつた。ちよつと悲しい。

『けど、ゆうかりんが妖力をドバーツと空に解き放つていたの、あれ凄かつたよねー！

あんな感じのスペルカード、考えておこつかなあ』

『……そういうスペルカードはそこにいるのに任せた方がいいと思うけど』

そう言いながら指差すのは、さつきから出来る出来ないと言いつ争つてる片方。出来ると言つている方だ。……内容をよく聞いてみると、全員超えられる、ちよいと無理がある、のようだけど。まあ、大した差はないだろう。多分。

あれは華麗に魅せるより、一撃の火力に重きを置いてるはずだから。まあ、多少敵めるくらいはするけれど、それも一撃を当てるためのもののはずだし。

『だから、見せて美しいと感じさせるスペルカードを考えてよ。うん』

『そうするっ！』

『そうして』

会話を打ち切つて追いやったのだが、嬉しそうに去つていった。……まあ、いいや。

ポテリ、と力なく倒れると、額にそつと手を添えられる。

『お疲れのようですね』

『あんな調子に付き合い切れないだけ』

『元気でいいじゃないですか』

『度が過ぎるっての』

そう言つてため息を吐いた瞬間、突然ドスリと鈍い音が響いた。続いてぼふり、ズザーと擦れるような音。

『何事？』

『とりあえず出てみればいいのではないのでしょうか？』

『そうする』

首を縦に振りながら表へと飛び出し、私は目を開いた。

「あがつ、痛あ……っ」

しかし、それは視界を確保するためではなく、脇腹に響く鈍痛のせいである。最初の鈍い音の正体、これかよ!?

脇腹に手を当ててなけなしの癒しを施しながら、気付いたら桜の幹から少し離れたところに転がっていた身体を起こす。擦れるような音じやなくて、思いつ切り滑つてたのかよ。はあ。

大妖精がハラハラしているが、膝の上にチルノを起こさないようにしているのが少し

ばかり微笑ましい。もう一人眠っていた少女がいたはずだけど、私が内側にいる間に何処かへ行ってしまったらしい。

「あら、死んでなかったのね。狸寝入りにしては変だと思ってたのよ。猫だし」

「……酷いモーニングコールもあつたもんだねえ」

「もう昼過ぎよ」

ちよつとした冗談にも乗ってくれない冷たい霊夢に、私は苦笑いを浮かべるしか出来なかった。

正常な異常

とりあえず痛みが引いたので脇腹から手を離し、滑っている拍子に外れてしまったらしく地面に落ちていた麦わら帽子を手を取って軽く土を落としてから被り直す。せつかく付けていた向日葵が取れてなくてよかった。はあ。

それから、ズンズンこちらに近寄つて来る霊夢を改めて見遣る。なんか焦つてない？ そんなイライラするなよ。

そんなことを思っていると、ガツと胸倉を掴み上げられた。幸い、爪先立ちすればどうにか足が地面に付く程度だったけど、ちよつと苦しい。

「あんたなら知つてるでしょう？」

「何をかな？ 霊夢」

「この花の異変よ！ 何処も彼処も咲き放題じゃない！」

「あー……」

素言つてその辺を指差しながら青筋を立てて怒鳴る霊夢に、私は何とも言えない気分になる。特に理由もなく空を見上げていると、胸倉を掴んでいる手に力が込められていき、さらに苦しくなってきた。別にどうということでもないけど。はあ。

まあ、知ってること全部話してもいいんだけど、放さないと流石に話す気になれない。口を僅かに開いてからすぐに閉じ、胸倉を掴んでいる手にトントンと指を立ててやると、いかにも仕方なしといった風に手を離してくれた。……はあ、楽になった。

「さて、まあ、話しますからその前に一つ」

「何よ？」

そう言つて眉をひそめた霊夢を横に退け、私は満開の桜の元へ歩き出す。そして、ちよつとした騒ぎになつていたくせに大妖精の膝で幸せそうに涎を垂らして眠りこけているチルノを見遣り、荒事の気配を察したのか目を白黒させている大妖精と目を合わせる。無邪気な笑顔を浮かべようと試みるが、どうにも張り付けたような笑顔になつてゐる気がしてならない。はあ。

「大よ、……だいちゃん。わ、……僕はちよつと霊、……れむれむとお話があるんだー」
「えつと、ん……？」

何か喋ろうとした大妖精の口に人差し指を当てて閉ざし、その手を開いて両目を覆うように被せた。そして、その手に妖力を込める。

「息を吸つて、……吐いて。もう一度吸つて、……吐く。そう、そのまま深呼吸する」
「すうー……、はあー……」

「うん、いい子。そして、貴女は眠くなる……」

「すうー……、はあー……、すう……、すう……」

睡眠の妖術。相手を眠らせることが出来る、と言えば聞こえはいいけれど、実際はほとんど使い物にならない。何せ、私に出来るのは精神的に平常で落ち着いている者に眠気を抱かせるところまでだから。しかも、眠らせられるのは一分あればいい方で、酷いときは一秒足らずで目覚めてしまうのだ。戦闘中に強制的に眠らせるなんて無理だし、最終的に寝るかどうかは相手の意思次第で、睡眠時間は極めて短い。正直、相手を眠らせるなんて腹を殴って昏倒させた方が確実だろう。多分。

まあ、大妖精と言えど所詮は妖精。結構単純だったらしく、妖術の効きはかなり早い方だった。これなら一分くらいは寝てくれるんじゃないかな。……妖力結構使ったんだから、そうであってほしい。

大妖精の顔からそつと手を離し、気付いたら隣で黙って待っていてくれた霊夢を見上げる。

「さ、少し場所を変えましょうか。二人を起こしたくないんでね」

「片方あんたが眠らせたじゃないの」

「細かいことは気にすんなよ」

霊夢の指摘を聞き流し、私はふわりと浮かび上がる。その横を霊夢が飛び抜けていき、さつさと先を行ってしまった。私はその後を追いかけていく。……あー、速い！

どんどん距離が離れてくんですけれど！ 身体強化の妖術を使ってまで加速したくないからそのままですけれどね。はあ。

霊夢が迷いの竹林手前に着地したのが見えたので、私もそこに向かって飛び続け、霊夢のところに着地する。……少し疲れた。

「遅いわよ」

「貴女が速いだけ」

霊夢に睨まれたけれど、私はその視線をサラッと受け流す。だから、何でそんなに焦ってるかねえ……？ そんなことを考えていると、ふと竹の花が目付いた。うわあ、竹の花までしっかりと咲いているのかよ。これ、放っておいたらまさか竹林全滅なんてならないよね？ ま、別にいいや。

「で、知ってることでしたね。異変は起きていませんよ」

「はあ？ 何処がよ！ あんたの目は節穴なのかしら!？」

「起きているのは正常な異常だ。六十年周期で起こる花の異常。外の世界の幽霊が過剰に溢れて花に憑り付いているだけなので、死神が回収して回れば自然と元に戻りますよ」

そう言っていると、霊夢の表情が幾分気楽なものになった。そして腕を組み、少しばかり考え始めたようだ。

「ふうん、何だかズレてる気がしたけれど、そういうことなのね……。黒幕探しは止め

て、死神探しに変更ね」

「ところで、死神ってどんな感じなんでしょう？」

「あんた、知らないの？ 馬鹿みたいに大きな鎌を持つてるのが多いから見ればすぐ分かるわ」

「え」

……あの寝てた少女、回収サボってた死神だったのかよ！

無計画に、当てもなく

靈夢から明かされた内容に思わず声が漏れてしまったが、靈夢はそんな私を気にすることなく一人で勝手に納得してきつきと何処かへ飛んで行つてしまった。空の彼方へ遠ざかつていく靈夢をその場で見送り、やがて豆粒よりも小さくなったところにふっと一息吐く。何処に行くつもりかは知らないけれど、きつと死神がいる当てでもあるのだから。まあ、頑張つてくださいな。応援くらいはしますよ。今だけは。

両手で麦わら帽子の鏝を軽く握り締め、ググツと引つ張つて頭に押し付ける。そうして自分で押し付けている麦わら帽子に押し潰されるように膝を曲げ、そのままその場にしゃがみ込む。……ああ、ちよつと疲れた。さて、どうしようか。私は特に行きたいところがあつて表に出てきたわけじゃあないわけで、つまり私には行く当てがないのはあ。

「……どれか代わりたければ代わつていいよ」

そう呟いても、何故か私を内側に引つ張つてくるのはいかなかった。おかしいな。私なんかより有意義なことをしたいのがあるだろうに、どうして。

まあ、それならしょうがないか。無計画に、当てもなく、彷徨うとしよう。そうだ。花

を見て回ろう。内側からじゃあなく、表で直接。うん、そういうことで。早速無計画でも当てもなくでもなくなつてしまつた気がするが、まあよし。

そうと決まれば、とりあえず歩き出した。蒲公英と菊が隣り合つて咲いているのを見て苦笑いを浮かべ、今朝見覚えがあつた鳥兜を見つけてどうするかちよつとだけ考へて放つておき、薔薇を手に取りろうとして茨の棘が刺さつてしまつたり。まあ、頭の端では死神にさつさと回収してほしいなあ、と思ひながらもそこそこ花の異常を楽しんでいた。

そうして気付けば妖怪の山の麓に付いていた。よくもまあ、これだけ歩き続けていたものだ、と自分で自分に感心する。そう意識した瞬間、脚が棒のようになつたけど。はあ。

「ん?」

少し遠く、妖怪の山から下りてくる足音が聞こえる。足音からして一人ではないけれど、五人もいないだろう。誰だろうか、と思つて近付こうとしたが、すんでのところまで止めた。その代わり、すぐさま足音の元から離れるべく棒のようになつた足を無理に動かし、出来るだけ音を立てないようにしながら樹の裏に滑り込んだ。

「うわあーっ! 何処を見回しても綺麗ですね、藍様!」

「そうだな、橙」

幸せそうに話す二人の声が聞こえてきた。だから、わざわざ私は隠れたのだ。一つ一つの花を愛でて回る橙と、その姿を眺めている藍。甘い雰囲気が見ているこちらにまで嫌ってほど伝わってくる。楽しそうだ。嬉しそうだ。羨ましいと思う。きつと、私があそこにいたら、そんな二人だけの空間はぶち壊れてしまうだろう。そうだと分かり切っているから、こうして隠れているんだけどさ。

そんなことを考えていたら、なんだか虚しくなってきた。あーあ、どうしてだろうな。私はああして楽しめない。喜べない。ああして橙が浮かべている幸せを前面に出しているかのような笑顔、最後に浮かべたのはいつだったのだろうか？ ……覚えてないや。あつたような、なかつたような。そもそも、浮かべたことがなかつたのかもしれない。……まあ、もうどうでもいいか。はあ。

「藍様！ こっちに行きましよう！」

「はは、そう引つ張るなよ」

「にゅふふつ。はあーい」

日の当たる世界を歩み続けている二人を、私は木陰から見ていた。

薄っぺらい嘘っぱち

藍と橙の二人が既に去っていったというのに、私はこの木陰から離れる気になれなかった。立ち上がる気にもなれず、樹の幹を背に座っていた。見渡す限り、何処も彼処も花だらけ。さつきまで綺麗だと思っていたのに、今はどうとも思わなくなっていた。少し前に刺さってしまった薔薇の茨の棘の傷跡が、今となつては馬鹿みだいだった。さつきまで多少なりとも楽しめていた花の異常が、今となつては早く終わってほしいと思つた。

しかし、だからと言つてあの眠つていた死神を探そうとも思えなかった。わざわざ私があつても霊夢が解決してくれるさ、と自嘲しながら思う。さつきまで思つていたことが、薄っぺらい嘘っぱちが、少し湿つた微風に乗つて剥がれ落ちていく感覚がした。

「……あーあ。どうしてなんだろうなあ」

私は嘘吐きだ。

これまでに数え切れないほどの嘘を吐いてきた。きつと嘘八百よりも多いだろう。口を開けばとりあえず嘘が漏れていたなんてこともある。相手のことを思つて嘘を吐いた。相手のことを貶めるために嘘を吐いた。計画的に嘘を吐いた。咄嗟に嘘を吐い

た。

誤魔化した。騙した。はぐらかした。言いくるめた。取り繕った。惑わした。化かした。お茶を濁した。屁理屈をこねた。言い逃れをした。詭弁を弄した。言い訳をこねくり回した。煙に巻いた。論点をすり替えた。論点をずらした。三味線を弾いた。混乱させた。幻惑させた。惑乱させた。当惑させた。

そして、今も変わらず嘘を吐く。私一人しかいないから、私自身に嘘を吐く。

興味あることを興味ないと言う。つまらないものを楽しいと笑う。羨んだものをどうでもいいと意地を張る。嫌だと言いなから求める。望んでいたものをいらないと目を逸らす。乾き切った心にはそれでいいと思う。

本当のことを嘘のように語り、嘘のことを本当のように騙り、そうしているうちに自分でもどつちが嘘でどつちが本当かも分からなくなってしまう。……いや、もう分からなくなっているのだろう。向き合っていないから、忘れてしまった。物覚えが悪ことから、ぼやけて薄れてうやむやになって消えちゃうんだよ。

見上げてみれば、雲一つない澄み切った青空。……本当に？ 何処から見ても雲は存在しないのか？ 一つくらい見ないふりしてるかもしれない。本当は分厚い雲が空を覆っているかもしれないよ。なーんてね。

「おや」

そんな馬鹿みたいなことを考えていたら、私の前を誰かが立ち止まった。鮮やかな深緑の髪になんかとげとげした帽子を被り、紅白のリボンで装飾している背の高い少女。その手には変な模様の棒が握られている。

「……どなた？」

「四季映姫・ヤマザナドゥ」

「あつそう。で、映姫でいいかな？ 私に何か用？」

「映姫で結構。私は部下である小町を探しているのです。何処かで見ませんでしたか？」

いきなり名前を言われても見当がつかない。聞いたことがあるかもしれないけれど、少なくとも今すぐ思い出せない程度には知らない名前だ。

そう思いながら首を傾げていると、映姫は一つため息を吐いた。

「くすんだ赤い髪をして大鎌を背負っている死神です」

「桜の下で寝てたけど、何処か行った」

「……小町」

知つてることを言っていると、映姫は変な模様の棒を固く握り締めて口元を隠した。しかし、口を隠したところで目を見れば怒っているのは明白である。口隠して目を隠さずじゃなくて、目は口程に物を言うかな。

質問に答えたから、もう用はないはずだ。それなのに、ずっと映姫の鋭い視線が突き刺さっている。私の前から立ち去らない。

「……まだ何か用？」

だから、訊いた。苦言を呈するように、不愉快であるように、眉をひそめながら。

「礼と言つては何ですが、一つ貴女に説いてあげましょう。今後の貴女のためになる助言です」

「はあ、そうですか」

だということに、何でもないかのように返されてしまった。

それにしても、魂を刈ったり、三途の川の渡し船をしたりする死神の上司が、これから生きていくための助言をするのか。何だか変な気分である。

そんなことを思いながら、映姫を見上げる。暫し待つと、変な模様をした棒の先を私に真っ直ぐと向けた。

「そう、貴女は少し自身がなさ過ぎる」

……いい、迷惑だ。

何を言っているのだろう、と思った。

「……自信なら、身の程知らずなくらいありますよ」

「それは貴方であつて貴女ではないでしょう。いえ、貴女自身ではあつたのですが。……それと、自信ではなく自身です」

言われた内容を理解して、まるで土足で踏み抜かれたような嫌悪感を覚えた。あと、せつかくずらしてやろうと思つたのに、足跡増やしながら戻りやがつて。はあ。

何か喋ろうとして口を開いたが、何故か何も出てこなくて口を閉ざす。おかしいな。言いたいことなんてなくても、言葉は出てくるものなのに。

「貴女の言う身の程知らずな自信は、貴女自身から乖離しつゝあつた。現に、切り離されてる」

そんな私を見下ろす映姫の視線に耐えながら、続きを黙つて聞かされる。

それは、既に過ぎ去つたことだ。止める。蒸し返さないでくれ。頼むから。

「困難に立ち向かう挑戦は、貴女自身から乖離しつゝあつた。現に、切り離されている」
「……………」

「身と心を守る防衛は、貴女自身から乖離しつつあった。現に、切り離されている」

「……………」

「記憶し把握する聡明な思考は、貴女自身から乖離しつつあった。現に、切り離されている」

「……………」

「万物を楽しめる童心は、貴女自身から乖離しつつあった。現に、切り離されている」

「……………」

「全てを平等に見下ろす達観は、貴女自身から乖離しつつあった。現に、切り離されている」

「……………」

「施し癒す慈愛は、貴女自身から乖離しつつあった。現に、切り離されている」

「……………」

「敵を葬り去る殺意は、貴女自身から乖離しつつあった。現に、切り離されている」

「……………」

そう思つても、決して止まることなく聞かされた。言いたいことはあるはずなのに、何故か口が開かない。無理に開いても、パクパクと空気だけが漏れていくだけだった。「全て、貴女自身から外れ過ぎていた。人格が、魂が割れるほど。だから貴女自身は失つ

た。……失い過ぎた。貴女は非常に不安定だ。だから、貴女は自身がなさ過ぎると説いているのです」

その口調は、厳しくも優しくかった。きつと、私のことを想って説いてくれているのだろう。確かに失ったものは取り戻すべきなのだろう。確かにそうだ。その通りだ。

……いい、迷惑だ。

「知ったようなことを言いますね」

「知っていますから」

「なら、言うなよ。……半端に知ったような風に言いやがって」

「貴女は一人に戻るべきだ。……そのままでは、貴女が消えかねません」

「それがッ！ 知った風だつて言つてんだよッ！」

叫んだ。さつきまで何も出てこなかった口が嘘のように、それとも溜まっていたものを一気に吐き出すように。

何も知らねえで好き勝手言いやがる。ふざけてんじやねえよ。戻れだ？ ……ああ、戻りたいさ。けど、戻るつてことはつまり私の愚行の再来だ。そんなことも知らないで、さも正しいように論しやがる。九つから一人になるべきだと。そうだね。正しいね。だが、同時に過ちだ。それは私の過ちで、目の前に立つ映姫の過ちだ。罪を犯せと、そう唆してくる。

「ええ、知っています。知っていて言っているのです」

「……は？」

「……何言つてんだ。私が九つ揃つて何をしたか知つた上で言っているのか？」

「貴女は罪だ何だと言いますが、あんなもの大した罪にはなりませんよ。それよりも、貴女が極楽にも地獄にも逝けず消え去る方が問題です」

「そんなの問題じゃあねえ！」

既に終わった身だ。私は、ただ生きているだけなのだから。

それよりも、そんなどうでもいいことよりも、許しがたいことを言つた……っ！

「私は全てを無下にしたんだぞ?! 私自身の都合でッ！」

「どのようなものも使い様です。貴女はその力で何をしましたか? ……何もしていません。ですから、罪に問えませんよ」

「違う、使い様なんかじゃあない。存在そのものが罪なんだよ！」

「貴女はこの手が罪と思つていますか? 貴女はこの足が罪と思つていますか? 首を絞め殺せる、頭蓋を蹴り碎ける、この手足が」

「……それとこれは違う」

「同じです。手も足も、貴方が罪だと言うその力も、貴女がどう思いどう使つたかが判決を下すのです」

ふらつく脚で立ち上がり、私を説いた映姫の両肩を掴んだ。今持てる力全てを使い、縫り付くように。まるで、癩癩を起して泣きじゃくる子供をあやすような口振りだった。……いや、実際そうだったのだ。視界が酷く歪む。

「……私を、そんな簡単に許さないで……」

「私は判決を下すだけです。許す許さないは私の仕事ではありません」

その冷たい言葉は、今の私にはちようどよかった。

貴女は貴女らしく

縁側から庭を見ていた。草の緑と樹木や土の茶色、青空と柔らかく浮かぶ白い雲、それと少々の花々。何と言うことはない。あれから三日経ち、幻想郷中を彩った花の異常がただの日常に戻っただけだ。

つまり、あの小町と呼ばれた死神が必死になって幽霊を回収し切った証拠でもある。博麗の巫女である霊夢が見つけて無理矢理働かせたのか、裁判長である映姫が見つけて叱りつけたのか、はたまたそれ以外の何か理由があるのか。まあ、私が知らないところで何かあつて気付いたら勝手に終わったことだけは確かだ。だから何だ、という話だけど。はあ。

「自身、ねえ……」

そんなことを考えていたからか、ありがたいお説教のことを思い出した。死神の上司は裁判長だったらしい。曰く、無暗に地獄に堕ちたりしないように説教をして回るのが趣味だとか何とか。そりゃあ知った風どころか筒抜けなわけだ。内側でそのことを私に教えてくれたのは、よくもまあそんなことまで知っているものだとちょっと感心したよ。うん。

自身がなさ過ぎる、つてき。九つもあるくせに、私が足りてないって。おかしいことを言う。私の一部だった、今となつては別の人格。それでいて皆私だ。私に私を殺せと言う。消せと言う。そんなことしちやあいけないと思わない？ きやあ、じぶんごろし。

あれだけのことをしておきながら、全部終わらせておきながら、罪にならないつてき。不思議なことを言う。一人に戻ると言うことは、再びその力を手にするつてことだ。使いたい物にならないくせに、存在してはならない力だ。……二度と御免だ。

そして、それらの言葉は嘘偽りないものであった。本気でそうあるべきだと、私を想つて説いていた。きっと、私と映姫では価値観が異なるのだろう。そんなの当たり前なんだだけどき。はあ。

「隣、いいかしら」

そんなことを考えていたら、急に隣から声があった。声があった方に目を向けてみると大きくスキマが開き、そこからぬつと飛び出した紫様が私の隣に腰を下ろした。……質問した癖に答える前に座らないでよ。ま、どうぞと返すつもりだったのだ。別にいいや。私と紫様の間にコトリとお盆が置かれ、紫様がその上に乗せられていた片方のお茶を手にした。一口含み、それからポツリと呟いた。

「あの映姫に何か言われたみたいね」

「……そうですね」

「何と言われたかは知らないけれど、貴女は貴女らしく生きればいいの。あんな説教に従う必要は一切切ないわ」

紫様と映姫の言っていることは、ほぼ真逆だ。きっと、紫様と映姫では価値観が異なるのだろう。そんなの当たり前なんだだけだよ。

どちらの言葉を取るか、少し考える。紫様の言葉は正しく誤っていて、映姫の説教は異なった正しさだ。どちらも正しい。けれど、どちらも違う。当たり前。

正しいって、難しい。

「紫様」

「何かしら?」

「死者として生きる。生者として死ぬ。どちらがいいと思えますか?」

もう片方のお茶を手にとって、その濁った緑色の水面に映った私を見詰める。私が見詰めている。そんなことをふと思いながら、私は一つ訊ねた。これだって、別にどちらが正しいわけでもないのだろう。世の中、そんなもんだ。

少しの間紫様は頬に手を添えて考え、そしてその手の指先を私に向けて答えた。

「生者として生きなさい」

……おい、何言ってるんだ。

「紫様、答えになってないですよ」

「その二択がそもそも間違ってるのよ」

「……そうですか」

苦笑いを浮かべながら、手にしているお茶を一気に飲み干す。……苦っ！ 誰が淹れたんだよ、こんな不味いお茶!?

そんな悪態は口に出さず、色鮮やかな花々を失った庭を眺める。綺麗なだけじゃない、けれど美しく整えられている。

……あーあ、世の中つてのは甘くないなあ。はあ。

閑話

邪魔するわね

桜の下で悠長に眠っていた死神を蹴つ飛ばしてから数日経ち、異変ではなかつたらしい花の異常は終わりを迎えた。あの時に彩から真相を訊いていなければ、きつと申し越し空回りして遠回りする羽目になっていたと思う。そういう意味では手早く済んでよかつただろう。

「はあ……」

しかし、異変ではないということはすなわちただ働きなのだ。こんなあからさまな異変を解決出来ないようではまるで私が怠けているようではないか、と思つて乗り出したわけだけど、異変ならよかつたのに、と思う私がいる。そう、何事も無かつたら商売あがつたりなのだ。

何かいい商売ないかしら、と想いながらため息を吐きつつ境内を掃いていると、縁側に人一人が優に通り返けられるほど大きなスキマが開いた。箒の手を止めて袖から札を数枚取り出しつつ、スキマから出てくるであろう紫を警戒する。

「邪魔するわね、霊夢」

案の定スキマから現れた紫と、その脇に抱えている彩を見て思わず肩を落としてしまふ。どうしてあんな雑に持たれて何の抵抗もしないのか……。内側にはそういうのもいるのだろうか？　そういうことにしておこう。

大きなスキマを閉じた紫は出来のいい人形でも置くように彩を隣に座らせ、新たに小さなスキマを開いて饅頭が四つ載っているお盆を取り出した。ここでくつろぐ気か。

早速饅頭を頬張っている紫を放っておくわけにもいかず、私は掃除を一旦止めて彩とは逆側の紫の隣に腰を下ろす。ちようど甘いものが欲しいと思っていたところだし、ちようどいいわね。けれど、饅頭だけだと喉が渇くわね。

「お茶はないの？」

「お客様に用意させるのかしら？」

「悪いけど、ここはそういうお店じゃないのよ。欲しければお賽銭の一つや二つ出してからにしてください」

「そうっ？」

そう言うのと、紫は何処からともなく見たことのないお札を取り出し、スキマを介してお賽銭箱の中に放り込んだ。……あれ、使えるのかしら。贋作なんかだと色々と面倒なのよ。

まあ、ああ言ってしまった手前、それと私も喉が渇いているのだし、お茶を淹れに行

く。湯呑を二つ取り出し、そういえば彩もいたことを思い出してもう一つ取り出して茶葉を急須に入れる。紫の分は出廻らしにしてやろうか、と一瞬考えたけれど止めておいた。

「ほら」

「ありがとう。……彩、飲む？」

「ん」

淹れてやったお茶を紫との間に置くと、紫は湯呑を彩に手渡していた。彩はというと、囁くような声で肯定なんだか否定なんだか分からない生返事をしていただけで、受け取ったということは肯定なのだろう。……本当に静かね。下手すればいることを忘れてしまいそうなくらい。

紫と彩が飲んでいるのを横目に、私もお茶を一口含む。うん、美味しい。

「ところで紫。さっきのお札は使えるわよね？」

「二千円札のことかしら？」

「……人里の子供でも分かる偽物じゃない。淹れてやって損したわ」

「嫌ねえ、本物よ？ 外の世界で記念に発行されたけれど、使いづらいからと早くも忘れ去られたの」

「何の記念か知ったことじゃないけれど、本物なら別にいいわ」

本物なら使えるだろう。

紫が餌付けでもするように彩に饅頭を押し付けているが、私はお茶を飲み干してから話を切り出した。

「で、何の用かしら？」

「別に急ぎじゃないけれど、少し見に行つて欲しいところがあるのよ。ちよつと怪しい家」

「……そう」

紫にそう言われ、私は湯呑を置いて立ち上がった。手持ちは十分にある。

「あら、もう出るの？」

「早い方がいいでしょう？」

「まあ、そうね。場所は——」

言われた場所を覚える。奥まった場所にある家で、いかにも言つた感じの場所だった。v何もなければそれでいい。留まってくればそれもいい。そして、既に成つてしまつていれば退治する。ならば、早い方がいい。成つてしまえば、もう遅いものだから。

「帰つたら夕食奢りなさい」

「いいわよ」

紫が唾つたのを見てから、私は飛び出した。少しでも早く済ませるために。

……きつと、もう手遅れなのだろうけれど。

私に全ては救えない

「……はあ」

昨晚病死したという方の葬式から帰り、そのまま真つ直ぐと部屋に戻った。一人きりになった部屋の中、私は肺に重く押し掛かっていた空気を吐き出した。喪服を身に包み当主を亡くして静かに涙を流す夫人のことを反射的に思い返してしまい、お腹の奥にズシリと重いものが押し掛かる。それを再び吐き出そうとしても、肺には何も入っていない。息を吸ってやれば、吐き出した以上に重くなる。……命は、重い。

そんな時、閉ざされた襖を叩く音がした。

「阿求さん、お茶をお持ちしました」

「……彩様、ですか」

けれど、今は少し、一人でいたい。けれど、一人では押し潰れてしまいそうだ。そんな葛藤が私の中で揺れ、やがて彩様を部屋に招く方へと傾いた。それに、まだ礼を言えていない。

どうぞ中へ、と掠れた声で言うと、襖が静かに開いて慈しむような微笑みを浮かべる彩様と目が合った。押し掛かる心の重みがほんの僅かだが軽くなったのを感じ、部屋に

招いてよかったと思う。

「彩様。この屋敷の留守をしてくださり、ありがとうございます」

「気にしなくていいのよ。けど、どういたしまして」

彩様は、私が屋敷を出る際に屋敷に現れ、その時私が着ていた喪服を見て事情を察して留守をしてくれていた。その時の表情は悲痛が見え隠れしていて、見ていた私も少し痛かった。彩様が私に付いて葬式に参列しようとしなかった理由は、亡くなった方との関係がないのもあるだろうが、彩様が妖怪であることが一つになってしまうのだろう。

お盆に乗せられた二つの湯呑にお茶が注がれ、その一つを受け取る。湯呑から伝わる温かさが、今の私には心地いい。

「辛そうですね」

「……そうですね」

やはり私の表情に出てしまっていたようで、彩様に心配されてしまった。

亡くなった当主は、それなりに名の知れた方だった。私が年端もいかなない少女であったころ、何度か顔を合わせて世間話をしたことを覚えている。しかし、一昨年にも一人娘を亡くしてからは少しずつ憔悴していき、それを境に表に顔を出さなくなってしまう、最近になっては見ていられない程に変わり果ててしまったと噂され、そして娘の後を追うように……。

「私自身ならいざ知らず、誰かが亡くなるのはやはり慣れませんか。……とても、悲しいです」

「そうね」

寂しげに微笑む彩様は、開いた両手をジッと見下ろした。

「手を伸ばしても零れ落ちてしまった命を、手を伸ばしても振り払って落ちていく命を、手を伸ばしても気付いてくれなかつた命を、私はいくつも見てきたわ。私にもつと出来ることがあつたんじゃないか、って思ったことが何度もある。……その亡くなった方も、私から何かしてあげていれば、その病気を癒していればもしかしたら、って思ってしまう。けれど、もう私に全ては救えないわ」

そこまで言つて口を閉ざした彩様は、顔を上げて私の目を見詰めた。その瞳の奥に強い意志を感じ、目が離せなくなる。

「だから、忘れないであげて。けれど、引き摺らないであげて。それが、遺された者の責務だと、私は思うの」

「……そう、です」

忘れない。私は、忘れられない。そんな能力を持つていてよかつたと、そう思った。

ネタバラシ

表のは鶏がらスープの素なるものをサラサラと鍋の中に振りかけ、もやしとわかめと一緒にクルクル回している。何時だったか紫様が外の世界から引つ張つてきていた調味料だ。流石に朝つばらから鶏を煮込む気にはなれないらしい。面倒くさそうだし。

そんなことを思いながら表から目を離し、私は内側に目を向けた。……さて、色々とネタバラシをしようか。

『いやあ、驚いた。嘘はいけません、なんて言うんじやあないかと思つてたよ』

『私から進んで虚偽を働こうとは思いません。ですが、その嘘で救われるなら、私はそれで構わないと思つていますよ』

ちよつとだけ挑発するように言つてみれば、澄ました顔で返された。やれやれ。

『手際よかつたなあ。いやあ、あれなら不合格になつたのも納得するつてものだよ。うん』

端的に言おう。病死は嘘だ。霊夢が始末した結果である。

霊夢が現場に急行してみれば、既に半分以上侵されている人間が一人いて、放つておくわけにはいかなかったわけだ。彼のためにも、人間のためにも、里のためにも、幻想

郷のためにも、そして博麗の巫女として。急ぎじゃないのは、既に手遅れだったからに他ならない。一日二日遅れたとしても大差はなかった。……まあ、流石にずっと放置というわけにはいかなかっただろうけれど。

紫様曰く、一昨年亡くした一人娘のことを忘れられず、胡散臭い交霊術に手を出したらしい。その過程はどうだったのか知らないけれど、結果として一人娘とは全く関わりのない悪霊を引き寄せて憑かれ、精神は半分以上壊れてしまった。あのまま寿命なり何なりで死んでしまえば、悪霊に身体を完全に乗っ取られて色々と面倒なことになるだろう、とのこと。

だから、霊夢に行かせた。男に憑いていた悪霊を祓い、そして皮肉にも悪霊憑きによつて壊れた精神が埋め合わせられて辛うじて生き延びていた男は急死した。そして、病死したことになった。下手に真実を伝えるより、そうした方が穏便に済むから。

『ちえつ。最初は俺に任せるとか言ってたくせによー』

『しゃあねえだろ。ありや、まだ人間だったんだ。人間のまま済むなら、そっちの方がいいに決まってる』

『私が悪霊を祓わず始末してしまえば、彼は妖怪に成ってしまっていた。ですから、博麗の巫女に任せるのが最良なのでしょう』

あそこで話している通り、最初は再試験の予定だった。しかし、人間の里における男

の立場から、人間のまま逝かせてやった方がいいと判断したそう。大変だなあ。はあ。

悪霊を祓うつてのは難しい。無念を晴らしてやれば自然と剥がれることもあるようだけど、へばり付くのはどうやっても無駄だ。力業になる。問答無用で悪霊を祓うのは、博麗の巫女に任せるのが一番手っ取り早い。

『……まあ、貴女がやる気になれば話は変わったんですが』

『何だよ、こつち見んな』

『扱えるでしよう？ 退魔の妖術』

『……自爆用だよ』

しかも、自爆するくせに自死には程遠いのが……。私自身が化け猫という妖怪、すなわち魔なのだ。使おうとすればヒリヒリする。使つてしまえばビリビリくる。しかも、使ったところで悪霊を祓えるかどうかなんて相手次第だ。相手が弱ければ上手くいくだろうけれど、強ければ一切通用しないだろう。はあ。

『ま、済んだことだ。もういいよ』

そう言つて、私はこの件について考えるのを止めることにした。

「さて、出来上がったことだし、紫様を起こさない」と

表を見上げてみれば、表のは火を止めてそそくさと歩き出している。いつも通りの日

常だ。

人間一人がどう死んだところで、私にとっては関係ないってことなんだよ。

喫茶店に行こう

警戒も兼ねて周囲を軽く見回してみれば、食べ歩きをしている少年少女、お店の前列を作っている人間達、お店で注文をしている男などなど。お昼時だしお腹空いてるんだなあ、と思った。どうでもいいけど。

「あ、ここにですね」

「阿求様が先程言ってた幻想郷初の喫茶店ですか」

私の前を歩いていた阿求が立ち止まり、私に振り向きながら指差した喫茶店には、分りやすく喫茶店と彫られた木札を吊るしていた。窓から店内を覗いてみると、八席のうち半分くらいが埋まっている。どうやら閑古鳥は鳴いていないらしい。

暇だったから阿求のお屋敷に遊びに行ってみると、少し前に開店したという喫茶店に行こうと言われたのでとりあえず付いてきた。道中で人間の里で初めてコーヒーを売り出しているとか、外の世界から流れてきた細々とした情報から喫茶店を名乗ることにしたそうだとか、そんな事前情報を聞かされた。……コーヒー豆、紫様が横流ししたんだらうなあ。多分。

「早速入りましょうか」

かなり期待しているらしく、阿求は私の返事も聞かずにさっさと喫茶店の扉を開けて中へ入っていく。チリンチリン、と軽い鈴の音が鳴った。

「おや、阿求様じゃないですか。何名様で？」

「二人です」

扉の向こうから喫茶店の店長と思われる渋い声と阿求の会話が聞こえてくる。私は帽子を深く被り直してから、喫茶店の扉を開けた。その瞬間、コーヒー特有のあの苦く香ばしい香りが漂ってくる。

ちよつとした苦い思い出が浮かんできて思わずため息を吐いていると、既に席に座っていた阿求に手振りで呼ばれたので隣の席に腰を下ろす。改めてこの喫茶店を利用している客を見回してみると、身に付けている服装や表情から生活に余裕のありそうな雰囲気や無粋な人間はいなさうだ。

「ふむ……。珈琲って思ってたより高いんですね」

「そこは数がまだ少ないので。申し訳ございません」

「いえ、そういう意味で言ったのでは……」

「はは。分かっていますよ」

お品書きを見ていた阿求と店長の会話を聞き流しつつ、どのくらい高価なのか横目で

覗いてみる。……うわ、本当に高い。普通のお茶の数倍はするんじゃないかな？ あと、アイスクリンとか季節の果実の搾りたて果汁なども書かれていた。これらも高いけど。なるほど、余裕のありそうな人間ばかりいるわけだ。

お品書きに視線を戻した阿求は、囁くような声で私に問うた。

「……彩様、苦味は平気ですか？」

「あんまり」

コーヒーは紫様に飲まされたことがある。苦味の種類が違うからか、かなり飲み辛かった。

まあ、たとえ飲めたものではなかったとしても対策はある。というか、目の前に粉砂糖が入った瓶が置かれている。値は張るようだけど、ミルクコーヒーを頼んでもいい。

……ああ、お品書きでは牛乳付き珈琲か。

そのことを軽く伝えてやると、阿求はすぐにミルクコーヒーを二つ注文した。私の分まで頼まなくてもいいのに、と思っただけどこにはありがたく受け取ることにする。何か買うつもりではなかったのだから、あまり手持ちがないのだ。はあ。

「どうぞ。好みで量を調節していいからね」

少しすると、店長が私達の前にコーヒーとミルクを置いてくれた。言われた通り、私はミルクを全部入れて軽くかき混ぜる。チラリと阿求の様子を窺ってみると、コーヒー

をそのまま飲んで口元を押さえていた。やっぱり苦いよね。うん。

砂糖を少し入れてから口に含んでいると、鈴の音がした。足音の向きから察するに、新たな客らしい。

「何名様で？」

「一人です」

その声と横目で見た姿で思わずミルクコーヒーを吹き出しそうになった。何とか堪えたけど。

「久しぶりですね。阿求、彩」

「お久しぶりです、映姫様。何かあったのですか？」

「いえ、今日は休暇です」

当然のように私の隣に座ってきた映姫と阿求が私を挟んで挨拶を交わしていた。……物凄く居づらいんですけど。

ミルクと砂糖で大分飲めるようにしたはずなのに、何だか苦く感じ出したミルクコーヒーを静かに置いた。……あの、横からの視線が痛いんですけど。

「牛乳付き珈琲を一つ、お願いします」

視線が外れた、と思ったら映姫はお品書きを見ることなく店長に注文し、そしてすぐに視線が戻ってきてしまった。何でさ。私、何かした？ ……何もしてないからか。

はあ。

「注文が届くまでの短い間ですが、貴女達に一つずつ説いてあげましょう」

そんなことを考えていたら、映姫はそう言った。私達に対してありがた迷惑だと言われるお説教らしい。阿求は身体を映姫に向けてしつかりと聞く気満々のようだが、私は聞きたくない。しかし、そう思ったところで、たとえ口に出したとしてもその口を閉ざすことはないだろう。はあ。

「まず、阿求。貴女は少し妖怪との縁が濃過ぎる。現状は罪となるほどではありませんが、深入りをし過ぎて道を外さぬように」

「はい、これからも気を付けます。映姫様」

まあ、確かに人間の里に住む人間の中では格段に妖怪と接する数が多いよね。主に私の所為で。……まあ、目の前で人間を辞めてしまった存在を見せてしまったのだ。流石にあんな風に成ろうとは思わないだろう。

そんなことを考えていると、映姫を視線が頬に突き刺さった。

「次に、彩。貴女は少し嘘を吐き過ぎる。貴女は妖怪なので嘘を吐いたところで舌を抜く必要はありませんが、貴女の場合はあまりにも多過ぎる。このままでは誰もが偽りの貴女しか知らず、三途の川を渡り切れなくなるかもしれない」

「……いや、流石に零人じゃないと思うんですけど」

紫様と藍、それと阿求と霊夢も一応。両手どころか片手で済んでしまったけれど、まあしょうがない。……あ、妖精達と楽しく遊んでいたし、それら全員含めればかなりの数になるかな。含めていいか知らないけど。

そんなことを考えていたら、注文していたミルクコーヒーが映姫の前に置かれた。

「ゆめゆめ忘れることのないように」

その言葉を最後に、お説教は終了となった。

まだちよつと苦いかな、と思いながらミルクコーヒーを飲みつつ、ふと映姫がミルクをコーヒーに注いでいるのを眺めていた。……何故か混ざり合わずにミルクがコーヒーの上に乗っている。一体何が起きてるんだ……。

「おっと、いけませんね」

「そう呟いたと思ったら、ミルクがコーヒーの中に沈み込み、そして混ざり合っていました。手品か。」

藍と彩、どちらが強いか？

「なあ、彩」

「ふう……、何だ藍？ 気になる点でもあったか？」

「……気になる点と言われればそうだな」

彩の訓練に付き合い、手合わせを交わし終えたところ。私は汗を拭いながら息を吐く彩に一つ投げかけた。

「先程全力だと言っていたが、本当に全力か？」

「悪いな。これが俺の全力だよ」

「そうだろうな。あれは確かにお前の全力だった」

全力。今回の手合わせで彩が叫んでいた言葉だ。あれは確かに化け猫という括りの中では数段突出した敏捷性だった。

だが、私が言いたいのはそこではない。

「しかしな、私は彩の全力を出すべきだ、と思うんだよ」

「あ？ ……ああ、九つ揃って来い、って言いてえのか」

「理解が早くて助かるよ」

多少無理を言っているのは分かっている。彩は『九心九尾』を明らかに嫌っているから。

私がこのようなことを言った理由は少し前、紫様との会話に遡ることになる。



「藍と彩、どちらが強いのか？」

「はい。一応、同じ九尾なのでしょう？ 同じ種を持つ式神同士ですし、ふと気になったんですよ」

「んー……、どうかしらねえ……」

私の問いに、紫様はこめかみに指先を当てて考え始める。

少し待つと、紫様はこめかみに当てていた指先を私に向けながら口を開いた。

「まず、貴女は九尾になって知恵を得た。その知恵をもって世の権力者を惑わしてきたでしょう？」

「そうですね」

「彩は、単純に力を求めて九尾に至った。強弱を付けるのなら、この差は大きいわ」

確かに、私が九尾となって妖狐としての位は上がった。その際に単純な力や妖力がど

れほど変わったかといえ、一つずつ積み重なるようになっていった。

それに対し、彩は妖術をもって無理矢理九尾に至った。その妖術は力を求めたからということは、それ相応の結果となっているだろう。爆発的な向上をしても何らおかしくない。

「けれど、妖狐と化け猫の種族差があるからどうなるかしら……」

「試せるものなら、一度試してみたいですね」

「そうね、私も気になってきたわ。……まあ、今の彩がそんな力比べをする気なんてないと思うけど」

あの時、鬼と対峙した彩の実力を思い出す。しかし、それを私に対してするか、と問われれば否と答えるだろう。

今の彩は力を拒絶している。いや、今でも力に手を伸ばしているのはいるにはいるのだが、それは少数になるだろう。例えば、娯楽に興じているの、家を整えるの、傷を癒すの、知識を蓄えるの……。そのあたりは力をそこまで求めていないだろう。



そのことを思い返していると、彩は腕を組んで私を見上げていた。

「俺からはどうとも言えねえよ。俺自身はともかく、他のにやる気があるかどうかなんざ知らねえからな」

「やはりそうか……。紫様も気にしてらしたのだが」

「んなこと言われてもなあ。紫様が何を言おうと無理なのは無」

台詞の途中でブツリと言葉が切れた。彩の表情が固まり、その瞳から光が失せていく。全身から無駄な力が抜け切った棒立ち。これは表にいたのが内側に潜ってしまったということであり、すなわち表が空になったということである。

しかし、それも一瞬のこと。すぐに彩が私を胡散臭いものを見るような目で見上げてきた。どうやら、別のが表に出てきたらしい。

「全力を出すべき。紫様が気にしてた。……ねえ、藍。理由はそれだけ？」

「切り札として扱うにしても、扱えなければ仕方あるまい。萃香と相對していた際、苦勞していたようではないか」

「……まあ、いいや。いいよ。いくつか条件飲んでくれるならやるよ。私がここで断つても、あとで紫様にやれと命じられるのがオチだろうし」

……驚いた。この手合わせの上で最も障害となるであろうのが、真つ先に了承したのだ。

「条件とはなんだ？」

「それは他のと話してから」

確かに、九つ揃って出てくるのだ。要望は九つそれぞれ違うだろうし、一つが勝手に全てを決められるはずがない。

これで話は終わりだと言わんばかりに彩は大きく伸びをしてから、私の横を通って縁側に向かう。

「橙にいい顔出来るといいね」

「ブフツ!？」

その際に囁かれた言葉に思わずむせてしまった。

……橙に藍様は紫様一番の式神だもんね、と言われてどうしても、と思っていたことが何故バレたのだ。

極彩『彩色剣尾・玖式』

「条件は一つ。これから九つ出るわけですけど、どれか一つでも止めると言えばその時点で終了。その場合の勝敗は藍の勝ちでいいですよ」

「待て。万が一でも勝利を譲られるなど御免だぞ」

「そこで万が一なんて自然と口に来るんだからわざわざ手合わせする必要なくない？」

「……これはお前のための手合わせだ」

「あー、はいはい。そうでしたね。じゃあ」

彩はそこで口を閉ざして言葉を区切ると、いかにも面倒くさいと言わんばかりの顔をこちらに向けた。

「その場合はそこで観戦している紫様に決めてもらいましょう。それならいいでしょう？」

「ああ、構わない」

藍は彩の代案に頷いているけれど、仮にも主である私を置いて勝手に決めないで頂戴。……まあ、私も気になっているからここにいます。二人の勝負を私に魅せてくれるの

なら、勝敗の判決くらい別に構わないと思つた。

彩は爪先で地面を突きながら肩を回し、それから両手を組んで大きく伸びをする。しばらく身体を伸ばした状態を維持し、最後に溜まった息を一気に吐き出した。

「さあ——おう——ツシヤア！——ふん——どーんつ！——もう、藍つたら——仕方ありませんね——不本意ですが——……ん——やろうか」

彩の雰囲気は激変する。見かけは何一つ変わっていないが、先程とは明らかに違う段階へ跳ね上がる。その変化に、私の口端が自然と上がっていく。

そして、藍がいきなり吹き飛んだ。身体をくの字に曲げて宙を舞い、しかし地面に落ちるようなことはなく、衝撃を受け切つてその場にふわりと浮遊する。目を凝らしてよく見れば、彩の前にほぼ不可視の頑強な結界が丸で拳のように伸びている。

「不意討ちとは」

「はあ？——開始の鐘が鳴るなんて——随分と甘い」

打撃を受けた腹を押さえながら零した藍の言葉に対し、彩は嘲り笑う。私としては、不意討ち程度反則でも何でもないだろう。開始の合図を頼まれたわけでもないのだから、勝手に始めてもらつて結構。

「結界——はい」

「ふっ！」

藍が動き出す寸前、彩は結界を張って身を包み込んだ。藍の手から放たれる膨大な妖力弾を結界で受け止めるが、流石に全てを受け切れるほど頑丈ではなかった。

結界に罅が入っていく中、彩は左右を見回した。一瞬、私と目が合ったが、気だるげで浮かない表情を隠そうともしていない。

「右回りで——左のほうか——直進に決まってるん——右で——右だよ——そうですね」

彩が意思決定を終えた瞬間、彩の姿がぶれた。遅れて爆ぜる音が轟き、ビリビリと肌に響いてくる。音速を軽く超越した高速移動。

既に藍に左に急接近していた血塗れの彩の右掌底が藍に叩きつけられた。が、その掌底はすんでのところで交差した両腕で防御されてしまったが、それでも藍を地面に打ち落とした。掌底を放った彩の右腕はひしゃげて見るに堪えないものとなったが、瞬間に治癒される。身体の脆さゆえか、彩の表情はあまり浮かないわね。

「やっぱあまり動かない方が——んだと?——長所を殺すのは——知ってた」

「彩! まさか私を地に付けた程度で終わりではあるまい?」

「ああん!?——ここから、乗らないの——火術——ん」

彩の周囲に三つの火球が浮かび、一斉に藍を襲う。それに対し、藍は青く燃える狐火を操り、三つの火球を飲み込みながら彩へ放った。やっぱり、こういう精密操作は藍のほうが圧倒的に有利ね。

「水壁——おーっ！——水術もどうでしょう？——じゃあ、それも」

火球を完全に取り込んで大きく燃え盛る狐火を、分厚い水の壁で受け止め消火し、その水壁を貫くように氷柱を撃ち出していく。水壁を凍らせながら通り抜けた氷柱は、撃ち出した時よりも巨大化している。だが、いくら大きくなっても所詮は氷柱。藍には掠りもせずひらひらと躲されていく。

躲されながら次々と放たれた妖力弾を、彩は最低限の結界を張って防御。藍の放った妖力弾は、先程の結界を見たからか貫通力を高めるためにより鋭利に、かつ螺旋を描いていたのだが、それでも難なく受け切られている。

しかし、彩にとつてはあまり面白い状況ではないらしい。

「くそっ！ もつと強えのは——黙れ——下りるよ」

そう言つて急降下。地面に勢いよく着地した瞬間、地面が激しく揺れ動く。……これは妖術で地震を引き起こしているわね。一応、二人の勝負のために強力な結界を張っているとはいえ、外部の被害を後で確認しないといけないわ……。

「うおっ!?!」

「直進——ああ」

突然の揺れに藍の体勢が崩れた瞬間、彩は真つ直ぐと突進した。その軌跡に血飛沫と音を置き去りにしながら、真つ直ぐと。

「身体強化——膂力？——ですね」

彩の左腕が筋骨隆々に膨れ上がる。その太さは倍以上。

「シャアッ！」

「げふっ!？」

肥大化した左腕が超音速で鳩尾に叩き込まれる。体勢を崩していた藍は防御するこ
とが出来ずもろに喰らい、そのまま結界の端まで吹き飛ばされていった。

しかし、その代償と言わんばかりに彩の左腕は悲惨な様相を見せていた。伸び切った
腕は明らかに潰れている。彩自身が放った衝撃に腕が耐え切れず、ポトポトと血を落
していた。が、そんな傷も気が付けば元通りになつてしまふ。

「はあ、はあ——血が——抜け——過ぎかも？——かも、じゃないです」

しかし、出てしまったものはなかなか戻らないようで、彩の顔色が悪くなっている。
それもそうよ。突撃一つで全身の皮膚が破れて、攻撃すればその部位が砕けてしまふ。
いくら治癒しても、その苦痛は想像に難くない。

「ツ——来る——どうするの？」

彩が目を見開き、その視線の先で藍が走り出した。先に妖力弾を放ち、彩の逃げ場を
なくすように周囲を漂う。その数は膨大で、ここから彩の姿を確認出来なくなつてしま
うほど。

「さあ、彩！ どうする?!」

「……極彩『彩色剣尾・玖式』」

妖力弾の塊から、九つの妖力が噴き出した。その九つの尻尾の様な妖力は暴れ回りながら周囲の妖力弾を打ち払い、そして縦横無尽に藍へと襲い掛かっていく。

横薙ぎの妖力に身体を低くし、振り下ろされる妖力は横に跳び、真つ直ぐと突き出される妖力は回り込み、躲しながら彩に向けて走り続ける。その身に妖力を纏わせて、境界の上から叩き付けて突き破るつもりのようね。そんな藍を、彩は目を細めてジッと見詰めていた。

藍の攻撃の直前、彩が消えた。思わず目を見開いてしまう。先程の超音速とはわけが違う。切り取ったように、その場からいなくなってしまった。

だが、消えたはずの彩はすぐに見つかった。全身血塗れで、藍の後頭部へ手刀を振り下ろそうとしていた。

「……止め。もう無理」

ベシヤリ、と濡れたタオルでもぶつけたような音を立てた手刀を最後に、彩はそう言った。そして、グラリと身体を傾けていく。そのまま地面に倒れてしまう前に、藍がその身体を受け止めたのだが、その時もベチャツと濡れた音がした。

「彩？ おい、彩！」

「……………なに——……………ひびく——……………るっせえ」

「藍、そこまでよ」

すぐにスキマを開き、藍と彩の隣に出て彩に触れる。……………これは、酷い。全身ズタボ口だ。どうすればこんなに傷つけるのか不思議なくらい、全身隈なく潰れている。

「……………ゆかりさま——……………ありがとう、うげ」

「それ以上喋らないで」

慌ててその身体を治してあげようとはするものの、流石に私一人ではすぐに終わるような損傷ではないわ。あまりにも深過ぎる。

藍の手伝いと、こんな惨状にもかかわらず彩自身の治癒の妖術によって思っていたよりも早く済んだ。……………というより、大半を彩自身が治していた。これは、私が思っていたよりも……………。

「ふう……………。さて、もういいや——はいはい——戻りましょう——またねっ！」

彩は藍の腕から下りて立ち上がり、一つ残して内側へと戻っていく。纏っていた異質な雰囲気収まり、何処にでもいるような化け猫へと戻ってしまった。……………少し、言えかなりもつたいたい気分ね。

「で、勝敗は？」

そう言った彩に見上げられ、私は少し考える。しかし、結論はすぐに出た。

「藍ね。あのまま続けていけば彩は死んでいた。死はすなわち敗北よ」
「ですよー。それじゃ、これで本気の手合わせはお終い、つと」

負けたにもかかわらず、彩は特に気に留めることなく立ち去っていく。血塗れでボロボロの服のまま帰って床を汚さないでほしいのだけど……。まあ、その時は掃除を命じればいいわね。

隣に立っている藍はというと、腕を組んで際の背中を見詰めていた。

「……やはり、改善した方がいいのではないか？」

「そうかもしれないわね」

彩はやはり強かった。私は二人を式神にする際、藍には知を、彩には武を、それぞれ求めていた。だから、強いことはいい。しかし、その力は相変わらず彩には大き過ぎるものだった。

社会派ルポライターあや

「えーっと、オクラ、トマト、茄子、ピーマン。それとニンニク、唐辛子ね」

人間の里に出掛ける前に書いておいたメモを見て一つずつ指差して確認する。自分で書いたんだから忘れてはいないと思うけれど、一応ね。

確認を終えたメモを仕舞い、私はふと足を止めて空を見上げた。燦々とした太陽が昇っていて、思わず目を細めてしまう。

「あらっ？」

その時、視界の端から端を一瞬で通り抜けていった黒い存在が見えた。黒い翼が見えたから最初は鷹か鷹、あるいは特別大きな鴉かと思っただけれど、あれは明らかに人型だった。顔も見えたし。……妖怪鳥かしら？ 夜雀みたいな。

「さて、買い物買い物」

少し気になったけれど、顔を前に戻して歩き出す。今は買い物の方が大事なもの。

もちろん、わざわざ買い物に行かなくても紫様が外の世界から引つ張り出している食材がある。けれど、やっぱり採れたてを使ったほうが美味しいもの。それに、支給されるお金はちゃんと使って人間の里の経済をしっかりと回さないとね。

目的の八百屋さんを目指して歩いてみると、後ろから私に近づいてくる気配と足音を感じ取った。隣を通り過ぎるのではなく、私の背後に向かつてくる不審な動き。……ここでやり合うと人間の里に迷惑がかかるし、変に目立ちちゃうから嫌なだけだ。

そんなことを考えながら、私は立ち止まって振り返った。

「あやや、気付かれてしまいましたか」

後ろを付けていた者は振り返った私を見てほんの僅かに目を見開いて、すぐに人当たりのいい笑顔を浮かべた。紅葉色のジャケットを着て鍔の小さな帽子を被り、肩に小振りな鞆を掛けた出で立ち。

「どなたですか?」

「おっと、すみません。私はこういった者ですよ」

付けられる覚えはないのだけど、と思いながら首を傾げると、ポケットから名刺を取り出して私に差し出してくれた。

名刺を受け取って、手書きの文字を眺める。

「……社会派ルポライターあや、ですか。私に何か用でも?」

「ネタを探していたら、ちょうど噂の貴女を見つけたものでして。いくつか取材を、と思いまして」

「いきなり取材、って言われても困るんだけど。買い物途中だもの。まあ、歩きながら

でもよければ」

「もちろん、構いませんよ」

それなら別にいいわね。立ち止まってしまった分を取り返すように早足で歩き出した私の隣にあやは歩幅を合わせて付いてきた。……そういえば、噂されるようなことなんて何かあったかしら？

あやが言っていたことに少し引つ掛かりを覚えていると、彼女が耳元に口を近づけて小さく問い掛けてきた。

「貴女、あの大賢者八雲紫の式神、八雲彩ですよね？」

「そうよ」

ちよつと脅してもするような声色だったけれど、訊かれたことは大したことじゃないかった。

顔をあやに向けながら肯定してあげると、再び目を見開かれてしまった。

「あやや、そこはちよつとくらい否定されると思つていたんですが」

「別に隠しているわけじゃないもの。いちいち言い触らして回らないだけよ」

「隠された八雲紫の式神、ついに暴かれる！ とでも銘打って記事にしようと思つていたんですが、当てが外れましたね……」

などと小声で言っているのが聞こえてきて、私は思わず苦笑いを浮かべてしまう。流

石の私でも、それは取材相手に聞かれちゃいけないことくらい容易に想像出来るわ。

人間達に式神だと知られても何か不都合があるわけではないと思う。少なくとも、私ではすぐには思い付かない。他のに訊いてみれば一つや二つ出てくると思うけれど。

「あ、着いた。続けるならそこで待つてね」

目的の八百屋さんに到着し、少し考え込んでいるあやに一声かけてから八百屋さんに入っていく。……まあっ！　こんなに綺麗な野菜がたくさん！　これはどれを買おうか悩むわね……。

一つずつ手に取って見比べていき、メモに書いておいた野菜と目に付いたとうもろこしを追加で買った。ふふっ、いい買い物したわね。

八百屋さんから出てみれば、私が買い物済ませている間に考えを済ませたらしいあやが手を振って出迎えてくれた。

「お待ちしましたよ。さて、続けてもいいですか？」

「いいわよ。けれど、あんまり時間を掛けないでね」

人間の里を出て少し歩いた先にある人気の付かない場所で紫様に通信し、スキマを開いてもらう予定になっている。その前に終わらせてほしいわね。

「では、手短に。貴女が八雲紫の式神になろうと思ったきつかけなどは？」

「ないわよ」

「えっ」

期待していた答えじゃないのはちよつとだけ申し訳ないわね……。けれど、残念ながら藍のように紫様に生涯を賭して仕えたく式神となった、みたいな美談はない。死にかげ消えかけのところを拾われただけ。終わるはずだった命が続いているだけ。もちろん感謝をしているけれど、あのまま私が消えてしまうことで護れるものもあつた。……まあ、こうして消えずとも護れているのだけどね。

「え、つと……。じゃあ、八雲紫の式神となつてよかつたことなどは？」

「ないわよ」

「……ええ」

続けて期待外の答えになつてしまつたかしら……。別に式神になつて特によくなくなつたことはない。逆に悪くなつたこともない。式神が憑く前よりも多少生きやすくなつたけれど、その所為で同じくらい生き辛くなつてしまつた。だから、私としては特にないわね。

私の答えに肩を落として落胆したようだったあやなのだけど、唐突に目を輝かせながら詰め寄つてきた。

「ちよつと、近過ぎるわよ」

「でつ、では！ 八雲紫に対して何か不満点などがあるのではっ!？」

「不満……？　そうねえ……。朝寝坊が多いわ。土砂降りでもお構いなしに流行りものを買って来いみたいな無茶なことを命じられたわね。夕食を作ってる途中で別のを食べたいて命じられたから急遽作り直したけれど、ああいうのはもつと早く言っただけじゃなかったかしら。綺麗にした部屋はすぐに汚すし、出したものは出しっぱなし、何処から持ってきたかよく分からないものを床に置きっぱなし。掃除するのは楽しいけれど、度が過ぎると流石にちよつとね。あと、気持ちよく寝ているところを起こされて仕事に駆り出されたり」

「もっとういいます」

細々とした不満を指折り数えながら答えていたら、あやに止められた。何でかしら？　まだあるのだけど、と思ったが、もう人間の里の出口も近い。これはちようどよかつたわね。

「なら、ここでお別れでいいかしら？」

「すみません、最後に一つだけ」

「何よっ？」

あやは苦笑いを浮かべながら、鞆からカメラを取り出して私に見せた。

「一枚いいですか？　出来れば、隠している頭と尻尾を出してくれると私としては嬉しいんですが」

「いいわよ。ただし、外に出てからね」

外に出て距離を取ってから帽子を外し、服の中に隠していた尻尾を揺らす。

あやがカメラを私に向けてきたので、帽子と買い物袋を背中に隠して微笑んだ。

「撮りますよ。はい、チーズ。本日は取材に答えてくれてありがとうございます。それでは、文々。新聞をよろしくお願いします！」

そう言つて、あやはバサアツと真つ黒な翼を広げてあつという間に飛び去つてしまった。……さつきの妖怪鳥じゃないの。というか、文々。新聞つてあの文々。新聞？

後日、文々。新聞にて『ものぐさ大賢者に不満たらたら!?!』という見出しで過大表現された不満が並べられていた。紫様、ごめんなさい……。

疲れた人間

外が明るくて何もせずに寝転んでいることが悪い気がして、私は深く帽子を被って人間の里を歩き回っていた。とはいえ、別に何かするために出掛けたわけでもないから、せいぜい本日も人間の里は平和でした、となればいいだろうと思いつながら妙な者がいないか見回っている。

「ん？」

そんな時、ふと掠れた鳴き声が聞こえてきた、と思つて家と家の細い隙間に目を向けてみれば、いかにも死にかけな猫を見つけた。その猫はその場から動くことなく、肉を感じさせないほどにやせ細つていて、毛並みが碌に揃つておらず、そして見るからに年老いていた。病気などではなく、明らかに寿命である。きつと残り数日である猫は骸と化すだろう。

まだ死にたくない、なんて言つて嘆いているようだが、知つたことではない。死ぬときは死ぬべきだ。

そう思つてこれ以上あの猫について考えることを止め、私は再び何事もないことを確認するために歩き出した。

「…………ええ」

……そう、思いたかったんだけどなあ。

ゆらりと蠢く何かを背後から感じてしまい、振り返ったところで見てしまった。面倒事になりそうな瞬間を見てしまった。人間が霊に憑かれた瞬間を見てしまった。

霊に憑かれた哀れな人間はその場で立ち止まり、腰を低くしながら周囲をキョロキョロと見回している。周囲にいた他の人間達はちよつと不思議なものを見る目で憑かれた人間をチラツツと見ていくが、特に気にすることなくすぐに日常へと戻っていく。……妙なこと仕出かさなきやいいんだけど。

私は道を少しだけ戻り、先程見かけた猫のいた隙間を覗く。……死んでいた。ほんの僅かな残り香とも言える妖力を漂わせながら。あーあ、今日も平和でした、で済めばそれでよかったのに。はあ。

私はその場で振り返って、あの疲れた人間を視界に収めながら紫様に通信を繋ぐ。

『紫様』

『あら、彩じゃない。どうかしたかしらあ?』

『未練たらたら猫の霊に人間が憑かれたんですが』

『そう。なら、どうかしてみせなさい』

どうか、つて。どうしると、と訊こうとした時には通信がブツツと途切れてしまっ

た。……これが再試験ですか、そうですか。はあ。

猫の霊に憑かれた人間は、両手を前にだらんと下ろしながらおぼつかない足取りで歩き出す。これで四足歩行の真似事をしていたら、もつと面倒事になっていただろう。そのくらいこの場には人間が多過ぎた。はあ。

……まあ、だから何も出来ないわけではないのだが。

「痛っ」

右手がバリツと痛む。その痛みが徐々に強くなり、指先が震え出す。手の平に浮かぶ妖力が反転し、清く白く光り出す。退魔の妖術。成りたての猫の霊程度なら、きつと今の私でも祓えるはずだ。ただし、祓った後で残った人間が無事かどうかは別問題だが。

そんなことを思つて自嘲し、私は偶然を装うなんて面倒なことをせずにそのまま霊に憑かれた人間の元へ歩き出す。そして、ふらふらしている人間の肩に手を乗せた。当然、その手の平に浮かんでいたものは人間に叩き込まれる。

「ぎにやつ!？」

「気分悪そうですが、大丈夫ですか?」

突然変な声を上げた人間とその隣にいた私に周囲の視線が一気に集まったが、そのくらいなら容易に想像がつく。だから気にすることなく、私はまるで心配するような顔をしながら、人間にさも心配しているかのような声色で語りかける。

「どうやら、疲れてるみたいですね」

ビクビク身体を震わせている人間に、そしてその中に憑りついている靈に、私は微笑みかける。そんな私に顔を向けた人間の表情に恐れが浮かぶ。何だよ、そんな顔すんなって。ちゃんと取り除いてあげるから。

追加で流し込んだ。右手が痛んだけれど、それで済むなら楽でいい。

しばらくすると、人間から何かが弾け飛んだ。瞬間、恐れを浮かべていた顔がハツとし、右や左をしきりに見回し出す。……憑かれてすぐだったから、喰い潰されずに済んだかな。それはよかった。

人間の無事にホツとしながら、私は見上げる。弾け飛んだそれを見遣り、そして目が合った。何故だ、と言わんばかりの瞳を見て、私は顔を下ろした。

「お嬢ちゃん」

「え、はい。何でしょう?」

もう済んだと思つて、私は人間の肩から手を離れたら、その場を去る前に呼び止められて振り返る。

片手を頭の後ろに当てた人間は、真っ直ぐと立ちながら私に照れ笑いを浮かべた。

「なんか、ポーッとしてみたみたいだ。あんがとな」

「いえ、お気になさらず。ですが、お気を付けて」

そう言つて軽く手を振り、私はその場から去つた。ちよつと疲れた人間がいた。それでいい。それでいいんだ。

ふと、猫の霊を思う。私もあんな感じなのかもな、と。……まあ、どうでもいいか。ちなみに、紫様には辛うじて合格を貰えた。しかし、次の試験はまたいつかと言われて、私は肩を落とすのだった。

こういうところが厭らしくて

パチ、パチツと薪が爆ぜる。いい音しやがる、と五匹の川魚を焼いている焚き火を見詰めながら思う。さつき捕まえたばかりで鮮度バツグン。味付けなしだがいい味出してくれるはずだ。焼き上がるまではまだ時間がかかるから、俺はじっくり待ち続ける。時折、恐れ知らずな鳥が急降下して勝手に取りやがるから油断は出来ねーがな。

そう思いながら待っていると、ふと近くからカサカサと草葉がこすれる音が聞こえてくる。すぐに音のした方に目を向けてみれば、草の中から頭だけを出した小せー猫がいた。

「……なんだよ」

その猫の視線が俺の焼いている川魚に向いていることに気付き、すぐに睨み付けてやった。やるつもりなんざこれっぽっちもねー。帰れ。

しかし、この猫は怯むことなく、むしろ俺に擦り寄ってきてきやがった。オイコラ、頬を押し付けんな！ 毛が付くだろうが！

「コラ、あっち行け！」

そう言って片手で軽く払ってやっても、猫は意に介することなく俺のすぐ隣に陣取り

やがる。……コノヤロー、まさか焼けたところを掠め盗ろーなんざ思っちゃいねーだろーな？ 俺がちよびつとだけ優しくしてやってる今のうちに去っておいた方が身のためだぞ……。

頬を引くつかせながら隣に座ってやがる猫を見下ろし、俺は手刀をゆつくりと振り上げた。

『待ってください』

『んがっ!』

しかし、その手を鋭く振り下ろす前に内側に引つ張り込まれた。すぐさま振り向いて首のあたりを掴んでいる手を振り払いつつ、俺を内側に引つ張りやがったのを睨みつける。が、どんなに目付きを鋭くしても碌に効いちゃいねー。チクショーめ。

『そのような行動は見過ごせません』

『ハッ！ 見過ごせねーだ？』

馬鹿言つてんじやねー。俺はいつだって奪われてきた。より強い者に力尽くで、より賢い者に狡猾に。今も俺の命さえババアに奪われ握られている。クソが、ふざけてんじやねーぞ！

思い出してたら腹が立ってきた。ふつつつと腹の底から沸き上がってくる。だからこそ、どんな手を使おうがより強くならなきゃならねー！ 強くなければ何も得られ

ねー！ 何処までも伸ばし上がり、どんなものだろうが盗られねーように！

『まあまあ、落ち着けて』

そんな俺の頭をポンと叩きやがったのがいた。俺の上を叩きやがったのはどいつだ、と怒り心頭で振り返ってみれば、胡散臭い顔で笑ってやがった。その顔を見て、腹から湧き上がっていたものがブシューッと一気に抜けていくのを感じてしまふ。

それでも腹の底に燻ぶった怒りのままにジツトリと睨み付けてやったが、悔しいが何処吹く風だった。

『どうやらあの猫はただ単純に懐いているだけのようだよ。実は何かしてあげたんじゃないかい？』

『俺があ？ んなもんするわきやねーだろ』

『なら他のどれかがしたかもしれないねえ。知らないけど』

そう言うてケラケラ笑われる。それを聞かされる俺は全く気分がよくねー。

『……もしかしたら、橙のしもべ候補だったりしてね』

だが、俺の耳元で囁いた言葉は俺の心を震わせた。それはつまり、俺が橙から奪えるかもしれないってことだから。

話すことは終わりだと言わんばかりに、俺は背中をドンと押された。

『いいのですか？』

『大丈夫でしょ』

そんな会話を背後に、押された勢いのまま俺は表へと押し出された。振り上げたままの手刀をそのまま振り下ろさず、ゆつくりと腕を下ろす。俺を見上げていた猫が小さく鳴き、俺はため息を吐いてしまう。……クソ、あの言葉は嘘かもしれないねーって分かってても踊らされちまう。癩だが乗せられてもいいかと思つちまう。こういうところが厭らしくて、だからこそ気に入っている。

……とりあえず、一匹くらいやつてもいいか。くそ。

生きてて楽しいかい？

紫様が寝静まった随分後、そろそろ日付も変わろうかといった深夜の食卓。私はすっかり温くなってしまった葡萄酒の酒を煽る。……うつへえ、喉が熱い。あははー。

対面に座っている藍は、もうすっかり酔いが回ってしまっている。頬は真っ赤で、吐く息も酒気に塗れている。

「でだなー、彩！ 今日も今日とて橙は可愛くて可愛くて」

「それはもう聞いた」

最早何杯目かも分からないほど付き合わされているのだが、さつきから橙の惚気話ばかりウロチョロして回っている。別に私から話すネタはないのだから、藍が話すネタがある間はだんまりよりはいいだろう、とは思っていたものの、流石にここまで一方的に語られ続けるのはちよつと苦痛だ。流石に飽きが来てしまう。

どれか代わってくれないかなあ、と思ってしまうのだが、藍の誘いの乗ったのは私なのだ。どうしても代わりたいたいのがないのなら、私が最後まで付き合うべきなのだ。いや、分かっているはいるけれど、それでも苦痛なものは苦痛なのだよ。どれか代わってくれ。あははー。

「橙が数多の子猫達を連れて微笑む姿と云つたら！ ああ、あれこそこの世の極楽と言える光景よ……」

「はいはい、そりやよかつたね」

つい返事が雑になつてきている気がするが、まあいいか。

さつきから同じ惚気を至宝だの珠玉だの後光だの言つて語つてくれているけれど、私としては物凄くどうでもいい。というか、橙と顔を合わせないようにしているのに、そんなに話をされても正直困る。……ずっと前から私の表情が変わっている気が全くないのだが、早く終わつてくれないだろうか。

そんなことを思っていたら、藍が空になつたラグラスの底をトントン鳴らし始めたので、すぐにグラスに葡萄色の酒を注いでやる。……あ、空になつちやつた。これで何本空けたかなあ。ちよつと恐ろしくて数えたくない。あははー。

新しく開栓した琥珀色の酒を私のグラスの注いでいると、もう呑み干してしまつた藍にジツトリと睨み付けられる。うっわ、目が据わつてるんですけど。

「何だ、彩。私との酒が楽しくないのか？」

「そこまで。流石に同じ話ばかりじゃあきついな」

「なら、お前は何なら楽しいんだ」

それは、今日初めてだな。

「楽しいこと、か」

そう言われてみると、これと言ったものが思い当たらない。特定の何か楽しい、と言えないものがない。

そんなんで、生きてて楽しいかい？ いいえ、私は死んだ身です。生きてて楽しいことは、もう過去に置いてきてしまいました。

まあ、他に楽しんでるのがある。何事も無邪気に、陽気に、笑っている。私の代わりに、あるいは私の分まで楽しんでるならそれでいいのではなからうか。あははー。

「無論、私は橙だなー」

「はいはい」

愉快に笑う藍を聞き流しながら殻になっていた藍のグラスに酒を注いでやり、私はちびちびと琥珀色の酒で唇を湿らせる。

……いつそ、ラッパ呑みでもして酔い潰れてしまったほうがいいのではなからうか。いや、流石に止めておこう。起きた後で紫様か藍に何と言われるか分かったものではない。

ふと、琥珀色の酒に映った私と目が合った。そこには何も映していないような、空っぽの瞳があった。なんて酷い目だ。私のなんだけどき。あははー。

「ところで、彩。最近、橙の子猫達がすっかり様変わりしてしまっただ。前とは違う橙

が見れるのはそれはそれは素晴らしいのだが、橙が手懐けた子猫を捨てるとは思えん。暇があれば私と共に変わる前の子猫達を探してくれないか？」

「過保護め。あと、それも聞いた。そして嫌だ」

「別にいいではないか。きつと子猫達も橙のことを愛おしく思っているに違いない！ならば会わせてやる方がいいと思わないか？」

「いや、知らねえよ」

橙の猫が入れ替わったことを聞かされるのも、以前の猫を探してくれと頼まれるのも、これで何度目だろうか。嫌だよ、面倒臭い。というか、どうやって見つけるのさ。

そもそも、猫だつて橙よりもいい相手を見つけたかもしれないし、サラツと忘れてしまったかもしれないし、死んでいても別におかしな話じゃない。それに、好きだから好かれているとは限らないし、今日愛おしく思つていても明日憎らしく思つていることもある。それならば、多少変わつていようが、その都度しもべ候補を集めているわけだしそれでいいと思うけれど。

……まあ、焚きつけた私が悪いのだろうか。積極的に奪おうとしているわけではないようだが、擦り寄つてきたならちよつかいを出すようになってしまった。あははー。

「やはり橙は今日も今日とて可愛くてなー！ あー最高だー！」

「そうですか」

また似たようなところに辿り着いてしまった。何時まで聞かされるのだろうか……。ところで、藍は酔っていた時のことを覚えているタイプだ。酔いが醒めた後で悶えな
いとよいけれど。あははー。

東方儂月抄

月面戦争

「……紫様、もう一度言ってください」

「二度手間は嫌いよ」

突然、紫様が荒唐無稽なことを言ったもので、思わず聞き返してしまった。

紫様はスキマから引つ張り出した扇子をパツと開いて口元を隠し、私を静かに見つめてくる。私はため息を一つ吐いてから天井を見上げ、その先を突き抜けたところにあるものを思い浮かべ、指先を上に向けた。

「月に攻め入る、と言いましたか？　もしかして、あの空に浮かんでいる月じゃあないですよね？」

「そう言ったじゃない。月面戦争よ」

……本当なのかい。そこは聞き間違いであつてほしかつたよ。はあ。

月面戦争ねえ。なんか、輝夜と永琳あたりが月の何かじゃなかつたつけ？　あんなのがゴロゴロいるところに攻めるって、大丈夫なのかなあ？　……まあ、無理ならしないか。多分。

「で、貴女には幻想郷の妖怪達を訪ねて回ってほしいのよ」

「そりやまたどうしてですか？」

「当然、戦力よ。最近の幻想郷は数が増えたし、それに伴って強力な妖怪が多くなっているわ。頭数を集めれば侵攻なんて容易いでしょ？」

そう言われてみれば、最近会った強力な妖怪が何人も思い浮かぶ。吸血鬼のレミリア・スカーレットとか、亡霊の西行寺幽幽子とか、鬼の伊吹萃香とか、花の妖怪の風見幽香とか。私なんかと比べても明らかに突出した妖怪。強いって凄いね。印象に残ってる。どうでもいいけど。

とはいえ、いくら強力な妖怪だとしても、……いや、強力な妖怪だからこそ気になることがある。

「協力してくれませんか？」

「そこは貴女次第よ」

力が強い妖怪は、得てして我が強い。自分本位。自己中心主義。自分の意見を無理矢理押し通せるのだから、そりやそうだよ。だから、こちらがいくら頼んだところで首を縦に振ってくれるとは思えなかったのだ。

そこを私次第と言いましたか。おいおい、丸投げかよ。私みたいなただの化け猫一匹が何言っても聞いちゃあくれない気がするんですが……。はあ。

「もう藍は動いてくれているわ。何処に行つて誰を尋ねるかは私が指示するから、貴女も出なさい」

「はい、分かりました」

命じられたし、しようがないか。やってみて無理でした、でもいいから言われたことを熟すとしましょうか。

「ところで、藍は何処に行つてるんですか？」

「今日は妖怪の山の天狗よ」

「……へえ、妖怪の山ですか」

帰りに迷い家に寄り道して橙と顔を合わせるんだろなあ。仕事のストレスには癒しを求めるものよ。きつと。

……まあ、私にはそんなものないけどさ。はあ。

来てしまったよ紅魔館

私は満天の星空を見上げ、隠す気もなく盛大にため息を吐いた。……あーあ、来てしまったよ紅魔館。命じられたことだけど、しようがないことだけど、面倒臭いものは面倒臭いのだ。やるけど。はあ。

ここに住んでいる吸血鬼にお邪魔するなんて事前の連絡は一切していないのだが、紫様には関係ない、行けと言われてるので、勝手に入らせてもらおうとしましょうか。壁を背にして立ったままぐっすり眠っている門番の横を堂々と歩いて中に侵入していく。……夜に眠るのは健康的だと言うべきか、寝るなら部屋で布団を敷いたらどうか、不寝番じゃないのかと呆ればいいのか。まあ、もう通り過ぎたことだ。どうでもいいか。

施錠されていたら破壊しても構わない、と言われていているけれど、別に鍵は掛かっていなかったもので、普通に開いて紅魔館へ侵入した。破壊すると後々面倒そうだと思つたので、壊さずに済んでよかった。解錠の妖術あるけど、通用するか怪しいし。はあ。

「……目が痛くなりそう」

とにかく紅い。壁にも床にも天井にも血を塗ってんじやないか、と思いたくなる。吸

血鬼だし。壁に立てかけているランプがところどころ光っているのだが、中途半端なところが逆に不気味だ。全部灯してくれていればそう思わないで済むのに。ならば私が点けてあげようとは思わないけどさ。はあ。

時折、給仕服を着た妖精とすれ違う。一応侵入者なのに、何もしてこない。いいのか、これで。別にいいか。楽だし。

そのまま特に何事もなく、紅魔館の主であるレミア・スカーレットがよく居るという部屋の前に着いた。そして、目の前の無駄に大きい扉を叩こうとしたその時。

「入っていいぞ」

不思議と惹きつけられるような声が、扉の向こう側からした。わあお、バレてたのか。まあ、それならそれで楽でいい。

とりあえず許可は出たので、扉を開けた。……うっわ、重っ！ もうちよつと軽量化しないと開けるの面倒じゃない？ 吸血鬼の力ではこのくらいが普通なのかな？ どうでもいいか。

部屋に入つてすぐ、一際豪華な椅子にふんぞり返ったレミア・スカーレットが目に入った。その両脇には給仕服を着た見覚えのある少女と、これまた見覚えのある不健康そうな紫髪の少女。……誰だっけ？ まあ、別にどうでもいいや。

少し振り向いて扉を一瞥し、また動かすのが面倒で扉を閉めずに置いておこうと思っ

たら、気付けば扉が閉まっていた。へえ、これが噂の時間を操る能力ですか。こんなもんか。

「私に用がある者が来ると感じてはいたが、化け猫が来るとは。少し驚いたわ」

「来たくて来たわけじゃねえんですがね。……まあ、時間掛けたくないし、さっさと事を済ませましょうか」

何を話せばいいのかは、ここに来る道中で聞かされた。ただし、一回だけ。大体覚えていられるけれど、細部は忘れた。まあ、多少欠けてても伝わればそれでいいでしょう。多分。

「えーと、月の都に行つて珍しいものとか凄い技術とかを見つけたいそうです。紫様曰く、それらを盗み出して停滞しつつある妖怪の生活向上を目指したいとか。そのようなこと、貴女のような強力な妖怪なら容易いことだろう、と」

私が紫様、と言つた瞬間、レミリアが露骨に眉をひそめたが、気にせず話し切つた。……そんな睨まないですよ。はあ。

「月の都には、例えば無限のエネルギーがあるそうですよ。ずっと遊んで暮らせる夢のような技術だそうで、紫様が今から数百年前に一度そんな技術を奪おうと思つて月の都に行つたみたいだけど、不慮の事故で手に入れることが出来なかつたとか何とか」

「知つてるわよ。不慮の事故つて、月の民にコテンパンにされて逃げ帰つてきたんで

しよ?」

……へえ、そうだったんだ。聞いてないよ、そんなこと。というか、負けたんかい。紫様は見栄っ張りだなあ。そうかもしれない、とは思ってたけど。はあ。

そんなことを考えながら苦笑いを浮かべていると、さらに目付きを鋭くしたレミリアが口を開いた。

「で、どうして今更そんな計画を持ちかけてくるのかしら?」

「数が増えたから。全員が協力すれば今度は容易いでしょう、と」

「ふうん。どんな計画なのかしら?」

……何だっけ。満月の境界がどうか言ってたけれど、忘れちゃってる。

さてどう説明すればいいだろうか、と言い淀んでいると、隣にどれかが出てきたのを感じた。そして、私が悩んでいるうちに口が勝手に動き出す。

「紫様が今年の冬に湖に映った幻の満月と本物の満月の境界を弄り、湖から月に飛び込めるようになります。貴女には紫様が結界を見張っている間に月の都に忍び込んで頂きたいのです」

あー、そういうえばそんな話だったなあ。流石、覚えててくれて助かったよ。

私が声を出さずにありがと、と唇を動かすと、隣のは微笑んでから内側へと戻っていった。

「まあ、そんな感じですよ。で、どうでしょう？」

そのまま微笑みを絶やさず、私はレミリアに対して返事を求めた。
「くだらないわ」

うん、知ってた。

来てしまったたよ太陽の畑

私は晴天の青空を見上げ、しかしこんな晴れやかな天候には似合わないため息を吐いてしまう。やっぱり面倒臭いなあ。藍はどうして喜々として出来るのか、これが分からない。はあ。

とはいえ、命じられたのならばやらなければならない。それが式神の悲しい性よ。文句はいくらでも出るけれど、やるだけやって早く済ませよう。そうしよう。

そんなことを思いながら顔を前に戻し、目の前に広がる一面の向日葵を眺めた。……あーあ、来てしまったたよ太陽の畑。無論、風見幽香に事前の連絡なんてしていない。

間違つても向日葵を傷つけないよう慎重に進み、幽香が住んでいる小さな一軒家に辿り着いた。窓から中を覗こうかと思つたが、いなかつたら帰るのだし扉を叩くことにする。勝手に覗き見して印象落とすのはどうかと思ふしね。まあ、悪くなるほど印象があるかどうか怪しいところだが。

「開いてるわ」

「そうですか。では、お邪魔します」

扉を叩いてすぐ返事が来たので、私はすぐに中に入れてもらう。

椅子に座って何やら難しい題名の本を読んでいた幽香が私に気付き、葉を挟んでからパタリと本を閉じて顔を上げた。見透かされているような気分がしたが、そこは気にせず笑顔浮かべてやり過ごす。嫌だけど。

「そこに座ってなさい」

そう言つて幽香が指差した椅子に腰を下ろし、サツと部屋を見回す。机、椅子、本棚、衣装棚、その他諸々……。これと言つて何かある、といった雰囲気を感じさせない、何処にでもありそうな部屋。強力な妖怪であるが、以前行かされた紅魔館とはまるで真逆である。

そんなことを思つたところで、カタリとティーカップが置かれた。ふわりと紅茶の香りが漂う。……流石に、あの時みたいなの沸騰寸前でも瞬間氷結でもなかった。よかった。

「で、私に何の用かしら？」

「月の都に行つて珍しいもの、凄い技術なんかを見つけてほしいんです。紫様曰く、それらを盗み出して幻想郷に持ち帰り、停滞しつつある妖怪の生活向上を目指したいとか。貴女のような強力な妖怪ならばそのくらい容易いことだろう、と」

手短かに用件を話すと、一つため息を吐いてから紅茶を口にした。それに合わせて、私も紅茶を一口。おお、美味しい。

そしてティーカップを置いた幽香は、私を怪訝そうな目で私を見詰めてきた。

「貴女、本当にあの紫の式神だったのね」

「気にするところそこですか？」

「あの胡散臭い新聞にも真実が載ることがあったのね……」

何て酷いことを言うんだ……。新聞とか全然読んでないから何処の誰が書いているかなんて知らないけれど、それを聞いたら泣いてしまっような気がする。どうでもいいけど。というか、情報元が怪しい感じがするとはいえ、いつの間にか私が紫様の式神であることは周知の事実になっていたんだ。へー、知らなかった。

おっと、話が逸れている。私が話を戻そうと口を開こうとした時には、幽香は既に窓の外へと目を向けていた。

「月の都、だったかしら？ 興味ないわね。私は今のままで充分よ」

「そうですか」

まあ、そんな感じはしてたよ。

稽古よ、稽古

「あらあら、博麗の巫女はこんなものかしら？」

「……うっさいわね！」

突然紫様が博麗神社へ行くと言つて、特にやることがなかった私も何となく付いていくことにし、スキマを抜けたらこれである。一体、紫様は何を考えているんだか……。まあ、どうでもいいや。

持つてきていたペットボトルのお茶のキャップを開きながら紫様のことを考えていたからか、ふと少し前のことが浮かんできた。

『月の都？ ハッ、どうでもいいね』

『嫌。二の舞は御免』

『いくら大賢者様の言葉でも無茶よ。私は降りるわ』

『ふざけてんじやあねえぞコラアッ！ ンなもん出来るわきやねえだろうがッ！』

『……眠い。やだ。寝る』

『なーに言つてやがりますか？ むりむりのかたつむりー』

『化け猫風情が……。寝言は寝てから言え』

『いいとは思うけれど、余所でやってくれない？ 盗れたらこっちにもよろしくね』
『帰れ』

『貴女、この私に従えと仰いましたか？ ……万死に値しますわっ！』

あれから紫様に命じられるままいくつも協力を要請したものの、誰も彼も首を縦に振ってくれませんでした。攻撃されて逃げ帰ったことだって結構な数ある。いやあ、大変だった大変だった。無事逃げ切ることが？ ……そうじゃなくて、反撃即殺しようとするのを押さえつけることが大変だったよ。はあ。

私としては、これまで知りもしなかった強力な妖怪を何人も直接見ることが出来た。私自身が弱いこともあってか、皆が皆自分の意見を押し通してくる。話が通じそうな妖怪に対しては、ちよつと言葉を足して少し誘導してみようとしたものの、結局嫌なもの嫌だと突っぱねられてしまった。まあ、そんなもんか。

「……結局、乗り気だったのはレミリアだけか」

くだらないという言葉は、半分くらい嘘であるのは見れば分かった。紫様の計画をくだらないと思っていただろう。しかし、それと同時に月の都へ行くこと自体には強く興味を持っていたようだった。つまり、レミリアはレミリアの手段で月へ行くつもりなのだろう。紫様よりも早く月へ侵攻し、出し抜いて、見せびらかそうとでも考えているのだろう。それが内側でいくつもの視点から見聞きし、私が直接感じ取ったことと合わせ

て内側で軽く話し合った結論。

まあ、それが合つていようと外れていようと、私にとつてはどうでもいいことだ。お茶と一緒に飲み込んでしまおう。外の世界ではこんな風に売られているそうなのだが、なかなか便利だ。空の容器を使い回せるのもいい。まあ、空になったペットボトルは紫様がスキマに放り込んでしまうのだが。

そんなことを考えていたら、紫様に吹き飛ばされた霊夢が私の隣にまで滑り込んできた。背中が擦れて結構痛そうなのだが、霊夢は気丈に振る舞つてすぐさま立ち上がりながら紫様を睨みつけた。対する紫様は妖しく微笑むだけ。

「ちよつと紫、急に何のつもり？」

「稽古よ、稽古。仮にも巫女なんだから、神様の力を借りるくらい出来るようになりなさい」

「はあ？ どうでもいいでしょ、そんなこと。今まで妖怪を叩き潰すのに必要なかつたじゃない」

「将来に備えて、よ。さあ、もう一度かかって来なさい」

「あんたから来たんでしょがっ！」

そう言い放つと霊夢は飛び出していき、紫様と衝突した。命名決闘法案ではない、純粋な決闘。いやあ、大変そうだなあ。

攻防が激しくなりそうなので少し離れることにし、勝手に縁側に座って観戦することにしたが、これと言つて霊夢から神様の凄い力が湧いてくる気配はない。まあ、急にやれと言われる霊夢の方が困つた話か。

神の力を借りるつていうのは、とんでもなく難しいものだ。身近な神様には猫神様という存在がいるのだけど、あちらは人間の憑りつくことにばかりに興味津々で、大抵こちらの話を聞いてくれないものだ。こちらに興味を向けても、そこからどうなるかなんて分かつたものではない。神様つてのは随分身勝手に、過ぎた善意は重過ぎるし、軽い悪意でも深く刺さる。

「つー、これ……」

「……………ふふ、そう。その感覚よ」

……………どうやら、そこまで困らなさそうである。羨ましい限りだ。はあ。

貴女を監視するために

「ほぼ毎日毎日ここにやって来て……。来るならお賽銭の一つでもしなさいよ」

「悪いけれど、私は貴女を監視するためにここにいます。それに、神頼みしたところで貴女の元には降りてくれないようですし」

「へえ、言ってくれるじゃない」

顔だけを後ろに向けて私を見詰めながらそう言われたけれど、残念ながらお金は持ってきていない。だから無理だ。

紫様は他の準備やら策略やらで忙しいらしく、直接稽古をつけることがあまり出来ないように、霊夢が神様の力を借りる訓練を真面目にしているか見守りサポートするよう命じた。という事で、私は代わる代わる博麗神社を訪れている。監視しているからか、それとも元から真面目なのか、露骨にサポートしている様子はない。

サポートというのは各々それぞれで、紫様の代わりに手合わせを申し出たり、甲斐甲斐しくお世話をしたり、知りうる限りの神様について話したり、横で頑張れ頑張れ出来る出来ると応援したり、問答無用で突撃したり、縁側にただボーツと座っていたり、辛いこと痛いことがあったら癒したり、周囲を警戒していたり……。私の場合、持つてき

たお菓子を並べておくくらいである。……え？　いくつかサポートじゃない？　知らん。

「……く、ふう」

「どうです？　はい、どうぞ」

「案外難しいものね。どうも」

参道の上で小一時間瞑想し続けていた霊夢の集中が途切れたところで、用意していた冷やした緑茶とカステラを持つて霊夢の元へ行く。これを冷やすのに氷結の妖術をわざわざ使ったのだ。氷結のくせに凍らないあたり、お察しである。

難しいなどと言っているけれど、見ていて日に日に上達しているのがよく分かる。数日空けている紫様なら、なおさらその進歩が分かりやすいだろう。才能があるってのはこういう者を指すのだろう。私にはないものだ。羨ましい限りである。欲しいとは思わないけれど。はあ。

「何よ、その顔。面倒なら来なければいいのに」

「命令です。そこは残念ながら逆らえないんですよ」

「だったらそんな変な顔しないでよ。気が散るわ」

「はあ、そうですか」

今、どんな顔してるんだろう？　そう思い、薄く広げた結界を浮かべる。無色透明で

はなく、ガラスのように光を僅かに反射する結果。ちよつと見辛いけれど、鏡でよく見る顔をしていた。そんなに変だろろうか？ ……まあ、どうでもいいや。

「それじゃ、十分休んだら続けてくださいな。そして、私にちゃんとやっていましたよ、と報告させてください」

「何よそれ。 ……ま、いいわ」

それだけ言つて、私は飲み干して空になった湯呑を受け取つて戻つていくことにする。もう少し休んだら再開するだろう、と思いつながら、私は台所で湯呑を水で軽く洗つて干しておいた。

縁側に戻つて霊夢の様子を確認してみれば、案の定瞑想を再開していた。霊夢に向かつて何か細く流れていくのを感じ、私は何とも言えない気分になる。

……まあ、ちゃんとやっていましたよ、と報告出来そうだ。なら、いいか。

その時を待っていたわ！

表のは博麗神社を隅から隅まで掃除をしている。鼻歌をしながら喜々として部屋の隅を固く絞った濡れ雑巾で拭いているけれど、私としては何が楽しいのかよく分からない。綺麗にするのはいいことなんだろうけれど、パツと見では汚れているように見えないうのに、まるで汚れを探すように掃除しているのはいまいち理解出来ないのだ。まあ、私がどうこう言うことでもないけど。

時折、参道に目を向けて霊夢の様子を窺っている。この前は紫様相手に地面に大穴を開けて見せていた。幻術の一種らしいけど。まあ、そんなことが出来てしまう程度には神様の力を借りられているようだ。簡単にやってくれやがって。はあ。

「おーい、何時まで掃除してんだ？ 空になっちまったから、早く新しいのをくれよ」
「まあっ！ それは霊夢のために用意していたものなのに」

そんな表のに魔理沙は空になった皿を見せびらかし、新しいお菓子を催促していた。残念ながらそれ以外は何も持ってきていなかったはずなので、どんなに強請られても出ないのだけだ。

「はあ。もう、いいわ。じゃあ、少し待ってて」

「おい！ 私に押し付けんなー！」

魔理沙に雑巾を押し付けつつ、表のは台所へと向かっていく。その背中に何で私が等と小うるさく言っているが、どうやら聞くつもりはないようである。

表のは蜂蜜を少量混ぜた生地をこね、いくつかの小判型にしたものを薄く油を敷いたフライパンの上で焼き始める。簡単なクッキーを作っているようだ。途中、廊下でドタ音がしているのが聞こえてきたけれど、表のは生地が焦げ付かない事のほうが今は大事なようだ。

『霊夢の元に通うの、どのくらい経ったっけ?』

『三ヶ月ほどですな』

うげ、もう三ヶ月経ってたんだ。止めろと命じられていないから続けていたけれども、何時までやればいいのかやらって感じである。……まあ、終わるまでやればいいのか。はあ。

『いいなー、らんらんはー。今日もゆかりんと一緒に出掛けてるしー』

『そうふてくされんな。これも仕事だ、仕事』

『何か危ないことに手を出してはいけないのですけれど……』

『ハッ、月に攻めるっつー時点で危ねーわきやねーだろーが』

私がこうして通い詰めている間も紫様は何やら精力的に色々していたらしい。式神

の鴉を飛ばしたり、藍に次々と新たな命令したり、幻想郷中にスキマを開いて覗き見したり、藍を連れて何処かへ行つてしまつたり、外の世界からやつて来た神様と巫女を歓迎したり……。随分と忙しいようである。

ちなみに、協力してくれる妖怪がいなかったことは許容範囲内で、レミリアが勝手に月の都に侵攻していくだろうことも予想の範疇だそうだ。別にそれならそれでいいけれど、紫様は一体何を考えているのやら。……まあ、事が済んで気が向いたら説明してくれるでしょう。多分。どうでもいいけど。

そんなことを考えていると、何やら外のほうから声が聞こえてきた。霊夢も瞑想が一段落ついて魔理沙と会話でもしているかと思つたら、どうやら別の誰かと話しているようだ。聞き覚えあるんだけど、誰だっけ？ ……んー、クツキーを焼く音でいまいち聞き取りにくい。

『誰だろう？』

『咲夜ですね』

『……誰だっけ？』

『レミリアの従者ですよ』

ああ、そういうえばそんな名前だった。いけない。ここ最近、紫様の屋敷と博麗神社の往復ばかりで、他のことを忘れがちだ。何度も聞いたはずだし、何なら前に顔を合わせ

たのに。まあ、あの時はレミリアのほうばかりに気を向けてたけどさ。

「よし、出上がり。……あら、お客さんかしら?」

私が外のことを気にしていると、ようやくクツキーが焼き上がったようだ。そして、表のがクツキーを皿に移しているところで、ようやく霊夢と魔理沙が咲夜と話していることに気付いたらしい。

「その時を待っていたわ!」

表のがクツキーを軽く手で仰いで粗熱を飛ばしながら外へ向かう最中、また新しい少女の叫び声が木霊した。……ええと、そうだ。この声は確か妖夢だ。紫様の友人の従者だし、覚えてる覚えてる。

話の途中で割り込むのを避けるためか、表のはその場で足を止めてそそくさと影に隠れた。ついでに聞き耳を立てているけれど、私としてもそちらの方が会話が聞こえやすいから都合がいい。

「ロケットは宇宙を飛ぶ船なのです。つまり、推進力を探すなら航海に関するものを探さないといけません」

「……確かにそうね。幻想郷には海がないからその辺抜け落ちていたわ」

「船を進める力がロケットを進め、海を鎮める力が航海を安全にするのです、……つて幽々子様が言っていました」

うん？ 幽々子様が言っていたあ？ いったったか藍が紫様の命で幽々子と話し合っていたようだし、何やら陰謀を感じますねえ。ま、どうでもいいか。はあ。

そこで四人の会話が止まったようで、表のはさつきとその四人の中へと歩き出していった。足音を聞いた四人の目が一齐に向けられ、咲夜と妖夢の目が僅かに険しくなった。しかし、表のはそんな視線を流しつつ、魔理沙の前に皿を出した。

「ほら、魔理沙。あり合わせのもので作ったクッキーよ。霊夢も修行で疲れてるでしよう？ 他の二人も一緒に食べていいからね」

霊夢は何やら考えながらクッキーを口にし、魔理沙は遅いだ何だと文句を言いながらクッキーに手を伸ばす。そんな様子を表のは嬉しそうに眺め、それから僅かな期待の籠った目を咲夜を妖夢に向けた。せっかく作ったのだから、二人にもぜひ食べてほしいらしい。

暫し目が合ったまま動かない二人だったが、しようがないと言わんばかりの笑みと共に折れた妖夢がクッキーに手を伸ばした。

「あー！ 三段の筒見つけたわ！」

そんな時、霊夢が叫んでビクツと妖夢の手が止まる。三つの筒？ 何それ？

「航海の神、住吉三神！ うわつのおのみこと 上筒男命、なかつのおのみこと 中筒男命、そでつのおのみこと 底筒男命！ この三柱よ！」

「まあっ！ よかったわね、霊夢！」

表のは手放しに喜んでくれるけれど、何のことか分かってねえだろ。多分。

努力も、意思も

レミリアが月の都に侵攻するためのロケットを完成させたらしい。紅魔館でお披露目のパーティーまでしているのだから、ここまで大々的に見せびらかして実は未完成だ、なんてレミリアのプライドが許さないだろう。

あと、霊夢の監視とサポートを終えるよう命じられた。これで終わりではないそうだが、かなり急な命令でちよつと驚いた。命令の時期的にロケットの完成と無関係だとは思えないが、まあそういうことを考えるのは他のに任せよう。面倒臭い。仕事が終わった。それでいい。

ということ、次の命令に備えて私はのんびりしていた。また面倒臭い仕事を命じられるだろうし、休める時に休んでおきたい。そんなことを考えながら、縁側で随分肌寒くなった黄昏時の空を見上げていた。このまま何もなければいいのに。そんなはずないけど。はあ。

淹れておいたがもう冷め切ってしまったお茶で乾いた唇を湿らせていると、横から足音が響いてくる。そちらに目を向けてみれば、ピリリと空気が張るような雰囲気を感じた藍がいた。どうやら、それなりに緊張しているらしい。まあ、月の都に攻め入るわけ

だしなあ。そりやそうか。

「いよいよだな」

「そうなんだ」

私の隣に立ち止まり、空を見上げながら呟く藍にぼんやりとしたまま答える。

「何だ、その態度は」

「そう言われてもなあ……」

しかし、そんな私の気のない返答に藍は納得していないようで、かなりきつく細めた冷やかな目付きで睨まれた。……止めるよ。そんな目で私を見ないでほしい。はあ。

緊張している藍には非常に悪いのだけど、私としてはいまいちピンと来ないのだ。全容が分からないまま、これをしてどうなるの？ まあいいか別に、なんてことすらも碌に考えることなく、言われるままに何となく熟しているだけ。そりやそうか。神様の力を借りる練習をし続けていた霊夢の監視しかしてないもんなあ。

「彩。お前はこの大役を成し遂げる気が本当にあるのか？」

「んー……。そんな風に訊かれなかつたら、きつとやる気なんて欠片も湧かなかつたと
思うなあ」

「……何だと？ 彩！ お前は、紫様の式神なんだぞ！」

正直に答えた私は藍に思い切り怒鳴られたけれど、耳から逆の耳に通り返けていくよ

うな感覚がした。

そうだね。私は確かに紫様の式神だ。式神を憑けてくれたことを多少なりとも感謝はしているけれど、それだけだ。私は藍と違って、紫様に仕えたたくて式神になったわけじゃあない。ただ死に際に命を拾われただけの関係。紫様の式神だと言われても、それが私のことだと直結しにくい。それと同時に、紫様のために、なんて殊勝なことを考えていないことがほとんどだ。命令されたから、で終わる。

私は怒気を露わにしている藍を見上げ、とりあえず微笑んだ。この表情に特に理由はない。強いて言えば、悪い表情よりいい表情のほうが会話が成立しやすい。話を通じないと、私としてはどうしようもないから。

「まあ、落ち着いてつて。藍、湧かなかった、だよ。今は多少なりともあるさ」

そう言った私を、藍は訝し気に見詰めてくる。止めるよ。その場しのぎの嘘なんだから。

そう思いながら微笑み続けていると、藍がドカリと腰を下ろした。……ああ、ちよつと話が長くなりそうだ。はあ。

「彩。お前は紫様の式神なんだ。私達の行動は紫様の行動であり、私達の成功は紫様の成功であり、私達の失敗は紫様の失敗なんだ。ゆえに、失敗は許されない」

「知ってるよ。何度も聞かされた」

「分かっているまいだろう。失敗を避ける努力を、成功を目指す意思を、今のお前から感じない。……いや、普段からほとんどだ」

「そうかもね。……努力も、意思も、過去に置いて来た」

ポロリと漏れ出た言葉。喋るつもりがなかったのに、どうして漏れてしまったのだろう。まあ、いいか。どうでも。

しかし、藍にとつてはどうでもよくなかったようだ。私の言葉を聞いてしまった藍が、私の肩をガツチリと掴んできた。……止めるよ、痛いじゃないか。

「それは、その言葉は、お前自身の否定だぞ。少なくとも、その内側にいる他のは努力していた。意思があつた」

「私じゃあない。確かに私だった。けれど、私じゃあないんだよ。その努力も、その意思も、もう私のものじゃあないんだ」

「……なら、お前には何がある?」

言葉が出ない。何も無い。それが答えだ。

私は藍を見た。目が合った。僅かに藍の口が動いたが、すぐに閉じてしまう。それ以上、話が続くことはなかった。

明日やること

霧の湖の岸边で横になり、夜空を見上げる。随分と細い月だが、これから少しずつ満ちていき、そして欠けていくのだろう。周囲には数多の星々が輝いている。あの中の一つがレミリアが打ち上げたロケットなのかもしれない、と思うとちよつと不思議な気分になる。

レミリアが月の都を目指すよう焚き付けた。霊夢に神様の力を借りる稽古をつけた。そして、次の満月の夜に紫様は藍と私を連れて月の都に侵入する。そう命じられた。つまり、レミリア達は体のいい囷なのだろう。ひよんなことで進行に成功してしまったのならそれもまたよし、とも思っていたりするのかもしれない。流石にないか。はあ。

ふと、肌に刺さるような冷気を感じて身体を起こしてみると、この辺りでよく見る妖精達が忍び足でこちらに近づいてきていた。その四人の妖精と目が合い、目を見開いて驚いたり、逃げようとしてずっこけたり、苦笑いを浮かべたり、悔し気に頬を膨らませたり、それぞれ違った反応をされた。

「……………、…………？」

せつかくだから声を掛けたはずなのだが、喉から音が出てこない。そういえば、思い

切りこけたくせに砂利が軋む音も弾ける音もしていなかった。……そういう妖精もいたような。まあ、いいや。

「さにーのせいだー！」

「チルノがバカだからあーっ!？」

「脅かそうと思つたのにー……」

「ごめんなさいね、彩」

「いいよ。特に気にしてないから」

私が声を掛けようとしたことに気付いたのか、こけていた妖精と苦笑いを浮かべていた妖精が私に謝ってきた。もう声が出る。やっぱり、チルノを除いた三人の誰かが音を消す能力を持っているのだろう。しかし、その後ろではサニーと呼ばれた妖精とチルノが取っ組み合いの喧嘩をしているけれど、放っておいていいのだろうか？ いいのか。

そんなことを考えていると、私に謝った二人は何故か首を傾げていた。何か変なこと言つたかな？ ……いや、違うか。普段妖精達を話している彩は私じゃあない。あれと違って、私には楽しい気な雰囲気はない。その違いに困惑しているのだろうか。

「……ところで、彩は一人で何をしていたんですか？」

「星を見ていただけだよ。ちよつと、一人で考えたくてね」

色々と考えたくなった。特に、映姫に会つてから。あれ以来、私の思考の端で燻ぶつ

ているもの。終わった私がどうあるべきか。

こんな面倒なことを考えているのは、きつと残りカスみたいな私の役目だろう。別に死にたいわけじゃあないが、だからと言って生きていたいとも思えない。ならば今すぐ死ぬるかと言われれば、そんな無意味な死は御免だと思う。理由もなく、目的もなく、言われたままに、ちよつと文句を言いながら、生かされている。そんな感じ。

「何を考えてたのかしら？」

「明日やることさ」

「もう日付変わってるわよ」

「じゃあ、今日やることで」

私の雑な答えに笑う二人の妖精に、少し肩から力が抜ける。そして、目の前の四人の妖精を見遣った。毎日が気楽そうだ。笑うこともあるだろう、泣くこともあるだろう、嬉しいこともあるだろう、悲しいこともあるだろう。それら全部ひつくるめて、きつと楽しいのだろう。

「……生きてて楽しいかい？」

「はい」

「うん」

「そっか」

羨ましいと思う。私には出来ない生き方だ。そういう生き方は、あの無邪気なのじゃあないと出来ない。

そう思っていたら、急に内側から一つ飛び出してきた。隣のは私では出来ないような、自然で陽気で澆漉な笑顔を浮かべる。

「つつきー、ほっしー。これからしばらくちよーつと忙しくなるからあんまり会えなくなるかも。ごめんねっ」

「あつ、そうなんですか？」

「忙しいところ、悪戯しようとしてごめんね」

「いいよいいよ楽しいから！」

ほら、私はこんな風に笑えないよ。笑えねえよ。

一匹残らず仕留めなさい

『違う……ッ！　違う違う違う違う違う違うッ！　アアアアアアッ！』

夢を見た。一匹の化け猫が慟哭している。過去の回想とも言える、酷くつまらないもの。しかし、二度と思い返したくないもの。こういう時の夢つてのは非常に不都合なもので、目を瞑ろうとしても瞼がなくて、目を逸らそうとしても視点が固定されていて、目を背けることは決して許されない。

『私は……、こんな力は欲してねえよッ！』

私はどうしてこんなものを見せられているのだろうか。長らく見ることもななてなかつたのに、どうして今更になつて掘り起こされてしまうのか。……きつと、ここ最近では馬鹿みたいなことばかり考えているせいだろう。だから、こんなものまで思い起こされてしまう。

場面が転々としていき、その度に化け猫の身体が崩れていく。肉体という器から溢れ自らを滅ぼすほど膨大な妖力を使えば治せないはずがないのに、その身体の傷は塞がる気配はない。治すよりも壊れるほうが早いから？　違う。既に諦めているから。あれは本来不可逆の妖術だったのだから。少なくとも、それを考えた私はオンオフなんて考

えちやあいなかった。

そんなズタボロな化け猫の元に、一つの影が伸びてくる。化け猫がガタガタと震えながら振り返ると、その影の主は手を伸ばしてきていた。表情は見えない。

「あ痛っ!」

と、いうところで私は落ちた。一体何が起きたかもよく分からず、まだ夢の中かと思つたのだが、どうやら違うらしい。上を見上げると大きなスキマが開いていて、私の横には紫様が普段の三割り増しくらい真剣な表情で私を見下ろしていた。そして私の周囲には布団が崩れている。つまり、寝室で眠っていたこの身体がスキマを通して落とされた、ということだろう。

「寝ていたところ悪いわね、彩」

「……いえ、別に。で、紫様。用件は何ですか?」

こうして無理矢理叩き起こされるだけの理由があるはずだ。落とされたせいで多少背中が痛いのは気にしていられない。

「屍食鬼の群れが幻想入りしてきたわ」

「……屍食鬼?」

「人間の屍を喰らう妖怪よ。善良な屍食鬼もいるけれど、今回は邪悪。墓荒らし程度ならまだしも、おそらく殺して喰らうわ。しかも、人間に化けるかもしれない」

紫様の簡単な説明に非常に面倒臭そうだ、なんて思っている、私の隣にどれかが出てきた。僅かに腰を浮かせてすぐに跳び出せる姿勢を取ったあたり、その屍食鬼とやらを殺すつもりなのだろう。

私の前にスキマが開く。地面を見下ろす形になっており、屍食鬼と思われる薄汚い人間と似ているが決して人間だと思いたくない様相をした者がたくさん見えた。

「数は二十。屍食鬼は本能のままに人間の里に向かっていているわ。今は霊夢がないから、好きにさせるわけにはいかないの。彩、一匹残らず仕留めなさい」

「ふん」

そう命じられ、私は隣のに引つ張られるようにスキマに跳び込んでいく。飛び降りていく最中に爪を伸ばし、落ちていった先で無防備にしていた屍食鬼の頭に振り下ろした。頭蓋骨ごと叩き切るように破壊し、そのまま倒れ伏す。これで一人。

屍食鬼が一人死んだ瞬間、残りの屍食鬼の視線が私に集中した。仲間を殺されたからか？ ……いや、違う。意識が私に向いていない。私が殺した屍食鬼の死体に向いていた。つまり、共喰いするつもりなのだろう。たとえ屍食鬼だとしても、死ねば屍だから。「シッー」

しかし、意識を逸らせるのなら楽だ。私は隣の動作に付いていくように身体を動かして、手近な屍食鬼の首を落とした。思ったよりも柔らかい感触。その調子で駆け出しな

がら爪を振るい、一人ずつ殺して回っていく。次の標的を見れば、クチャクチャと屍を食い荒らしている。首を撥ねた。次の標的も屍を喰つていた。首を撥ねた。

「チ、グジョ……ッ。オ、オ……。ナ、ゼ」

屍食鬼がなんか言つてたが、構わず首を撥ねた。気分が悪い。が、人間の里の人間はある程度生かさなくてはならない。幻想郷のルールも知らないで好き放題喰い荒らされたら困るのだ。説明もなしに殺してすまないとはちよつとだけ思うけれど、これも残酷だが受け入れてほしい。悪いとは思わないが。

そしてついに最後の屍食鬼の首を落とそうと右腕を真一文字に振るつたが、その屍食鬼は跳び退つて私の爪を躲した。そして、恨みがかつた目で私を睨み付ける。

「ギザマー！ グラッデ、ナニガ、ワルイツー！」

そう掠れた声で叫びながら跳びかかつてきた屍食鬼が伸ばしてきた腕を左腕で引き裂き、続く右腕で首を落とした。残つた身体を横に跳んで躲すと、落とした首がコロコロと転がっていく。その頭が、ちょうど顔が見えるところで止まった。

「ゴノ、ゲドウ、……ガ」

そんな呪詛を最後に、屍食鬼は息絶えた。仕事は終わった。

スキマを閉じずに終始見ていたらしい紫様が屍食鬼の死体を巨大なスキマで飲み込んでいく。それらが何処へ行くのかは知らないけれど、もうどうでもいいことだろう。

私にも別の隙間が通り抜けていき、こびり付いた返り血や臭いなんかを取り除かれる。痕跡一つ残らない。

やることを終えたからか、気付けば隣のは内側に戻っていた。私は跳び込んできたスキマを見上げ、そちらへ飛んでいく。スキマを通り抜けると、何事もなかったかのように閉じられてしまった。

「上出来よ、彩」

「……外道、か」

「あんな戯言、聞き流しなさい」

「そうですね」

そう返したものの、私は聞き流せそうにない。

私は既にあるべき道から外れている。そういう存在を外道と呼ぶのだろうか。

……最ツ悪よ!

私は妖怪の山を登っている。最近妖怪の山に幻想入りしてきた神社には神様二柱と巫女一人が、頂上にはここを治めている天狗の長である天魔がいるらしいが、ハッキリ言つてこれっぽっちも用はない。偶然出掛けていたところを出会うでもない限り、きつと顔を合わせることすらしないだろう。そんなもんだ。

「……着いた」

鬱蒼をしている樹々の間を抜けた先、ようやく辿り着いた目的地に一息吐く。ここは迷い家。藍の式神、橙が住んでいる。

満月まではもう一週間もない。だから、私は橙に用が出来てここに来ている。彼女には嫌つてほど嫌われているが、そんなこと分かつている。嫌われている相手に好き好んで顔を合わせたいと思うほど、私は被虐的じゃあない。ならば他に理由があると問われれば違う。紫様に何か命じられたわけでも、藍に代理を頼まれたわけでもない。私の意思でここにいる。別に止められていないし、他の仕事があるわけでもない。ならば、問題ないでしょう?

「さあ、いっこうか」

だからと言って、気分がいいわけじゃあない。あまりよくない。しかし、私は意を決して迷い家に踏み込んだ。別に、橙がいらないならそれでもいい。むしろ、そちらの方がいいのではないだろうか？ 私の身勝手な用得橙を不快にさせようとしているのだ。ここまで来たくせに、止めた方がいい気がしてきた。……止めねえけどさ。はあ。

普段橙が住んでいる家の前に立ち、私は扉の取っ手を思い切り捻った。一瞬、ガチリと引つ掛かる感触がしたが、解錠の妖術で無理矢理押し開けた。そして扉を閉めることなく、そのまま奥へとわざとらしく足音を立てて突き進んでいく。

「何ッ!？」

「やあ、橙。気分はどうだい?」

「……最ツ悪よ!」

「そうかい。それはよかった」

勝手に部屋に入り込んできた私を見た橙の気分は一瞬にして急降下し、その表情は見るからに厳しく鋭く険しくなっていた。私自身のために軽口に軽い調子で話しかければ、嘘偽りない答えを返された。……本当、よかった。相変わらず私は嫌われている。そのことに、ちよつとだけホツとしてしまう。

「……鍵は閉まっていたはずなのに」

「開けた」

解錠の妖術を使ったとはいえ、無理矢理抉じ開けた際に下手に力を込めたからか、多少壊れてしまった気がするが、もう過ぎてしまったことだ。どうでもいいだろう。

橙の敵意が突き刺さる。けれど、不思議だ。もっと気分が悪くなると思っていたのに、そこまで悪くならない。直前に引き返そうとすら思ったはずなのに、むしろここに来るまでのほうが悪かったんじゃないやあなかるうか。

「私は用なんてないわ! 帰れ。むしろ死ぬ」

「私はあるんだよ、橙」

「黙れッ! その口で私の名を呼ぶなッ!」

そう叫ぶ橙と目が合う。睨み付けられる。そんな瞳を、私は見詰めた。瞳に映る私の瞳と目が合った。よく見る濁った目をしていた。はあ。

一つ大きく息を吸い込む。そして、ゆっくりと吐き出した。もう一度橙を見遣れば、さつきと変わらず私を睨みつけていた。そんな彼女に、私は端的に用を口にした。

「橙。貴女は、生きてて楽しいかい?」

しかし、答えが返ってこない。……せめて答えてほしかったんだけどなあ。答えてくれるまで待とうか、それとも諦めてさつきと帰ろうか。

少し考えて、もう一度だけ訊くことにした。それで駄目なら、諦めて帰るとしよう。

「生きてて、楽しいかい?」

「……今この瞬間から最悪を更新中よ」

「……そうかい」

そういう生き方も、悪くないのかもしれない。

退屈過ぎて死んでしまうわ

ふと空を見上げるが、星明かりはもちろん、月明かりすら届かない。あまりに静かで、私以外誰もいないのでは、と錯覚してしまう。そのくらい寂しい竹林の中、私は足を動かし続けている。とはいえ、ここは迷いの竹林。目的地に到着出来るか少しばかり不安ではある。到着しないなら、まあ、それはそれで。

これを道と呼んでいいのか分からないが、右側に脇道らしきものが見え、私は特に考えずに右に曲がる。

「違いますよ」

が、脚が突然止まり、飛び出してきた隣のが声を発した。それだけ言うと、隣のはすぐに内側に戻っていく。どうやら、右に曲がってはいけないかつたらしい。そう言うのならば、そうなのだろう。私の貧相な記憶なんぞよりもよほど信用出来る。ちなみに、道案内はこれで七回目。大助かりだ。

そんな感じで後何度か道案内をされながら歩き続け、私は迷いの竹林から開けたところに着した。一息吐きながら夜空を見上げれば、満月から僅かに欠けた月が見えた。この調子なら、後二日で満月だろう。

「月面戦争まで残り僅か、かあ。……はあ」

思うことは多々あれど、既に命じられている身だ。残念ながら避けられるものではない。どれだけの脅威だろうか。まあ、知ったことではないが。

そんなことを思いながら、私は前を向く。以前、異変で侵入したときと大差なく見える屋敷、永遠亭を眺める。ここが目的地。話したい人と会えるかどうかは、また別の話だが。はあ。

永遠亭の敷地に侵入し、軽く庭を見回しながら玄関へ向かう。なんか丸っこい兎がたくさんいるけれど、これといって敵意はなさそうである。というか、ちよつとこちらに顔を向けただけですぐにやっつけていたことに戻っていく。警戒する価値がないのか、それともどうでもいいのか。どうでもいいっぽいですね、これは。それならそれで好都合。

難なく玄関の前に着き、扉に手をかけた。無造作にガラガラと音を立てながら開くと、バシンと張っていたものが一気に縮む音が響いた。一体何の音だろうか、と思つてみると、突然冷たいものと硬いものが全身に叩きつけられた。……うげえ、水じゃん。あと盥。

「引つ掛かったー！ 侵入者侵入者！」

悪戯に成功したような子供の様な声が聞こえ、私はため息を吐く。そんなことは今、

どうでもいい。というか、気にしてられない。

揺れる。揺らぐ。剥ける。剥れる。……式神が僅かに取れかけてしまった。理由は何だ？ さつき思い切り水を叩きつけられたせいだ。まずい。非常にまずい。ほら、内側からいくつも押し寄せてくる。離されていたはずなのに、近付いてくる。

「何事!?! つて、貴女は……」

「……悪いけど俺は—今ね—輝夜さんに—用が—あん—です—よ—で—だ—……
—ウサギ—邪魔だ—から—ちよつと—脇に—退いて—くれ—ね—かい?—」

「はあ!?! 急にそんなこと言われても姫様に会わせるわけないでしょう!—」

「あつ—そう—かい—それなら—仕方が—ね——ですね—……—なら—悪いが—押し—
通らせて—いただき—ま—すっ!—」

ごちゃ混ぜに口が揺れ動く。一瞬で臨戦態勢を取った鈴仙が見える。極めてスロウに見える。人差し指が私に向けられるのを予測し、寸分の狂いなく向けられる。そこから放たれる妖力弾の着弾予測は両膝と眉間。その地点に結界が張られ、鈴仙の目が僅かに見開かれた。

……私は誰だ。けれど、ハッキリ分かることがある。これ以上は危険だ。

「火術—ええ—おう」

九つ揃って火の妖術を放った。瞬間、視界が真っ赤に燃え盛る。

「きやあつ!? ……つて、え?」

ただし、燃え上がっているのは私だけだが。手っ取り早く乾かせば式神は再び貼り直される。そうすれば、表に出されたのは内側に戻れるはずだから。

まあ、水が乾き切る前に邪魔な鈴仙は退いてもらおうとしましょうか。

「シツ—つと」

「あ……ツ!?」

「らあつ—隙あり—申し訳—ねえ—です」

身体強化で硬化させながら肉薄し、一息で鳩尾、心臓、首と三連撃を叩き込み、怯む隙も与えず踵落としを頭に叩き込む。キチンと硬化出来ればこの程度の速度で皮膚が破れずに済むらしい。まあ、どうでもいいが。はあ。

「熱ちち。よい、しょつと。……ふう」

纏っていた炎を振り払いつつ、動かなくなった鈴仙を脇に寄せておく。ああー、滅茶苦茶熱い。酷い目に遭った。何処のどいつだ、あんな悪戯しかけたのは。ふと、目が合った妖怪兎が一目散に逃げ去っていった。……まあ、もういいや。多少面倒事にはなったものの、済んだことだし。はあ。

しかし、こんなことをして私は輝夜に会えるだろうか? 出来ることなら、月面戦争が起こる前に一度会っておきたいんだけど。

「あらあら、珍しいお客様じゃない」

「……ちようどいい。貴女に会いたいと思つていたところなんですよ、輝夜」

突然背後から声を掛けられ、振り返れば目的の相手が立っていた。氣付いたら、と
いった風である。ただし、その後ろにいる永琳が付いているのはあまりいいことではな
いのだけど。……まあ、そこはしようがないと割り切ろう。

口元を隠してくすくす笑う輝夜は、私に一步近付きながら一つ問いかけてきた。

「貴女の主人に何か言われてきたのかしら？」

「いえ、関係ないですよ。私の意思でここに来ています」

「姫様。彼女は……」

「いいのよ永琳。このくらい遊びがないとつまらないじゃない」

本当に紫様は関係ないんだけどなあ。まあ、信じてくれなくても結構。それに、私が
勝手に輝夜に会いに行つた程度で崩れる計画なら既に土台が腐つているだろう。流石
にそんな杜撰な計画で月面戦争を仕掛けるつもりではあるまい。

私は、一つ訊ねたいことが出来ただけなんだ。

「輝夜。私はきつと貴女を殺せます」

そう言い来る前に、私に矢先が向けられる。輝夜の背後にいる永琳から発せられた殺
意が突き刺さる。が、その矢と私の間に輝夜の手が差し伸べられ、永琳は戸惑いながら

弓を下ろした。

「その上で訊きます。貴女は生きてて楽しいですか？」

「ふふっ、それをよりにもよって私に訊くのね。楽しいわよ。たとえ無限の過去に押し潰されようと、今がとでも楽しい。楽しくないと退屈過ぎて死んでしまうわ」

「……死にたく、ないんですか？」

「死にたいわ。けれど、今じゃないわね」

それなら、よかった。

今生きている、今日を

「今日は冷えますね、彩様」

「そうだね、阿求」

縁側に座って丁寧に手入れされ、その上に薄く雪化粧が施されている庭を眺めながら、熱めに淹れたお茶を口にする。……うん、苦いし舌が火傷しそうだ。下手だなあ、私。これは阿求に悪いことをしてしまったかなあ。

そう思いながら阿求の様子を窺うと、流石に湯呑に触れた際の熱さで察したらしく、軽く息を吹きかけて冷ましてからお茶を飲んでいた。少し微妙な顔をされてしまった。……うん、まあ、そういう反応されちゃうだろうとは思ってた。はあ。

そんな苦笑いを浮かべた阿求がこちらに顔を向けた。

「それで、今日はどのような御用でこちらに？」

「暇潰しだよ」

「そうでしたか」

そう答えると、阿求はホツとした表情を浮かべた。紫様の伝言なんて何も無いよ。うん。やることないから来たんだ。

まあ、実際のところ暇ではあるが、それと同時にそんな暇なんてないとも言えるのだが。明日の夜は遂に満月。つまり、私達が月に攻め入るということである。やることなんて探せば見つかるだろうに、私は何もせずこうしている。何もしていないのに悪いことをした気分だ。何もしてないのが悪いのだが。はあ。

もう一口お茶を口に含む。苦い。酷い苦さだ。どうしてここまで違ってしまったのだろう。……まあ、いい。

「阿求はさ」

「何でしょう?」

私は何でもないようにそう話し出す。何処にでもある、ありふれた、何気ない会話のように。私にとって重大なことでも、阿求にとっては軽い雑談の一つとして埋もれてくれるように。

「貴女は、生きてて楽しいですか?」

「生きててですか? それは難しい問いですね」

「あら意外。毎日楽しいってすぐ答えると思ってた」

「いえ、楽しいですよ?」

阿求はそう言つて微笑むと、空を見上げた。釣られて私も見上げてみるが、これと言つて何事もない、いくつかの小さな雲と澄んだ青空が見えた。

「ですが、私は先が短いですからね。転生すると分かっているとしても、一日が終わるのが怖い
です」

「……ふうん」

「けれど、……いえ、だからこそ、今日を楽しく過ごしていると思うのですよ」
「それは、義務感かい？」

「嫌なこともあります。辛いこともあります。けれど、楽しい方がいいに決まってる
じゃないですか。だから、私は今日を楽しんでいます。今生きている、今日を」

その答えを聞いて私は思う。嫌なことは見上げるほどあった。辛いことは溢れるほ
どあった。けれど、私は楽しいと思ったことは碌にない。ただ、樂したいと思うだけ。
その樂したいと思うことすら、成し遂げられていないのだが。はあ。

残ったお茶を一気に飲み干した。苦い。最後まで苦い。……苦いなあ。

「彩様」

「何？」

思わずしかめ面をしていると、阿求が私を覗き込んできた。

「何か、あったのですか？」

「……いや、何も」

「……それなら、いいのですが」

ありがとう。一つ決めたよ。ようやく、踏み出せそうな気がする。

貴女を殺しても、私は許されませんか？

普段は食卓として使っている机の上に身体をのべーつと伸ばしていた。窓から見る空が眩しい。今夜だよ、今夜。あー、嫌だ嫌だ。面倒臭い。何でいちいち月に攻め入らねえといけねえんですかねえ？ まあ、やりますけどね。はあ。

そんな私の目の前に一つの湯呑が置かれた。視線を湯呑を持っていた手の先に向けると、小さなスキマが開いている。湯呑の次は饅頭が置かれ、そしてスキマを大きく広げた紫様が降りてきた。

「随分固くなってるわね。緊張してるのかしら？」

「……そりゃあ、まあ。今夜でしょう？」

「ええ、そうね」

身体を起こし、湯呑を手にしながら妖しく笑う紫様を見遣る。何でそんな自信満々でいられるんだか。はあ。

まあ、いいや。後で自分から顔を合わせようと思っていたけれど、紫様から来てくれたならちようどいいし、今のうちに訊いておこう。

「紫様は、生きてて楽しいですか？」

「この上なく楽しいわ。そういう貴女は、……楽しくなさそうね」

そう言われ、私は思わず目を逸らし顔をしかめてしまう。こう、まるで見透かされたような言葉はあまり好きじゃない。はあ。

無論、楽しくなんかない。どうしてかな。楽しいって思えないんだ。思いたくないのかも。あの時助けてくれなければ、と思って自嘲する。まあ、そんなもしもは深く考えないことにしよう。取り返しがつかないし、この上なく面倒臭いから。

「どうして楽しいんでしようかね」

「やりたいことを好きにだけやれるからよ。貴女にも一つくらいあるでしょう？ やりたいこと」

「やりたいこと、ねえ」

そう言われて思い浮かべたのは、訓練だった。いや、これは私じゃないか。家事も私じゃあない。奉仕も違う。挑戦も違う。遊びも、殺しも、考察も。かと言って、何もしたくないわけでもない。……あれ、私がしたいことって何だっけ？

そこまで考えたところで、僅かに蓋が開く音がした。いや、音なんてしていない。した気がただけ。……そうだ。まだ開く時じゃあないし、そもそも開くべきではない。だつてそうでしょう？ 私は弱いんだから。

「……そうね。貴女はそうだったわね」

そんな言葉が聞こえ、私は紫様に顔を向けた。憐れむような目だった。……止めろよ。そんな目で私を見るな。

「他のと違って、貴女はこれと言ってやりたいことがない。他人任せなのに、肯定も否定も半端でどっちつかず」

「……分かつてるなら訊かないでくださいよ」

「そうね。貴女をそうしたのは私なのだから」

紫様はそう言いながら、私の口に饅頭を無理矢理押し込んだ。急に何を、と思いがらそのまま啜えていると、けらけら笑い出す。本当に何なんだよ。はあ。

「けれど、ただ一つ貴女にブレないものがある。それは弱くあれ、としているところ。

……私が気に食わないところ」

私は口に押し込まれた饅頭を手にして咀嚼しつつ聞いていた。気に食わないのか。碌に知らないくせによく言う。あるいは、知ったようなことを言う。

そう思っていると、人差し指を突き付けられる。紫様の鋭い視線と目が合う。

「たった一度の失敗で止めるなんてもったいないわ。貴女はこうして生きてるのだから、もう一度やり直せるでしょう？」

勝手なことを言うな。やり直すのは嫌いだ。二度と御免だ。

けれど、一歩だけ踏み出してしまった私には、非常に縋り付きやすい甘言でもあった。

「……紫様。以前、生者として生きろ、とおっしゃいましたよね？」
「言つたわね」

一つ深呼吸を挟む。次の問いの答えで、私がどうするかを決めよう。……ああ、やっぱり私は他人任せだ。

けれど、しょうがないじゃないか。私は、一人で勝手にやつて取り返しをつかないことをしたんだ。他の誰かに決定を譲らないと、やつていられない。

「藍を殺しても、許されますか？」

「許すわ。決してさせないけれど」

……ああ、そうだよ。

「博麗の巫女を殺しても、許されますか？」

「許すわ。決してさせないけれど」

許されないとかほざいてるくせに、許さないでと泣くくせに、許される方が辛いくせに。

「幻想郷を壊しても、許されますか？」

「許すわ。決してさせないけれど」

私は誰かに許されたいんだ。

「貴女を殺しても、私は許されますか？」

「許すわ。決してさせないけれど」

そうじゃないと、踏み出すことすら出来やしない。

「……本当に？」

「その程度のことでも許せないほど、小さいつもりはないわ」

そっか。

それなら、私は一線を踏み越えてしまえるよ。

最後の命令よ！

私は紫様と藍がなんか小難しい会話をしているのを聞き流し、背を向けて夜空に浮かぶ満月を見上げた。これからあそこに行くのか……。既にレミア達がロケットを使って月の都に飛んでいつているはずなので、彼女達を囿にでもして別方向から攻め入るわけか。

「聞いているのか、彩？」

「いや、聞いてなかった。で、何？」

「おい。……これから私達で空き巣をしてめぼしいものを奪いに行く。隠密に、だ。分かっただな？」

背を向けていたところを藍に呼ばれ、訝し気に睨まれながら問われたことに正直に答えてみれば、呆れられながら教えてくれた。んー、攻め入るだとか戦争だとか言ってたくせに、随分みみっちいことをするなあ。……まあ、そちらの方が楽そうだしいいか。私にとっても。

そんなことを思っていたのがバレたのか、妖しく笑う紫様が私を見詰めてくる。

「彩。遙かに進んだ科学力、強靱な生命力、妖怪には手に負えない未知の力。地上の民は

月の民には決して敵わないわ。特に、月の都ではね」

「……へえ、そんなもんなんですねえ」

無限に等しいエネルギー、不老長寿に不老不死の薬、何の脈絡もなく隣に現れる。……うん。輝夜を月の民としていいのかわからないけれど、そう考えれば理解は出来る。理解するだけだが。

だって、紫様は嘘を吐いている。具体的には、決して敵わない、というところ。科学力、生命力、能力では敵わなくても、それ以外では敵うとも思っているのだろう。思っているだけかもしれないけどさ。はあ。

そんなことを考えながら、私は藍を見遣る。そんなこと微塵も考えていなさそうな実に真剣な表情。そんな私の視界の端で、大きなスキマが開く。

「さあ！ 藍、彩、最後の命令よ！ 中に入って私を満足させる素敵なものを盗んできなさい！」

まあ、対峙しないのならその三要素はほぼ関係ないだろう。さつさと行つてさつさと盗つてさつさと帰ればいいか。

そんなことを考えながら、私は早速スキマに飛び込んでいった藍の後ろを付いている。スキマを通り抜ける寸前、紫様がスキマを開くのが見えただけれど、まあどうでもいいだろう。

藍が着地する前に、目の前の背中に一つ妖術を叩き込む。続けて全く同じ妖術を私も付与。藍が振り返って私を睨んできたが、手水草で前を向くよう促せばすぐに前を向いた。消音の妖術。気休め程度だが、その身体から発する音が消える。一割くらい。シヨボ過ぎて効果なさそうだけど、まあ、ないよりはマシだろう。きつと。

私の背後にスキマを通り抜けた紫様が来たところで、改めて降り立つた場所を見回してみる。竹林だった。へえ、月つて竹が生えてるんだなあ。

「違うッ！ こゝは迷いの竹林だ！」

「え？」

「いけない！ 満月が閉じてしまうわ！」

「はあ？」

何やら二人が慌てている中、若干置いていかれながら私は紫様が開いていたスキマが独りでに閉じていくのを眺めていた。……ええーっと、満月同士を繋げて月の都に行くはずだったのに、通り抜けた先は何故か地上のまま、繋いでいたはずのものが閉じようとしている。というか、今閉ざされた。……あれ？ 失敗した？ この最重要そうな局面で？

「そう。月の公転周期の僅かな乱れ。それは完全な数であるはずの二十八を僅かに欠いたトラップ。もう貴方は月に戻れない。師匠が千年以上も前に仕掛けたトラップだね」

いまいち空回りしてそんな頭でそんなことをぼんやり考えていると、背後からそんな言葉が聞こえてきた。振り返ってみれば、腰まで伸びた金髪と金色の瞳を持つ少女と月の兎が立っていた。

……よく分からないけれど、紫様は罫に嵌められてしまっただらしい。あーあ、何やってんだか。はあ。

月の最新兵器

「小人愚者を囮とし愚者を欺かんとす。留守に気をつけろ。……うふふ、お師匠様の言った通りね。あんな大時代なロケツトは目眩まして、本物は静かに現れるとね」

私達の前でなんか言っている少女の言葉を話し半分で聞き流しながら、私は夜空を見上げた。残念ながら、私は月に行き損ねたらしい。素敵なものを盗み出すことは出来なさそうだ。まあ、しょうがないね。

少女が月の兎に何やら自慢気に話しているが、私は藍を見遣った。険しい顔を浮かべているが、これは本気で焦っているらしい。次に紫様を見遣る。余裕そうだが、視線が少女から離れていない。……あーあ、ピリピリしてるなあ。居心地が悪い。はあ。

そこまでしてようやく少女の長つたらしい戯言が終わったらしく、目を向けてみればその場からふっと消え去ってしまった。

「浅はかなものよ。私と一戦交えるかね」

その言葉がやけに近くから聞こえ、紫様の喉元に閉じた扇子を突き付けて笑う少女が見えた。……見逃した。ということとは、瞬間移動の類かな？　まあ、具体的にどんなことをしてそうなったかなんてどうでもいい。

そのまま紫様と少女は動かないでいる。いや、紫様は動けないのだろうけれど。……さて、どうしようか。紫様の喉元に得物が突き付けられているから、私としても非常に手出ししにくい状況である。紫様を見捨てて攻撃する？ 嫌だ、面倒臭い。後始末とか、色々。はあ。

「この扇子は、森を一瞬で素粒子レベルで浄化する風を起こす。そんな月の最新兵器相手に貴女は何が出来る？」

……はい？ いきなり何を言ってるんでしようかねえ？ しかし、少女は本気でそうだと知っていることに気付いてしまい、私は思わず扇子を凝視してしまう。最新兵器つて、これが？ え、本当に？ こんなものが？

しばらく膠着状態でいた二人だったが、突然紫様の身体からふつと力が抜けた。

「あーはっはっ！ もう降参、降参！ 戦う気なんてないわ。最初からまともに戦ったら勝ち目がないんだから。囀作戦がバレた時点で私達に勝ち目はなかったのよ」

そう言っただけで笑い続けている。藍は思わずといった風に紫様と呟いているけれど、私としては罠に嵌った時点でこうなるだろうと思っていた。だって、紫様本人がそう言っただでしょう？ 何やってんだか。はあ。

「いやに聞き分けがいいわね」

しかし、対する少女は訝し気に紫様を睨んでいる。……いや、そんな睨まなくていい

よ。紫様は本気で勝ち目は無いって言ってるんだから。怪しみなくなるのも分かるけれど、怪しまなくていいんだって。

そんなことを思っていると、紫様が膝を追って両手を地に付けた。

「敗れた側がこんなことを言うのもおこがましいかも知れないが、……全ては愚かな一妖怪の所行。地上に住む全ての生き物には罪はない。どうかその扇子で無に帰すのは勘弁願えないだろうか」

うわ、無に帰す!? 素粒子だとか浄化だとか言ってたけれど、それってそういう意味だったの!? ……はあ、そっかそっか。そうなのか。

私は少女に目を遣った。しかし、少女は紫様を見下ろすばかりで私を気にも留めていない。

「ここに住む生き物に罪がないはずがありません。地上に住む、生きる、死ぬ。それだけで罪なのです。お前への罰は月に持ち帰って考えるとして……。地上の生き物への罰は」

そこで一度区切ると、少女は言い放つ。

「一生地上に這い蹲って生き、死ぬこと」

今更過ぎて、馬鹿にしてるのかと思った。馬鹿にしてんだな。うん。

真の『九心九尾』

月の兎が私の身体を細い紐で縛ってくる。縛られるのが紫様、藍と続いて最後なあたり、放っておいてもいいと思われたのかもしれない。まあ、実際そんな感じだ。

私は後ろに回された左手で右手首を握り締め、少女が実に自慢気に語っているこの紐についての話を半ば呆れながら聞かされる。このフェムト何とかだけどき、わざわざ小難しいことを言っているけれど、ちよつとやそつとじゃ千切れないなんか凄い紐つてこどでしょう？ 物凄くどうでもいい。

「藍」

「……何だ、彩」

目線だけを横にやって藍に向けて小声で呼んでやると、非常に苦い表情の藍が悔し気な小声で返してくれた。なんだ、その顔。逆に笑えてくるじゃないか。……そう睨むなよ。はあ。

目線を前に戻し、未だに紐が不浄な者をどうのと語っている少女を見遣る。そして、ここ最近散々考えていたことを思い返す。……まあ、うん。悪くないな。

「前よお、努力と意思がどうのつて言ってただろ？」

そんな私の隣に、一つ飛び出してそう言った。……あれ。どうして表に出てくるんだろう？ 他にはまだ何も言っていないはずなんだけど。

「それなら、今こそ成功を目指す意思が必要じゃないかしら？」

さらに一つ。その言葉、私が言おうと思つてた言葉なんだけど。なんで分かるの？

「拘束程度、障害にならん。敵は殺す」

続けて一つ、両脚だけで立ち上がる。ちよつと、何勝手に。少女が言葉を止めて警戒してるじゃん。

「あれは危険ですからね。取り除かなければなりません」

一つ、左手で右手首から指先に至るまでの骨を治療し、文字通り骨抜きにしてしまった。いや、元よりそのつもりだったけど。

「力業の近道と、知略の遠回り。どちらも否定されていますが、ならばどうすれば正解だと思いますか？」

一つ、骨がなくなつた分だけ細く柔らかくなつた右手を引き抜く。

「今の僕さ、全ツ然楽しくないんだよね。つまんない」

一つ、骨抜きになつた右手が再治療され、キチンと骨が埋め込まれた。

「ん」

一つ、退魔の妖術を右手に宿す。私一つでは到底出せないほど強力で、無慈悲な輝き。

「おっせーんだよ、バーカ」

最後に一つ、そう言つてこの身体を右手で貫いた。そして、握り締める。

「ゲボ……ッ！」

「彩!? 貴女、何してるの!? 止めなさい!」

突然の私の行動に、ギョツとした表情で振り返つた紫様と目が合う。これは命令だ。従わなければならない。この手を止めなければならない。

「嫌だね。私は許されている」

……んなわけねえだろ。もう遅いんだよ。

あーあ、実に身勝手な覚悟だ。外れた道を、さらに踏み外そうとしている。けれど、そんなもんだらう? 最低だ最悪だと言つてきたけれど、それを更新するのも悪くない。勝手に一番底だなんて言つてても、そんなもの思い込みに過ぎないのだから。

私は握り締めたそれを引き抜いた。身体に空けた大穴は、即座に癒して閉じる。そして、取り出したそれを放り棄てた。

「貴女、式神を……っ!?!」

「これが真の『九心九尾』です」

その宣言と共に、唐突にフェムトファイバーが千切れ飛んだ。

器兵新最の月

近付く。表と内側の境界がなくなり、全てが表に引きずり出されてしまう。

刺さる。切り離された八つが欠落していた私を貫いていく。

繋がる。何を考えたか、何を思うか、何をするか、全てが分かる。

混ざる。私は俺。私は私。私は私。私は僕。私は俺。私はわたし。私は私。私は俺。

「最ッ高にサイテーな気分……。だが、ふん、まあ、最悪なくれえ最良です」

爪先で地面を軽く突き、身体の感覚を思い出す。しかし、そんなものは必要なかった。忘れていかなかった。覚えている。嫌ってほど、刻み込まれていた。

チラリと目を前に向けると、月の最新兵器だという扇子を握る少女が見るからに狼狽えているのが分かる。認識出来ない細さの繊維で組まれた限りなく連続した物質であり余計な物がなくなることで最強の強度を誇りさらには余計な穢れも付かなくなったと自慢げに語っていたフェムトファイバーが千切れたのが、そんなに信じがたかったのだろうか？

しかし、まあ、私からすればそんなものは最早どうでもいい。それよりも、私がするはずだったことを先取りされたこと。……何だよ、半端に剥れた際に伝わってたのか。

どれもこれも消えてしまうのに、何で自ら付き合おうなんて思えるかね。悪いね、私の身勝手に付き合わせて。私は悪くない。

「そのまま縛られていれば放っておいてやる」

「あー、もうええです。んな台詞、全部……意味なんざねーからねっ」

少女が扇子を向けた少女が上からの言葉をつき捨てる途中、私は肩を竦めて笑ってしまふ。意味なんてない。何をしようと、何をされようと、最早何一つどうでもいい。

「それに、他人任せで腰抜けなテーマにその最新兵器は振れねえよ。計画は師匠、罫もお師匠様、兵器は技術。んでもって、……使うつもりもありやしません。所詮見せるだけのお飾り。貴女にや何も出来ない。出来やしねー」

けれど、いや、だからこそ、私は好き放題物を言える。それが正しかろうと、誤つていようと、全てがどうでもいいのだから。

しかし、これだけ言われて黙っていられるほど少女は我慢強くはなかつたらしい。わざとらしく音を当てて扇子を開き、そして挑発でもするようにゆるやかに手首を上げて見せた。

「彩！ 何を考えているの!？」

「これから誰も彼も紫もみいーんな……消えんですよ？ 俺のせいでねえ」

「お前は紫様の式神じゃあないのか!？」

「るっせえ。既に剥れてんの。申し訳ございませんね、八雲藍」

背後から悲痛な声が響く。何だよ、幻想郷が壊れても許されるんじやあなかつたのかい？ それに、私はもう式神じゃあないんだよ。その辺にいる、ただの化け猫だ。

……いや、もうただの化け猫じゃあないんだった。本当、嫌になる。はあ。

「自ら無に帰ることを望むなら」

「そーだねっ。全ては……なかつたことになる」

「お望み通りここで罪を償いなさい」

そう言った少女が手に持っている月の最新兵器である扇子が振り下ろされ、放たれた旋風が目の前の景色を瞬く間に消し去ってしまったしてっ去し消に間く瞬を色景の前の目が風旋たれた放、れさろ下り振が子扇るあで器兵新最の月るいてっ手に手が女少女に肉薄し、私はその顔を蹴り抜いた。グシャリと鼻が潰れた感触が伝わってくる。

「アが……っ?」

「ん、つかっしいですね……」

蹴り飛んでいった少女は背中を地面に滑らせていったが、血がドクドクと溢れるその顔は私をしつかりと見詰めていた。

かなり強めに潰すつもりで蹴り飛ばしたつてのに頭が弾け飛ばなかつた。思つてたよりも頑丈だったらしい。月の民の強靱な生命力つてやつを舐めてた。

「ふん、もうどうでもいいね」

私は一步踏み出した。瞬間、その速度は最高速へ到達する。

たいてめ詰見とりかつしを私は顔のそるれ溢とクドクドが血、がたついてせら滑に面地を中背は女少たついでん飛び蹴り飛んでいく瞬間の少女の頭に踵落としを叩き込んだ。

「ぐ、……………な、らば……………」

「あん？」

踵落としをもらに喰らって膝から崩れ落ちた少女は、次の瞬間ふつと消えてしまった。……………さっきの瞬間移動か。しかし、もう遅い。遅過ぎる。その時その瞬間そこにしたのなら既に手遅れなのだから。

私は駆け出し、遙か遠くから風を切り全てを素粒子に分解していく音を聞きながらがなき間を音くいてし解分に子粒素をて全り切を風らかく遠か遙。たつましてえ消とつふ間瞬の次、は女少女の扇子を持った手に向けて脚を振り下ろし、そして踏み潰す。

「いぎっつー！」

「遅えんです、馬ア鹿」

少女の手首を踵を使って問答無用でグリグリと押し潰していくが、しかし再び消えてえ消び再しかし、がくいてし潰し押しグリグリで用無答問てつ使を踵を首手首の骨を即

座に踏み砕いた。それと同時に、その手に握っていた扇子が地面に落ちる。

苦痛で顔を歪ませながらも、少女は私を睨み付けたまま目を離さない。

「貴、女……。まさか、時間を遡っ」

「黙ってな」

「つ遡を間時、かさま。……。女、貴、女……。がああああつ!」

踏み砕いた手首から自然の雷に等しい威力を持った雷の妖術を流し込んだ。少女の喉が焼き切れるまで雷の妖術を流し続け、そしてようやく声が出なくなったところで妖術を切った。少女の全身が焼け爛れ、黒煙が舞う。

ああ、そうだよ。これこそ私が欲した力。実力差、力量差、技術差、種族差、個体差、環境、状況、現状、過程、結果……。全てを覆す力だ。

意味なんてないのだから

「彩、貴女は、まさかそこまで……」

「満身創痍と全力全開とを比べねえでください」

死にかけのところしか見てなくせに、それでも私を式神にしたのは紫様の慧眼かと思っただけで、案外そうでもなかったのかもしれない。まあ、別にどうでもいいか。

「……彩、お前、そんな力を」

「猫が九匹並んでりゃあ九尾になりますか？ 否、九尾は……一匹だ」

それでも、表に九つ揃えても不完全ながら『九心九尾』が発動してしまうあたり、そのところの境界は曖昧なのだろうが。まあ、明確に決めてなかった私が悪いのか。……偶然？ 必然？ どっちだよ。はあ。

しかし、まあ、いつまで保つか。当然、いつかの破滅と隣り合わせである。そして刻一刻と近付いている。九つの意思を一人としてまとめあげ、一人でありながら九つという矛盾を孕みながら、それを妖術で無理矢理成立させてしまう。意識の完全統一。『九心九尾』の圧倒的な力の根幹はそこにある。

つまり、この力の代償は多重人格の否定である。全てが全く同じ考えを持つのなら

ば、多重人格に存在意義はない。ゆえに自我統一。すなわち、八つの死だ。どれが死ぬか？ ……私が残る？ 何を馬鹿な。

それでなくとも、下手に扱えば自壊する力なのだから、身体が滅びれば当然死ぬ。今だって、常に自己修復をし続けて最良の肉体を無理矢理維持しているのだ。気を緩めれば身体は一瞬で木端微塵に弾け飛んでしまうかもしれない。そうなっても治癒出来る、だって？ ……死ぬ前なら出来ちゃうんだよなあ。はあ。

「気分はどうだい？」

私が見下ろす焼け爛れた少女が見上げ睨む最中、ふと私は少女の隣にいた月の兎を見遣った。すつかり青ざめており、目が合った瞬間後退ってしまった。しかも、その際に足元が引つ掛かって尻もちをついてしまう始末。それでもなお私から距離を取ろうとするあたり、随分と情けないものだと思ってしまう。はあ。

「……あ、っ」

そんなことをしていたら、踏み潰していた手首が忽然と消えてしまい、足が地面に付いてしまったつましい付に面地が足、いましてえ消と然忽が首手たいして潰み踏、らたいしてしをとこなんそうやって消えてしまう前に、私は加重力の妖術を少女を対象に叩き込んだ。

「い……っ、っ！」

あーあ、余所を見る暇があつたら少女に瞬間移動なんかさせる余裕を与えるべきじゃないのか。そんなことを思いながら、少女に加える重力を徐々に増していく。まあ、殺すのは後でいい。しかし、もう既に三桁倍になつてははずんだけど、少女の身体はまだまだ耐えられそうだ。月の民つてのは、想像を絶するほどタフらしい。

それでも少女は落としてしまった扇子に手を伸ばし、伸を動かされる前に氷の妖術による氷柱で地面に縫い付けた。はあ。

「とりあえずさあ……、うん、死んどく？」

「っ……!？」

加重力の妖術を極限まで高め、やがては光を捻じ曲げ飲み込み始める。おいおい、何だよその絶望しましたって顔は。

「侵略者だろう？ それに、ここを壊すつもりなのよね？ あと、私を殺すつもりだったでしょう？ あとさー、面白くないんだよねえ。しかも、踏み越えた壁だ。……ん。貴女のような危険は取り除くべきです。敵は殺す」

少女の身体が潰れ出し、徐々に圧縮されていく。血が流れない。流れる前に、集まり潰れ一つになつてしまう。

「それに何より、私は、貴女みたいなのを殺したくてこの力を手にしたんだから」

それだけ言い残し、既に石ころほどに圧縮された少女だったものを消滅の妖術で文字

通り消し飛ばした。流石に、ここまですれば月の民だろうと死んでしまらしい。

一人殺したってのに、何も思わない。そりやそうだ。私は何をして、意味なんてないのだから。

何か用か？

私が圧縮し消し飛ばした少女がいた場所から月を見上げ、あそこにどうやって行こうかと少し考える。距離はどのくらいだっけ？ 約三十八万キロメートル？ 光の速度で一秒ちよつとねえ。それならすぐか。宇宙は真空で無重力だけど、ちよつとくらいなら大したことないでしょ。ちよつと速過ぎないように気を付けないといけないけれど。

しかし、私個人としては月の都に興味がない。あるのは、どうすれば私にとつてよくなるかだ。このまま月の都に攻め入って崩壊させるべきか、少しばかりちよつかいを出して技術や物を奪い取るべきか、何か偉そうな少女を殺したことだけ伝えて止めておくべきか、少女を殺したことすら隠匿してしまうべきか……。考えれば考えるだけ道が広がっていく。深みに嵌っていく。

ふと、少女に付いてきていた月の兎に目を向けた。顔面蒼白、戦意喪失。さて、彼女は生きていていいだろうか？ それともここで死んでいる方がいいだろうか？ 生かすにしても、どう生かすのがいいだろう。放つとく？ 逃がす？ 脅す？ 痛めつける？ 片腕くらい落とすとく？ 少し変わるだけで、その先はさらに大きく変わってしまう。こういう時に一番楽なのは、あまり考えなくていい放置なのだが……。いつか

恨みでも抱いて帰ってくるかもしれない。覚えておかないと。

「彩」

そんなことを考えていたところで、紫様に呼ばれて振り向く。ああ、まだフェムトファイバーに縛られてるのか。一目見れば、その態度でどう思っているのか大体把握出来る。その態度が本当か否かの真贋を見分けられる。その動作から次にどうしたいのか予測出来る。つまり、拘束を解いてほしいのだろう。

「終わったのなら、これを解いてくれないかしら？」

「ん。今やるよー、ババア」

ほらね。

私はその場で軽く右腕を上げていき、紫様と藍を縛っているフェムトファイバーを見詰める。そして、フェムトファイバーは千切れ飛んだのを見て、私は腕を下ろした。あーあ、これで私はまた全てを殺してしまった。本当、なんて自分勝手な力なのだろう。しかし、言われた通り解いてあげたというのにあまり浮かない表情である。月面戦争なんて言つて、月の民をぶち殺したつてのに。まあ、紫様の計画ではそもそもこちらがこんな風に勝つことなんて考えてなかったのだ。……というか、そもそも私達すら囚だったっほいんだよなあ。ではレミリアが本命かと言われればそれは違う。つまり、どこかの第三者が本命。なんて遠い回り道。

しかし、囧だったはずの私がこうなってしまうては、計画が狂ってしまう。まあ、計画がどれだけ狂ってしまおうと、最早どうでもいいのだが。

「しっかしまあ、どうしたもんでしようね……」

どうすればいいのか、際限がない。そんなことを呟いたところで、私は紫様に判断を任せたいと思っっている自分に気付いた。既に式神ではないというのに。何がどうなるうとどうとでもなってしまうのに。はあ。

瞬間、ゾワリとした気配を感じ取り、私は竹林に目を向けた。超音速の矢が私目がけて飛来してし来飛てけが目私が矢の超音超たれた放らか弓たつ絞き引でま杯一界限が琳永たいてめ潜を身に中の林竹林の中に身を潜めていた永琳が弓の弦を限界一杯まで引き絞っていたが、私に既に見つかってしまったことを悟りながらも、その場から離脱しながら超音速の矢を放ち放を矢の超音超らがなし脱離らか場のその場から逃げ出される前に、私は裏へ回り込んだ。

「ハッ!」

きつと、忽然と消えてしまったように見えただろう。驚く声を上げながらも即座に振り向いて弓を私に向け向に私を弓てい向り振に座即もらがなげ上を声く驚く声を上げた永琳の首を落とした。振り向こうとした動作と重なり、切断面の上でクルクルと頭が回る。

しかし、その頭が突然燃え尽きるように灰となって散り、切断面から綺麗な頭が復活した。……うわあお、これが不老不死の薬。

「何か用か？ 永琳さん」

まあ、この程度なら殺せなくとも消し飛ばすのは容易かな。

この世界は、なかったことにしよう。

私の問いに対し、永琳は口を開くことなく超音速の矢を放った。ご丁寧な眉間を狙ってくるあたり、その技術が超一級なのは確かだろう。しかし遅い。遅過ぎる。たかが音速を越えた程度、あまりにもスロウ過ぎて嫌になつてくるほどだ。人差し指を一本立てて迫り来る鎌に向ける。瞬間、矢が空中で木端微塵に炸裂してしまった。

その結果を見た永琳の目が見開かれ、そして私を睨みつけてくる。止めろよ。そんな風に睨まれても困る。敵討ち、か。それこそ千年は顔を合わせていないであろう弟子のために、わざわざここまでやって来たらしい。

「あの娘を殺したのは、貴女で違ういわね？」

「違いありません。えーりん」

しかも、その先に勝利がないと悟りながら、だ。何と馬鹿な。

私としては、あまり長いこと続けたくない。面倒だし。死にたくもない。……いや、続けるべきなのか？ 私はここで死ぬつもりなのに。そのために、こうしてここにいる。なあんだ、なら別にいいか。

永琳が弓に矢を番えた瞬間、私は軽く踏み出した。永琳に肉薄して右腕を突き出し、

はあ。

「放つておいたら永琳だけ追放されて亡きものと化す歴史と共に消えるのよ」

……何故知っている。そんなはずはない。知られているはずがない。既に消し飛ばされた未来だった話だ。

私が思わず足を止めていると、輝夜が私を見詰めてくる。

「永琳を消すのなら、私も一緒に消しなさい。それとついでにあの妹紅もね」

「……輝夜」

「どうして貴女の頼みを聞かになりませんか？」

「この私を殺してくれるのでしょうか？　なら、遺言の一つや二つ、叶えてくれてもいいじゃない」

本気だ。あの時今ではないと言っていたあの輝夜が、今殺してくれと頼んでくる。その理由は、孤独だろう。永遠の時をたった一人では耐えられないと、そう感じている。

別に殺せばいいじゃないか。殺すのは面倒臭い。ここで終わるならそれでいいじゃないか。恨みを募らせ復習に来るぞ。今のうちに禍根は断っておいたほうがいい。揺れる。揺らぐ。ああ、気持ち悪い。選べ。選べよ！　迷う必要なんてないじゃないか。

「よく耐えた。通信ご苦労だった、レイセン」

しかし、その迷いは致命的な隙だったらしい。永琳と輝夜から離れたところにいた月の兎のその隣、何者かが光と共に降り立った。そして、その少女は永琳と私を交互に見てから、永琳に歩み寄っていく。

「お久し振りです、お師匠様。……そして、お前か。お姉様を殺したのは……ッ！」
「はあ」

あーあ、面倒なことになった。どうやら、あの月の兎は生かしておかない方がよかつたらしい。

「すまん、蓬萊山輝夜」

私は怒り狂う少女を無視しつつ輝夜を見遣り、一つだけ謝っておく。意味なんてないくせに、口にしてしまう。きつとただの自己満足だ。ああ、なんと醜いことか。

「殺せないよ」

「そう」

この世界は、なかったことにしよう。

くおてつ謝けだつ一、り遣見を夜輝つつし視無を女少う狂り怒は私「！ツ……はのたし殺を様姉お。か前お、てしそ……。様匠師お、すでり振し久お」。くいてつ寄み歩に琳永、らかて見に交互を私と琳永は女少のそ、てしそ「ンセイレ、たつだ労苦ご信通。たえ耐くよ」。たつ立り降に共と光がか者何、隣のその兎の月たいにろことたれ離らか夜

輝と琳永「いなやじいもてれくてえ叶、つ二やつ一の言遣、らな？うよしでのるれくてし殺を私のこ」「夜輝……」「ねも紅妹のあにでいつとれそ。いさなし消に緒一も私、らなのす消を琳永」。るくてめ詰見を私が夜輝「よのるえ消に共と史歴す化とのもき亡てれさ放追けだ琳永らたいおてつ放」。たし現出が夜輝然突に後背の琳永「わいならが下、えいい」「いさだくりが下お、様姫」「琳永、いさなち待」。たいてし活復が琳永に所場たつ取を離距からくいらか私ばけ付気「アハ、アハ……！ッハ」。ぶ飛け弾が体身のそ、間瞬たえ番を矢に弓が琳永「？ねわい違い違で女貴、はのたし殺を娘のあ」。るくてけつみ睨を私てしそ、れか開見が目の琳永た見を果結のそ。たつましてし裂炸に塵微端木で中空が矢、間瞬。たつ放を矢の速音超くなどこく開を口は琳永——

元、貴女の式神だがな

——「とこぬ死、き生てつ蹲い這に上地生一」。つ放い言は女少、とる切区度一でこそ「は罰のへ物き生の上地。……てしとるえ考てつ帰ち持に月は罰のへ前お。すでのな罪でだけだれそ。ぬ死、るき生、む住に上地。んせまりあがずはいなが罪に物き生む住にここ」。りかばすろ下見を様紫は女少「かうろだいなえ願弁勤はのす帰に無で子扇のそかうど。いなは罪はに物き生ので全む住に上地。行所の怪妖一なか愚はて全……、がいなれ知もかいしまがこおもこの言をとこなんこが側たれ敗」。たけ付に地を手両てつ追を膝が様紫。るいでん睨を様紫に氣し訝は女少るす対、しかし「ねわいいがけ分き聞にやい」。るいてい眩と様紫に風たついとずわ思は藍。るいてけ続い笑てつ言うそ「よのたつかなは目ち勝に達私で点時たレバが戦作囀。らかだんいなが目ち勝らたつ戦にもとまらか初最。わいなてんな氣う戦！参降、参降うも！つはつはーあ」。たけ拔が力とつふらか体身の様紫様の身体からふつと力が抜けた。

「あーはつはつ！ もう降参、降参！ 戦う氣なんてないわ。最初から、ツ!？」

「紫様……、つ?！」

紫様の喉元に月の最終兵器である扇子が突き付けられているその横を、私は一気に駆

け抜けていく。突然出現した私にバツと目を向けた紫様も少女も、呆然と眩きながら驚いている藍も無視だ。

レイセンと呼ばれた月の兎。彼女が生きていると結果を月の都に通信し、場合によってはさらに面倒そうな少女が幻想郷に下りてくる。

「リアツ！」

ならば、先に殺しておけばいい。そうすれば、月の都に通信されることはない。

右手の五指の爪を伸ばし、その首を左から右へ真一文字に引き裂いた。何が起きたかいまいち理解していない怯えたような表情の頭に、引き絞った右手を亜光速で貫く。瞬間、空気を爆破したような轟音と衝撃波がこちら一帯を揺らし、その中心にあつた頭は爆ぜてそこら中に飛び散った。もはや原型は留めておらず、炭と化したそれらからは焼け焦げた臭いが漂ってくる。

「さ、彩、なの……?？」

「はい。……元、貴女の式神だがな」

状況が理解出来ない紫様の問いかけに、私は伸ばした爪を戻しつつ振り返りながら端的に答えておく。紫様の背後にいる藍の隣、私がいた足元に私に憑けられていた式神が落ちている。当然、そこに私はいない。具体的にどこまでかは分からないけれど、同じものは二つとして存在出来ない。少なくとも、魂は。理由？ 知らん。そうい

うものだから、そういうものなんだろう。

しかし、付いてきた月の兎を殺されたこの状況で少女はどう出る？ 紫様の喉元に当たった扇子をそのままに私を脅迫するか？ それとも、その扇子を紫様から私に向ける？

まあ、そんなもの見れば分かかってしまう。すぐに振り向くぞ。

「貴女、よくもレイセンを……っ！」

「お、使いますか？ 使えんのか？ そのご自慢の最終兵器をよお！」

ほおら、私にその扇子を開いて見せる。挑発するように、威圧するように、振るえば幻想郷が素粒子を化して無に帰すものがあると見せびらかす。

その時点で、隙だらけだ。無防備の瞬間があつたならば、私はその瞬間に不可避の攻撃が出来るしまう。

「私達に楯突いたことを後悔しなし悔後をとこたい突楯に達私」

すからびせ見とるあがのもす帰に無てし化を子粒素が郷想幻ばえる振、にうよるす圧威、にうよるす発挑。るせ見てい開を子扇子を開かれる前にその手を掴み、その瞬間に手首に妖術を流し込んで扇子を綺麗に切除された手ごと真上に放り投げた。手首には丸く肉と皮で包むように処理され、出血は一切ない。痛みさえもない。何故なら、これは飽くまで治療なのだから。

そして、少女は存在しない手を動かして既に放り投げられた扇子を開いたつもりで腕

を振り上げてしまう。何て滑稽な。

「私達に楯突いたことを後悔しながら、罪を償いなさい……う？」

腕が振り下ろされる。当然、何も起こらない。

私は嘲笑いながら少女のぶよぶよとした手首を突いてやる。そして気付く。気付いてしまう。自分の手がなくなっていることを、ようやく認識してしまう。ギョツと目を見開いたその瞬間、私は無防備な胸を右手で貫き、心臓を抜き取った。まだドクドク震えているが、それもじきに止まる。

「え、あ、……がふ、っ？」

「さて、次だ」

右手を引き抜き、少女に加重力の妖術を叩き込んで圧殺しながら、あの時永琳がやって来た竹林の方角を見遣る。……まだもう少しだけ時間があるかな。

私は首無し月の兎の身体の前に向かいつつ、永琳をどうするかを考える。どうすれば私にとって都合がよくなるだろうか、と。

須臾を超越する

右手に抜き取った心臓を潰さないように軽く握り、念のため左足で首なし死体を踏ん付けておく。これらは次に必要になるかもしれないもの。失ったらちよつと面倒になるかもしれないから、出来るだけ近くに置いておきたい。特に、この心臓は。

「彩、貴女は、まさかそこまで……」

「さ、彩。お前、そんな力を……」

紫様と藍が私を見て何か言っているが、どうでもいい。今の二人は私に不利益を与える存在ではないから。だから、今のところ放置でいい。

私はあの時永琳が潜んでいた竹林を見詰める。少女を殺した私の仇討ちに現れるはずだ。少女を殺し、紫様と藍を拘束していたフェムトファイバーを千切り、それから少し経った頃には私に矢を放っていた。その時間は約三十秒程度だったか？ 随分と早い登場なこと。

「そちら来た」

私が注視していた竹林とは真逆から攻撃の気配を感じ取り、即座に振り返りながら超音速の矢を左手で迎え打つ。瞬間、私が迎撃する前に矢が弾けて破片が飛び散る。そし

て、その先にいた永琳と目が合った。少し遅い登場だったな。まあ、回り込む分だけ遅れただけかな？

そんなことを思いながら、私は永琳をどうするか考える。どうすれば、私にとってより都合がいいか？ 敵対した永琳をどうすればいい？ 放っておくと紫様まで巻き込まれるだろう。そうなると幻想郷が滅びかねないので却下。ならば、やはりここで消しておくか。

「ほら。やっぱり無駄だったじゃない」

そう決意した矢先、私と永琳のちょうど中間にまた輝夜が現れた。

「そも、彩が須臾を超越する時点で敵いっこないもの」

永琳に向けてそう言いながら、嬉しそうに、寂しそうに、微笑みながら私の元に歩み寄ってくる。

「さあ、一つ前の歴史で私が言っていたでしょう？ 永琳を消すつもりなら、私も一緒に消してちょうだいな。一応、あの妹紅もね」

「……一応訊いところか。どうして知ってやがる？」

「見たからよ。ある短期間に集中して無数に枝分かれしていく歴史が紡がれ、そして今の一つを除いて次々と剪定されていく様を。そして、その中心にいるのは貴女」

驚いた。映姫が私が犯したことを知っていた時も驚いたが、まさかまだいたとは。ど

うやら記憶が続いているのではなく、そんななかったことになった未来もあったと認識しているだけのようだが。

しかし、そうなることさらに面倒だ。知られてしまえば、対策される。そうなれば、私は不利になっていく一方だ。

「そっかあ」

ならば、二人まとめて消しておくか。既に決意していたんだ。ちょうどいい。

私は右手に握っていた心臓を上になく投げ、そして一気に駆け出した。瞬間、目の前で微笑んでいた輝夜も、その奥で立ち尽くしていた永琳も、紫様も藍も、私が投げ上げた心臓も、その場でピタリと動きを止まる。須臾を一つ超えた、時間すら認識出来ない時間。光速の世界。そんな世界の中、右手で輝夜の腕を、左手で永琳の腕を掴み取る。

「あら」

「これは……!?!」

私が掴んだせいで光速の世界に入り込んでしまった二人にそう言い放つ。永琳が私の腕を振り払おうとしたが、無抵抗な輝夜を見ると諦めたような表情を浮かべて抵抗を止めた。抵抗しないならそちらの方が楽でいい。

空中で動きを止めている心臓と首なし死体を持つていこうと思っただが、心臓は端っこを口に咥えれば持つていけそうだが、首なし死体はちよつと大き過ぎて持つてい

けそうにない。というか、手が足りない。生やそうと思えば生やせるけれど、首なし死体はそこまで重要ではないからいいや。

「永琳、最期の光景よ。私達は今から、須臾を超越する」

空中に浮かんでいた心臓を口に咥えているところで言っていた輝夜の言葉を聞き流し、私はさらにもう一段階加速する。

超光速による時間逆行。それこそ、私が全てを覆す力を望んだ結果。

「……輝夜。私の所為で、悪いことをしてしまったわね」

「気にしなくていいのよ。それもこれでお終い」

ほんの僅かにだが時間流に逆らったところで咥えていた心臓を放し、再び光速の世界に落ちる。放した心臓が宙に浮かぶ。一度で上手くいつてよかった。光速ちように調節するのって難しいんだよ。

今この瞬間、この停止した世界に永琳と輝夜が存在する。無論、私達がこの時間に来たことで、それまでこの時間にいたはずの永琳と輝夜は消えている。そして、今この瞬間に限り、私の所為でこれから消えていく時間とこれから新たに紡がれる時間が混在する分岐点が存在する。私がこのまま光速からさらに一つ速度を落とせば、新たに紡がれる時間に共に到達する。

「さて、さよならです。てるるん、永琳さん」

しかし、今手放したものは消えていく時間に置いていくことになる。二人を手放した瞬間、その動きが止まる。

宙に浮かぶ心臓を手に取り、私はさらに速度を落とす。世界が動き出す。二人がいたはずの場所には、誰もいない。消えていく世界と共にいなくなってしまった。

心臓を片手に、足元に転がっている首なし死体を見下ろす。僅かな時間で済んだから、月の兎が死ぬ前まで戻らずに済んだ。それはよかった。

しかし、二人の最後の顔が未だに貼り付いて離れない。これから消えていくつてのに、まるで救われたような顔をしていて、何だかやるせないような気になるのは何故だろうか？ はあ。

顔を上げ、もう一度二人がいた場所を見遣る。そこでふと思ひ出したことがあった。

「…………妹紅って誰だ？」

八雲彩

「消えた!? 紫様、あの二人は何処に!」

「二つ前の歴史……、枝分かれし剪定される歴史……、中心にいる彩……、須臾を超越した存在……」

「……紫様?」

輝夜と永琳が消えたことに驚いている藍と、ブツブツと呟きながら何か考え出した紫様を見遣り、私は一息吐く。

月の兎は真つ先に殺した。通信手段を断った上で少女を殺した。その仇討ちに現れた永琳と、それに付いてきた輝夜を消した。次がきつと最後だ。姉であるらしい少女を殺した仇討ちにやって来る、妹であろう少女。実を言えば、かなり厄介でもある。何故なら、来るか来ないかが不明であり、来るにしてもいつ来るか分からないから。来ないと高を括って放っておく? それでいいならそれでもいいけれど。はあ。

「あれ?」

まだ終わってはいないものの、少しばかり余計なことを考えられる時間が出来たことで、意図して考えようとしていなかったことに気付いてしまう。

私はどうして死んでいないのだろうか？ おかしいな。贖罪にもならない自己完結のために、死ぬつもりでこうしていたはずなのに。生きていたから。死にたくないよ。まだ超えてねー壁があるから。次の襲撃者がやって来るかもしれないねえ。護りたい二人が後ろにいるもの。……あれ？

「彩」

「あん？」

そんな不可解なことに首を傾げていたところ、紫様に両肩を掴まれて無理矢理振り返らされて考えが一度ブツリと途切れてしまう。まあ、いい。後にしよう。

私は紫様に振り向かされて顔を合わせることになる。興奮、畏怖、歓喜、期待、憂慮、様々な感情が入り混じった表情を向けられ、私は思わず辟易してしまった。

「貴女、まさか時を歩き来出来るのかしら？」

違う。私が出るのは時間遡行だけだ。

しかし、紫様の過大評価よりも重要なことがある。それは、紫様が私を利用しようとしていたことだ。そりゃあ便利だろうなあ。望む結果が出るまで何度もやり直せる。私もそう思う。……思ってた。

けれど、違うんだ。望めば望むほど、この力はあるべきではないと認識していく。最善を求めようとすればするほど、何処まで遡ればいいのか分からなくなってくる。それ

に、結果がどれだけよくなるかと、その過程には苦難しかない。襲撃者を追い払おうと、再び現れる。守ろうとしたものは、何度も失う。癒した者を、もう一度怪我させてしまう。殺した敵は蘇る。そうして同じことを何度も何度も繰り返して、何に対しても事前に決めておいた行動をしていく。そんなものはつまらない作業ではない。

そして、時間遡行をしたその瞬間、遡った分だけ世界に存在するあらゆる選択を切つて捨てている。その時間に生きているあらゆる存在を世界ごと消し飛ばしている。そして、私の身勝手な理想のために選択を捻じ曲げ、本来進むはずだった道筋を世界ごと外れさせていく。ああ、何と罪深いことか。

だからこそ、こんな力は存在してはいけない。私が望んだ力は、こんな力じゃあなかつたのに。

「……彩？」

嫌なことを思い返してしまい、押し黙っていた私の名を呼ばれる。名前なんて意味がなかつた。むしろ不便でしかなかつた。自分で付ける気は一切なかつた。そんな私に与えられた名前。

……ああ、そつか。私はもう八雲彩なんだなあ。

「決めた」

質問と答えが何一つ噛み合っていないせいで紫様に変なものを見るような目で見た

れてしまったが、そんなものはもうどうでもいい。

背後から雷でも落ちたような轟音がしてすぐに振り返ってみれば、あの少女が光と共に落ちてきたようだが、そんなものはもうどうでもいい。

「この世界はなかつたことにしよう」

紫様のギョツとした表情も、首なし死体を見下ろした少女の殺意に満ちた表情も、そんなものはもうどうでもいい。

ほら、やつぱり、結局、私はいつだって間違える。

情表たち満に意殺の女少たしろ下見を体死しな首、も情表たしとツヨギの様紫。たき
てち落に共と光が女少のあ、ばれみてつ返り振にぐすてしが音轟なうよたち落もで雷ら
か後背。たつましてれら見で目なうよる見をのみな変に様紫。るれば呼を名の私「?彩
……」「?らしかの来出来き行を時かさま、女貴」。情表たつじ混り入が情感な々様、慮
憂、待期、喜歓、怖畏、奮興「彩」。様紫たし出え考か何らがなき眩とツブツブ、と藍る
いてい驚にとこたえ消が琳永と夜輝「?様紫……」「……在存たし越超を臆須、……彩る
いに心中、……史歴るれさ定剪しれか分枝、……史歴の前つ」「?!に処何は人二のあ、
様紫?!たえ消」――

私は遡る。

——るいてめ止をき動で中空、げ投く軽に上を臍心「女貴はのるいに心中のそ、てしそ。を様くいてれさ定剪と々次てい除をつ一の今てしそ、れが紡が史歴くいてしれか分枝に数無てし中集に間期短るあ。よらかた見」「ねも紅妹のあ、応一。ないだうよちてし消に緒一も私、らなりもつす消を琳永？うよしてたいてつ言が私で史歴の前つ一、あさ」。るくてつ寄み歩に元の私らがなみ笑微、にうそし寂、にうそし嬉、らがないうそてけ向に琳永「のもいなこつい敵で点時るす越超を與須が彩、もそ」。たれ現が夜輝たまに間中どうよちの琳永と私「いなやじたつだ駄無りばつや。らほ」。る散び飛が片破てけ弾が矢。るいてつ言か何て見を私が藍と様紫「……を力なんそ、前お。彩、さ」「……でまこそかさま、は女貴、彩」——

私は遡る。少女の心臓、月の兎の首なし死体。それらを持つていれば、遡るのを止めた瞬間に少女の心臓が欠落し、月の兎は頭だけになる。しかし、それはもう必要ない。まあ、そもそも首なし死体は持つて来てないんだけど。

「と、いうわけで。ポイツと……ね」

——たれさ殺圧れま込き叩が術妖の力重加に女少「？つ、ふが……、あ、え」。たれら

取り扱を臍心、間瞬のそたい開見を目とツヨギ。うましてし識認くやうよ、をとこるいてつなくなが手の分自。うましてい付気。く付気てしそ。いならこ起も何、然当。るれさろ下り振が腕「?……いさない償を罪、らがなし悔後をとこたい突楯に達私」。うましてげ上り振を腕でもつたい開を子扇たれらげ投げ放に既てしか動を手いなし在存は女少、てしそ。たれさ理処にうよむ包で皮と肉く丸はに首手。たげ投げ放に上真とご手たれさ除切に麗綺を子扇に前るれか開を子扇「!つ……をンセイレもくよ、女貴」——

私は遡る。少女を殺せば、弟子の敵討ちと永琳が現れる。そして姉の敵討ちと少女が降りてくる。どちらも対処するのが面倒だ。きつと、消そうと思えば消せるだろうし、殺そうと思えば殺せるだろう。

「八意永琳はともかく、……あつちは幾度となく挑戦を強いられるだろーね」

——るいてち落が神式たいてれらけ憑に私に元足たいが私、隣の藍るいに後背の様紫。けかい問の様紫いないて来出解理が況状「?……のな、彩、さ」。るくてつ漂がい臭たげ焦け焼はらかられそたし化と炭、ずらおてめ留は型原やはも。たつ散び飛に中らこそてぜ爆は頭たつあに心中のそ、しら揺を帯一らここが波撃衝と音轟なうよたし爆破を気空、間瞬。情表なうよたえ怯いないてし解理ちいまいかたき起が何。たれか裂き引に字文一真へ右らか左が首の兎の月たれば呼とンセイレ「?つ、……様紫」「?!ツ、らか初最。わいなてんな気う戦！参降、参降うも！つはつはーあ——

私は遡る。限界だった。たかが数回やり直しただけのくせに、既に私の精神は擦り切れていた。たとえ世界が消えたとしても、何千何万と繰り返した経験は消えることなく刻み込まれていたから。

「止めんのか？ 当たり前だ。分かっていますけれど」

——たけ拔が力とつふらか体身の様紫然突、がたつだ人二たいで態状着膠くらばし「？る来出が何は女貴に手相器兵新最の月なんそ。すこ起を風るす化浄でルベレ子粒素で瞬一を森、は子扇のこ」。るいてれらけ付き突が物得に元喉の様紫。るいでいなか動は女少と様紫ままのそ。女少う笑てけ付き突を子扇たじ閉に元喉の様紫「ねかるえ交戦一と私。よのものなかは浅」。たつましてつ去え消とつふらか場のそ、りわ終が言戯いらたつ長の女少。いないてれ離らか女少が線視、がだうそ裕余は様紫。いしらるいてつ焦で気本はれこ、がるいてべか浮を顔いし険は藍。るいてし話に気慢自らや何に兎の月が女少「ねとるれ現にか静は物本、でしま眩目はトツケロな代時大なんあ。ねり通たつ言の様匠師お、ふふう……。ろけつを気に守留。すとか欺を者愚しと囿を者愚人小」

私は遡る。放り棄てた心臓は未来に消えた。そして、世界ごと消え去っていった。これで、あの少女が突然心臓を失うなんて羽目に遭うことはなくなつた。それでいい。「あの時は、取り除くべき、殺すべき、襲撃者だつたんだがなあ」

——たいてつ立が兎の月と女少つ持を瞳の色金と髪金たび伸でま腰。たきてえこ間が葉言なんそ「ねでプツラトたけ掛仕に前も上以年千が匠師。いなれ戻に月は方貴うも。プツラトたい欠にか僅を八十二のずはるあで数な全完はれそ。れ乱なか僅の期周転公の月。うそ」。くいてじ閉にでり独がマキスたいてい開が様紫、中るいてて慌が人二らや何「！わうましてじ閉が月満　！いなけい」「！だ林竹のい迷はここ　！ツう違」。たつだ林竹は所場たつ立り降。た来が様紫たけ抜き通をマキス。術妖の音消。たい向を前にぐす、がたきでん睨てつ返り振が藍。るれま込き叩が術妖つーに中背、に前るす地着が藍——

私は遡る。少女を殺さなければ、弟子の敵討ちと永琳が現れることはない。そして姉の敵討ちと少女が降りてくることもない。対処の面倒な二人が、たつたそれだけで解決してしまふ。

「……まあ、生まれてこの方間違いだらけ。正しいって、むっずかしいーね」

——く開をマキスが様紫、前寸るけ抜き通が藍たついでん込び飛にマキス速早「！いさなきでん盗をのもな敵素るせさ足満を私てつ入に中　！よ令命の後最、彩、藍　！あさ」。く開がマキスなき大。情表な剣真に実「ねはで都の月、に特。わいなわ敵てし決はに民の月は民の土地。力の知未いなえ負に手はに怪妖、力命生な韌強、力学科だん進にか遙。彩」。るくてめ詰見が様紫う笑くし妖。たれくてえ教らがなれられ呆、れま睨に

氣し訝、れば呼に藍「？なたつか分。だ、に密隠。く行にい奪をのもしほめてしを巢き空で達私られこれ……。いお」「？彩、かのるいてい聞」。るいてしを話会いし難小かんなが藍と様紫

私は遡り、そして目的の時間に到達した。

「つと、あつたありました」

光速の世界にて、紫様と藍の後ろに浮かぶ式神を掴み取る。

ケツ、最強の力をまた失うのかよ。構わん。いいじゃねえか。ほら、拗ねないの。知らないことつて楽しいもんねー。まあ、そうだろうとは思っていましたけど。ん。私がこんなに傷付いてしまったのですから。また、いつものように間違えた。それだけ。はあ。

「さよなら、私」

私は手にしている式神を、身体の中に埋め込んだ。表と内側の境界が生じ、私から八つが抜き取られていく。……これで、いい。

「ア——ツ！」

次の瞬間、世界が動き出し、それと同時に私の身体が引き裂かれ、鮮血がそこら中に飛び散った。こんな中途半端な『九心九尾』では光速なんてとんでもない速度を維持出来るはずもなく、精々超音速で精一杯。その落差が衝撃となって私の身体を襲う。滅茶

苦茶痛い。悲鳴を上げなかつたことを誰かに褒めてほしいくらいだ。褒められるわけないけど。はあ。

「彩!? 突然どうしたんだ! 何があつた!」

「あ——何でも、ねえよ——気に、しなくて、大丈夫、です、から」

飛び散つた血をもろに浴びてしまった藍が私に詰め寄つてきたが、返事をするのも億劫だ。そう思つても、意地を張りたいの、心配させたくないのがいて、勝手に返していた。それと同時に表に揃っている九つが一斉に身体を癒していく。破裂した内蔵、いかれた骨、千切れた筋肉、破れた皮膚と徐々に癒していき、やがて痛みは引いていった。……ああ、血が足りない。頭ふらふらする。はあ。

ふらつく頭を押さえていると、今度は心配半分、不可解半分、つて感じの表情の紫様が私に詰め寄つてきた。

「彩」

「紫様——式神がちよつといかれてしまつたみたいですよ——後で調整してくれませんか?」

「……何があつたのかしら? 正直に答えなさい」

そう命令され、当然逆らえるはずもなく、私は正直に答えた。

「いいえ、何もありませんでした」

無血の勝利

紫様が開いたスキマを黙って通り抜け、既に聞かされた罫と最新兵器について自慢げに語る少女の話の話を聞き流し、そのままフェムトファイバーで縛られ竹林に放置された。まあ、しばらくしたら鈴仙が私達を解放してくれたけど。口にはしていなかったが、永琳にでも命じられたのだろう。きつと。

それから一ヶ月ほど経過した。私はといえば、どうして生き残ってしまったののだろうか、と頭を悩ませながらちよつとした後遺症と闘っている。

「もー！ くやしー！」

「また今度頑張ればいいじゃないですか。その時はあの月の民もぎやふんと言わせられますよ」

「そうそう。別に殺せねー敵じゃ、……まあ、どうにかなりますよ。きつと」

冥界の白玉楼へ続く長つたらしい階段を登りながら、実に胡散臭く実際に嘘つぱちである紫様の態度に適当なことを返しつつ、自然と口から零れた言葉に辟易してしまう。

『九心九尾』による意識統一。その過程で、私の記憶には九つがどう思い、考え、行動したかが未だにこびり付いている。何故そう思えるのか私にはいまいち理解出来ない

思考回路であり、しかし同時にこびり付いた記憶に引つ張られるようにそう思つて当然だと思つてしまう。非常に気持ち悪い。まあ、新たに積み重なる記憶にいつかは埋もれていくだろうが、それまではもう少し時間が掛かりそうだ。

……まあ、私と違つて他のは割と早く解消したみたいなんですけどね。随分と我が強くて羨ましい限りだよ。はあ。

そういうこともあつてちよつと余計なことを口走りそうになる口元を押さえていると、紫様の元へ鴉が飛んできて静かに肩に止まった。そして、紫様が怪しく微笑んだ。

「はいはい、悔しがっている振りはこれでお終い」

「え?」

「久し振りの大勝利よ! 最近いいことほとんどなかったから」

そう言つて諸手を挙げて大喜びしている紫様に、何が起きたのか理解出来ていなさそうな藍を見遣り、私は二人から目を外して静かにため息を吐いてしまう。

……ああ、やつぱり。私つてのは、本当にどうしようもねえなあ。

そんなことを思いながら階段を登り切つた先に、紫様を待つていたらしい幽々子が立っていた。

「あら、遅かつたじゃない。ずっと待つてたんだからあ」

「しばらくは宇宙人に見張られていたからね。悔しがっている振りをしてなきやね」

「まだ準備中だけど、とりあえず上がって上がって」

そう言われ、私達は幽々子の後を付いていく。藍は未だに首を傾げているけれど、どうして分からないんだろう？ ああ、紫様の言葉を全部鵜呑みにしているからか。式神としては、それが正しい姿なのだろう。

白玉楼に上がると、疑問符で頭がいつぱいそうな藍が紫様に説明を求め、紫様は種明かしをする子供のよう嬉々として語り出した。

月の使者のリーダーは二人いる。神様の力をその身に降ろして戦う実力派と地上と月を結ぶ援護要員。実力派をレミリア達が、援護要員を私達が囷となつて月の都をがら空きにしたそう。ついでに、地上には月の頭脳というスパイ、永琳を引っかけるために私達は囷にならなければならなかつたとか。紫様は援護要員を引き付ける囷になりつつ、もう一つスキマを開けておいたそうで、既に浄土の住人であり穢れのない幽々子達ながら空きとなつた月の都に堂々と侵入したそう。

「流石紫様。でも、事前に説明してくれてもよかつたのに。地上に戻された時は本気で焦りましたよ？」

「敵を騙すにはまず味方から。幻想郷にはスパイだっているのだから」

紫様の策略に感心している藍には悪いけれど、私の記憶にそういう筋書きなのだろうという推測がごびり付いているせいでいまいち驚けない。いや、実際に出来ることが凄

いんだと思いたいのだけど、凄いとと思うのが癪だと思ってしまう。ああ、そうじゃない。私はそんなこと考えてない。はあ。

妖夢が机に並べた豪華な料理でも眺めて余計なことを考えないようにとも思ったのだが、今度はどう調理しただろうかと考え始めてしまう。……あー、どうでもいいだろうでもいい。

「それで幽々子様には何をしてもらったのでしょうか？」

「空き巣目的よ、空き巣。幽々子が手荒い真似をしてくるとは思えないし、何か宝物を盗んできているんじゃないかしら。それに気づいた綿月姉妹がぎやふんと言ってくれはらずよ」

ぎやふん、ねえ。あの姉妹がそんなことを言う姿はいまいち想像出来ないけれど、どうなんだろう？

そんなことを思っていたら、幽々子のごそごそと何かを取り出しながら言った。

「賢者の家には珍しい物も置かれていたけど、剣とか玉ばかりであんまり面白そうなものもなかったの。で、これにしたわ」

「……幽々子、この古臭い壺は何かしら？」

コトリと机に置かれた見るからに古びた壺。確かに、宝物というにはちよつとどうかと思いたくなる見た目をしている。

「お・さ・け。月の都に置かれた千年物の超々古酒よ」

頬を上気させながらそう言った幽々子に、藍はポカンとしてしまい、その隣で紫様はケラケラ笑い出す。

「ぎやふんと言わせるための宝物が、お酒」

「うふふふ、上出来よ上出来！ それでいいのよ。敵が取り返しに来ない物を盗んだ方がいいのよ。どうせ呑んでしまっだろうし、あの綿月姉妹が悔しがっている姿が想像出来て愉快だわ」

……酒かあ。まあ、無限のエネルギーの技術とか持ってこられても使えるかどうかも分からないし、単純なものの方が盗む価値あるのかなあ？ お酒って呑んだら楽しいもんね！ 楽しくねえよ。

「早速このお酒で勝利の祝いをしましょう？ 第二次月面戦争の無血の勝利を」

血に染まった勝利もあつたんだがな。まあ、既になかったことになったんだ。関係ないか。はあ。

後日談

当たり前前だろう？

全身から余計な力を抜いて立ち、頭の中でゆつくりと三つ数える。一つ、二つ、そして三つ。数え終わると同時に庭の端から端まで走り出し、そして止まる。そして振り返ってもう一度数えて走り出す。まずは真つ直ぐ、次は半円を描くように曲がり、その次は中央で逆の半円を描くように二度曲がり、その次は斜めに出て中央で直角に曲がり、その次は二度曲がる。速度は曲がる時も落とさず最高速。止まる時は徐々に速度を緩めるんじゃないかと、一歩で急停止。決してもう一歩踏み出してしまふようなへまはしねえ。

……分かつちやあいる。俺が最終的に辿り着こうとしている極致は『九心九尾』で、繰り返してきた経験からどう動けばいいかを少しずつ当て嵌めていつている。だが、決してそこに到達することはねえ。何故なら、俺は一尾だから。一つの心に一つの尻尾が『九心九尾』の前提であるがゆえに、この身体に新たな尻尾が生え揃うことは決してねえ。きつと、いつか頭打ちがやって来るだろう。こればかりはしようがねえし、どうしようもねえことだ。

「だからって、諦められねえよなあ……！」

俺はこの身体と宿る九つの心を守らねばならない。そのためなら立ち向かうことだって、逃げることでだって厭わねえ。傷付いてから、死んでから、もつと強ければ、速ければ、なんて考えたくねえからなあ。

「いい脚だな、彩。また速くなつたんじゃないか？」

「ん、そうか？」

次を走り出そうと数え始めたところで、縁側から藍の声が聞こえて一旦足を止める。しかし、藍の言葉に首を縦に振っていいのかはちよつと分からねえ。

俺が表に出ていて暇なときはこんな地味な訓練を繰り返しちゃあいるが、成長している実感はほとんどねえ。だが、何もしねえでもと変わらねえ。下手すれば鈍る一方だ。だから、俺はやれるときにこうして続けている。……まあ、身体強化の妖術抜きで俺よりこの身体の使い方が上手いのが既にあるんだが、だから怠けていい理由にはならねえ。

「ああ。僅かだが確実に速い」

「へえ、そうかい。そいつあ嬉しいねえ」

そう断言されると気分がいい。何故なら、以前よりも成長していることであり、まだ頭打ちじゃあなかつたってことだからな。

そんなことを思いながら、俺はふとちよいと思ひ至る。ならば、藍に向けて爪を伸ばして一つ頼みごとをした。

「藍。暇ならちつとばかり付き合ってくれねえか？　いつも通り軽く攻撃してくれりやあいい」

「意欲があるのはいいことだが、私はこれから出掛ける用事があるんだ。そういうことであまり時間がない」

「ああ……、んならしゃあねえか」

「悪いな。また今度にしてくれ」

「おう、行つてこい」

そう言つてこの場から立ち去つていく藍に爪を仕舞つた手を振つて見送る。まあ、先約があるならしゃあねえよなあ。

そして訓練を再開しようと思つた矢先、ふと浮び上がってきた。二度と御免だと言いながら、無意味な死は御免だと言いながら、自殺しようと思ひ至つたこと。

そのことを望まずとも知つてしまった時、ああして死のうと考えていたのはあまりいい気分じゃあなかつた。そりゃあ、俺だつてあんな力ホイホイ使つていいもんじゃねえことくらい分かる。だが、譲れない何かのために使わなきやならねえ時だつてあるだろう。だからこそ、その力をこの身体と心を終わらせるために使うのは、はいそうですか

と納得出来るもんじゃあねえ。

だが、そういう理屈じゃあねえんだ。あいつが、外ならぬ俺達の『中心』が、本気で死を望んだのなら、俺達は付いていく。当たり前だろう？ まあ、結局死なねえでこうして生き延びたわけだが。いいか悪いかは知らねえが、俺に取っちゃあいいことだ。

「さて、続けるとしますか」

相手がどんな強力な襲撃者であろうと、せめてあいつが決意するまでの時間くらい余裕で稼げるようにはならねえとな。

どうか、平穩な日々を。

お湯を沸騰させたら火を弱め、斜め切りした長葱を鍋に入れていく。長葱に火を通したら火を止め、味噌を溶かしていく。お玉でほんの少し掬って味見してみても、味が薄過ぎないか、あるいは濃過ぎないか確認する。ふふ、大丈夫そうね。出来上がった味噌汁の鍋に蓋をして、隣のフライパンの鮭の切り身を菜箸で軽く持ち上げての裏面に焼き目が付いているか確認する。うん、付いてるわね。それなら、酒を少量入れてすぐに蓋をして蒸し焼きにする。そうして出来上がった鮭の塩焼きを皿に盛りつけ、フライパンの汚れを拭き取ってから卵を割る。紫様は半熟のほうが好きなのよね。

「おはよう、彩。今日のご飯は何かしら？」

「今日は炊きたてのご飯に長葱の味噌汁、菜の花のおひたし、目玉焼き、鮭の塩焼き」

「そう、ありがとう」

少量の水を入れてフライパンに蓋をしたところで、紫様から声を掛けられた。朝ご飯が出来上がったても起きないようなら叩き起こしてあげようと思っていたのだけど、その前に起きてくれたみたい。朝ご飯は出来たてのほうが好きだね。

沸騰したお湯に塩を一つまみ入れ、菜の花の茎のほうを入れて少し火を通してから穂

先のほうもお湯につける。速めに取り出して流水にさらして粗熱を取り除いて水気を絞り、食べやすい大きさに切つて小皿に移す。そこでちょうどよくピーツと炊飯器から音が鳴り、ほぼ予定通りの時間に少し喜びつつ、綺麗な緑色をした菜の花に少しからしを利かせた醤油をかけ、その上に鰹節を振りかけて完成。

「ご機嫌ね」

「そう見える?」

炊飯器を開けて炊きたてのご飯をよそつてみると、紫様からそう言われ、改めてこうした調理を楽しんでいる自分に気付く。度とにでもあるような普通で平凡で落ち着いた日常を謳歌していると思うと、私は思わず顔が綻んでしまう。

私は皆が帰る場所を守りたい。帰る場所は、平穩な日常を送る上で大切な居場所。落ち着いて、難しいことを考えることなく、楽しく過ごせるような時間。簡単なようであるが、難しいもの。だから、守り通さなければならぬと思う。守り通せれば、またこうして日常に帰ることが出来るのだから。

「紫様、朝ご飯が出来ましたよー」

今日の藍は昨日から橙のところにお泊りしに出掛けているから今日はいない。一人いないから食卓がちよつと寂しいわね。

「いただきます」

「いただきます」

紫様と私の二人分の朝ご飯を運び、私達は手を合わせて贖罪に感謝を述べてから口にする。……うん、今日もいい味ね。藍にも食べさせてあげたかつたわ。今頃二人で何を食べてるのかしら？

そんなことを思ったけれど、さつきまで考えていたことの続きが溢れ出る。けれど、失うって、痛いよ。護りたかつたものが何度も何度も壊れて、何度も何度も失って、いつか取り戻せると思いつながら、いつか終わってほしいと願いつながら、それでも壊れて失って繰り返して……。痛くて痛くて仕方なかつた。懐かしいわね、いつからだつたかしら。護り切つたという終わりから、この永遠に続くかもしれない時間の終わりを願うようになつていった。それを真に願つたのは私じゃないかもしれないけれど、それでも私達の『中心』はそう願つていた。ならば、私達はそれがいいと思う。納得出来なかつたのもいたけれどね。

「どうしたのよ、彩。そんなにジロジロ見て」

「まあっ、そんなに見詰めてたかしら？」

「そりゃあもう」

そんなことを思いながら護りたい者を見ていたら、そんなことを言われてしまった。私の日常には、いつからか紫様と藍がいた。

けれど、私としては死後の安寧が保証されているのなら、私は死んでも構わないと思っている。だって、日常を送る上で最も大切なのは他ならぬ私自身だもの。私自身が壊れてしまったら、残念ながらもう元には戻れない。護りたいものを護るために私が、私達の『中心』が壊れてしまうくらいなら、護るものを諦めて死んでしまってもいい。死ぬことで壊れかけていた私達の『中心』を護れるのだから。死後の日常を送れるのなら、ね。

「今日の朝ご飯はどうだったか気になったの。どうかしら？」

「そんなこと？ これでも今日も一日頑張れるわ」

けれど、残念ながら私には、そして私達の『中心』にも死後の安寧は保証されない。極楽にも地獄にも逝くことはなく、中途半端な魂としてその道中で消えてしまおうらしいから。非常に残念な現実だと思うわよ。

なら、今ここにある日常を護れるだけ護らないといけないわね。

「あら、そう？ それなら作った私としては嬉しいわね」

どうか、平穩な日々を。

私が代わりに考えましょう。

団子屋にて串団子と緑茶を注文し、品が出来上がるまでの間は人間の里を監視する。ちよつとした人だかりが出来ているのが気になって少し耳を澄ませてみると、最近幻想入りしてきた守矢神社の巫女が入信を勧めているらしい。こういった宣言効果は大きく、まず知らなかった者の目に付くというのがあり、そして努力しているところを見せることで応援してあげようと思わせることも出来る。多少の不興を買ってしまう場合もあるが、それが少数派であるうちはめげずに続けていればいいでしょう。

さて、それ以外では特に目立ったもの、あるいは不自然に目立たないものはなさそうですね。よくある人間の里の光景。ちょうど注文したものが置かれましたし、監視は一度切り上げましょうか。

「彩様は少し変わられましたね」

「おや、そうですか？」

緑茶を一服しようとしたところで、向かいに腰を下ろしている阿求が私にそう言った。手に取った緑茶を静かに置いて阿求を見ると、興味あり気に私のことを見詰めていた。

「何かあったのではないですか？ 差し支えなければお聞きしたいのですが。私、気になります」

「構いませんよ」

何があつたかと言われれば、私達の『中心』が自死しようと思ひ、そして失敗し、結局それでもいいかと思ひ至つたことでしょうか。

そもそも、何故自死に思ひ至つたかは、以前から考えていたようですね。既に終わつた存在として、キチンと終わらせたいと思つていた。『九心九尾』という存在してはならない全てを覆す力を抹消するためにも。けれど、その一線を踏み越えられなかつたのは、なんだかんだ言いながらもこの余生を手放し難かつたから。

その一線に踏み出せたのは、転生という単語から裁判長である映姫に言われた一人に戻すべきだと言われたことを思ひ出し、そして過去に縛られつばなしで今日を生きておらず楽しくも楽しもしていないと思つたから。生者として生きるには、既に遅過ぎた。だから、全てを壊し、全てを殺し、ついでに傍迷惑で一方的で独善的で身勝手な恩返しとして勝ち星を押し付け、そして自分も殺す。一度キチンと終わらないと、次に進めないから。たとえ進む先が次なんてない終焉だとしても。

けれど、残念ながら失敗してしまつた。『九心九尾』を発動させて一人に成つて死ぬつもりが、今も紫様の式神としてのうのうと生きている。私達の『中心』は、そして私達

は今更になって気付かされた。もう一人には成れないと。私達は九つの個として分かれ過ぎていたがゆえに『九心九尾』を発動しても完全に混ざり切れない。私達の『中心』に従って死んでも構わないと思っていたのは確かですが、死にたくないと思っていたのも多数いたのも事実。

一人に戻れない。勝ち星は不要。自死を望まない。これだけ揃ってしまい、一線を踏み越えた理由が瓦解した。だから、自分の意見を覆した。手の平返しとも言いますが。

しかし、それを正直に語るつもりはない。存在してはいけない力を口にするのは、私達の『中心』が忌み嫌っていること。思い出したくもなく、知られるべきではない。

「時折、人間の里を歩いていると紫様の式として声を掛けられるようになったのですよ。ですから、あまり舐められないようにと気を遣っているのです」

「そうですね！　まだ里中に知れ渡ってはいませんが、彩様もようやく人里に認められるようになりましたもの」

嘘はあまり得意ではないのですが、これもまた事実。私は多少気を遣うようにしているのは確かですし、これでよいでしょう。

私達の『中心』はどうでもいいと、もう済んだことだ、と言ってこれ以上考えないようになっているでしょう。また覆そうだななんて思わないように。ですから、私が代わりに考えましょう。それが記憶と思考を抜き取った私に出来ることですから。

難しく考えないで

「でねー、ゆうか！　こーんなにおつきな蛙相手でもアタイの手にかかればカチンコチンよ！」

「あら、それは凄いわね」

ちるるんが腕をいっぱい広げながら語っている武勇伝をクツキー片手に聞きながら、僕は頭の中でそのくらい大きな蛙を想像してみる。ヌルツとしていてテカテカした緑色の肌と、その大きさに見合う低くて深くてうるさいゲロゲロ鳴き声。そして、そんなすつごく大きな蛙をちるるんがカチンコチンに凍らせてしまう。

「ケケケケケケケケ、クワクワクワ」

「蛙の鳴き真似ですか？」

「そうだよー？　どう？　似てた？」

「うーん……。ふふつ、そこまで？」

「そっかー。にやははっ」

別に似てなくてもいいんだよ。ほら、隣に座ってるだいちちゃんが笑顔になってるから、僕もこんなに嬉しい！

「そうやってだいちゃんと笑い合っていると、ちるるんが顔をこっちに向けて目を輝かせる。」

「おー、さいつて上手だなー！　アタイも負けないぞー！　ゲロゲロツ！」

「っ！　チルノちゃん……っ、その顔は反則……っ！」

「にやはははっ！」

僕の蛙の鳴き真似よりも低く響く鳴き真似と迫真の蛙顔に思わず笑ってしまふ。それに釣られてちるるんも大笑い。あー、楽しい！

「ゲロゲロ」

「待って、チルノちゃんっ。今聞くと笑っちゃう……っ」

「ゲロゲロ」

「待っ、てっ、て……っ！」

「ゲロゲロゲロツ！」

「あはははっ！」

どうやらツボに嵌ってしまっただいちゃんは、ちるるんの蛙の鳴き真似に大笑い。そんな二人を見ているとやっぱり僕も楽しい。けれど、あの中に突っ込もうと思う前に一歩引いちゃうのは、ちよつと僕らしくないかなあと思つた。

「ねえ」

「ん？ なあに、ゆうかりん？」

「貴方、少し変わったわね」

「そう思うー？」

そう思った矢先、まるで見透かされたみたいなのゆうかりんの言葉にちよつとだけドキツとした。うつわー、すつごいなあ。まあ、あんなことがあったんだもん。ちよつとくらい変わってもおかしくないのかも。

僕達の『中心』はいまいち楽しくなかったみたい。過去を想って泣いてたし、未来を思つて悩んでたし、今を全然楽しめていなかった。

分かるよ。あんなに痛かったし、苦しかったし、僕が僕じゃなくなつて、周りの皆と一緒にくたになつて、グチャグチャに混ぜられて消えそうになつて、そして一人に成りかけたあの時。忘れたくても忘れられないし、きつと忘れちゃいけないことなんだと思う。けれど、いつまでも引き摺っていやいやいけないことでもあると思うんだ。

知ってるんだ。力を得るだけなら他にいくらでも方法なんてあっただろうに、一人に成つて力を得ようとした理由。僕達は他の化け猫と違うことを気にしてたつてこと。そうやって、普通になることを望んでたこと。その結果、結局化け猫からも外れちゃつて、どちらにしても普通とは違うことに泣いたことも。けれど、皆違つて皆いいつて言うじゃん？ 僕は、皆と一緒にいれる今が好きなんだ。

考えたことがある。あの力があれば、皆を永遠に閉じ込めて遊び続けられる。けれど、やっぱり違うよね。何回もグルグル繰り返し続けていくと、何だかもの見方が変わっていくんだ。前を見ているんじゃないやなくて、自分の頭の上から見下ろしているような感じ。辿り着きたい結末っていう先のことばかり考えて、だから今はこう動こうって考え出す。同じ場所に立っているはずなのに僕だけが違う場所に浮かんでいる気がして、世界がつまらなくて嫌になる。だから、やっぱり過去も未来も気にし過ぎちゃいけないんだ。今ってこんなに楽しいのに、すぐ見落としちゃう。

過去があるから今があつて、今があるから未来がある。けれど、僕が立っているのは今なんだ。だから、難しく考えないで思いつ切り笑おうよ。痛かったことも、辛かったことも、苦しかったことも、過去を想って泣いてても、未来を思つて悩んでも、今を笑えれば楽しくなれるから。たとえ今が嫌になつても、次の今のために楽しく笑つていたい。そう思う。

「僕もそう思うよ。お揃いだねっ！」

ちよつとだけ違う僕もいいんじゃないかな？ だって、いつまでもずーっと同じじゃあつまらないもんねっ！

喜んで従うぜ。

「遂に見つけたわッ！ 私のしもべ候補を何匹も奪いやがって！」

「ああん？ んなもん奪われる方が悪ーに決まってるだろ」

俺が焚き火で川魚を焼いているところに擦り寄ってきた猫に餌付けしてやっている
と、小川を挟んだ向こう側の茂みから猫が現れて俺にそう言い放ってきやがった。そう
だな。本当にしもべ候補かどうかは置いといて、積極的に侵略する気はねーが、擦り
寄って来るなら奪ってやるかくらいには思ってた。んで、しもべ候補なら奪えて喜ばし
いし、違うなら将来の候補の先取りだ。

俺の右肩の上に乗って焼き魚を食ってる猫と目の前で怒り心頭のネコを交互に見回
し、俺はニヤリと笑ってやる。そうして挑発してやれば、いとも容易く釣り上げられま
うもんだ。

「ッ！ 返せッ！」

「ハッ！ テメーに奪えんなら奪ってみな！」

橙が真っ直ぐと跳び出してきた瞬間、身体強化を掛けた右脚で地面を踏み抜いて燃え
盛る薪をバラバラと浮かび上げる。さて、あのネコがこのまま真っ直ぐと突貫してくる

ことはねー。右か左に回り込んでくるが、上はねー。薪の向こう側で目を見開いたネコを見遣りながらそこまで考え、爪を伸ばした左手で浮かばせた数本の薪を刺し貫く。さて、どちらに回り込んでくるか？

「シャッ！」

「だろーな！」

頭に血が上って小難しいこと考えてる余裕なんざねーネコが利き足である右脚で方向転換し、俺の右側に回り込んでくるなんざ手に取るように分かる。それに、俺の右肩にはネコが奪い返してー猫がいる。しかも、奪ってみろと挑発したばかり。そりゃあ、ご自慢の速度を生かして掠め取ろーとするよなあ？

左腕をネコに向けて思い切り振るってやれば、爪に突き刺しておいた薪がすっ飛んでいく。流石にこの程度の投擲でネコが被弾することはねーことぐらい分かっている。だから、次の一手として尻尾に妖力を込めた。

飛んできた薪を見たネコは途中で大きく曲がることでほとんど速度を落とさずに薪を躲して俺に迫ってくる。

「極彩『彩色剣尾』」

尻尾に込めていた妖力を解き放ち、ネコが俺に向かって駆け抜けていく軌道を逆走するように走らせる。突然の攻撃にネコが目を見開いて驚愕しているのが分かる。今ま

で俺が見せたスペルカードは爪からぶつ放すもんばつかで、その両方の爪に妖力が込められてねえからあれでお終いだと思ったか？ どうやら尻尾までは見てなかったようだな。そりやそうだ。俺の身体で隠してんだから見えるわきやねーか。

ネコはすぐさま右に跳んで避けようとはしていたが、それより早く妖力を加速させてネコを飲み込ませる。……悔しいが、俺一つじゃあネコ一人気絶させるのはちよいと厳しーよーだな。

「……んだよ、飯食ったら帰んのか。別に構わねーけど」

尻尾の妖力を出し切ったところで、俺の肩に乗っていた猫がぴよんと飛び降りて向この茂みへと行っちゃまった。茂みの中に入る前に振り向いて一声鳴かれたが、だから何だって気分にはかならねー。ま、いつかまた擦り寄って来んだろ。他の猫みてーに。

地面を転がってたネコが起き上がると、俺の肩に猫がいねーことに気付いて目を見開いた。

「あーっ！ 逃げられた！ ……ッ！」

「オイオイ、何睨んでんだよ。テメーのが強けりや奪えてただろーが。とろつちーテメーが悪い」

「つ……、だ、あああああーっ！ 私のしもべ候補を奪ってるって藍様に言いつけてやるッ！」

「ハッ、言つてろ」

そう負け惜しみを言い放つて猫が去つていった茂みのほうへと走り出していったネコを見遣りつつ、俺は焚き火があつた場所の近くに土と一緒になつて転がつた焼き魚を拾い上げた。ま、キツネに何言われよーが関係ねーな。

俺は強くなる。強くねーと、全て奪われ失つちまう。ぶつ壊れちまつた俺達の『中心』みてーに絶対に諦めたりしねー。だが、俺達の『中心』がまたいつか強さを求めたなら、俺は喜んで従うぜ。

私は今日も流される。

八雲紫に博麗霊夢が自堕落に過ごしていないか監視しろ、と命令されて博麗神社に飛んで来た。別に歓迎もされず、縁側に座つても最初文句を言われたが、それ以降は気にせず境内の掃除をし続けている。

「あんたねえ……。お賽銭も払わずそこに居座るつもりなら掃除くらい手伝いなさいよ」

「……………」

そんな博麗霊夢を黙って見続けていたら、そんなことを言われた。金は持つて来ていない。監視を命令された以上、目を離せないから掃除の手伝いをするのは不可能。しかし、それは飽くまでわたしのこと。掃除をしたいのが代われと言うならば代わります。しかし、どれも表に出るつもりがないのなのでわたしはそのまま表にいる。

そういうことでわたしはそのまま動かないで博麗霊夢を見詰め続けていると、やがて博麗霊夢は諦めたようにため息を吐いて掃除を再開した。頑張れ。

「せめて何か喋りなさいよ、……って言っても無駄か。今のあんたはだんまりだものね」別に喋れないわけじゃない。けれど、わたしが喋ることに価値を見出せない。わたし

が喋ること。わたしの口から空気を震わせる振動として出ていった特定の意味となり得る音の羅列。すなわち、わたし以外。ならば、そんなもの、既に価値は存在しない。

人妖も男女も公私も賢愚も善悪も好悪も正邪も美醜も紅白も白黒も明暗も有無も真贋も真偽も可否も正誤も増減も加減も曲直も大小も長短も高低も長幼も強弱も軽重も緩急も寒暖も難易も開閉も清濁も和洋も天地も今昔も考えるだけ無駄。今を生きるのにわざわざ考えずともいい事柄。そういう些細な差異なんて、すべからくまとめどうでもいい。

別に最初からそこまである種極端な思想を抱いていたわけじゃない。わたしがその考えに至った最たる原因は、わたし達の『中心』が意固地になって何度も何度も繰り返して続いていた時だ。散々繰り返し続けているうちに、わたしはわたし以外のその他雑多の価値をなくした。だって、わたし以外のあらゆるものは好き放題出来てしまう。わたしさえ生き残ってしまえばどうとでも出来てしまう。生かすも殺すも残すも消すも自由自在。価値とは他と違うからこそ生じるならば、わたし以外の全てが等しくなり無価値と化す。

そうとでも考えないとわたし達の『中心』が耐え切れなかった。だって、わたし達の『中心』が今まで切り捨ててきた世界の価値全てを背負っていたら簡単に押し潰れてしまふから。思考の全てが繋がっていたからこそ、全てから浮いた考えような逃げ場所が

必要だった。そんな思考に最も近しかったのはわたし。別にそれでも構わなかった。それでわたしが、わたし達の『中心』が無事生き残るのならば、それだけで無限の価値になるから。

価値があるから重くなる。だから、わたしの価値はわたし達の『中心』の逃げ場となることだけがいい。決断するから辛くなる。だから、私は世界を平たく見下ろして流されよう。立ち向かうのは他のでいい。護るのは他のでいい。考えるのは他のでいい。楽しむのは他のでいい。挑むのは他のでいい。癒すのは他のでいい。殺すのは他のでいい。それでいい。

「ん」

きつと、わたし達の『中心』はまたいつか『九心九尾』に手を伸ばすだろう。その時に罪だということも、全部どうでもいいって思える。擦り切れたわたし達の『中心』がこれ以上壊れてしまわないように。

今日は何にもない素晴らしい一日だった。そんな風に、私は今日も流される。

手を差し伸べ続けていきたい。

「今日も何事もなさそうですね」

私は人間の里の大通りを見回しながら歩いていますが、急を要するような怪人も、今すぐ取り除かなければならないようなものもなさそうですね。

そんなことを思っていたら、少し遠くからすすり泣く声が聞こえてくる。それと同時に、改めて大通りの人間の流れを見詰めていると、不自然に歩みが早くなったり遅くなったりしている場所があります。それは、すすり泣く声がする場所とほぼ一致していました。すぐ向かいましょう。

人通りの間を縫うように進んでいくと、そこには大通りの隅にしゃがみ込み膝を擦りむいてしまつて泣いている子供がいました。周りの人間達は心配そうに眺めながら、あるいは関係ないとばかりに歩みを止めずにその場を去っていく。私はすぐにその子供の隣にしゃがみ込んだ。

「僕、大丈夫？」

そう訊ねれば、涙をためた目をこちらに向けてフルフルと首を横に振った。そんな子供の頭を撫で、安心させるためにも私はこれからすることを口にする。

「痛かったんだね。じゃあ、私はその傷を治してあげるから」

「え……？」

困惑したような声を漏らした子供の膝に手を添えて、その傷を癒してあげる。少しずつ傷が塞がっていき、やがて傷は完全に塞がった。

「ほら。これでもう大丈夫」

「本当だ！ もう痛くない！ ありがとう、お姉ちゃん！」

「どういたしまして。これからは気を付けてね」

怪我が治ってはち切れんばかりの笑顔を浮かべた子供はすぐに立ち上がって、私に大きく手を振りながら走り出していった。元気になったのはとても喜ばしいことなのですけれど、あの慌てつぶりではまた転んで怪我をしまいそうでちよつとばかり不安かしら。

以前までは人前で大つびらに癒しを施すことは出来ませんでした、別に隠してはいませんが、私に紫様の式神であることが世間に露呈してしまった結果、人間の里にあるルールの例外になることになりました。つまり、私が化け猫であることを見せてもあまり問題ではなくなつたということ。人間達の中には、私が紫様の式神である以上多少の妖術が使えて当たり前という認識があり、ああして怪我人を癒すことが出来ても何ら不思議ではなくなる。だから、私としては嬉しい変化ですね。

帽子を目深に被っていると、耳が押し潰されて少しばかり痛めてしまうことがあったんですよね。これからも必要な時は被りますが、不要な時には被らずに済むというのはいいことでしょう。

「げっ」

「あら」

今日は一ついいことを出来たかしら、と思いつつ立ち上がると、そんな私に二人が反応したからくるりと振り返る。一人は大きな笠を被った葉屋さんで、もう一人は同じような笠を被っているけれどまったく正体を隠せていない輝夜さんだった。よく見れば、葉屋さんは鈴仙さんじゃありませんか。

「こんにちは、鈴仙さん、輝夜さん。私に何かご用でしょうか？」

私は二人に微笑んで挨拶をしました。鈴仙さんは首を横に振った。どうやら、単に私を見かけただけで特に用はなかったみたいですね。

ですが、私はちよつとだけ用があります。そう思いながら私が輝夜さんに足を踏み出すと、その間に鈴仙さんが立ち塞がった。

「何する気なのよ？」

「私はちよつと輝夜さんに一つ訊ねたいことがあつたんです。そこを退いてくれませんか？」

「そうなの？ 一体何かしら？」

「姫様!？」

私がそう言うと、輝夜さんは鈴仙さんの横を抜けてきた。なので、私は輝夜さんに顔を向けて一つ問うた。

「貴女は、死にたいですか？」

そう言った瞬間、私の眉間に鈴仙さんの人差し指が向けられる。静かな殺気が私に刺さる。しかし、輝夜さんがその腕に手を添えて微笑むと、鈴仙さんは困惑しながらもその手を下ろした。

「いいえ。今はまだ」

私は生き延びることで救われることがあると思っている。生きていけば、変化が訪れる。だから、私は傷付いた者を癒すべきだと考える。

しかし、死によって救われる者がいることも知っている。死んでしまい、終焉が訪れる。だから、私は死を望むならば楽にしようと思う。

目の前にいる輝夜さんは、どちらとも言えない方だ。永遠を生き続けなければならぬ。苦しみで死を望んでいるものの、今を生きている変化を楽しんでいる。だから、私は改めて訊いておきたかった。

輝夜さんの答えを聞き、私はホッと胸を撫で下ろす。楽にしてあげるべきだとして

も、施す私はやつぱり辛いもの。

「そうですか。それならいいんです」

「話はそれだけみたいね。貴方の飼う主に愛想が尽きたらいつでもこつちに来ていいのよ。」

「いえ、今のところは」

「そう、残念」

そう言いながらも嬉しそうに微笑む輝夜さんは、鈴仙さんを連れて去っていった。私はその二人をその場で手を振って見送る。そして、二人の姿が遠くに言つて見えなくなったところで、私は二人とは逆の方へ歩き出した。

こうして歩いていくと、人間の里は平和そうに見える。それでいい。ああして癒さなければならぬことにならないのが一番だもの。

けれど、たとえ平和だとしても私が何もしないことはない。それは外にはなく、内側にいる。私が一番癒さなければならぬ存在は、『中心』だ。世界を自分の都合で終わらせ続けたことで、限界寸前まで擦り切れてしまった。だから、今ある世界を癒し続けていきたいと思つている。それがたとえ余計なお世話だとしても、何もしないなんて私には出来ない。そのために、私達の『中心』にはたとえ死を望んでいようともし生き延びてもらわなければ困る。そうでないと、私が伸ばす手がなくなってしまうか

ら。

自分勝手な贖罪のためにも、私は手を差し伸べ続けていきたい。

殺して終いだ。

紫に妖夢の手合わせをしてやれと命じられ、俺一つで手合わせしているのだが、呆れるほど綺麗な太刀筋だと感じた。攻撃せずに長いこと刀を避け続けているのだがあまりにも単調だ。きっとその太刀筋は相当速いのだろうが、超光速に慣れ切ってしまった俺からすれば随分とトロっちい。しかも、刀を振る前にどの軌道を通るのか分かってしまつては意味がない。……さて、もういいか。

左肩から右腰にかけての袈裟斬り。その前動作である刀の振り上げを見てからそう判断し、振り下ろされると共に幾重にも掛けた身体強化の妖術によって急加速し、一気に背後へと回り込む。妖夢の目は俺の姿を追っていたようだが、しかし刀を振り下ろしてしまった身体を止めて反撃するにはあまりにも遅過ぎる。

「ぐっ……」

ほぼ無防備の背中を蹴り付けたが、踏ん張った両脚で堪えられる。そして、衝撃と痛みに耐えた妖夢が振り向きざまに真一文字に刀を振るつたが、それを見た俺は即座に身体を低くして躲した。そのまま両手を地に付けて猫本来の四足歩行を模した姿勢で駆け出し、妖夢の両脚の間をすり抜けると同時に臍を噛み千切つた。

「痛……ッ！」

そのまま距離を取って口から肉片を吐き出し、重心のズレた妖夢を睨み付ける。腿が切れれば関節が簡単にぐらつき力を込めることが困難になるが、その程度ではまだ止まらない。片脚使えなくとも、もう片脚あるのだから。

しかし、妖夢の表情はあまり思わしくない。当然だ。見ていて感じていたが、妖夢の刀は基本的に人型を想定したものだ。それと多少は上にいるものを切り伏せることも可能なようだが、地を這うものに対してはほとんどない。精々振り下ろすか、真下に突き刺すが、地面を斬りながら斬り上げる程度。振り下ろし、突き刺しは上から来る以上当たるまでが遅く、斬り上げはどうしても大振りだし前動作が分かりやすい。

四足歩行で駆け回って妖夢を攪乱しつつ、背後に回り込んでもう片脚の腱を爪で切り裂いた。歩くならまだしも、走ることは厳しく、強く踏み込むなんぞすれば容易に捻挫する。そんな状態で俺に刀を当てるのはほぼ不可能だ。

「……降参です」

「ふん」

敗北を悟った妖夢は刀を鞘に収めて両手を上げた。それを受けて俺はゆつくりと立ち上がる。そもそも、本気で斬るつもりなら超光速に至るかももう少し卑怯な手段を覚えてからにしな。例えば、降参だと言ったこの場で騙し討ちするくらいしろ。生き残れば

勝利であり、死に晒せば敗北なのだから。

「強いですね、彩さんは」

「下らんな」

妖夢はそう言うが、俺は首を横に振る。今の俺では妖夢との手合わせで降参させることが出来ても、殺すのは非常に困難だ。殺さなければ、いつか次が来る。きつと策を講じるだろう。不意討ち、寝首を搔く、毒を盛る……。手段なんぞいくらでもある。

だから、敵は完全に殺し尽くす。そうすれば、少なくともその敵の次はない。究極、それを無限に積み上げていけば俺は安全だ。敵がいなければ、俺が殺されることは決してない。

しかし、そうも言ってもらえないこともある。殺しても次があることもある。俺達の『中心』によって至った『九心九尾』は、俺の考える安全とは相反している。一度殺せば済むはずのことを、延々と繰り返すなどあまりにも不毛だ。結果を覆す必要なんぞない。殺して終いだ。それだけでいい。

「……本当に、下らんない」

ここでは殺しても幽霊として恨みを果たしに化けて出るかもしれないと思うと、殺して終いとはいかないかもしれないが。

だから、敵を殺すばかりの俺とは異なる考えを持つのがいることは構わん。真逆の思

考、真逆の理想、真逆の行動。時には、敵を生かすことで生きることもある。

なあ、俺達の『中心』。決めるのは貴様だ。殺すなら遠慮なぞいらん。俺がこの手を血で染めてやる。

私達が八雲彩なんだ

私は席に座ってお品書きを眺め、チラリと店長のほうを見遣る。以前阿求と来店した時には書かれていなかったホットケーキをミルクコーヒーと合わせて注文したのだが、まだ焼き上がっていないようである。まあ、注文してから材料を混ぜ始めていたし、しようがないですね。

ホットケーキにはバターが乗せられ、その上に蜂蜜をかけてくれるようだが、料金を上乗せすればアイスクリンや季節の果実なんかも乗せてくれる。とりあえず、私は何となく美味しそうなのでアイスクリンを乗せてもらうことにした。まあ、阿求との話題作りくらいにはなるだろう。

え？　そもそも喫茶店に来店した理由？　定期的に支給される金の消費のためだよ。それなりの値段だし、ちょうどいい。使わずに貯めていたらただの金属片と紙切れにしかならないからね。さっさと使って人間の里の経済を回してあげるのも仕事の内さ。多分。はあ。

……さて、もうそろそろ諦めるか。いい加減、向かいの席にいる方の視線でお品書きに穴が開く気がしてならないんだ。

「で、何の用ですか、映姫」

「休暇で来てみれば貴女がいただけです」

「だったらどうして私の前に座るかな。他に空いてる席はいくらでもあるよ」

「ちようど貴女と話しておきたいこともあったので、そのついでです」

「あつそ」

私はお品書きを机の端に置き、映姫を見遣った。ジロリと睨み返されて思わず目を逸らしたくなつたが、そうしたら何となく負けな気がして映姫の瞳を見詰めていく。勝てなきや価値なしだろーが。勝ち負けなんて関係ないんだよ。はあ。

ちなみに、映姫はお品書きを見ずにミルクコーヒーを注文していた。常連か。

「じゃあ、さっさと話してくださいよ。その話しておきたいこと、つてやつを」
「そうですね」

映姫はそう言つて頷き、改めて私を見詰めてきた。そんなに見詰めないでほしい。なんか気まずいから。はあ。

「貴女は九つから一人に戻りました」

「戻つたね」

「貴女が罪だと言ひ張る力を使いました」

「使つたね」

「貴女は一人から九つに分かれました」

「分かれたね」

「案の定何もしなかった」

「そうだね」

事実確認のように並べられていく言葉に対し、私は一つ一つ肯定しながら頷く。式神を勝手に引き抜いて一人に成って、ちよつと時を遡って都合のいいようになるようにしようとして、紫様の式神と成るために貼り直して九つに切り分けた。結局、私は何もしてない。好き放題色々仕出かしたくせに、その痕跡は存在しない。既になかったことになったのだから。

けれど、案の定って言われるのはなんか癪だなあ。相変わらず、知ったような口を利きやがる。いや、知っているんだった。はあ。

そんなことを思っていたところで、店長が私達の前にコーヒーとミルクを置き、それから私の前にホットケーキを置いてくれた。店長に一言礼を言ってからコーヒーにミルクを投入してゆつくりとかき混ぜておく。さて、この喫茶店のホットケーキはどんなものなのかな？ 紫様が外の世界から勝手に拝借したであろうホットケーキミックスの袋に書かれたレシピ通りに作っていたのを内側から見ただけなので、どんな味なのかちよつとだけ楽しみではある。美味ければよかったと言えるし、不味ければそれもそれ

で話題としてはいい。まあ、中途半端なのは止めてほしいかな。

「私としては、貴女にはそのまま一人でいてほしかったのですが」

「それは無理そうかな」

コーヒーの上にミルクが乗ったまま混ぜても一向に混ざり合わないことに首を傾げながらそう言う映姫に、私はフォークをホットケーキに刺しながら答えた。

九つにキツチリ切り分けられてから流れた時間が、私達に明確な個を形成してしまった。私達が似通っていたならまだしも、致命的に相反するのが多過ぎる。以前の映姫が言っていたように、あまりにも乖離し過ぎている。

無理に一人に成らなくていいかな、と思つてしまった。私が思つたのか？ 他のが思つたのか？ いや、どれが思つたかなんてどうでもいい。私達は九ついて一人。それでいい。

「私達が八雲彩なんだ」

私はナイフでホットケーキを九つに切り分けながらそう呟く。バターが多かったり少なかったり、蜂蜜が多かったり少なかったり、アイスクリンが乗つてたり乗つてなかつたり、違うところを探せばいくらでもあるけれど、ホットケーキはホットケーキ。

そうだ。私達は八雲彩。種族は化け猫であり、紫様の式神。他の化け猫と違うことがあつて、内側がちよつと騒がしい。それでいいじゃないか。

「そうですか。はあ、判決が面倒になりそうですね」

「あれ、魂が消えるとか言ってますませんでしたか？」

「かもしれない、ですよ」

「ふうん」

まあ、とりあえず生きたいと思っているのがある間くらいは生きていようかな、くらいには思ってる。私としてはさつきと終わりにしたいのだが、残念ながらそうはいかないらしい。私が無理を言えば付いてきてくれるらしいけれど、所詮抜け殻でしかない私にはちよつと厳しそうだしね。

そんなことを思いながら、ミルクコーヒーを口にする。……ミルクを入れたとはいえ、まだちよつと苦いなあ。まあ、世の中そんなもんだ。割り切るしかないかな。はあ。

番外

やあ、混入者

最近、博麗神社の近くで温泉と悪霊が噴き出したことで一悶着あつたのだが、それも一段落ついたらしい。その件に紫様は霊夢に色々手助けをしていたようだけど、私は別に何もしていない。面倒臭いし。当事者と一部の関係者からは地底で色々あつたのだと聞かされたのだが、そういうのは覚えてくれるのに任せて私はほとんど聞き流していで碌に覚えていない。まあ、そんなもんだ。

「それじゃあ、任せたわよ」

「……はあ」

何故机に突つ伏しながらそんなことを考えていたかつて？ 今、地底に行つて地霊殿の主である古明地さとりに手紙を手渡して来いと命じられたからだ。スキマでも開いて投げ込めばいいのに、と思つたのだが、遣いを出して直接伝えると言つていたそう。私じゃなくて藍を遣えよ。はあ。

まあ、命じられてしまったものはしょうがない。面倒臭いけれど一応紫様の式神ですし、命令は熟さなければならぬ。そう思いながら、私は顔だけ起こして、キッチンと封

をされた手紙と命じ終えてその場から去っていく紫様を見遣った。

「え？」

その時、紫様が消えた。何の脈絡もなく、痕跡一つ残さずに。

「質の悪い冗談は止めてほしいんだけ、ツ!？」

立ち上がって周囲を見回して、目の前に広がっているものを視認して思わず言葉が詰まる。外がない。廊下もない。白とも黒ともつかない無がどこまでも広がっている。つまり、この部屋しか存在しない。……何が起きた。何が起きた？ 何が起きています？ まるで理解が追い付かないところに、背後の障子が開く音がしてすぐに振り向いた。

「やあ、混入者」

そして、無から私が現れた。そう言つて障子を閉じ、そのまま私の向かい側に腰を下ろして微笑んでいる。

いや、違う。服装、身長、髪形、声色、その他諸々……。探せばいくらでも違うところは見つけられる。だということに、それでも目の前にいる存在が私であると思ひ込まされている。突き付けられている。疑えば疑うほどに、疑いようがなくなっていく。その事実が単純に不気味で、気味が悪くて、気持ち悪くて、おぞましい。

『いや、違う。服装、身長、髪形、声色、その他諸々……。探せばいくらでも違うところは見つけられる。だということに、それでも目の前にいる存在が私であると思ひ込まさ

れている。突き付けられている。疑えば疑うほどに、疑いようがなくなっていく。その事実が単純に不気味で、気味が悪くて、気持ち悪くて、おぞましい』かあ。そういう反応は、随分と久し振りだね。：まあ、気にすんな。小難しいこと考えないで、わたしはそういう存在だって思ってくればそれで結構。貴女はそういうのが得意なんでしょう？」

「うげえ」

考えてたことを丸ごと読み上げられ、思わず辟易してしまう。いや、それよりもこの部屋の外だ。やって来たのがたった一人である以上、目の前にいる存在が犯人ってことでいいはずだ。

「八雲彩。『九つの命を宿す程度の能力』を持つ、魂が九つに切り分けられた化け猫。過去に二六五〇四回の時間遡行を行い、繰り返して続けていくにつれて段々悪化していく状況に絶望し、そもそも時間遡行するべきではなかったという結論から精神崩壊していくところを八雲紫に拾われた、と。：まあ、混入者だし、そのくらいのは経歴はあつて当然か。いやー、混入者ってのは何処も彼処もやけに強かったり好かれてたりするから不思議なものだと思わないかい？わたしもだけどき」

そう考えてとりあえず構えた私を、僅かに鋭くなつた目で見上げられながらつらつらと並べられる言葉にゾツとする。内側をではなく、もつと根本的な何かを全て掌握され

ているような気分。

私はどうすればいい？ 目の前にいる存在をどうにかして、この部屋を元に戻す方法。

『九心九尾』は止めておいた方がいい。この部屋に時の概念が存在しない、いわば写真の中みたいなもの。時を遡ればわたしが切り取って創ったこの部屋は当然消える。時間軸に逆らえても次元軸を切り替えれない貴女は、世界の外側に置いてかれて無に吞まれて消滅するよ。…ま、消えたがりのようだし、それもそれで別にいいか」

そう言われ、私は頭の隅に浮かんでいた『九心九尾』の発動を思い止まる。……いや、最初からしたくはなかったのだが、万が一もしもの時はと思っていたものが使い物にならないと言われ、ドクリと心臓が嫌な音を立てる。

そんな時に、私の隣にどれかが出て来て、即座に爪を伸ばして目の前の存在を攻撃しようとした。私も慌てて隣の動作に付いていこうとしたのだが、その腕を動かす前に伸ばした爪が綺麗に切断されて後ろに転がった。……見えなかつたんですけど。事前動作もなしに、しかもご丁寧なことに伸ばす前と同じ長さにされたんですけど。

「警戒したいなら好きにだけしていいけどさあ、わたしは別に侵略しに来たわけじゃないんだよ」

そう言つて頬杖を吐きながら微笑む存在から唐突に圧倒的なプレッシャーが放たれ

て思わず一步後退る。私が今まで見てきた誰よりも恐ろしく、目の前の存在を基準にしたらそれだけでその他全てがまっ平になってしまふほどの強大さ。敵わない。もしもあのプレッシャーに殺意や敵意が混じっていたら、それだけで私は死んでしまっただ。

押し潰されそうなプレッシャーがふつと消え去り、私の乾いた喉から外へ空気が吐き出される。どうやら私は息まで止めていたらしい。そんなことに気付けない程に、目の前の存在は危険だ。しかし、どうにもならないことを本能的なところで理解してしまっている私があった。……なら、しようがないか。はあ。

私は一つため息を吐いて諦め、目の前の存在の向かい側に腰を下ろした。少なくとも敵意はないらしいし、嘘も吐いていないようだし、大丈夫でしょう。多分。きつと。

「話を聞こう。じゃあ、何しに来たの?」

「わたしの目的は世界観光でね、単なる来訪者なんだ。近くに幻想郷を含んだ世界が五千個くらいあってさ、どれにお邪魔しようか迷ったんだけどここを選んだよ」

「幻想郷が五千……?——狂人か」

「異常だおかしいとはよく言われる」

目の前の存在は実に愉し気にケラケラと笑っている。ちよつと何を言っているのか意味が分からない。ほら、隣のも内側に戻って行っちゃったし。

付いていけそうにないので、私は早々に終わらせるためにも、話を切り出した。目の前の存在が何を考えているかは理解出来そうにないが、私が何を考えているのかが見透かされているようだから、その上で口に出せば多少は考えてくれるだろう。

「この部屋は戻してくれませんか？ そうじゃないと困るんだけど」

「戻すのは部屋じゃなくて貴女なんだけど…。ま、大差ないか。悪いことしたね」

そう言うと、目の前の存在は私の意図を汲んでくれたらしく、軽く謝りながら立ち上がった。そして、無に向かつて歩き出していく。そのまま部屋から出て行くのかと思っただが、その一歩前で立ち止まり、首だけクルリと振り向いて言った。

「色々制約はあったけれど、一日くらいならって許可が下りたんだ。まずは、貴女と混入者同士で誰にも邪魔されず話してみたからね。というわけで、わたしはこの世界を勝手に見させてもらおうとするよ。どうやら、霊夢とか紫とか、かなり性格違うみたいだから結構楽しみななあ」

そして、目の前の存在は無へ出て行った。それと同時に、消え去ったはずの紫様の背中があつて、外から眩しいくらいの日差しが差し込んでくる。……どうやら、私は元に戻れたらしい。

しかし、あれは夢だったのだろうか？ 私としては夢とでも思ったのだが、私の背後に落ちていた爪が、あれは現実だったと突き付けている。はあ。

とりあえず、私は地底に行こう。忘れてくても忘れられない幻影だったが、私はそんなことよりも命令を終わらせることのほうが重要だから。